

人文・自然・人間科学研究

第 49 号

2023 年 3 月

論文

- 『純粹理性批判』原則論に見られるカントの実体論
 — 第三類推から第一類推を読み返す — …………… 犬竹 正幸 (1)
- 「尊厳をもって死ぬ権利」を巡る闘い
 — フランスにおける「緩和ケア」 — …………… 豊岡めぐみ (29)
- スティーヴン・ミールドマン
 — 出版から見るエドワード六世時代 …………… 富田 爽子 (51)
- ユスティヌス・ケルナーの詩作品における自然観について …………… 田野 武夫 (78)
- The Gardens of Adonis, the Drama of the Green World,
 and Eugene O'Neill's Urban Dystopia …………… 大森 裕二 (95)
- Toni Morrison の *Home* でたどるアフリカ系アメリカ人の旅 …………… 三井 美穂 (113)
- 「データ・情報・知識・知恵」モデルの再考 …………… 黒崎 茂樹 (132)

研究ノート

- 小浜藩英学教師、塚越酸素彦（鈴彦）の化学、医学、英学修業
 — 伝記『金蘭簿物語』の出生から渡米までの記述の検証 …………… 塩崎 智 (156)

論文

- 「現代の国語」の中の「やさしい日本語」について
 — 共通必修科目における「書くこと」の指導をめぐって — …………… 佐野 正俊 (1)

- 退職教員の略歴・業績 …………… 犬竹 正幸 (185)
- 拓殖大学研究所紀要投稿規則 …………… (189)
- 『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』執筆要領 …………… (192)

『純粋理性批判』原則論に見られる カントの実体論

— 第三類推から第一類推を読み返す —

犬竹正幸

Kant's Theory of Substance as seen in the "Analytics of Principles" of the *Critique of Pure Reason*

— Reading Back from the Third Analogy to the First Analogy —

Masayuki INUTAKE

要 旨

実体概念は古来より哲学・形而上学の中心に置かれてきたが、カントの批判哲学においても、それは重要な役割を担っている。ところが、その実体概念が集約的に論じられている『純粋理性批判』原則論の「第一類推」の内容を正確に理解することは、きわめて困難である。そこで本論考では、実体間の相互作用の原則を扱った「第三類推」の内容を先立って検討することをもって、「第一類推」を解釈するための準備的考察とする、という戦略をとった。これによって、カントの実体概念に関する無用な誤解を防ぐとともに、統一的で明確な実体概念を取り出すことができた。それによれば、実体は恒存的なものとして、時間の代行者の役割を果たすとともに、事物の変化の主体・担い手としての役割を果たすという、二重の機能をもつが、その二つの機能が統合的にはたらくのは、自然科学的経験のレベルにおいてのみであることが究明された。それと同時に、そうした実体概念によっては、時間の不可逆性を表すことができないという、カント実体論の限界が露呈し、こうした欠落を補うべく、新たな実体概念を模索する試みが示された。

キーワード：実体の恒存性、経験の類推、時間、空間、相互作用

はじめに

「実体」という概念は古来より哲学・形而上学の中心に置かれ続けてきた。その主著『純粋理性批判』（第一版 1781 年、第二版 1787 年。以下、『批判』と略記）においてカントが確立した批判哲学のうちでも、実体概念は重要な役割を担っている。とりわけ、実体や因果といった形而上学の基本概念から成るアприオリな総合判断（カントはこれを「純粋悟性の諸原則」（A148/B187）と呼ぶ）の客観的妥当性を、「経験の可能性の

条件」(A158/B197)の究明を通じて論証することを課題とする「原則の分析論」(A130ff./B170ff.)において、実体性の原則には、「完全にアプリアリに成立する純粹な自然法則の頂点に置かれるのにふさわしい」(A184/B227)と表現されるほどの中核的な位置が与えられている。

カントはこの実体性の原則を「経験の諸類推」(A176ff./B218ff.)中の「第一類推」(A182ff./B224ff.)において集約的に論じているが、ここに見られるカントの実体論は、これを正確に理解することがきわめて難しい。その理由は以下の通りである。第一に、アカデミー版のページ数にして8ページという、わずかな分量のうちに、実体概念をめぐるさまざまな論点が圧縮して論じられており、これらの論点を一つ一つ解きほぐすのに、かなりの労力を要する。第二に、述べられている内容が抽象的で具体例に乏しく、したがって各文の内容を一通り理解しようとするだけでも、大きな困難を伴う。そして第三に、第一版について言えることだが、実体性原則の提示の後に付された「証明」では、証明と銘打たれながら、じっさいには議論があちこちに飛んで、厳密な論証の体をなしていない(この点は第二版では改善されているが、こちらにも新たな問題が見られる。詳細は本論に譲る)。

そこで本論考では、第一類推に展開されているカントの実体論を理解し、論評するために、以下のような戦略を取る。まず「相互作用の原則」の名の下で、実体間の実在的な相互作用の必然性が論じられている「第三類推」(A211ff./B256ff.)の内容を検討することから始める。それは、第三類推中に展開されている論述が、第一類推および第二類推すなわち「因果律に従う時間継起の原則」(A189/B232)で述べられた内容を前提しており、こうした前提を承認した上でなら、第三類推の内容を理解することは、他の二類推を理解するのに比べて、相対的に容易だからである。それと同時に、第三類推の内容を踏まえておくことが、第一類推を解釈する上での準備的考察の役割を果たすことになり、その結果、抽象的な内容が述べられている第一類推の各文を正しく理解し、無用な誤解を防ぐ助けとなる、という効果が期待できる。以上のような理由で、本論考では第三類推から第一類推を読み返す、という戦略を取る(ちなみに、管見の及ぶかぎり、こうした戦略を取ったカント研究は国内外を通じて見当たらない)。こうした戦略を取ることによって、統一的で明確なカントの実体概念を取り出すことができると同時に、その問題点、限界点も浮かび上がってくるであろう。

ただし、急いで付言すれば、筆者は第三類推すなわち実体間の相互作用の原則を、第一類推に比べて、その存在意義が小さいとみなしているわけではない。むしろ逆に、純粹悟性の諸原則一般がもつ、経験的世界の構成というはたらきに関して言えば、第三類推こそが、もっとも包括的で重要な役割を担っていると考えている。したがって、第三類推を第一、第二類推に対する付け足しとみなすような、しばしば見受けられる解釈に

筆者は与しない⁽¹⁾。なお本論考では「第二類推」すなわち因果性の原則について主題的に扱うことはしなかった。批判哲学に占めるカント因果論の重要性は言うまでもないが、本論考のテーマはあくまで『批判』の原則論に見られるカントの実体論を論じることにある。第二類推の内容については、このテーマに関わるかぎり、折に触れて言及するにとどめたい。

第一章 第一, 第三類推を解釈するための予備的考察

第一節 「経験の類推」とは何か

両原則の内容を検討するに先立って、「経験の類推」とは何かについて、簡潔に見ておきたい。カントは「類推」(Analogie)を数学的なものと哲学的なものに分けて、大略、以下のように述べている。数学的な類推とは、「二つの量的関係の相等性」(A178/B222)、すなわち、 $a:b=c:d$ という公式で表される比例関係を意味する。これに対して哲学的な類推とは、「二つの質的な関係の相等性」(ibid.)を意味する。この二種類の類推の違いのポイントは以下の点にある。カントによれば、数学的類推では三つの項が与えられた場合に、第四項は一律に決定されるのに対し、哲学的類推の場合には、三つの項が与えられても、第四項は特定の何か(直観の対象)としては与えられず、ただ「経験のうちで、この第四項を探し求めるための規則」(ibid.)だけが与えられる。これがどういう事態であるのか、具体例が示されていないために判然とはしないのだが、以下のように考えてよいだろう。先の比例関係の公式を借用して、結果：原因＝現象 A：現象 X が成り立つとすれば、特定の現象 A を結果とみなした場合に、A を引き起こす原因として現象 X が存在しなければならないことは確かだが、それが何であるかは未定であり、ただ、さまざまな経験的メルクマールを手がかりとして、X を探し求めることが可能である。

哲学的類推のもつこのような特徴は、「経験の類推」が「(現象的)対象の現実存在(Dasein)の関係」(A179/B222)だけをアприオリに規定すべき原則(すなわち「動力学的原則」(A162/B201))であることに由来する。すなわち、「経験の類推」によっては「現象の現実存在はアприオリには認識されず、…なんらかの現実存在を推論することはできても、これを規定的に認識することはできない」(A178/B221)のである。こうした事態をカントは次のようにも表現している。

これらの経験の類推は単なる規則、すなわち、それに従って、([特定の現実存在の直接知としての]知覚そのものが与えられるわけではないが…)諸知覚から経験の統一が生じるための単なる規則にすぎない。(A180/B222, 挿入引用者)

それゆえ、われわれは経験の類推によって、数学のように直観的に確実な認識を手に入れるわけではないが、経験の類推が表現する規則に従って、諸知覚を一定の仕方で結合することによって、経験のうちに与えられる現実存在の客観的な関係について判断することが、はじめて可能となるのである。「経験とは、…諸知覚を通じて客観を規定するような認識である」(B218)という、「経験の類推」一般の「証明」の冒頭に掲げられた一文は、経験の類推によって可能となる経験の特徴をひと言で表現したものと言えるだろう。

第二節 カテゴリーの図式について

続いて、経験の類推をはじめとする「純粹悟性の諸原則」が、経験の対象に適用されるさいに重要な役割を演じる「純粹悟性概念〔カテゴリー〕の図式」(A142/B181)についても簡潔に見ておきたい。

上述したように、「経験の諸類推」をその中核として含む「原則の分析論」は、実体性原則や因果性原則のような、形而上学の根本原理となるべきアプリアリな総合的命題の客観的妥当性を、人間が行う経験的認識(=経験)の「可能性の条件」の究明を通じて論証することを課題とする。ここで経験の対象はつねに感性的直観の形式的条件(空間・時間)の下でのみ与えられ、それゆえに現象と呼ばれるから、この論証は具体的には、純粹悟性概念としてのカテゴリーが、感性的形式的制約に従いつつ、どのようにして現象に関する客観的な「経験の形式」(A110)を構成するのか、そのプロセスを明示することに帰着する。ここに、「悟性を実在化すると同時に制限する」(A147/B187)ところの、「カテゴリーの図式」が重要な役割を演じるのであるが、ここではカントの図式論に深入りする余裕はない。ただ、第一類推、第三類推いずれの場合でも、それぞれの図式の役割を理解することが、各類推の証明を検討する上で不可欠の要件となるので、ここでは、さしあたり図式論中に示されている双方の図式の定式を掲げ、各類推の証明内容の理解に資するかぎり、若干のコメントを付しておく。

実体の図式は、時間における実在的なものの恒存性(Beharrlichkeit)である、いいかえれば、この実在的なものが経験的時間規定一般の基体(Substratum)として表されるかぎりでの、そうした実在的なものの表象である。それゆえ、この実在的なものは、他のすべての実在的なものが移り行く(wechseln 交替する)なかで、とどまっている(bleiben)。

……

相互性^②(相互作用)の図式、あるいは諸実体の偶有性に関するそれら諸実体の相互因果性の図式は、一方の実体の諸規定と他方の実体の諸規定とが、普遍的な規則

に従って同時存在することである。(A144/B183f.)

ここで、両図式に関する、考えうる誤解をあらかじめ防いでおきたい。それは、両図式とも知覚の対象すなわち現実存在するかぎりでの事物に関わるものであって、ア prioriに成立する純粋直観（の対象）ではない、ということである。なるほどカテゴリーの図式は、カテゴリーが現象に適用されるための「感性の制約」(A147/B186)に属するものであり、この点からして、カテゴリーの図式を純粋直観（の対象）と解する余地があるように見えるが、しかし、もし仮にカテゴリーの図式を純粋直観とみなすなら、こうした図式を含む悟性原則はすべて、数学的な「公理」(Axiom)となり、哲学的な原則ではなくなってしまうであろう。なぜなら、『批判』の「超越論的方法論」中の「公理について」(A732f./B760f.)と題された一節から明らかのように、数学的な公理は、「概念の構成」(ibid.)すなわち概念の対象をア prioriな直観のうちに描出することにもとづく「直証的 (intuitiv) な原則」(A733/B762)であるのに対し、哲学的な原則は「比量的 (diskursiv) な原則」(ibid.)として、そのような性格をもたないからである。いいかえれば、「哲学のうちには、公理の名に値するいかなる原則も存在しない」(ibid.)のである。

第二章 第三類推（相互作用の原則）の独自の意義

ここでは、第一、第二類推には見られない、第三類推の独自の意義を明らかにすることを中心に、第三類推の内容を検討して行く。

第一節 第三類推とその証明の提示

『批判』第二版では、すべての悟性原則に証明が付されているのに対して、第一版では、なぜか第一類推にのみ証明が付され、それ以外の悟性原則には説明が与えられているだけである。そこで本論考では、各原則に第二版で付された証明を中心に検討し、第一版の内容は、証明内容の理解に資するかぎり、そのつとと言及するという方針をとる。そこで以下に、まず第三類推の定式とその証明を提示した上で、その内容の検討を行うことにする（なお、証明中のポイントとなる文に A, B, C…の記号を付しておく）。

第三類推

相互作用ないし相互性の法則に従う同時存在の原則

あらゆる実体は、空間のうちで同時に存在するとして知覚されるかぎり、汎通的な相互作用のうちにある⁽³⁾。

証明

(A) 経験的直観において、ある事物 (Ding) の知覚と、それとは別の事物の知覚とが、相互に (wechselweise) 継起可能であるとき、これらの事物は同時に存在する。…それゆえ私は、最初に月を知覚し、次に大地〔地球〕を知覚することも、あるいは逆に、最初に大地を知覚し、次に月を知覚することも可能である。…ところで (B) 同時存在とは、多様なものが同一の時間において現実存在することである。だが、(C) 時間そのものを知覚することはできない。(D) 〔もし時間そのものが知覚できるならば〕諸事物が同一の時間に定立されること〔の知覚にもとづいて、そこ〕から、それら諸事物の知覚が相互に継起可能であると結論できるのだが〔それはできない〕。…ゆえに (E) 諸知覚の相互継起が客観のうちに根拠を有し、それによって同時存在が客観的として表象されるためには、互いに外的に同時存在する諸事物のもつ諸規定の相互継起に関わる悟性概念が必要となる。ところで (F) 一方の実体のもつ規定の根拠〔つまり原因〕が、他方の実体のうちに含まれている場合、そうした実体間の関係は影響 (Einfluss) の関係であり、各実体が相互に他方の実体の規定に対する根拠を含んでいる場合には、それは相互性もしくは相互作用の関係である。ゆえに (G) 空間における諸実体の同時存在が経験のうちで認識可能となるのは、実体間の相互作用という前提の下でのみである。〔以下、省略〕(B256ff. 挿入引用者)

以上が第三類推の証明の主要部であるが、ここではまず結論に注目しよう。問われているのは、空間における諸実体の同時存在の経験がいかんにして可能となるかであり、実体間の相互作用がそこに前提されることによってである、というのがその答えである。ここで「空間における諸実体の存在」という事態は、第一、第二類推には見られず、第三類推ではじめて登場する事態である。いいかえれば、第三類推では「空間」がキーワードになっている、ということである。もう一点、文 (F) 中に見られる「(相互の) 影響」という実体間の関係もまた、第三類推ではじめて登場する関係である。なるほど、「影響」(より正確には「物理的影響」⁽⁴⁾) という概念は因果関係に属する概念であり、この因果関係は第二類推 (因果性原則) ですでに論じられている。しかし第二類推は、一つの実体における状態変化の原因が、その変化に時間上、先立つ何かのうちに求められねばならない、ということだけを主張したものであり (vgl. A195/B240)、複数の諸実体間の関係を定めたものではない。したがって第三類推は、第二類推の単なる応用や拡張ではなく、第二類推を踏まえた上での一つの独立した原理なのである (この両原則の関係は、『自然科学の形而上学的原理』(以下、『原理』と略記) の「力学」章における、慣性法則と作用反作用の法則との関係と同様のものとも言え、理解しやすい

かもしれない⁽⁵⁾。さらに重要な点は、この「空間における諸実体の存在」という事態と「相互影響」ないし「相互作用」という事態とが、密接不可分の関係にあるという点である。では、それはいかなる関係にあるのか。この点は以下の論述を通じて明らかとなる。

第二節 第三類推の証明の検討（前半）

それでは本証明における論証の各ステップを検討することにしよう。冒頭の文（A）では、同時存在の定義が述べられているのではなく（同時存在の定義は（B）で示されている）、経験の現場において、知覚されている諸対象が、客観的に同時存在しているか否かを判定するための判定基準が示されている。その判定基準とは、諸知覚の相互継起可能性の有無である。ここでカント自身が挙げている事例に即していえば、まず月を知覚し、次に大地を知覚し、さらに月の知覚に戻り、ふたたび大地の知覚に進むことが可能である、といった事態が知覚の相互継起可能性を示していると理解するならば、それはまったくの誤りである。そうではなく、まず月を、次に大地を、という順序で知覚している、まさにその時に、その逆の順序での知覚もまた私には可能であったという意識をもつこと、それが知覚の相互継起可能性の意味するところである。現実の知覚の順序としては、月→大地という順序か、あるいはその逆の順序か、どちらか一方の順序しか成立しない。したがって、現実の知覚順序と、それとは逆の知覚順序とが両立可能であるという主張は、「可能的知覚」（A212/B258）という概念を含意している。この可能的知覚という概念は、単なる知覚レベルでは成立せず、そこに何か加わった時に、はじめて成立する概念であるが、ここではさしあたり、現実の知覚順序と、それとは異なる知覚順序との両立可能性を意味すると理解しておこう。

しかし、そもそもどうして知覚の相互継起可能性が、現象的对象の同時存在を判定するための判定基準であると言えるのか。それは、われわれが事物の同時存在とはどういう事態であるかをあらかじめ理解しており（この先行的理解が文（B）で示されている）、この理解にもとづいて知覚の相互継起可能性を導き出しているからである。では同時存在に関するこの先行的理解そのものは、どこから得られるのか。

さしあたり言えることは、それは単なる知覚によって得られるのではない、ということである。カントによれば、われわれは事物の同時存在を単なる知覚だけで認識することはできない。その理由としてカント自身は、知覚における「多様なものに関するわれわれの覚知の総合〔すなわち知覚的表象の「経験的意識への取り入れ」（B202）〕がつねに継時的（*sukzessiv*）である」（A182/B226、挿入引用者）ことを挙げているが、この理由づけは説得力に乏しいように思われる。たとえば地平線にかかる月を眺めるとき、たしかに、われわれは月と大地を同時に眺めていると言えるだろうから⁽⁶⁾。むしろカン

トが言わんとするのは、単なる知覚レベルでの表象間の主観的な関係がどうであろうと、知覚の対象間の客観的な関係は、そこからは導くことができないということであろう（地平線上の月を大地と同時に知覚しているからといって、両者が同時に存在していると結論することはできない）。カントは上述した理由づけの直後に、「それゆえ、われわれは多様なものの覚知だけによっては、これらの多様なものが経験の対象として同時に存在するのか、それとも継起するのか、けっして決定することができない」（ibid.）と述べているが、この主張は、上の理由づけから切り離して理解するべきであろう（また第二類推のうちには「単なる知覚によっては…諸現象の客観的關係は決定できないままである」（B234）という主張も見られる）。

さて、われわれが事物の同時存在の意味を知覚から得ているのではないとすれば、それはどこから得られたものであろうか。それはアプリアリな直観によってである。同時存在、すなわち「多様なものが同一の時間に存在すること」の意味そのものは、アプリアリな純粹直観によって得られる。

しかしながら、じつを言うと同時存在のアプリアリな直観は、時間だけの直観のうちでは得られない。なぜなら、「時間のすべての部分は、つねに継時的（nacheinander）に存在し、同時には存在しない」（A33/B50）からである。「多様なものが同一の時間に存在すること」の直観は、時間と空間との結合によって、はじめて可能となる。この点に関して、カントは『批判』に先立つ『感性界と知性界の形式と原理』（以下、『就任論文』と表記）のうちで、きわめて興味深い考察を行っているので、その内容を見ておこう。

カントはこの『就任論文』で、空間・時間が、経験的に与えられるあらゆる事物の存在から独立に定まる構造をもちながら、ニュートンの言うような実体としての絶対的な空間・時間として実在するのではなく、われわれの感性的直観の主観的・形式的条件としてのみ存在するという、空間・時間の超越論的観念性の理説をはじめて提示したが、その中で次のような考察を行っている。

時間は一次元しか持たないのだが、（ニュートンの表現を借りるなら）時間の遍在性（ubiquitas）—— その意味するところは、感性的に表象可能なすべてのものは、いずれかの時に在るということであるが—— を通じて、現実的な諸事物の量に〔時間的な量すなわち持続のほか〕 もう一つ別の次元が付加されることになる。それは現実的な事物が、同一の時間点に、いわば吊り下げられている〔つまり同時に存在する〕かぎりのことであるが。なぜなら、時間が無限に延びる直線によって表示され、また各時間点における同時存在が、時間を表す直線に直交する直線によって表示されるとすれば、そこに生じた平面は、…現象の世界を表すことになるからで

ある。

(II 401Anm. 挿入引用者)

ここに展開されているカントの考察は、以下のような内容である。まず時間が一次元の直線で表示されることについては、『批判』の中でもしばしばカントが語っていることであり、問題はないであろう。この時間軸上の各点において、時間軸に直交して引かれる直線は、「もう一つの次元」すなわち空間の次元を形成する。空間は本来、三次元であるが、一本の直線に直交する三次元空間をイメージすることはできないので、カントはここで一次元空間に限定して考えたと思われる。そして、時間軸上の各点において時間軸に直交して引かれた無数の直線は一つの平面を形成するであろう⁽⁷⁾。この平面はまさしく時空を表すものとして、たしかに世界全体の形式を表すものと言える。しかし、この世界全体の形式を直観的に理解するためには、時間軸に直交する（直線ではなく）平面すなわち二次元空間を考えた方がイメージしやすいように思われる。重なり合った無数の平面、およびそれらを垂直に貫いて無限に延びる時間軸、それが世界の形式を表している、ということである。

さて、われわれの関心事から見たとき、こうしたカントの考察は、同時存在のアプリオリな直観がどのようにして成立するかを示したものとして捉えることができる。ひと言でいえば、それは時間の次元に対して「もう一つの次元」すなわち空間の次元を開くことによってである。もう少し敷衍して言えば、アプリオリな直観によるならば、事物が同時に存在するということは、時間軸に直交する平面、その同一の平面上に（事物を表す）複数の点が存在することにほかならない。

今、この平面上に二点 A, B があるとして、この A, B の順列を考えると、 $A \rightarrow B$ と $B \rightarrow A$ の二通りが可能である。この認識は数学的認識として、アプリオリな直観にもとづくことはいうまでもない。そして、この二通りの順列が可能であるという事態が知覚の現場に置き移されたときに成立する事態が、知覚の相互継起可能性なのである。そのさい、知覚は時間のうちで成立するものとして、必ず時間的順序を伴う。すなわち、A（この場合は知覚の対象として、もはや幾何学的点ではなく現実の事物である）の知覚の後に B を知覚するか、あるいはその逆の順序で知覚するか、現実の知覚順序としてはどちらか一方だけが成立する。それにもかかわらず、この二通りの知覚順序が可能である、すなわち知覚の相互継起が可能であると主張する場合、この主張は A, B が同一平面上に存在するという前提の下でのみ可能となる。さもないと、 $A \rightarrow B$ か、あるいは $B \rightarrow A$ のどちらか一方の知覚順序しか成立しえないであろう。いいかえれば、A, B が同一平面上に存在すること（同時存在すること）と、A, B に関する知覚の相互継起が可能であることとは、互いに等価の関係にある、ということである⁽⁸⁾。

以上の議論から明らかになったのは、現象的对象の客観的な同時存在を判定する判定

基準としての、知覚の相互継起可能性という主張の根底には、時間と統合された空間に関するアプリアリな直観が存している、ということである。しかし、繰り返しになるが、事物の同時存在の意味をアプリアリな直観にもとづいて理解しているからといって、知覚の現場において目の対象が同時存在しているか否かを判定する根拠が与えられたわけではない。いいかえれば、与えられた現象の知覚にさいして、知覚の相互継起が可能であると判断する根拠が与えられたわけではない。同じことをアプリアリな直観の観点から言い直すならば、(空間と統合された)時間のアプリアリな直観それ自身は、時間のうちに現実存在する諸事物の客観的な時間関係を決定するはたらきを有してはいない、ということである。現実存在の時間関係の決定に関与できる直観は、経験的直観すなわち知覚だけである(「知覚は…現実性(Wirklichkeit)の唯一の特性である」(A225/B273))。そこでカントは(論理的に可能な)一つの仮定として、もし時間そのものが現実の諸事物の存在から独立に、それだけで知覚できるとしたらどうなるかを考えた(それが文(D)で表わされている)。そうすると本来、アプリアリな直観のレベルでしか成立しなかった上述の諸事態が、知覚の現場において、そのまま成立することになる。いいかえれば、時間そのものの知覚にもとづいて、(ペイトンの表現を借りるなら、「現象A、Bが生じた時間点が、それら現象に捺印される(stamped upon)かのよう」⁹⁾な仕方)で目の諸対象が同時存在しているか否かを、したがってまた、それら諸対象の知覚が相互継起可能であるか否かを、直接決定することができることになる。しかし、事物の現実存在から独立な諸特性をもった時間そのものの知は、アプリアリな直観としてのみ可能であって知覚としては不可能であること、これは『批判』の感性論からの重要な帰結である。ゆえに(C)「時間そのものは知覚されない」。

第三節 第三類推の証明の検討(後半)

以上の議論を踏まえた上で、カントは第三類推の証明の核心となる一文(E)を提示する。きわめて重要な一文であるので、再掲しておこう。

ゆえに(E)諸知覚の相互継起が客観のうちに根拠を有し、それによって同時存在が客観的として表象されるためには、互いに外的に同時存在する諸事物のもつ諸規定の相互継起に関する悟性概念が必要となる。(B257)

まず、この一文の後半に見られる「互いに外的に同時存在する諸事物」という表現は、読み方によっては論点先取の嫌疑をかけられ兼ねないので、「空間のうちに存在する」という表現に読み替えておこう。そうすると、この一文の意味するところは次のようになる。空間のうちに存在する諸事物のもつ諸規定のあいだでの、「相互継起」と表現さ

れる時間的關係が、ある悟性概念ないしカテゴリーによって規定され、そのことによって、諸知覚の相互継起可能性に対する客観的な根拠が与えられることになり、したがってまた、この根拠によって、空間における諸実体の同時存在の経験がはじめて可能となる。このカテゴリーとは、文 (F) に見られるように、相互作用のカテゴリーである。

こうして、文 (E) の意味するところは明らかとなった。問題は、この文が主張している内容が正しいか否かにある。第三類推の証明の成否は、この点にかかっている。以下に、この問題の検討に向かうが、その前に、「諸規定の相互継起」という表現が何を言い表しているのか、はっきりさせておく必要がある。カントによれば、時間的に生起するような「事物の規定」とは「実体の偶有性」(A186/B229) を意味し、それはまた「実体が現実存在する特定の仕方」(ibid.) として、実体の「状態」(A187/B230) を意味する。したがって、「事物の規定の継起」とは、〈実体の状態が変化すること〉を意味するわけである(「変化とは、同一の対象の一つの在り方の後に、別の在り方が継起することである」(ibid.))。ここで第二類推によるならば、原因がはたらくのは実体の状態そのものに対してではなく、実体の状態の生起ないし変化に対してである(vgl. A207/B252Anm.)。したがって、相互作用すなわち相互因果性のカテゴリーは、二つの実体の状態変化の原因が、互いに他方の実体のうちに存することを言い表すカテゴリーである。では、このカテゴリーはどのようにして二つの実体の状態変化の関係を規定するのか。いいかえれば、相互作用のカテゴリーは、どのようにして空間のうちに存在する諸事物の同時存在の関係を可能にするのか。

この問題を検討するために、具体的な事例を挙げながら考えてみよう。ここに同じ長さの紐に、まったく同一の大きさや重さをもった鉄球が各々結びつけられた二つの振り子があり、その紐の先端が同一の支点に固定されたまま、両鉄球が鉛直下方に吊り下げられているとしよう(空気抵抗や摩擦力はないものと仮定し、また両鉄球は完全弾性体であるとして)。さらに、この事例では遠隔作用としてはたらくのは重力だけであり、それ以外の作用は近接作用としてはたらくと仮定しよう)。このうちの一方の鉄球(これを A とする)を、紐をピンと張ったまま、水平方向に近づくまで持ち上げ、そして手を放してみよう。この鉄球 A は次第に速度を増しながら、静止している鉄球(これを B とする)に正面衝突し、その結果、鉄球 A は静止し、鉄球 B は、鉄球 A が描いていた弧の運動を引き継ぐかのように、静止状態から運動状態に移行するであろう。ここで双方の鉄球の状態変化を見ると、A は運動状態 (a1) から静止状態 (a2) に移行し、B は静止状態 (b1) から運動状態 (b2) に移行している。このとき a1 → a2 への移行の時点と、b1 → b2 への移行の時点とは、同時であるか否か。つまり両球の状態変化は同時に生じているか否か。これに対して、状態変化は必ず時間を要するから、この問い方では一義的な解答は得られない、という返答もありうる。そこで、さらに厳密に、a1

→a2 への移行の開始時点と b1 →b2 への移行の開始時点とは正確に同時であるか否かと問うてみよう。相互作用の原則が自然界を統べる法則としてアприオリに妥当すると主張することは、この問いに対して然りと返答することにほかならない。では、なぜそう言えるのか。

今、重力以外には遠隔作用ははたっていないと仮定されているから、鉄球 A が「原因の原因性 (die Kausalität der Ursache)」(A203/B248) を発揮する時点、つまり作用を開始する時点は、鉄球 A が鉄球 B に衝突した瞬間の時点である。ここで、こうした作用に対して、その結果が生じ始める瞬間が作用開始時点よりもわずかに後であると仮定すること、いいかえれば鉄球 A が衝突した後、静止していた鉄球 B がわずかに遅れて運動を開始すると仮定することは、論理的には可能である。しかしカントによれば、「結果が生じる最初の瞬間においては、結果はつねに原因の原因性〔つまり原因としてののはたらきを発揮すること〕と同時に存在する。なぜなら、もし原因の原因性が一瞬前に停止してしまっただらば、結果は決して生じなかつたであろうからである」(ibid. 挿入引用者)。ゆえに、鉄球 A がその衝突によって作用を開始する時点は、鉄球 B が静止状態から運動状態に移行する、その最初の瞬間と同時に存在する。ただし、この同時存在は、相互作用の原則が主張する同時存在を意味してはいない。なぜなら、ここでの同時存在は、原因と結果のあいだでの時間経過がゼロという意味だからである (vgl. ibid.)。一方向的な因果関係では、「時間の順序」(ibid.) という観点から見るかぎり、つねに原因が先で結果が後でなければならない。

ところが、この二つの振り子の衝突においては、一方向的な因果関係ではなく双方向的な因果関係が成立している。すなわち、ここでは鉄球 A の運動が原因となって、鉄球 B の静止状態から運動状態への変化が生じているとともに、静止している鉄球 B が鉄球 A の進路に立ち塞がるのが原因となって、鉄球 A の運動状態から静止状態への変化が生じている。そこで問題は、この二つの状態変化の開始時点が同時であるか否かという点にある。仮に鉄球 A の a1 →a2 の開始時点が、鉄球 B の b1 →b2 の開始時点よりもわずかに後であったとしよう。その場合、運動していた鉄球 A は衝突後、わずかのあいだ、その運動状態を維持することになる。他方、鉄球 B は衝突した瞬間に運動を開始するとはいえ、運動変化の連続性を前提すれば (そしてこの前提は『批判』のうちで証明されている (vgl. A171/B213, A208/B254f.)), 鉄球 B が静止から徐々に速度を増していくあいだに、鉄球 A は鉄球 B を追い越してしまうことになる。これは不合理であろう。逆に、鉄球 B の b1 →b2 の開始時点が鉄球 A の a1 →a2 の開始時点よりも後であったとしよう。この場合も、鉄球 B が静止しているあいだに、鉄球 A が鉄球 B を追い越してしまう、あるいは少なくとも透過してしまうことになる。これも不合理であろう。ゆえに二つの鉄球 A, B の衝突現象が相互因果性すなわち相互作用の原

則に従っているとみなすかぎり、両鉄球の状態変化は厳密に同時に生じるのではなくてはならない⁽¹⁰⁾。

さて、振り子の衝突という事例に即した以上の議論によって、空間のうちにある諸事物が相互作用の原則に従う場合には、それら諸事物の（状態変化から見た）同時存在の必然性が帰結することは十分、証明されている。しかし、そのさい本論証は、物的実体が「不可入性」(B278)を本質的属性として有するという、自然哲学上の知見を前提していた。なぜなら、一つの鉄球が別の鉄球を追い越したり透過したりすることは、この不可入性に反するがゆえに不合理とされるからである。しかし、本論証が純粹に批判哲学的なレベルでの論証であるためには、自然哲学上の知見から独立に、いわば認識論的な論証を提示しなくてはならない。それは具体的には、相互作用の原則と知覚の相互継起可能性との必然的な結びつきを示すことによって遂行される。

この点は上述した時空統一体に関する議論に即して容易に証示することができる。今、アルファベットの大文字Hを書き、左右の縦線をそれぞれ振り子の鉄球A、Bの、時間経過に沿った状態を表すとしよう（上方から下方へと時間が経過するとする）。そして、横線が縦線と交わった点は、それぞれの鉄球の状態変化の開始時点を表すとしよう。今、AとBは衝突を介して相互作用するという前提であるから、ここで問題とする知覚順序は、ちょうどあみだ籤の場合のように、一方の縦線から横線を通して他方の縦線に進むという順序になる。この知覚の順序は明らかに二通り存在する。そこで問題は、この二通りの知覚順序が両立可能であるか否かにある。今、仮にこの横線がどちらか一方に傾いているとしよう。それは両鉄球の状態変化の開始時点がわずかに異なっていることを意味する。その場合、少なくとも一方の変化の開始時点から他方の変化の開始時点までのあいだ、知覚は一方向的にのみ進み、双方向に進むことはできない。なぜなら、「過ぎ去った時間に属する」(A211/B258)ものは「もはや覚知の〔つまり知覚の〕いかなる対象にもなりえない」(ibid.)からである。そして第二類推の成果によれば、こうした知覚の不可逆性は、そこに一方向的な因果関係が成立していることの証左である。ゆえに、この二球の衝突現象が相互作用の法則に従っていると前提するかぎり、二つの状態変化の開始時点は厳密に同時でなくてはならず、したがってまた、二通りの知覚順序が必然的に両立可能でなくてはならない。これを一般化して言い替えるならば、空間における諸実体の客観的な同時存在を、知覚を通じて規定するような経験的認識（＝経験）は、そうした実体間に相互作用がはたらいているという前提の下でのみ可能となる。

以上に見てきたように、第三類推の証明は十分な予備的考察の下で、また各命題に対する適切な補足的説明を適宜、付加することによって、論理的な破綻の見られない首尾一貫した論証を提示していると判断することができる。

さて、本章の最後に、第三類推の証明のもつ現代的な意義について、簡潔に述べてお

きたい。今日のわれわれはアインシュタインによって、同時性という概念が局所的にのみ成り立つ相対的な概念であって、宇宙全体にわたって成立する非局所的・絶対的な同時性なるものは、光速度の有限性を考慮に入れない、常識にもとづく先入見にすぎないことを教えられている。カント批判哲学の理論的部門が、ニュートンの唱えた実体としての絶対時間に関する、いわば認識論的な読み替えにもとづく理論である以上、カント哲学もまた時代的制約を免れることはできず、したがってまた、第三類推の証明が現代において無条件に妥当するとは、もはや言えない。しかし、そうした時代的制約を踏まえた上で言えば、一方でわれわれが知覚を通じて事物の時間的関係を判定しているという事実と、他方で事物の客観的関係が自然法則に従って成立するという事態とを、認識論的考察にもとづいて結びつけようとしたカントの哲学的営為は、同様のテーマを主題とする場合に、今日なお参照するに値する十分な価値を有していると判断する。

以上、相互作用の原則およびその証明の内容を検討してきた。こうした検討を通じて、カントが考えている実体概念についても、大まかな輪郭が描けたと思われる。それでは次に、本論考の中心テーマである、カントの実体論を究明するために、第一類推の検討に向かうことにしよう。

第三章 第一類推（実体性の原則）に見られるカントの実体概念

第一節 第一類推とその証明の提示

第三類推を検討した場合と同様、『批判』第二版に依拠して、まず第一類推の定式とその証明を提示し、次にその証明の検討を行うことにしよう（証明中のポイントとなる文に A, B, C … の記号を付しておく）。

第一類推

実体の恒存性の原則

現象のあらゆる交替（Wechsel 移り変わり）において、実体は恒存し、実体の量は自然のうちでは増減しない⁽¹⁾。

証明

あらゆる現象は時間のうちにある。(A) 基体としての（すなわち内的直観の恒存的な形式としての）時間のうちでのみ、同時存在ならびに継起が表象可能となる。したがって (B) 時間は、現象のあらゆる交替がそのうちで考えられるべきものとして、〔同一に〕とどまり、交替しない。なぜなら、(C) 時間とは、継時的存在（Nacheinandersein）や同時存在が、みずからの規定としてのみ表象可能となる、そのような何かであるから。ところが (D) 時間は単独では（für sich）知覚する

ことができない。それゆえ、(E) 知覚の諸対象つまり現象のうちに、時間を一般に表す基体が見いだされなくてはならない。(F) この基体に即して (an), あらゆる交替や同時存在が、この基体に対する現象の関係を通じて、覚知のうちで知覚可能となる。ところで、(G) あらゆる実在的なもの (das Reale) の基体、すなわち事物の現実存在に属するものの基体は実体であり、この実体において、現実存在に属するあらゆるものは、〔実体の〕規定としてのみ考えられる。ゆえに、(H) 恒存的なもの、〔詳しくいえば〕現象の〔現実存在の〕あらゆる時間的關係がこれと関係づけられることによってのみ規定されうところの恒存的なものは、現象における実体、すなわち現象の実在的なものであり、これは、あらゆる交替の基体として、つねに同一にとどまる。〔以下、省略〕 (B224f. 挿入引用者)

さて、証明の検討に入る前に、二点ほど前置きとして述べておきたい。第一点は、本証明に見られるカントの実体概念の独自性についてである。本論考の冒頭で述べたように、古来より哲学ないし形而上学の中心には実体概念が置かれてきた。代表的なところでは、アリストテレスが命題の主語の位置を占めるものという観点から実体概念を捉え、なかでも個物こそが本来の実体であるという説を唱えた。中世では神との関係において実体が考察され、近代初期ではデカルトが、神を背景としつつも、独立存在としての実体という考えを前面に押し出し、「延長実体」(res extensa) と「思惟実体」(res cogitans) の二元論を唱えた。これに対してカントは、これら先行者たちの実体概念を踏まえながらも、本証明に見られるように、実体を時間との本質的な関係の下で捉え、実体を「経験的時間規定一般の基体」(A144/B183) あるいは「時間そのものの経験的表象の基体」(A183/B226) とみなす理説を展開している。こうした時間との関係という観点から実体概念を理解しようとする点こそが、カント実体論の最大の特徴である。しかし、これと同時に、証明の後半部分に見られるように、命題の主語の位置を占めるべきもの、あるいは性質や変化の基体・担い手としての実体という概念もカントは堅持している。問題は、実体に関するこの二つの概念ないし捉え方が、本証明において、うまく統合できているか否かにある。

第二点として、第一類推の定式に関して、時折見受けられる誤解をあらかじめ防いでおきたい。一般に純粋悟性の諸原則は、カテゴリーにもとづき、かつ図式という感性的制約のもとに成立するアプリアリな総合判断である。そこで第一類推の定式もアプリアリな総合判断として示されているはずであるが、そのさい、定式中に見られる「実体は恒存的である」という文こそがアプリアリな総合判断を表したものである、とみなすなら、それは明白な誤解である。「実体は恒存的であるという命題は同語反復である」(A184/B227) とカント自身が明言している。いいかえれば、ここで実体カテゴリーは

あらかじめ図式化されたカテゴリーとして考えられている、ということである。実体性の原則がアприオリな総合判断だと言われるのは、「現象のあらゆる交替（移り変わり）において実体は恒存的である」という文全体についてである。だからこそ、「あらゆる現象のうち、恒存的な何ものかが存在しなければならない」（ibid.）という事態を証明することこそが本証明の要となるのである。

第二節 第一類推の証明の検討（前半）

続いて証明内容の検討に入る。一見して明らかなように本証明は、検討すべき多くのことがらに圧縮された形で述べられており、一読したかぎりでは内容を理解することすら覚束ない。まず（文）A 中に見られる「（内的直観の恒存的な形式としての）時間」という表現は、端から大きな問題を孕んでいる。「直観の形式」としての時間に「恒存的」という形容詞を付することは、きわめて不適切であると思われる。なぜなら、「感性の純粹形式はそれ自身、純粹直観とも呼ばれる」（A20/B35）という感性論中の一文から明らかなように、直観形式はそれ自身、アприオリに直観されうるものであり、したがって、この直観形式に恒存的という形容詞が付されるならば、恒存性が、あたかも時間そのものの性質としてアприオリに直観される規定であるかのように解されてしまうからである。しかし、すでに見ておいたように、恒存性が時間のアприオリな直観的規定であるとする、実体性の原則は数学的な公理とみなされることになり、これではカント批判哲学に悖る結果となる。アприオリな直観にもとづいて知られる時間の諸性質は、感性論によれば、時間の一次元性や連続性、時間の諸部分の継時性、さらには時間の唯一性といったものであるが（vgl. A30f./B46f.）、ここには恒存性は含まれていない。それでは恒存性は知覚されるものであろうか。その答えは然りでもあり否でもある。それがいかなる意味であるか、以下に明らかにして行こう。

そこで文（A）の意味するところは、さしあたり、われわれが諸現象の同時存在や継起を経験的に表象する、つまり知覚するさい、時間がその基体としてはたらいっていることだと理解しておこう（ここでの「基体」の意味についても、行論の中で説明して行こう）。そして、このような基体としての時間そのものは、同一にとどまり交替しない、つまり恒存的である。それが文（B）の主張するところである⁽¹²⁾。その理由づけとして、文（C）が挙げられているが、この文の意味するところは判然としない。これよりもむしろ、第一版で挙げられている理由づけの方が分かりやすい。それによれば、「もし時間そのものが継起するとすれば、この継起がそこで可能となるべき、もう一つの時間が考えられなくてはならないであろう」（A183/B226）、つまり無限背進に陥るであろう、と言われている。要するに、時間と現象とでは、その在り方が根本的に異なるということである。「時間は過ぎ行く（sich verlaufen）ことはない。ただ時間のうちで転変す

るもの (das Wandelbar) の現実存在が過ぎ行くだけである」(A144/B183) というカントの文言も、そうしたことを言わんとしていると思われる。

こうして諸現象の同時存在や継起を知覚するためには、時間は恒存的なものとなさねなくてはならない、という地点にまでは到達した。そこで次に問われるべきことは、この時間の恒存性はどのようにして表象されるのか、という問題である。すでに見ておいたように、時間の恒存性はアプリアリな直観によっては表象されない。では、それは知覚によって表象されるのではないか。この可能性を否定したものが文 (D) すなわち、「時間は単独では知覚できない」というテーゼである。前章でも見たように、このテーゼは、実体としての絶対時間というニュートン的な時間概念を、われわれの感性的直観の形式として認識論的に読み替えつつ存在論的には否定した感性論から帰結する、きわめて重要なターニングポイントの位置を占める。

すなわち、事物の現実存在の時間的關係が知覚を通じて客観的に規定されるためには、第一に必要な条件として時間の恒存性が表象されなくてはならないが、時間の恒存性はアプリアリには直観できず、また時間そのものの知覚は不可能である。したがって、「時間を一般に表す」ことによって時間の恒存性の役割を代行する何ものかが、知覚の対象すなわち現象のうちに見いだされなくてはならない。それが文 (E) で主張されている内容である。第一版では「恒存的なもの (das Beharrliche)」(A182/B226) と呼ばれる、この基体としての何ものかについて、文 (F) では、あらゆる同時存在や継起が「この基体に対する関係を通じて」知覚可能となる、と言われる。この文 (F) の意味するところを理解するためには、事物の変化と時間 (ないし時間を表す恒存的なもの) との関係を、物体の運動と空間との関係と類比的なものとして捉えることが、きわめて有効と思われるので、以下に詳論したい (なお、あらかじめ注意しておく、時間を表す何ものかが示すべきこの恒存性は、事物が一定時間、状態を維持することとは異なる。なぜならカントによれば、「現実存在が持続 (Dauer) と呼ばれる一つの量を手に入れることができるのは、恒存的なものによってのみ」(A183/B226) だからである。とはいえ、この両概念はきわめて親しいものであり、必ずしも明瞭に区別できるとはかぎらない⁽¹³⁾)。

カントは現象中に見いだされるべき恒存的なものの実例として、太陽の日周運動に対する「地上の諸対象」(B278) を挙げているが、説明が欠けているために、「地上の諸対象」がなぜ恒存的なものとなさねるべきなのか、判然としない。じつはカントは、これと類似した実例を「形而上学講義」のうちでも挙げている。曰く、

恒存的な何ものかが存在しないとすれば、変化が生じたことの経験は不可能である。粗雑な例を挙げるならば、〔船に乗っている〕海上の水夫は、海が〔船とともに

に] 動いている場合には、何か恒存的なもの、たとえば島が存在していないかぎり、自分の〔船の〕運動を知覚することはできないであろう。この島に即してのみ、自分〔の船〕がどれほど移動したかが分かるのだから。(XXVIII 567, 挿入引用者)

この事例によって、カントが事物の変化と時間ないし恒存的なものとの関係を、物体の運動と空間との関係と、きわめて類似したものとみなしていることが分かる。それどころか、この事例によるかぎり、カントはこの二つの関係を混同しているようにすら見える⁽¹⁴⁾。

太陽の日周運動にしても船の運動にしても、物体の場所の移動として、空間の存在を前提している。ところが感性論によれば、空間そのものは知覚不可能であるので、空間を表す特定の物体（この例では「島」）を運動記述の原点に据え、この原点に対する距離と方向の時間的変化として、諸物体の運動が記述される。要するに、諸物体の運動を記述するためには、さしあたり必ず何らかの特定の物体を基準とした座標系を設定する必要がある、ということである。『原理』の「運動学」章で展開されている、運動と空間との関係に関するこうした論述（vgl. IV 481）が、ほぼそのまま、事物の変化と時間との関係にも妥当するであろうことは容易に見てとることができる。とりわけ、基準点に据えられる特定の物体は、物体である以上、本質的に「運動可能」(IV 480)であるにもかかわらず、これを（暫定的に）「不動 (unbeweglich)」(ibid.) とみなすことが、物体の運動記述の大前提となるという議論と、諸現象の変化を知覚するために特定の現象を無変化なもの、すなわち恒存的なものとみなす必要があるという議論とは、完全な並行関係にあることが分かる。それどころか、上記の船の運動の例では、島という特定の事物が、空間を表す不動なものとみなされると同時に、時間を表す恒存的なものともみなされている。

こうした事態は、前章で検討したカントの時空統一体モデルを採用することで、比較的容易に理解できると思われる。すなわち島は、無数に重なり合う二次元空間の原点に置かれると同時に、この原点を通る垂直な直線として時間軸が引かれる。この時間軸から二次元空間を俯瞰したかたちで見たとき、船の運動（より正確には船の運動の軌跡）が記述され、そのさい島は不動として表象される。これに対して視線を二次元空間に平行した位置に移したとき、時間軸で表される時間の経過に沿った船の動きが変化として記述される。そのさい、島が恒存的として表象されていなければならないことは、必ずしも明白とは言えない。そこで、たとえば島が一時的に水没し、しばらくして、ふたたび海上に出現したといった事態を想像してみよう。このとき、まず島の水没の前後における船の運動の記述が統一性を欠くことになることが分かる（地殻変動によって島の位置が変わった可能性を否定できない）。それどころか、再出現した島が水没以前の島と

同一である保証すらない（まったく新しい島が生じたのかもしれない）。そうだとすれば、時間軸の成立が島の存在に依拠するという前提に立つかぎり、島の水没前後における時間軸の同一性は保証されないことになる。これは時間軸が切断されたことを、いいかえれば時間の統一が破壊されたことを意味する。「もし、われわれが（実体という点から見て）新しい事物が生成することを認めるならば、そのみが時間の統一を表しえたもの、すなわち基体の同一性が失われるであろう」（A186/B229）とカントが言っているのは、こうした事態を言わんとしていると思われる。

またカントは、「われわれが運動を経験しようとする場合には、そうした運動がそこでなされる空間もまた〔感覚可能な物体によって〕感覚可能〔すなわち知覚可能〕でなければならない」（IV 481, 挿入引用者）と語っている。これと類比的に考えるならば、現象の変化をわれわれが知覚するにさいして、時間が単独では知覚されないにせよ、時間は恒存的なものとして現象の変化と共に知覚されていなければならないであろう。これと同様な主旨の主張はペイトンにもアリソンにも見られる。ペイトンは現象の変化と共に知覚される恒存的なものとしての時間について、「背景」（background）という表現を用いて言及しており、またアリソンは本証明中に見られる「基体」という概念を「背景」（backdrop）という意味であると解し、さらにそれを「準拠枠」（frame of reference 座標系）とも言い替えながら、事物の変化の知覚のためには、時間が共に知覚されている必要があるという事態を、「バックドロップ・テーゼ」とすら命名している⁽¹⁵⁾。このような解釈は、事物の変化と時間との関係を物体の運動と空間との関係と類比的なもののみなし、またカントの時空統一モデルを援用しつつ提示した、われわれの解釈と基本的に軌を一にするものであろう。

以上の議論を通じて、本証明中の文（E）および（F）の主張内容を理解することができたと思われる。すなわち、事物の現実存在の時間的關係が知覚を通じて客観的に規定可能であるためには、第一条件として、時間の恒存性を表す何か、個々の事物の知覚と共に、背景ないし準拠枠として知覚されていなければならない、というのがその内容であり、われわれはこうした主張を十分、首肯しうる。

しかしながら、事物の変化と時間（恒存的なもの）との関係を、物体運動と空間（不動なもの）との関係と類比的なもののみなし、また事物の変化を前景、時間を表す恒存的なものを背景とみなす上記の解釈は、証明の最後の段階である文（G）および（H）の内容を理解しようとする場合に、その有効性が失われるように見える。そこで次に証明の後半の検討に移ることにしよう。

第三節 第一類推の証明の検討（後半）

この文（G）および（H）においてカントは、「事物の現実存在に属するもの」すな

わち、事物の現実存在に固有の規定、たとえば物体ならば色や温度、重さ、さらには不可入性といった規定（カントはこれを「実在的な」規定と呼ぶ）、そうした規定の「基体」としての「実体」が、時間を表す恒存的なものにはかならないと主張する。これはいいかえれば、同一の実体が以下のような二つの異なったはたらきをもつという主張を意味する。すなわち、実体は一方で、現象のあらゆる変化や同時存在がそれとの関係を通じて知覚可能となるところの、恒存的なものとしての時間の代行者としてのはたらきをもつ。この場合、実体は「つねに在るもの（jederzeit ist）」（A182/B225）とか「あらゆる時間にわたって現実存在する（Dasein zu aller Zeit）」（A185/B228）ものと言い表される。これはまた、不生不滅なものとしての実体とも言い表すことができるだろう。他方で実体は、個々の事物の状態変化にさいして、その変化を通じて同一なるもの、いわゆる変化の担い手としてのはたらきをもつ。この場合には、実体について、「変化とは、同一の対象〔実体〕の一つの在り方に別の在り方が後続することである」（A187/B230）などと表現される。カントが主張する実体のこの二つのはたらき、あるいは二つの実体概念は、本証明において首尾よく統合されているであろうか。

実体のこうした二つのはたらきが、互いにまったく異なったものであることは容易に分かる。なぜなら、たとえば船と島の例を挙げるなら、実体が時間の代行者のはたらきを示すという観点から見たとき、「あらゆる時間規定の本来の基体」（A185/B228）としての実体に相当するのは、島であって船ではない。他方、変化の主体・担い手としてのはたらきという観点から見たとき、その位置を変化させている船こそが実体と呼ばれるべきだろうからである。このような違いが生じる根本的な理由は、物体の運動が「空間における恒存的なものに対する外的な関係の変化」（B277）であるのに対し、実体の変化の主体とされる場合には、一つの事物の状態の変化が考えられている点にある。外的関係の変化と事物の状態の変化との違い、この違いのゆえに、物体の運動と空間との関係と、変化と時間との関係という、二つの関係のあいだに見られた類比性が、ここではもはや成り立たないのである。したがって、ペイトンやアリソンが唱える「背景」理論もまた、そのままのかたちでは、時間を表す恒存的なものとしての実体と、事物の変化の主体としての実体という、二つの実体概念の統合を説明する力をもちえないであろう（アリソン自身、証明のこの段階は「バックドロップ・テーゼを超えている」と明言している⁽¹⁶⁾）。

カントの実体論に見られる、こうした二つの実体概念が『批判』の中ではうまく統合されておらず、そこには一つのディレンマが生じている、すなわち、実体カテゴリーを時間そのものを表す恒存的なものともみなした場合には、個々の事物の変化に実体カテゴリーを適用することはできず、またその逆も然りというディレンマが生じている、という主張を正面切って掲げたのは、B. W. ホールである。ホールは、このディレンマを解

消することこそが、晩年の遺稿集『オプス・ポストゥムム』におけるカントの元々の目論見であったと論じている⁽¹⁷⁾。ホールのこの論点には賛同できないが、二つの実体概念の統合には大きな困難が伴うという主張には、耳を傾けるべき十分な理由があるように思われる。

この二つの実体概念を統合する方法はあるのだろうか。この問題を考えるにあたり、カントが第一版で言及している、経験に関する二つのレベルの区別がヒントになる。それは日常的経験と自然科学的経験との区別である。カントによれば、ある哲学者（この場合は自然哲学者、現代であれば自然科学者を意味する）が、煙の重さはどれほどかと訊かれたときに、燃やす前の木の重さから、燃やした後に残った灰の重さを引けばよい、と答えたという。そうすると、この哲学者は「燃焼においてさえ、物質〔元素〕（実体）は消滅せず、その物質の姿形（Form）が変化するだけであることを、確実なこととして前提していた」（A185/B298）ことになる。これはいいかえれば、哲学者（自然科学者）ならぬ一般人の場合には、日常的経験において、性質や変化の主語・担い手としての実体概念が用いられてはいるが、その使用は哲学者のように厳密なものではなく、木の色が変わるといった現象の場合には、木はそうした変化を通じて同一にとどまるとみなされているのに対し、木が燃えて灰になるといった現象の場合には、木が（実体として）消滅し、その代わりに灰が（実体として）生成しているとみなされている、ということである。要するに、日常的経験のレベルでは実体カテゴリーの使用が首尾一貫したものではなく、場当たりの使用されているのに対し、自然科学的経験のレベルでは、整合的な体系的知を求めるといふその本分のゆえに、実体カテゴリーの使用は厳格なものにならざるをえない。その基本的な戦略は、日常的経験では実体そのものの生成消滅とみなされる現象に関して、その現象を不生不滅な何ものかの振舞い、ないし状態変化とみなすという点にある。自然科学的経験が採用するこうした基本的戦略について、カントは次のように述べている。

現象において、ひとが実体と呼ぼうとするものが、あらゆる時間規定の本来の（eigentlich）基体であるべき（sollen）ならば、過去の時間であろうと未来の時間であろうと、時間におけるあらゆる現象は、もっぱらこの実体に即してのみ規定されうるのではなくてはならない。したがって、われわれがある現象に「本来の」実体という名を与えることができるのは、この現象があらゆる時間にわたって現実存在することを、われわれが前提しているからである。（ibid. 挿入引用者）

つまり、自然科学的経験のレベルで追求される「本来の基体」ないし〈本来の実体〉⁽¹⁸⁾ についてのみ、同一の実体が「あらゆる時間にわたって現実存在する」恒存的な

ものとして時間そのものを表すというはたらきと、事物の変化の主体・担い手としての
はたらきという、この二つのはたらきを共に有することが成立する、ということである。
第一類推の証明の最終段階において問題となった、二つの実体概念の統合という事態は、
自然科学的経験のレベルではじめて成立する、と結論してよいであろう。なお付言すれ
ば、自然科学的経験は日常的経験から一足飛びに究極的な〈本来の実体〉に到達できる
わけではなく、科学そのものの進展に伴って〈本来の実体〉として追求されるべき対象
が変更されることは、つねに可能である。その意味で〈本来の実体〉は自然科学的経験
にとって「統制的原理」(A178/B222)の役割を果たしていると言えるだろう。

以上、カントの実体性原則の証明内容を検討してきた。第三類推(相互作用の原則)
の証明の場合と同様、証明の鍵となる概念や命題に関する十分な準備的考察と、適切な
補足的説明を付加することによって、本証明は筋の通った論証を展開していると判断す
ることができる。しかし、それを認めた上で、〈本来の実体〉が、恒存的なものとして
「時間そのものの経験的表象の基体」としてのはたらきをもつというカントの結論には、
大きな欠落が存在しているのではないかという疑念を禁じ得ない。それは論証における
不備や飛躍ということではなく、〈本来の実体〉が表すかぎりでの時間の観念に関わる
疑念である。最後に、カント実体論の限界と題して、この問題を検討してみたい。

第四節 カント実体論の限界と新たな実体概念の模索

カントの実体論に関する払拭しがたい疑念、それは、自然科学的経験が追求する〈本
来の実体〉なるものが、本当に時間そのものを表しているのかという点に関わる。とは
いえ、ここで取り上げたいのは、現代でよく論じられている、自然科学者が前提する直
線で表される時間と、哲学者が問題とする過去・現在・未来の区別を本質とする時間と
の対立という問題ではない⁽¹⁹⁾。あくまで自然科学的経験が前提する時間に関するカ
ント自身の理解を問題にしたいのである。それは端的に言えば、カントが第一類推で論
じている、自然科学的経験に即応した実体概念によっては、時間の重要な特性である時間
進行の一方方向ないし時間の不可逆性という事態が、こぼれ落ちてしまっているのでは
ないか、という問題である。

ただしカント自身は、この時間の一方方向性・不可逆性という時間の特性を、まったく
無視しているわけではない。それどころか、感性論の中では、時間の諸部分が「次々に
(nacheinander) 存在する」(A31/B47)ことが、アプリアリに直観される時間の重要
な特性であると明言されている。ここで「次々に」という規定は、時間が直線で表され
るという事態と結びつけられることによって、たしかに時間の一方方向性・不可逆性を含
意していると言えるだろう。また、「過ぎ去った時間に属するものは、もはや覚知〔つ
まり知覚〕のいかなる対象にもなりえない」(A211/B258)という一文も、カントが時

間の不可逆性を、時間の一特性として理解していることの証左であるといえる。さらにカントは、この感性論の中で、目下の問題を考える上で重要なヒントとなる、以下のような文章を提示している。

〔時間に関わる〕この内的直観は、いかなる形態 (Gestalt) も与えないからこそ、われわれはこの欠点を類推によって補うべく、時間の継起 (Zeitfolge) を無限に延びる一本の直線で表し、…こうした直線の性質から、時間のあらゆる性質を導き出すのであるが、…時間の諸部分がつねに次々に存在するという性質だけは、それができない。
(A33/B50, 挿入引用者)

つまり、一本の直線を引くことによって、時間の他のすべての性質が表されるのに対し、「時間の諸部分がつねに次々に存在する」という性質だけは、直線を用いてこれを表すことができないのである。時間の諸部分が次々に在ること、したがってまた時間が一方向性をもつことは空間規定によっては表すことができない。このことをカント自身がはっきりと認めているわけである。ところがカントは、時間そのものを表す〈本来の実体〉としての恒存的なものを、本質的に空間的なものとみなしている（「観念論論駁」(B274ff.)を参照）。そうであるとすれば、この恒存的なものによって、仮に他のすべての性質を表すことができたとしても、時間進行の一方向性だけは、これを表すことができないという帰結を避けることができないように思われる。

この点は、カントが〈本来の実体〉とみなしている「物質」(B278)ないし物質元素の場合に、とくに顕著に現れる。カントはみずからの自然哲学理論として原子論を認めていないが、日常的に経験されるすべてのマクロな物体が、何らかの物質元素から構成されるとみなす要素主義的な自然観を採っている点では、原子論と軌を一にする。では、こうした原子あるいは物質元素が、どのようにして時間を表すことができるのか。なるほど、それらは不生不滅なものとして、時間の統一を表しており、またニュートン力学的な運動法則に従って運動することによって、事物の変化の基体としての役割を果たしていると言えるかもしれない。だが、まさしくこの運動法則が曲者なのである。ニュートン力学的な運動法則、とりわけ運動の第二法則は、解析学的に表現された場合に、時間 (t) の関数として表される。すなわち、 $F = m \cdot d^2s/dt^2$ (ここで F は外力, m は質量, s は距離を表す) となる⁽²⁰⁾。そして時間の不可逆性という目下の問題関心から見て、きわめて重要なことは、この運動法則中に現れるパラメータ (t) を、正の符号から負の符号に代えても、運動法則は同様に成立する、という点である。今、t の値ゼロが「現在」を表し、また正の符号が「未来」への向きを、負の符号が「過去」への向きをそれぞれ表すとすれば、運動法則は、時間が未来の方向に進もうと過去の方

と、どちらの場合にも成立する⁽²¹⁾（ここで過去・現在・未来という表現を使用したのは、時間の進行方向の違いを理解しやすくするための手段としてであって、ここでの議論にとって本質的な要件としてではない）。いかにすればニュートン力学の運動法則は、時間の逆方向への進行を許容するようになってきているのである。したがって、カントの言う物質ないし物質元素がニュートン力学的な運動法則に従うべきものと考えられるかぎり、それが表すはずの時間からは、時間の不可逆性という時間固有の性質が抜け落ちてしまう結果となる。

『批判』原則論中に展開されている、カント実体論のうちに見られるこうした問題点ないし限界を直視しつつ、実体が「時間そのものの経験的表象の基体」としてのはたらしきをなすというカント実体論の基本思想に忠実であろうとすれば、時間進行の一方向性・不可逆性をも表すような、新たな実体概念を模索する必要がある。そのためには、上述の議論から推測することができるように、カントの死後、19世紀に発見された熱力学の第二法則、いわゆる「エントロピー増大の法則」に手がかりを求めるべきであろう。とはいえ、この法則を正面から問題にする能力は筆者にはなく、ここでは、その一般的な結果を受容した上で、それに適合するような実体概念を探し求めることに専念したい。

この熱力学第二法則によれば、熱のやり取りのない孤立した系において、エントロピー（無秩序さ、乱雑さ）は不可逆的に増大し、したがって、「自然界（宇宙）を孤立系とみなせば、エントロピーの総和はその極大値に向かって増加していることになる」⁽²²⁾。きわめて大雑把な言い方をすれば、秩序をもったもの、形あるものは絶えず無秩序なものへと向かう必然的な流れの中にある。こうした宇宙の中であって、同一にとどまるもの、恒存的なものとしての実体もつべき性格は、単なる不生不滅性ではなく、実体としての同一性を保持すべく、無秩序へと向かう流れに抗うものという性格でなくてはならないであろう。

そして、そのような性格をもった実体こそが、時間の不可逆性を表す資格を有すると言えるのではなからうか。こうした点を直観的に示唆してくれる、以下のような事例を考えてみたい。

ここに二枚の写真がある。一枚には若者が、もう一枚には老人が写っている。まったくの他人にしか見えない。ここにもう一枚、中年の男が写っている写真がある。これを先の二枚の写真のあいだに置いた瞬間、私は突如、二つのことを同時に見てとる。一つは、この三枚の写真に写っている人物が同一人物であること、もう一つは、この人物が長い時間を、しかも二度と戻ることのない不可逆的な時間を生きてきたであろうことである。ここで重要な点は、写真の人物の同一性を見てとることと、長い不可逆的な時間経過を見てとることとは、表裏一体であって切り離すことができないという点である（別人だと思っているあいだは、時間の経過をこの写真から見てとることはできない）。

また、仮に三枚ともまったく同一の写真である場合も、当然、時間の経過を見てとることはできない。老人の白髪や顔に刻まれた深い皺こそが、写真を見る者に不可逆的な時間の経過を見てとらしめるのである。

この例から導き出せる帰結は以下のようなことである。熱力学第二法則が支配する世界においては、秩序をもったいかなるものも無秩序へと向かう必然的な流れの中にある。この流れに対して、何とかして、みずからの秩序を維持しようと抗う存在者、それが、この世界における実体である。生物に見られる、細胞レベルに至るまで行われている新陳代謝という活動は、こうした抗いの一つの形であると言えるだろう⁽²³⁾。そのような実体は、アトムのように完全無欠な同一性を維持することはできず、無秩序へと向かう傾向をつねに有している。しかし、そうだからこそ逆に、このような実体は、さまざまな変化の主体ないし基体であると同時に、時間の不可逆的な流れを、みずからの一身において表出するというはたらきを有しうるのである。

さて、そうだとすると、このような意味での実体は本質的に歴史的な存在者であると言えるだろう。カントは木の燃焼を説明するのに、要素主義的な自然観にもとづいて、一足飛びにミクロな物質元素へと向かった。だが、こうしたミクロな物質元素は、それが力学的な運動法則に従うべきものとみなされるかぎり、時間の逆方向への進行を許容するような世界における存在者であり、本質的に非歴史的な存在者であると言わざるをえない。木の燃焼という現象は、(文脈に応じてだが)こうした要素主義的な自然観とは根本的に異なる自然観、たとえば生態学的自然観にもとづいて、森林というマクロな実体の状態変化とみなすことも可能ではないか⁽²⁴⁾。そして、そのような実体概念こそ、時間を表す基体としてのはたらきを体現するのに相応しいものではないだろうか。

以上に展開された、新たな実体概念を模索するための試論は、もとより粗雑なスケッチにすぎない。しかし、カント実体論のもつ問題点、限界を踏まえた上で、なおかつ、実体と時間との本質的な連関のうちに深く分け入ったカントの思索に忠実たらんとする者にとって、向かうべき一つの方向が示されたのではないかと考える。

以上、『批判』原則論中に見られるカントの実体論を、さまざまな角度から検討してきた。そのさい、特に意を用いたのは、実体性原則に付された証明の内容を一文、一文検討することを通じて、この証明中に展開されている論証が筋の通ったものであり、また、それによって統一的で明確な実体概念が提示されていることを明らかにすることであった。そのための戦略として、相互作用の原則を扱った第三類推の内容を先に検討することをもって、その独自の意義を明らかにするとともに、三つの類推の中でもっとも難解と言われる第一類推を正しく解釈するための準備的考察とした。これによって、第一類推に関わる多くの障害が除去されたと思われる。それと同時に本論考では、カント

実体論に見られる大きな問題として、経験の現場において実体が表すはずの時間には、時間進行の一方方向性・不可逆性という、時間固有の性質が抜け落ちているという事実を取り上げ、その原因がカントの要素主義的自然観および当時の自然科学の水準という時代的制約にあることを指摘し、熱力学第二法則や生態学的自然観を援用して、カント実体論の枠内で新たな実体概念の模索を試みた。こうした目論見が成功しているか否か、大方の叱正を請う次第である。

《注》

『純粹理性批判』からの引用は慣例に従って、第一版を A、第二版を B で表記し、それ以外のカントの著作、講義録等からの引用はアカデミー版カント全集の巻号をローマ数字で表記する。なお引用文は岩波書店版『カント全集』に拠っているが、一部ことわりなしに訳文を変更した。

- (1) 高名なカント研究者 H. E. アリソンは、その著『カントの超越論的観念論』において、『批判』分析論に関する詳細にして緻密な解釈を展開しているが、驚くべきことに、第三類推についてほとんど何もコメントしていない。また E. ワトキンスも第二類推に関する論究に 33 頁を費やしているのに対し、第三類推に関しては 13 頁しか充てていない。また戦前の英語圏におけるカント研究を代表する H. J. ペイトンは、その著作中で三つの類推をほぼ同等に扱っている。これに対し、第三類推の意義をとくに強調しているのは、P. ガイアである。

H. E. Allison, *Kant's Transcendental Idealism*, Yale UP 1983.

E. Watkins, *Kant and the Metaphysics of Causality*, Cambridge UP 2005, pp. 185-229.

H. J. Paton, *Kant's Metaphysics of Experience*, vol.2, Loutledge 1936, rep. 2002, pp. 184-331.

P. Guyer, *Kant and the Claims of Knowledge*, Cambridge UP 1987, pp. 267-276.

- (2) 「相互性」の原語は“Gemeinschaft”である。話題となっている領域や状況に応じて、さまざまな訳語が考えられるが、カントの理論哲学に限定した場合、邦訳書の多くが「相互性」という訳語を採用しており、本論考でもこれに従う。
- (3) 第一版では、相互性（相互作用）の原則は以下のように定式化される。

「あらゆる実体は、同時存在するかぎりで、汎通的な相互性（相互作用）の下に立つ」（A211）。

- (4) 「物理的影響（*physischer Einfluss*）」（A275/B331）という概念は、デカルト二元論で問われた、延長を本質とする物的実体と思惟を本質とする心的実体とがいかなる関係にあるのかという問題をきっかけとして生じた、実体間の関係に関する三つの理説の一つであり、他はライブニッツの「予定調和」説、マルブランシュの「機会原因」説である。カントはその哲学的生涯の初期の頃から物理的影響説を保持し続けてきたが、その背後には、若年の折に出会ったニュートンの万有引力理論に対する傾倒という事情が潜んでいる。以下の拙論を参照。

犬竹正幸「空間論から見たカント批判哲学への道」（拓殖大学論集『人文・自然・人間科学研究』第 47 号、2022 年、1-28 頁）。

- (5) 作用反作用の法則を理解するためには、慣性法則の理解が前提されなくてはならないが、慣性法則から作用反作用の法則が導かれるわけではない。
- (6) H. J. Paton, *op. cit.*, p. 330.
- (7) ここで時間軸を横にとるか縦にとるかについて、「現実の諸事物が同一の時間点に、いわば吊り下げられている」というカントの表現に忠実であろうとすれば、時間軸を横にとるべ

きであろうが、現代の時空論では時間軸を縦にとるのが慣例のようである。本論考でも、この慣例に従うことにする。

- (8) なお以上の議論では、同一平面上の二つの点だけが検討されたが、この複数の点はいくらでも増やすことができる。そこで今度は、三つの点 A, B, C の場合を考えると、その順列は六通り存在する。そして、この六通りの順列が可能であることを、近くの現場に置き移すと、六通りの知覚順序が考えられる。したがって、三つの対象が同時に存在する場合には、六通りの知覚順序が両立可能であることになる。ゆえに知覚の相互継起可能性を表す表現として、対象が二つの場合にしか当てはまらない「知覚の可逆性 (reversibility)」という表現よりも、〈知覚 (順序) の順不同性〉といった表現の方が適切であろう。ちなみにペイトンは、三つ以上の対象についての知覚順序を考慮に入れていないために、「知覚の可逆性」という表現を用いている。H. J. Paton, *op. cit.*, p. 300.
- (9) H. J. Paton, *op. cit.*, p. 302.
- (10) 以上の議論は、ビリヤードの二つの球を例にとっても同様に成り立ち、しかもビリヤード球の場合には、運動の相対性にもとづくことによって、より容易に同一の結論を導くことができる。このビリヤード球の例を避けたのは、ここでの議論が運動の相対性が成り立つ現象に限らず、相互作用の原則が適用されるあらゆる自然現象に対して妥当することを示したかったからである。もう一点、我が国における『批判』のほとんどの翻訳書では、“Wechselwirkung” というドイツ語に対して「相互作用」ではなく「交互作用」という訳語が充てられている。直訳としてはこの通りであろうが、この語が表していることがらを理解するためには、不適切な訳語であると判断する。なぜなら、この訳語では二つの振り子が交互に、すなわち互い違いに運動するという現象を、本当は一方向的な因果関係にすぎないのに、相互作用を表す例であると誤解してしまうからである。こうした誤解を防ぐために、振り子の例を取り上げたまでである。
- (11) 第一版では、第一類推の定式は以下のように示されている。
- 「あらゆる現象は、対象そのものとして恒存的なもの (実体) を含み、そして転変するもの (das Wandelbare) を、対象の単なる規定として、つまり対象が現実存在する仕方として含む」(A182)。
- この定式のうちには、第二版で見られる「実体の量は自然のうちでは増減しない」という一文は含まれていない。カントがこの一文を第二版で付加したのは明らかに、第二版の前年に公刊された『原理』の「力学」章中の、「力学の第一法則」(IV 541) と銘打たれた、いわゆる「物質量の保存則」を意識してのことである。しかし、この一文の付加はカントの勇み足であると思われる。たしかに物質量保存則は「いかなる実体も消滅しない」(ibid.) という、「実体の恒存性の原則」(IV 542) を前提するが、実体の恒存性の原則から実体の量の一定不変性が導かれるのは、実体が「空間における実体」の場合に限られる。なぜなら、「空間において可能となる客観のあらゆる量は、互いに外的な諸部分から成る」(ibid.) 量、すなわち外延量であり、したがって、空間的な実体の量の増減もまた、互いに外的な部分をなす諸実体の生成消滅としてしか考えられないのに対し、「内官の対象は…実体としては、互いに外的な諸部分から成るのではないような量〔すなわち内包量〕をもつことができる」(ibid.) からである。ところが、第一類推で論じられる実体が、空間における実体に限定されるべきだとは証明中に明示されていない（それがはじめて明示されるのは、第三類推においてである）。ゆえに、そうした明示がない以上、第一類推の定式中の後半の一文は少なくとも、ここでは証明されていないと結論せざるをえない。
- (12) ちなみに、もし文 (A) の言うように、時間は直観形式として、すでに恒存的であることが認められるならば、文 (B) の主張はほとんど同語反復にしか聞こえないであろう。
- (13) 『原理』の「運動学」章のうちでカントは、物体の静止を定義して、「静止とは、同一の場

- 所に beharrlich に存在することを言う。ここで、何かが beharrlich に在るとは、その何かが一定の時間、存在すること、すなわち dauern することを言う」(IV 485)と述べている。この場合の“beharrlich”という語は文脈からして「恒存的」とは訳せず、「持続的」としか訳せないだろう。そうすると“beharren”と“dauern”とは、ほぼ同義ということになる。
- (14) それというのも、船の運動の記述が問題となっているこの例文中で、本来「不動」と表現されるべき、運動記述の原点としての島を、「恒存的」と表現しているからである。
- (15) H. J. Paton, *op. cit.*, p. 196., H. E. Allison, *op. cit.*, pp. 201ff. ただしアリソンは、このバックドロップ・テーゼが感性論からの直接的な帰結であると主張しているが、上述したとおり、この点については賛同できない。
- (16) H. E. Allison, *op. cit.*, p. 204.
- (17) B. W. Hall, *The Post-Critical Kant. Understanding the Critical Philosophy through the Opus postumum*, Routledge 2015, pp. 36ff. ホールの所論に対する批判を含んだものとして、「カントの『オプス・ポストゥムム』におけるエーテルの演繹論について」と題された拙論を近々、発表する予定である。
- (18) カントはこの引用文の直前でも、「現象における本来の主語」(ibid.)という表現を用いており、それがここで「本来の基体」と言い替えられている。これらの表現から推して、〈本来の実体〉という表現も許されるであろう。
- (19) あるいは、運動法則と重力法則から導かれる、地上物体の落下運動に関するガリレオの法則を考えてもよい。それは以下の数式で表現される。
- $$S = 1/2gt^2 \text{ (Sは落下距離, gは重力加速度)}$$
- (20) 松浦社『時間とはなんだろう』(講談社, 2017年) 60頁以下を参照。
- (21) 平凡社版『世界大百科事典』(1988年) 第3巻, 760頁。
- (22) 福岡伸一『生物と無生物の間』(講談社, 2007年)。
- (23) 栗原康『共生の生態学』(岩波書店, 1998年)。

(原稿受付 2022年10月25日)

「尊厳をもって死ぬ権利」を巡る闘い

— フランスにおける「緩和ケア」 —

豊岡 めぐみ

The Struggle for Right to Die with Dignity

— Palliative Care in France —

Megumi TOYOOKA

要 旨

近年、自分の納得のいく最期を迎えるために、いつ、どのように死ぬかを自律的に決定したいと望む人が増加傾向にあるように思われる。

本稿は、フランスにおける「緩和ケア」に着目しながら、「自己決定」と「死ぬ権利」の関係について考察する。今日、フランスに代表されるように、患者は「緩和ケア」を受け、延命を拒否することが可能であり、それは患者の権利として法的に守られている。「緩和ケア」として、終末期の苦痛が激しい患者に、鎮静剤や鎮痛剤を投与し、死亡するまで意識の低下した状態が保たれるようにする「持続的で深い鎮静」が行われることがあるが、この「持続的で深い鎮静」の捉え方が問題となる。果たして「持続的で深い鎮静」は治療の手段か、それとも死ぬための援助か。

フランスでは、この「持続的で深い鎮静」が延命治療の差し控えや中止において、「死ぬ権利」と「尊厳」を巡る闘いへと発展している。その時、「死ぬ権利」は、単に、患者自らが積極的に死に関わる権利のことを指すのではなく、「不合理で執拗な治療」を中止する権利へと移行しているように思われる。

こうした問題意識の下、フランスにおける3つの事件を追いながら、自己決定の捉え方および治療中止と「尊厳死」について考察し、「安楽死」合法化の倫理的な是非を検討した。

キーワード：緩和ケア、尊厳、死ぬ権利、自己決定、治療中止

はじめに

「安楽死」は、穏やかで、耐え難い痛みがないような死、つまり厳密な意味では「よき死」を意味する。そのため、自然死や安らかな苦しむことのない死は、文字通りの意味で安楽死である。しかし、現代では、その意味が変遷し、それは能動的に引き起こされた死のことを指す。

われわれが終末期において、死を希求するとき、その根底には肉体的な耐え難い痛み

が存在している。現代では、なかなか取り除けない肉体的痛みが依然として存在するものの、以前と比べてはるかに疼痛緩和が可能となっている。しかし、人が死を希求するのは耐え難い身体的苦痛に苛まれるからだけではない。「生きがい」や生きる意味を見失い、自らの尊厳が脅かされているというような、絶望感や悲壯感を伴った精神的苦痛によるものも大きい。また、精神的苦痛に伴う孤独感や疲労感も死の選択に拍車をかける。通常、われわれは自らの尊厳を守るため、最期まで「人間らしさ」を保ったまま死んでいきたいと願う。

近年、高齢化が進む中、終末期を巡る治療の在り方や患者の自己決定の在り方がクローズアップされるようになった⁽¹⁾。その際、治療に関して患者本人の意思を尊重することに重きが置かれる。インフォームド・コンセントに示されているように、医師は患者に十分な説明を与えなければならないし、患者は治療に同意もしくは拒否することが可能である。今日、医療において、自己決定は治療のプロセスの中心に置かれているものであると同時に、われわれの尊厳の内実の中核をなすものである。そして、それは選択の自由にも関わる重要なものである。

われわれが着目したいのは、「自己決定」と「死ぬ権利」の関係である。そもそも、生命や身体は〈この私〉に帰属するのだろうか。もしそれらが他にもない〈この私〉に帰属すると解釈するのであれば、自分で決定することを高く評価し、その価値を持ち出すことにつながる。そこから、そうした自己決定の主体である〈この私〉が、自分の身体をどのように処分するのか、自己の生命をいつ断ち切るのかについて、自由に選択する権利を有していると解釈するのであれば、「死ぬ権利」は正当化されることとなる。果たして、われわれは「死ぬ権利」を有しているのだろうか。

この問を考察するために、われわれはフランスにおける「死ぬ権利」を巡る事件に着目したい。「死ぬ権利」について考察するならば、「自殺幫助」を合法化しているスイスを取り上げるのが一般的と思われるかもしれない。スイスは「自殺ツーリズム」として、スイス国内および諸外国からの自殺幫助希望者を受け入れているからである⁽²⁾。当然、誰でも利用できるわけではなく、いくつか存在している諸団体がそれぞれ条件を設けているのだが、それによると、耐え難い苦痛に苛まれていること、死を希求する自発的意思を有していること、合理的判断能力があること等が挙げられている。スイスでは、耐え難い苦痛を理由とする、死にたいという本人の意向が尊重される。そして、それが明確な自発的意思であるといえる場合、本人の希望を叶えてやるのが最善であり、それは患者の権利を保障することであるという考えに支えられている。

われわれが、スイスではなくあえて隣国のフランスを取り上げる理由は、「緩和ケア」に着目したいからである。「緩和ケア」とは、患者を苦痛から解放することを目的とし、為される医療の総称であるが、フランスは、他国と比較して「緩和ケア」のシステムが

進んでいる。説明と同意に基づくインフォームド・コンセントの中で、患者には治療を拒否する権利があることが謳われ、終末期にある患者には「緩和ケア」を受ける権利が保障されている。「緩和ケア」自体は多くの国で為されており、終末期にある患者に尊厳ある死を保障している。その意味で、「緩和ケア」そのものに目新しさはないのだが、延命治療の中止や差し控え時にも実施できるという点にフランス独自の特徴がある。

ただし、尊厳ある死が保障されているといっても、フランスでは「積極的安楽死」も「自殺幫助」も合法化されていないため、それは一般的に言われるような「死ぬ権利」ではないということになる。フランスは、単なる「死ぬ権利」を問題としているのではなく、患者が「緩和ケア」を受け、「不合理で執拗な治療」(obstination déraisonnable)を拒否する権利を保障しているからだ。確かに、直接自らの生命を断ち切る「積極的安楽死」や「自殺幫助」よりも、フランスが行っている「緩和ケア」の方が、最期を穏やかにし、死に近づく者の心に平静さをもたらすように思われる。

とはいえ、「緩和ケア」のあり方は「死ぬ権利」と無関係ではない。「緩和ケア」では、終末期の苦痛が激しい患者に、鎮静剤や鎮痛剤を投与し、死亡するまで意識の低下した状態が保たれるようにする「持続的で深い鎮静」(sedation profonde et continue)が行われることがあるが、この「持続的で深い鎮静」の捉え方が問題となるからである。「持続的で深い鎮静」は以下の2通りに分けられる。一つは、「持続的で深い鎮静」として、例えば苦痛緩和のためモルヒネなどの鎮痛剤を投与し続けるならば、そのことによって、患者の生命を短縮する可能性があること。もう一つは、「持続的で深い鎮静」は、開始直後から意識の低下を引き起こし、それによって患者は意思疎通ができなくなるのだが、死ぬまで持続的に鎮静が為されること。フランスでは、この「持続的で深い鎮静」が延命治療の差し控えや中止において、「死ぬ権利」と「尊厳」を巡る闘いへと発展している。

「死ぬ権利」とは、例えば先のスイスを念頭に置くならば、医師に致死薬を直接投与してもらい死に至るといふ、患者自らが積極的に死に関わる権利のことを指すものである。その時、自己決定という点を強調するならば、「死ぬ権利」とは医師の裁量や医師の決定ではなく、自分自身によって死を決定するという強い権利として捉えられる。今日、フランスに代表されるように、患者は「緩和ケア」を受け、患者が望むならば延命治療を拒否することが可能である。そして、それは患者の権利として法的に守られている。こうした流れの中、「死ぬ権利」は、「不合理で執拗な治療」を中止する権利へと移行しているように思われる。この意味で、単なる「死ぬ権利」ではなく「尊厳をもって死ぬ権利」が問題となる。

フランスでは、あるいくつかの事件をきっかけに、「安楽死」や「自殺幫助」について激しい議論が交わされ、「安楽死」を合法化しようとする動きが高まりをみせつつあ

る。そうした動きの中、「死にゆく積極的な医療支援」が議論の的となっている。「死にゆく積極的な医療支援」とは、死ぬための積極的な医療支援を承認することによって、患者が「人生の終わりを選択する」ことができるよう、患者に選択の自由を提供し、自律性を促進するものである。「死にゆく積極的な医療支援」が議論されるとき、「尊厳をもって死ぬ権利」が問題となる。以下で、フランスで起こったいくつかの事件を追いながら、「尊厳をもって死ぬ権利」について考察したい。

本稿の目的は、フランスにおける「緩和ケア」およびそれを巡る治療の差し控えや中止に焦点を当てながら、以下3つの問について考察することである。「死ぬ権利」を主張し、自らの生命を断ち切ることは正しい選択だろうか。自由は死の選択にも適用できるのだろうか。「死にゆく際の積極的な医療的支援」の合法化は、合法化されることによって、緩和ケアシステムに適合するようになるのだろうか。

第一章 生命終結の自己決定

われわれに「死ぬ権利」はあるのだろうか。そして、それは選択の自由を行使することだということができるだろうか。この章では、これらの問を考察する手がかりとして、まず複雑化している「安楽死」の定義のポイントを押さえ、次に自己決定について考察する上での困難を指摘したい。

一 安楽死の定義

「安楽死」は、ラテン語の *euthanasia* を踏襲しており、もともとこの *euthanasia* という語は、ギリシア語の *eu* 「よく」および *thanatos* 「死」という語に由来する。「安楽死」という語は、元来は苦痛のない死を意味しており、「大往生」という意味を有していた。ところが、現代では、「安楽死」とは、病に倒れもう余命が短い患者を、本人の自発的意思を尊重し死に至らしめることを指し示すようになり、その意味が変遷していった。

「安楽死」は、厳密には以下の3つの種類に分類できる。

- 1) 消極的安楽死 延命のための積極的措置を差し控えたり中止したりすることによって、患者を死に至らしめるもの。ただし、延命治療を停止する場合も苦痛を除去する治療は続けられる。
- 2) 間接的安楽死 苦痛緩和のために薬剤を投与し結果的に患者の死期を早めるもの。
- 3) 積極的安楽死 医師が患者に直接致死薬を投与し、患者の生命を直接断ち切るもの。

現在、医師が患者に直接致死薬を投与し患者を死に至らしめる、いわゆる「積極的安楽死」を合法化している国として、オランダ、ベルギー、ルクセンブルグ、カナダ（ただしケベック州は除く）、オーストラリアのヴィクトリア州が挙げられる。また、スイス、スペインやアメリカ^③（国レベルでは認められていないが、州レベル）で自殺幫助が認められている。このように、世界各国で、「積極的安楽死」が合法化され、医師による「自殺幫助」が容認されている。「積極的安楽死」と「自殺幫助」は一見すると違いがないように思われる。結果だけに焦点を当てるならば、患者もしくは死を希求している目の前の人が死に逝くという点で両者に違いはない。しかし、医学的には、「積極的安楽死」とは、医師が患者に致死薬を直接投与し、患者を死に至らしめること、「自殺幫助」とは、患者もしくは死を希求している目の前の人が、自ら生命を断ち切るための手段を行使することであり、そこに明確な線引きが行われている。もう少し具体的に説明するならば、「自殺幫助」では医師が処方する薬を自ら経口したり、自らがボタンを押し致死薬を自分の身体に取り込んだり、自分の好きな食べ物や飲み物の中に致死薬が含まれており、患者自らそれを口に運び死へと至るといった方法が取られている^④。

オランダは、世界に先駆けて「積極的安楽死」を合法化した^⑤。2001年に「要請に基づいた生命終結と介助自殺に関する審査、並びに、刑法と遺体処理に関する法の改正」（以下、「安楽死法」と略す）が成立し、2002年4月1日より施行されている。オランダでは、この「安楽死法」以降、規定された手続きを踏み、決められた基準を遵守していることが証明できれば、安楽死を実践する医師は法的に訴追されることはないと言われる^⑥。さらに、オランダでは、医療従事者は苦しみを軽減したり消滅したりするための代替手段が他に存在しないことを条件として、患者の意思を尊重し穏やかに死を迎えることに重きを置く。患者は死を希望するなら、自分の意思が自発的なものであることおよび生きることが耐え難い苦痛であることを医師に訴え、それを認めてもらう必要がある。これらの条件が揃ってはじめて、患者は死に向かうことが可能となるが、特筆すべきは、単なる身体的苦痛の場合だけでなく精神的苦痛による安楽死にも門戸が開かれていることである。

われわれがこれから考察していくフランスは、オランダのように「積極的安楽死」が認められていない。そのため、当然のことながら、尊厳が保たれないと感じるとか、生きる意味を喪失したということに伴う、精神的苦痛による死の選択はその射程に入ってくることはできず、患者は自らの生命を断ち切ることが許されていない。

耐え難い身体的苦痛に喘ぎ、「生きがい」を喪失し「人間らしさ」が保たれていないと感じる精神的苦痛が存続する際、われわれは「積極的安楽死」によって生命を断ち切りたいと思うだろう。死を希求する自己決定は正当化されるべきものであるのか。以下でヴァンサン・アンベール事件を概観しながら、こうした問について考察を進めてい

こう。

二 ヴァンサン・アンベール事件⁽⁷⁾

フランスのヴァンサン・アンベール (Vincent Humbert, 以下ヴァンサンと記載) という 19 歳の男性のある事件を概観してみよう。

2000 年 9 月 24 日, 19 歳の志願消防士であった, ヴァンサンは, 夕方にガールフレンドと一緒に映画に行く約束をしていた。彼は, この 24 日の日曜日は当直の日ではなかったが, 同僚のひとりに家族の洗礼式があったため頼まれて当直を代わった。さらに, いつもは当直を 19 時に終えるのだが, 同僚が残業となったので, その同僚に付き合った。そのため, 予定より 1 時間遅く営舎を出ることになってしまった。ガールフレンドは, 彼に早く帰るように電話をし, 彼は田舎道を急いだ。その途中の狭い田舎道で, 大型トラックとすれ違いそうになったので, 彼は車を徐行し, 自分の車を土手に乗り上げて道幅を空けようとした。しかし, その瞬間に車のタイヤがパンクしコントロールを失ってしまい, トラックのトレーラーの後輪に突っ込んだ。その後, 仲間の消防士たちが駆け付け, 懸命にヴァンサンを救出したが, ほぼ全身が損傷を受けており, 現場は血の海となっていた。彼は数週間にわたって生死の境を彷徨って集中治療室から出ることができず, 医師団の診断は, 「助からないか, 助かったとしても植物状態となるだろう」⁽⁸⁾ というものだった。

9 ヶ月間の昏睡状態が続いたが, ヴァンサンの頭脳は奇跡的に回復した。ただし, そこから彼の地獄の苦しみが始まることになる。というのも, 彼の頭脳は正常に機能し耳も聞こえるのに, 右手の親指を除いて, 全身の感覚が麻痺して, まったく何もできないことを認識したからだった。

外見から判断すると植物状態に見えるヴァンサンに意識が戻ったことがわかったのは, 母親マリーの献身的な看病のおかげだった。マリーは, 息子の手を毎日握り締めていたため, 事故から一年以上が過ぎたある日, 息子が親指で自分の手を強く押し返すことに気付くことができた。そして, マリーが息子に質問をしたところ, イエスならば一回, ノーならば二回親指で押し返してくることがわかった。

次に母親が, A, B, C とアルファベットを順に読み上げたところ, 彼は特定の場所に来ると親指を押すことによって意思を伝えようとしていることに気づいた。初めて彼がノートに書きとめた文字を並べると, 「M, A, M, A, N, J, E, S, U, I, S, C, O, N, T, E, N, T, Q, U, E, T, U, S, O, I, S, L, A」(母さん, そこにいてくれて嬉しいよ) というメッセージが読み取れた⁽⁹⁾。この方法が彼の唯一のコミュニケーション手段であった。膨大な時間がかかったが, ともかく彼は, 他者にメッセージを伝えることができるようになった。その後, リハビリテーションも始まることになったが, 残念ながら彼の

身体機能については、ほとんど改善が見られず、彼は精神的に疲弊していった⁽¹⁰⁾。

次第に、ヴァンサンは死にたいと考えるようになった。母親や医師や看護師に自分を死なせてほしいとメッセージを送るが、彼の望みは叶えられなかった。そこで彼は、当時の大統領である、シラク大統領に宛てて手紙を投函することを思いつく。彼は、事故から現在に至る自分の状況を説明した後で、「死ぬ権利」について訴えている⁽¹¹⁾。

シラク大統領への彼の訴えは真剣なものであって、彼は、それを嘆きや不平として書いたのではない。自分の運命を憐れんでもらいたいと思ったわけでも、自分を理解してもらいたいと思ったわけでもない。彼が望むことは、「死ぬ権利」を認めて欲しいということだけだった。

ヴァンサンが大統領に直訴したことが、ベルクの地方ニュースで報じられ、全国版の新聞やテレビやラジオで大きく報道された。彼の事故から現在の状況までがセンセーショナルなものとして取り上げられ、彼の「死ぬ権利」を巡って、フランスでは安楽死論争が巻き起こることとなった。

シラク大統領からのヴァンサンへの返事は「死ぬ権利」を与えるわけにはいかないというものだった。その代わりに、大統領は、彼の後見人になり最良の治療を施すこと、彼の母親の仕事の面倒もみること等を約束した。しかし、彼はその申し出に納得せず、死ぬ以外に自分の助かる道はないと考えた。マリーは、息子の唯一の望みは「死」であると悟り、躊躇しながらも息子の死の手助けをする約束をした。そして、2003年9月24日午後5時半、事故からちょうど3年目が過ぎた同時刻、マリーはヴァンサンにつながれたゾンデにバルビツール系鎮痛剤を注ぎ込んだ。その二日後、蘇生専門医のフレデリック・ショソイ医師は、彼の回復の見込みはなく、これ以上の延命措置は無意味と判断し、人工呼吸器を外して塩化カリウムを注射して彼の心臓を止めた。こうして、ヴァンサンは「待ち焦がれた花」⁽¹²⁾が咲いたように、26日にあの世へと旅立った⁽¹³⁾。その後、母親マリーは毒殺投与、ショソイ医師は予謀毒殺容疑に問われることとなった。

この事件のポイントを押さえよう。ヴァンサンは激痛があるわけではなく、彼は身体的苦痛よりも精神的苦痛や実存的苦悩に喘いでいる。先に見たように、フランスは、オランダのように「積極的安楽死」が認められていない。そのため、ヴァンサンのような精神的苦痛や実存的苦悩による死の選択は許されない。しかしながら、彼の叫びは、多くのフランス国民に、どのように死ぬのが最善かということを考えさせる機会を与え、「死ぬ権利」、厳密には「尊厳をもって死ぬ権利」についての議論を深めさせることにつながった。

しかしながら、「積極的安楽死」が、患者への同情や思いやりから死なせてあげようという思いに裏打ちされてしまうならば、それは慈悲殺と混同されることになる。また、自分自身で死を希求したのだから、その決定は尊重されるべきだと問題を単純化し、自

己決定を容認してしまうことにはリスクが伴う。

三 自己決定

このヴァンサン・アンベール事件は、私たちに自己決定の孕む難しさを突き付ける。ヴァンサンは、以前の自分と現在の自分を比較し、そこに自己同一性を認めることができず苦しんでいる。そうした状況下で、彼は〈いつどのような仕方で自分の生命を終結するのか、決めるのは他でもない自分である〉と考え、これこそが自己決定というもののあり方だと考えているように思われる。

この事件は、われわれに、自己決定すなわち自律の捉え方を示す。「自律」を強調し、それを積極的権利として強く解釈するならば、その人の意思決定の内実、いわば質がクローズアップされることとなる。患者が死を希求するのは、耐え難い肉体的苦痛に苛まれている場合もあるが、多くは精神的苦痛や社会的役割の喪失によるものが大きく関与している。そのため、死に直面した際の患者の意思決定が精神的なものに大きく左右され、自暴自棄になっていないか、合理的判断といえるかどうかその質をチェックする必要があるように思われる。患者が死にたいと思う際、孤独や生きがいの喪失、社会との隔たり等によって鬱の状態に陥っていないか、生への苦悩による逃避であり一時的な気の迷いとなっていないか等、丹念に調べなければならない。次に「決定」に重きを置くならば、患者の自己決定そのものが問題となってくる。つまり、死を希求する際の患者の知性や意志といった判断力が首尾一貫したものであり、整合的かつ自発的なものかどうか基準となる。

ヴァンサン・アンベール事件に戻ろう。彼は、自己決定について上記2点を踏まえつつ、各人が自分自身で自らの生命の在り方を決定することの利点を主張し、そのよさを確信しているようにみえる。果たして、このことは、結果的にヴァンサンの利益を最大化することにつながるのだろうか。自己決定の正しさは、何によって決定されるのだろうか。自己決定を尊重し、その正しさを強調するならば、その時、以下4つの観点⁽¹⁴⁾から、この問題を検討できるように思われる。①自分の意思、②身体的および精神的な耐え難い苦痛、③家族や周囲の人への迷惑や負担④貧富の差や経済的問題である。

①について、自分の生命は自分のものであるから、それをいつ断ち切るか決めるのは自分であると考え人は多いように思われる。そこには、どんなことがらも他者ではなく自分自身で選択し決定していくことのよさに訴える態度が見て取れる。それゆえ、たとえそれが死という変更不可能な究極の場面であっても、自分自身の決定に価値を置き、自らで決めることは何よりも優先されるべきものと考えられる。しかし、これに対しては一般的に言われるように、そもそも生命は与えられたものか、自分で生命を処分する方法や時期を決定できるのかという疑問が生じる。

②について、これはある原則に訴えるものであり、われわれに自己決定を正当化するように傾かせるものとなる。ある原則とは、われわれは、快なる状態を求め、害を避けるという、われわれの自己保存にも関わるものであり、同時に個人の利益にも関わる重要なものである。ヴァンサンは、意識は正常であり、快や苦痛といった感覚や感情を正常に経験できる。彼が求めているのは、「自殺幫助」、言い換えれば「積極的安楽死」であって、それを根拠付けるのは、人格の自己実現としての自己決定を為すことで最善の利益を享受するという考え方である。確かに、われわれにとって身体的苦痛は有害なものであり、彼のような状況下に陥ったら多くの人はこの耐え難い苦痛から一刻も早く解放されたいと切に願うだろう。また、そのような悲惨な状況を身近で見ている者は、その人の痛みや重荷を解いてあげたいと同情するだろう。しかし、このことを個人の利益だけに訴えることは正しいだろうか。また、医師をはじめとする他者からの、生きるに値する命かどうかという評価基準は許されるものだろうか。ヴァンサンのようなケースに直面した医師は、医師の使命である患者の生命を救うという義務と、患者の自己決定を尊重するという義務のジレンマに直面することとなる。医師に生じる2つの義務の葛藤は、どちらの義務が大きいかを見積ることによって、どちらを優先すべきかを決定することへとつながる。つまり、〈患者に最も利益となる措置かどうか〉および〈利益と苦痛との比較衡量〉が基準となる。しかし、医師が患者の生命の価値を評価することには大きなリスクが伴わないだろうか。

③について、患者が家族など他者の負担になる点を強調し、自己決定を尊重する際、そこには共感や同情が存在する。そこから、「家族や愛する人を持つ人には、常に、自分の人生にかんして自分勝手あるいは自己中心的 (selfish or self-centered) な決定をしない義務がある。私たちには、愛する人の人生を深刻な脅威や質の大きな低下から守るような責任がある」⁽¹⁵⁾ と考えるならば、「死ぬ義務」⁽¹⁶⁾ へと転じることとなる。

④についてみていこう。貧富の差や経済的問題に訴え、自己決定を正当化しようとする場合、その人は功利主義を採用している。例えば、医療資源の分配等、国全体としての利益を優先するために、社会への貢献度という尺度でもって快を計算してしまう。功利主義とは「最大多数の最大幸福」を原則とするものであり、個人よりも全体を優先するからである。そのため、貧困に喘ぐ人や障害を抱えた人など社会的弱者は蔑ろにされる可能性が高い。

以上の考察から、患者の死期を早めることと自己決定との関係を巡る困難と問題点が明らかになったように思われる。

第二章 終末期における法整備と「事前指示書」

フランスでは、これまで、終末期に関する4つの法律⁽¹⁷⁾が可決されている。そのたびに、患者の自由とインフォームド・コンセントが義務づけられてきた。そして、「不合理な執拗さ」と「執拗な治療」を拒否することによって、患者の権利が強化されてきた。その中でもとりわけ、2005年と2016年に可決された「レオネッティ法」、「クレス-レオネッティ法」は注目に値する。これら2つの法のおかげで尊厳のある終末期の支援に関して、立法上の重要な進展が可能となったからである。この章では、それを踏まえながら、フランスにおける終末期に関する法整備と「事前指示書」について考察したい。

一 「レオネッティ法」

ヴァンサン・アンペールの事件を機に、フランスでは、終末期における患者の権利に注目が集まるようになった。ジャン・レオネッティ氏を代表とする委員会が組織され、「緩和ケア」を施し、最期まで患者の尊厳を守ることを前提に、終末期における延命治療中止を合法化した、「レオネッティ法 (Léonetti)」が2005年に制定された。その第1条には、「無益で、度を越すような治療行為あるいは人工的に生命を維持するだけの治療行為は、開始しないか中止することができる。その場合、医師は適切な「緩和ケア」を行い、最期まで患者の尊厳を守り、終末期のQOLを保証する」と明言されている。

「レオネッティ法」とは、治癒が望めない終末期にある患者およびその信任者に、治療の中止や差し控えを認めるものである。これは終末期医療における治療方針および患者の権利に関して大きな飛躍をもたらした。というのも、患者が意識を失っている場合、「治療の執拗さ」は、共同処置の最後に決定されるが、「緩和ケア」と支援の義務の概念は、この法の中にすでに導入されているといえるからだ。「緩和ケア」は、自律原則に基づきつつ、患者の尊厳を守り、痛みを緩和することに重きが置かれる。鎮静剤や鎮痛剤の投与などによって、患者の生命を短縮してしまう恐れもあるが、最後まで患者を救済することを唯一の目的としていることが重要な点である。そのため、特定の鎮静薬、例えばミダゾラムの投与によって、患者の死期を早めてしまう可能性があるとしても、適切に投与されていることが確認されれば、患者の苦痛を緩和することに力点が置かれるため、終末期ケアの一環としてみなされる。したがって、医師は患者の苦痛をできるだけ少なくすることができ、その上、患者の尊厳を守ることができるという点で支持されている。

しかし、以下で考察するヴァンサン・ランペール事件のように、生命維持に有効な医療が提供できるにもかかわらず、それを差し控えたり中止したりすることは正しいのだ

ろうか。

二 ヴァンサン・ランベール事件⁽¹⁸⁾

次に、ヴァンサン・ランベール (Vincent Lambert) 事件の概要を追っていこう。

ヴァンサン・ランベール (第一章のヴァンサン・アンベールと区別するため、こちらのヴァンサン・ランベールを、以下、ランベールと記載することとする) は 32 歳で、精神科の看護師だった。妻のレイチェルも看護師として働いており、二人は子どもができたばかりだった。2008 年 9 月 29 日、シャロン・アン・シャンパーニュ (マルヌ) 近くの道路で、交通事故により脳に重度の損傷を受け、四肢麻痺となった。ランベールは、事故後、一命は取り留めたものの、遷延性意識障害 (植物状態) となった。彼は、ランスの病院へ入院し、妻と彼の家族は、彼のために可能な限りのことをしようと努めた。それは、医療従事者も同様で、医師は蘇生法からリハビリテーション、さらには専門治療へと移行しながらありとあらゆる治療の可能性を探った。しかし、その努力も虚しく、回復の見込みはなかった。レイチェルは、彼の病室に写真を飾り、彼が好きな音楽を流し、彼のお気に入りのテレビ番組を放送したりしたが、彼は、静まり返った病室の中で胃管から栄養を与えられ、話したり反応したりすることもなく、ただ遠くを見つめているだけだった。

レイチェルは、書面には残されていないもののランベールが事故以前、人工的に生かされるのは嫌だとはっきり意思表示していたと主張し、延命治療の中止を懇願した。これに対し、熱心なカトリック教徒である彼の両親は延命治療を望み、法的措置によってこれまで 5 回にわたり医師による生命維持装置取り外しを差し止めてきた。ローマ・カトリック教会のフランシスコ法王も今年 5 月、ツイッターでランベールに言及し、命は神からの贈り物であり、自然な死を迎えるまで守り抜くことが必要だと訴えた。

意識がなく、植物状態となったランベールの延命を巡って、両者の見解は相容れず、そのまま治療が続行された。2012 年、レイチェルは、彼の主治医であったエリック・カリジェ医師に延命治療の中止を要請し、カリジェ医師は、迷いはあったものの、最終的に延命治療中止を決断した。「それは (延命治療の中止は) 私の責任です。いま、非常に特異的で、これまでにあまり例のない状況に直面しています。しかし、決断するのは、医師である私です」と、カリジェ医師は述べている。

しかし、南フランスに住む両親は、延命中止について知らされていないと反発し、母親は「息子が死にたくないと思っているという確信があります。その証拠に、息子は栄養を摂取していますし、息子は微笑んでくれます」と主張した。ランベールの両親は、カトリック信者であるということも相まって、まだ生きている息子の生命を断ち切ることに強い反発があった。それゆえ、彼の両親は、延命治療の継続を求め行政裁判所に訴

えを起こした。その結果、彼は延命治療が再開されることとなり、またしても、彼の妻と彼の両親との溝はさらに深まり、対立はさらに決定的なものとなった。

妻、レイチェルは、以前の夫の発言から、いたずらに生命を長引かせる治療を継続することに反発し、判決を覆すべく、カリジェ医師はもとより、彼の両親とも何度も話し合った。カリジェ医師もレイチェルの考えを支持し、「ヴァンサンは看護師でした。彼は幾度となくこのような状況下で生きたくはないと言っていました。4年間、彼は植物状態です。私達は、彼の妻がひどく苦しんでいるのを見ています。彼の妹、彼の娘も同様に苦しんでいるのを見ています。ヴァンサンのこの状態は、私たちに快適さとは程遠く、害悪という感覚さえ与えます。それゆえ、私は、延命治療中止という決断をしました。私の決断は確固たるものです」と、自らの判断を正当化するための説明を加えた。

その後、2014年1月11日、カリジェ医師は、「レオネッティ法」に基づき、栄養の投与を中止した。これに対し、再度、彼の両親は生命存続を求め行政裁判所に訴えを起こした。数年におよぶ法廷闘争の結果、フランスの最高裁に当たる国務院が彼の生命維持装置の停止を認める判決を下し、ランスの病院の医師たちは装置の取り外しに着手した。最終的に、2019年7月2日、2013年以来、3度目の彼の人工栄養と水分補給が中断された。彼の両親は2019年7月8日、上訴をやめると発表した。2019年7月11日、彼の家族は「午前8時24分」にランベールの死を発表した。

このヴァンサン・ランベール事件は、われわれに治療中止と「尊厳死」について以下のような問題を提起するように思われる。治療を中止し、生命を短縮することは、われわれの尊厳を脅かすことであろうか。それとも、それは尊厳をもって死ぬことであろうか。

三 「クレス-レオネッティ法」

回復の見込みもなく、植物状態となったランベールの延命措置継続を巡っては、家族はもとより、フランス国民のあいだでも賛否両論が巻き起こり、「死ぬ権利」や「尊厳死」について国民に考える機会をもたらした。

2019年4月、国務院は、家族が争った「不合理で執拗な治療」に終止符を打つためにランス大学病院が下した、治療を中止するという決定に準拠して判決を下した。しかし、治療の中止に反発する熱心なカトリック教徒であるランベールの両親は、息子は人生の終わりにいるのではなく、身体に障害があるだけだと考えている。ランベールの8人の兄弟姉妹のうち、2人もその考えを支持している。一方、彼の妻、甥のフランソワ、6人の兄弟姉妹は「治療の執拗さ」を非難した。彼らによれば、このような状態で生きるよりも死ぬほうがランベールにとってよいと考えるからだ。

フランスは、「事前指示書」と「持続的で深い鎮静」の基本概念を導入した「クレス-

レオネッティ法 (Claeys-Léonetti)」が2016年に制定され、新たな一歩が踏み出された。このクレス-レオネッティ法によって、患者と家族の合意後、医師は鎮痛剤の助けを借りて治療を中止し、患者に穏やかな死をもたらすことが可能となる。フランスでは、このことは、「自殺補助」とは根本的に違うものとみなされている。なぜなら、単に死を希求する人に向けてではなく、終末期にある人を対象としているからである。その意味で、「クレス-レオネッティ法」は、治療における根本的な進歩を示したといえよう。

フランスでは、この「クレス-レオネッティ法」は、医師が患者と家族の利益のために、大きな思いやりとヒューマニズムをもって、「緩和ケア」として尊厳ある死を実行するものだという考えから広く支持されている。

「レオネッティ法」でも鎮静は認められていたが、それは一時的なものだった。それに対して、「クレス・レオネッティ法」では、死に至るまで「持続的で深い鎮静」が認められ、合法化された。また、「レオネッティ法」では、患者が意思表示できない場合、「事前指示書」を尊重しつつも最終的に医師が医療の中止を決定するものだったが、「クレス・レオネッティ法」は、緊急時以外は、医師は患者が残した「事前指示書」に従わなければならないという強制力が加えられた⁽¹⁹⁾。

このように、患者の治療を巡って、治療を差し控えたり中止した方が良いかどうかについては、家族で意見が対立したり、迷いが生じて決めかねてしまうケースが多々ある。そのとき、重要となるのが「事前指示書」である。今見たように、ランベールはこの「事前指示書」を書いていなかったため、本人の自発的な意思が確認できなかった。また、家族間の見解も統一したものではなく激しく対立したものとなったため、問題はより困難を極めた。患者の意思表明は医療の現場で重要視されるものだが、患者の自律、いわゆる「自己決定」が尊重されるのは、われわれが判断能力を備え、意思と行動を自分自身でコントロールできるという前提のもとであるから、ランベールのように、患者の意思が不明確である場合、彼がどのように思っていたとしても、それを表明する手立てがない以上、彼の尊厳を守ることはできない。

では、「事前指示書」が法制化され義務づけられれば、ランベールのような状況を回避できるのだろうか。法制化されるならば、意識があるうちに「事前指示書」を作成することとなるので、有効な手段とみなされるかもしれない。さらに、「尊厳をもって死ぬ権利」も守られるように思われるかもしれない。

しかし、「事前指示書」の法制化、義務化に問題がないわけではない。「事前指示書」の法制化は、社会的弱者に圧力をかけてしまう恐れがあるからだ。病気や障害に苦しんでいる人や貧困に喘ぐ人は「事前指示書」を作成し、人生を断ち切る選択をせざるを得なくなる可能性が健常者や富裕者に比べて高い。「事前指示書」の法制化は、その意味で、生きるに値しない生命を選別することにつながる危険性を帯びている。

簡潔にまとめるならば、重要なのは治療の中止や差し控えについて、患者の意識が明確であり、合理的判断が可能な場合は「事前指示書」は効力を発するが、患者が意識障害等により、自分の意思を表明できない場合は大きな問題が生じるという点である。「事前指示書」と自己決定の問題は、患者の尊厳ある死を左右する重大な問題である。

フランスにおいて、「緩和ケア」は、苦痛から解放し、終末期にある患者に尊厳ある死をもたらすことを目的としている。「緩和ケア」と「尊厳ある死」が結びついており、その「緩和ケア」を中心に据えている「レオネッティ法」は、「治療の執拗さ」を拒否する権利を保障しているといえる。

第三章 治療中止と「尊厳死」

生命を短縮する可能性がある医療処置をすることは許されるのだろうか。すでに見たように、「緩和ケア」は、苦痛を解放することを目的として行われるため、それが結果的に患者の生命を短縮することにつながったとしても、医療行為の一環としてみなされている。しかし、問題は、生命を短縮する可能性のある「持続的で深い鎮静」そのものではなく、治療の中止や差し控えを「誰が決定するのか」⁽²⁰⁾という点である。例えば、オランダでは医師が決定するのが通常であるが、日本では患者が治療の差し控えや中止を決定することは「尊厳死」と呼ばれており、治療の差し控えや中止を誰が決定するかということは、尊厳と権利に関わってくる。以下で、「尊厳をもって死ぬ権利の闘い」の象徴となっている、アラン・コック事件を概観しながら、治療中止と「尊厳死」について考察し、「死にゆく積極的医療支援」の合法化について検討したい。

一 アラン・コック事件⁽²¹⁾

アラン・コック（Alain Cocq、以下敬称略、アランとする）氏は、動脈の壁と壁がくっつく難病を患っており、34年間にわたり闘病生活を送っていた。アランは、病気が進行し寝たきりとなり、激しい痛みを苦しんでいた。アランは、「死ぬ権利」を求めて何年も闘っていた。これまでに、アランは「自殺幫助」の承認を求めて活動を行っており、これを「究極のケア」とまで考えている。それゆえ、アランにとって、耐え難い苦痛に喘ぎながら生き続けるよりは、薬剤を投与されて死ぬことの方が魅力的だった。

すでにみたように、2016年に採択された終末期の「クレス-レオネッティ法」は、「持続的で深い鎮静」を認めているが、予後が「短期的」である人々、つまり死期が迫っている患者にのみ適用される。アランは、不治の病ではあるが終末期にいないため、死ぬまで「持続的で深い鎮静」を許可する「クレス-レオネッティ法」の恩恵を受けることができなかった。そこで、2020年7月20日、マクロン大統領に宛てて、日々の生活

における激しい痛みや苦しみを訴え、安楽死の承認を求めた。「本日、機能不全の体に閉じ込められ、気分も悪く苦しんでいるこの状況をあなたにお伝えしようと思います。大統領、あなたは腸や膀胱に管を刺され、栄養補給をされ、第三者に風呂をいれてもらうことや、耐え難い痛みによって自由を奪われていることへの苦しみがわかりますか。家族や友人は私を死なせまいとしています、私は尊厳を持って、積極的な医療支援を放棄するように頼んでいます。一部の人は『積極的安楽死』のことを『自殺幫助』という用語を使いますが、私が考える最も適切な用語は、『尊厳ある人生の終わりのための積極的な医療支援』だと考えています」と。

これに対し、マクロン大統領から法律の範囲を超える内容の返答はなかった。しかし、アランの主張は、フランス国民に「安楽死」について再考する機会をもたらし、安楽死の合法化を求める人々の多くがアランの考えに賛同した。その後、アランは、マクロン大統領の政治方針に一石を投じるため、ハンガーストライキを行い、彼は2020年9月、服薬や食事、水分補給までもやめることを決断した。そして、自らが死にゆく様子をフェイスブックにて動画配信することを発表した。しかし、フェイスブック側は、自殺の動画を配信することは、ポリシー違反であることを伝え、動画の配信をブロックした。その数日後、アランの容態は急激に悪化し、大学病院に移送されることとなった。アランは、それまで治療を拒んできたが、重い脱水症状や激痛に耐えかねて、最終的に「緩和ケア」を受け入れた。

彼はスイスのベルンで2021年6月15日火曜日の午前11時20分に「自殺幫助」により亡くなった。「墓の向こうからの手紙」と題された手紙の中で、アランはマクロン大統領と政府の「政治的勇気の欠如」を非難し、「スイスでの自殺幫助手続きの一環として、尊厳を持って死んだことをここにお知らせしたい」と語った。

このアラン・コック事件は、われわれに治療中止と「尊厳死」について問題提起をしているように思われる。「尊厳」とは広範な意味を伴う言葉であり、治療中止の文脈の中では、「尊厳死」と「積極的安楽死」や「自殺幫助」という言葉は、線引きが曖昧で、内容的には同一か、それほど差異のないものとして使用されることが多い⁽²²⁾。アランが希求するのは、「尊厳死」であり、それは、「『無益な治療を中止して、患者を自然の状態に戻し、自然な死を与えてほしい』という意味での『自然死』という概念」⁽²³⁾に近い。

アラン・コック事件は、われわれに「死ぬ権利」という言葉も多義的であるということを示す。この意味で、「はじめに」で述べたように、患者自らが積極的に死に関わる権利のことを指すような単なる「死ぬ権利」から、「不合理で執拗な治療」の中止を伴う「尊厳をもって死ぬ権利」へと移行していると言えるのではなからうか。

二 「死にゆく積極的な医療支援」の合法化の動き

フランスでは、終末期における患者の選択の自由が強調されつつあるように思われる。先にも見たように、とりわけ、2005年と2016年に可決された「レオネッティ法」、「クレス-レオネッティ法」のおかげで、尊厳のある終末期の支援に関して立法上の重要な進展が可能となった。その中でもとりわけ注目に値するのが「クレス-レオネッティ法」であり、定められた枠組みの中で、死ぬまで「継続的で深い」鎮静と強制力のある事前指示に基づいてアクセスする権利を確立している。

そうした患者の権利強化の流れの中、2021年4月8日、国会は、オリビエ・ファロルニ（シャラントマリティム国会議員）によって提案された、「死にゆく積極的な医療支援」を合法化しようとする、終末期に関する新しい法案が議論的となった。繰り返すが、「死にゆく積極的な医療支援」とは、死ぬ際の積極的な医療支援を承認することによって、患者が「人生の終わりを選択する」ことができるよう、患者に選択の自由を提供し、自律性を促進するものである。「レオネッティ法」や「クレス-レオネッティ法」により患者の権利は保障されるようになったが、終末期における患者の治療の差し控えや中止において、患者に尊厳ある死を保障する法的効力についての規定はいまだ定まっておらず、法整備は進んでいない。「緩和ケア」は、こうした残された課題を乗り越えようとするものであるが、問題は「死にゆく積極的な医療支援」をどこまで拡張するかという点にあるように思われる。とはいえ、「死にゆく積極的な医療支援」を拡張するならば、それは「積極的な安楽死」や「自殺幫助」を合法化することへつながる。そして、このことは、同時に、「積極的な安楽死」と「自殺幫助」の認識的境界を曖昧にする。

これまで長きに渡って仏尊厳死協会（AMD）が「安楽死」の実施を呼びかけ、フランスで「安楽死」について活発な議論が交わされてきた。しかし、「積極的な安楽死」を合法化するには至っていない。上記の2021年4月8日の国会でも、ヴァンサン・ランバールやアラン・コック事件のような場合の安楽死実施については理解が示されながらも、立法上となるとその是非について意見が対立し、多くの議員の反対意見が多く寄せられ、結果、先延ばしとなった。

フランスでは、「安楽死」に関する議論が再度、盛り上がりを見せている（24）。マクロン大統領は2022年9月13日、国家倫理委員会（CCNE）が「死にゆく積極的な医療支援」を肯定する見解を出したのを受け、安楽死の合法化について再度議論することを宣言し、国民対話集会を10月に設置すると発表した。

このように、今、フランスは「死にゆく積極的な医療支援」を巡る、治療の中止と患者の「尊厳」の問題で揺れている。このことはわれわれに、新たに以下3つの問を提起するように思われる。自由は死まで拡張できるのだろうか、「安楽死」または「自殺幫

助」は患者の自己決定であり、選択の自由を完遂した行為といえるだろうか、「死にゆく積極的な医療支援」の合法化は人間の尊厳を維持するのだろうか。

「死にゆく積極的な医療支援」は、これまでのわれわれの間への解決策を提供するのではなく、多くの困難を引き起こす。例えば、「緩和ケア」と「自殺幫助」の融合、「自殺幫助」と「自然死」との同一視である。「自殺幫助」と「積極的な安楽死」を法制化しようとする一方で、手段を詳述せずにそれらに委譲される「緩和ケア」への普遍的な権利を具体化することは矛盾しているように思われる。

おわりに

「はじめに」の箇所挙げた本稿の3つの目的に戻ろう。

- (1) 「死ぬ権利」を主張し、自らの生命を断ち切ることは正しい選択だろうか。
- (2) 自由は死の選択にも適用できるのだろうか。
- (3) 「死にゆく際の積極的な医療的支援」の合法化は、合法化されることによって、緩和ケアシステムに適合するようになるのだろうか。

(1)について、一見すると、死にたいと強く願う人の自己決定を尊重し、そのよさに訴えることは問題がないように思えるだろう。死に方や死ぬ時期に関わる問題は個人的なことであることを理由に、「自律」を強調しそれを積極的権利として強く解釈するならば、自己決定は常に尊重されなければならないものであり、判断能力がある人にとっては自分で決定を行うことが利益となる。しかし、死ぬ時期や方法を選択することはわれわれの「死ぬ権利」と言えるだろうか。自分自身で死を希求したのだから、その決定は尊重されるべきだと問題を単純化し、自己決定のよさをそのまま容認してしまうことには大きなリスクが伴うように思われる。

(2)について、確かにわれわれには自由意志があり、それによって自分にとって善もしくは利益と思われるものを選び取る。しかし、死に方の選択までも個人の自由であり、自由の範囲内と言えるだろうか。死に方を決定することも自由を行使することの一環として捉え、それを「死ぬ権利」まで拡張することは正しいだろうか。われわれには自分の人生に関わる様々なことがらについて、自由に選択する「権利」があるのだから、死に関わることも自由に自分自身で決定してよいと、自己決定のよさを強調してしまうと、われわれが有している選択の自由を盾に、患者の意思決定の質的問題に力点が移ることになってしまう。われわれは快を求め有害なもの（痛みや苦しみ）を避けることを患者の利益としてみなしている。そのとき、一般的には、患者にとって有害なもの（痛みや苦しみ）を取り除くことが、それに耐えるよりもより大きな利益をもたらすと判断されるので、死ぬことが正当化されることになる。そうなると、「耐え難い苦痛」に苛まれ、

死への明確で自発的な意思があれば、誰でも簡単に生を放棄することができるようになってしまう。このことは、快樂や苦痛という感情だけで死の自己決定が行われることを意味する。しかし、死は一度決定すると撤回不可能な究極の選択である。自己決定および自由の射程が曖昧なまま、そこに、医師の裁量や医師の決定ではなく自分自身によって死を決定することを強調する意味での「死ぬ権利」が絡み合うことで、問題がより複雑化されてしまう。

これまでみてきたように、今日、フランスに代表されるように、患者は「緩和ケア」を受け、患者が望むならば延命治療を拒否することが患者の権利として法的に守られている。この意味で、「死ぬ権利」は、「不合理で執拗な治療」を中止する権利へと移行しており、この文脈の中で広い意味で死に方の選択は自由といえる。しかし、その時間問題となるのは、単なる「死ぬ権利」ではなく「不合理で執拗な治療」の中止を伴う「尊厳をもって死ぬ権利」であるように思われる。

(3)について、「レオネッティ法」や「クレス-レオネッティ法」により患者の権利は保障されるようになったが、終末期における患者の治療の差し控えや中止において、患者に尊厳ある死を保障する法的効力についての規定はいまだ定まっていない。「緩和ケア」は、こうした残された課題を解決しようとするものであるが、問題は、患者が「死にゆく積極的な医療支援」を受け「人生の終わりを選択する」ことによって、死の瞬間まで人間としての尊厳を維持することができるかという点である。

これまで考察してきたように、他国と比較し、フランスでは「緩和ケア」のシステムが進んでいる。「緩和ケア」は、苦痛緩和を目的として行われるものであり、「緩和ケア」そのものは多くの国で為されているものだが、延命治療や中止や差し控え時にも実施できるという点にフランスの独創がみられる。その時、「緩和ケア」の一環として行われる「持続的で深い鎮静」が争点となる。「持続的で深い鎮静」が死を明確に意図したものである場合、「積極的な安楽死」と大きな差異はなくなってしまう、「積極的な安楽死」を容認したように解釈されかねないからである。とはいえ、フランスでは「積極的な安楽死」は違法であり、フランスが目指しているのは、「緩和ケア」による苦痛緩和である。そして、「持続的で深い鎮静」によって死亡時まで患者が尊厳を持って死と向き合う援助である。

2005年の「レオネッティ法」では、終末期による治療停止が認められ、医師が「不合理な執拗さ」でもって治療等を行うこと禁止した。また、終末期にある患者の苦痛緩和を行う際、苦痛緩和によって生命が短縮される可能性を示した。その後、2016年に、「クレス・レオネッティ法」が制定され、一定の条件下での鎮静が合法化された。

フランスのこうした法整備はわれわれに「持続的で深い鎮静」のあり方を問いかける。「持続的で深い鎮静」は、苦痛緩和のための単なる治療の一環であり、手段であるのか。

それとも、治療中止した患者が死の瞬間まで尊厳を保持しながら死ぬための援助であるのか。

われわれはフランスで起こった3つの事件を取り上げ、その後の法整備について考察してきたが、これまで検討してきたこれらの安楽死や「自殺幫助」に関する「尊厳をもって死ぬ権利」を巡る闘いは、根本的なパラダイムシフトにわれわれを誘発するように思われる。それは単にわれわれが「安楽死」や「自殺幫助」への準備ができていのかどうかを判断することではない。「安楽死」や「自殺幫助」を巡る問題は、超高齢化社会に直面しているわれわれにとって大きな社会問題である。根本的なパラダイムシフトは、そのような死の選択への準備が整っているかが焦点となっているのではなく、そのような死の選択が望ましい社会的選択であるかどうかを検討する時期が迫っているということを示す。

「安楽死」とは単に生命の短縮ではなく、元来の意味での安らかで穏やかな苦しむことのない死の成就ではなかろうか。そのために必要なのが、フランスに代表される、医師による「緩和ケア」だと考える。患者は「緩和ケア」を受ける権利を有し、「不合理で執拗な治療」が中止されることによって、「尊厳をもって死ぬ権利」が保障される。しかしながら、「持続的で深い鎮静」は、上記のように、治療の手段か、それとも死ぬための援助か解釈が分かれるため、「緩和ケア」と「積極的安楽死」や「自殺幫助」の融合、「積極的安楽死」や「自殺幫助」と「自然死」との同一視という、新たな問題が引き起こされる。

《註》

- (1) この点については以下を参照した。甲斐克則『終末期医療と刑法』、医事刑法研究第7巻、成文堂、pp.63-111.
- (2) 「自殺ツーリズム」については、宮下洋一『安楽死を遂げるまで』、小学館、2017年に詳しく説明されているので参照されたい。
- (3) シャボットあかね『生きるための安楽死 オランダ『よき死』の現在』、日本評論社、2021年、p.60に詳細な区分が紹介されている。それによると、「アメリカでは、現在九つの州とワシントン D. C. が『死における援助 (Aid in Dying)』を認めています。これは狭義安楽死と自死の援助、両方を示しうる表現ですが、アメリカでは自死のみが可能。さらに二〇州が現在検討中なので、数年のうちに六〇%の州で自死の援助が認められる可能性があります」と説明されている。アメリカの9つの州とは、オレゴン、バーモント、ワシントン、カリフォルニア、コロラド、ハワイ、ニュージャージー、メイン、モンタナである。
- (4) この点については、松田純『安楽死・尊厳死の現在 最終段階の医療と自己決定』、中公新書の「はじめに」のiiを参照した。
- (5) この点については、以下を参照。盛永審一郎『終末期医療を考えるために』、丸善出版、2016年。
- (6) アグネス・ヴァン・デル・ハイデ「オランダとベルギーにおける安楽死と医師による自殺

幫助」, 甲斐克則編『海外の安楽死・自殺幫助と法』, 甲斐克則・福山好典訳, 慶応義塾大学出版会, 2015年, pp.123-136を参照されたい。

- (7) この事件については, ヴァンサン・アンペール, 『僕に死ぬ権利をください 命の尊厳をもとめて』, 山本知子訳, NHK出版, 2004年を参照した。ヴァンサンの母親が, あるジャーナリストに息子の話をし, そのことが大きな反響を呼ぶこととなる。その後, もう一人のジャーナリストである, RTL (ラジオ・テレビ・ルクセンブルグ) や「フランス・ソワール」の記者をしているフレデリック・ヴェイユがヴァンサンのために上記の本を執筆することとなった。
- (8) ヴァンサン・アンペール, 前掲書, p.42.
- (9) ヴァンサン・アンペール, 前掲書, p.56.
- (10) 事故から二年以上が過ぎたとき, 彼は次のようなメッセージを残している。「僕はただただ疲れている。毎朝, 起こされ, 顔を洗われ, タオルで拭かれ, チューブでミルクを流し込まれ, 寝返りを打たされ, みっともなくないように服を着せられる。もうたぐさんだ。僕がよだれをたらすから喉をこすられるのもうんざりだ。このベッドに横たわり, 明け方三時に起こされるのも嫌なら, 毎晩なかなか眠れず, 母さんが仕事に追われて健康を害し, 自分自身のこともできなくなるのを見るのももう嫌だ。僕はもう疲れた。そうしたすべてに疲れ果てた。こうしたすべてが僕を衰弱させ, へとへとにさせるのだ。本当に死んでしまいたい。毎日感じていることをもう感じないですみ, 苦しまなくてすみ, 僕が愛している人々を苦しませなくてすみ, 母さんの生活をこれ以上メチャメチャにしないですむように」(ヴァンサン・アンペール, 前掲書, p.84)。
- (11) 「あなたは特赦権を持っていらっしゃる。だから私に, 死ぬ権利を与えてほしいのです。私が死にたいのは, もちろん, 自分のためでもあります, 何より私の母のためです。母は, ここベルクで私のそばにいるためこれまでの生活すべてを捨てました。そして, 私に会いに来る時間以外は, 毎朝, 毎晩, 一日も休まずに一週間ぶっ通しで働いています…今のところ, 母はまだ若いです。でも数年後には, 母も今のようなリズムで働くことには耐えられなくなるでしょう。そうすれば家賃も支払えなくなり, ノルマンディーのアパルトマンに戻らざるを得ません。私のように意識がはっきりしている患者は自分の行動に責任が持てるので, 生きつづけるか死ぬかを決める権利があると思います」(ヴァンサン・アンペール, 前掲書, p.113)。
- (12) 「そう, 僕にとって, 死は, ちょうど待ち焦がれた花が咲いたようなものだ。毎日柔かい花びらが開くのを待ち望んでいる。その日がやって来たら, 僕はその優しさに包まれて, 平安のなかで休むことができるのだ。そしてその花は再び閉じ, 僕をその中心に連れて行ってくれる」(ヴァンサン・アンペール, 前掲書, p.188)。
- (13) ヴァンサンは以下のように主張している。「実際に, 僕が望んでいるのは最期的手段としての安楽死を選ぶことではなくて, もっと広い意味で事態を進展させるということだ。安楽死, それは極端な解決手段だ。苦痛がどうにも耐えがたいもので, 執拗に死にたいと願ったときに選択されるものである。僕はさらに先を考えたい。僕が願うこと, それは, 最後には自分がもう二度と以前のようになれないと気づいたときに, その人たちが死ぬことができるように, 病院という環境のなかで基準が設けられることである。僕のように, 死にほとんど傾きかけていた人に, 何時間も, さらに何日間も, むきになって蘇生装置を施し, 結局, 植物状態になってしまった人々を延命させるのはもうやめようではないか」(ヴァンサン・アンペール, 前掲書, pp.181-182)。
- (14) 有馬斉『死ぬ権利はあるか』, 春風者, 2019年, p.6を参照した。自己決定容認派についてのポイントが端的にまとめられており, そこでは3つに分類されている。4つに分類した理由としては, ヴァンサン・アンペール事件をまとめた, フレデリック・ヴェイユがその

「まえがき」の中で、「ヴァンサン・アンベールは、ある日、新聞に自分の写真が載ったからといってうぬぼれるような愚劣な青年では決してない。そんなことはすべて、彼にとってはどうでもいいことなのだ。ヴァンサンが望んでいる唯一のこと、それは、もう苦しめないこと、もう自分の家族を苦しませないことである。彼が今日体験している人生、彼が自分で選び取ったのではないその人生のなかでの彼の唯一の目標は、ただ、これ以上生きていないこと、つまり死ぬことである」と述べていたことによる。このように、自分の家族を苦しませないということは自己決定を為す際の理由の一つとなりうるのではないだろうか。

- (15) 有馬斉, 前掲書, p. 233. 有馬氏はハードウィッグの「病人には死ぬ義務がある」という考えを紹介している。ハードウィッグによれば、この死ぬ「義務は、生き続けたときに家族にかかる負担が大きいほど、また患者が高齢であるほど、大きくなる」と説明されているが、それを受けて、有馬氏は、患者の利益としての文脈の中で紹介されたものであり、「現実にもそのような場合がおきたとして、この義務は具体的にはだれに何をすることを要求するのか」とその曖昧さを指摘している。

- (16) 同上.

- (17) 4つについては、①1999年に「緩和ケア権利法」②2002年に「患者の権利法；患者の権利及び保健医療制度の質に関する法律（2002年法/クシュネル法）」③2005年に「患者の権利及び生の終末に関する法律（2005年法/レオネッティ法）」④「クレス・レオネッティ法」である。この点については、以下を参照。

https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2018/PA03299_04.

それによれば、以下のように説明されている。2016年1999年6月「緩和ケア権利法」が終末期医療に関する最初の法律として成立。緩和ケアへのアクセス権と、患者が自分の治療を自己決定する権利を保障した。2002年には、「患者の権利法；患者の権利及び保健医療制度の質に関する法律（2002年法/クシュネル法）」が成立した。国境なき医師団の医師でもあった国会議員ベルナル・クシュネルの名前を取った同法は、終末期の苦痛軽減のために治療を受ける患者の権利を定め、死亡時まで尊厳ある生を過ごせるようあらゆる方法を尽くすことを医療者に義務づけた。本人のオートノミーと同意を明記し、本人に代わって意思表明する「信任者」の制度が創設された。2005年には、「患者の権利及び生の終末に関する法律（2005年法/レオネッティ法）」が成立。同法の概略は、オランダのように安楽死を合法化せず「死の医療化のなかで緩和治療ケア（soins palliatifs）によって終末期をヒューマニズム化しようとするもので、同法により終末期の積極的治療の中止が認められ、患者の治療拒否の権利と事前指示書について明記された。その後、2014年7月から、右派国民運動連合のレオネッティ議員と左派の社会党のアラン・クレス議員が指名されて超党派で策定した法案「クレス・レオネッティ法」が、2016年1月27日に国会で可決成立した。

- (18) ヴァンサン・ランベール事件については以下を参照。

https://www.lemonde.fr/societe/article/2019/07/11/vincent-lambert-est-mort_5488017_3224.html.

https://www.lemonde.fr/societe/video/2019/06/28/comprendre-l-affaire-vincent-lambert-et-ses-multiples-rebondissements_5482830_3224.html.

牧田満知子「欧州人権裁判所判決から考えるフランス『尊厳死法』」、『医療・生命と倫理・社会』15, 2019, pp. 17-22.

- (19) 篠田道子「フランス終末期ケアの動向と尊厳死法の改正」、『健保連海外医療保障』No. 115, 健康保険組合連合会社会保障研究グループ, 2017年。

- (20) 松田純, 上掲書, p. 101.

- (21) アラン・コック事件については以下を参照。

<https://www.lemonde.fr/societe/article/2020/09/08/alain-cocq-hospitalise-apres-quatre>

jours-sans-traitement_6051438_3224.html.

Cf. <https://www.afpbb.com/articles/-/3303120>

- (22) この点については、有馬斉，前掲書，pp. 23-64 を参照されたい。
- (23) 松田純，上掲書，p. 101.
- (24) フランスの「自らの死を再び自分のものとするを人に許容すること」に関する 1980 年代以降に達成された道筋としては，以下のものを参照。クリスティアン・ビッグ「フランス法における安楽死」，甲斐克則編『終末期医療と刑法』，柿本佳美・甲斐克則訳，pp. 103-119.

(原稿受付 2022 年 10 月 25 日)

スティーヴン・ミールドマン

— 出版から見るエドワード六世時代

富田 爽子

Steven Mierdman: Printer in the Age of Edward VI

Soko TOMITA

要 旨

エドワード六世時代は政府がプロテスタント政策へと舵を切り、時代が大きく動いた。政府はプロテスタント振興政策のプロパガンダとして、活版印刷を積極的に活用した。その結果、大陸に大きく後れを取っていた英国の印刷技術は急速な発展を遂げる。本論では時代の印刷業者の特徴を体現する人物として、アントワープ出身のスティーヴン・ミールドマンを取り上げる。熱心なプロテスタントであり、亡命先のロンドンで出版数第3位の大物印刷業者になる。アントワープで培った技術と人脈を活用し、印刷業界を牽引した。難易度の高い楽譜や外国語の印刷、図版の積極的な活用に高い技術力がうかがえる。来英3年足らずで有利な特許を取得し、ビジネスマンとしての能力も高かった。大物印刷業者の傾向である宗教書印刷が大勢を占めたが、『ユートピア』や『ランカスターとヨークの2大名門の統一』など知的な著作や、庶民に人気の暦なども印刷し、時代の流れを見ることに長けていた。このような印刷業者の活動は時代の流れを映す。大量の出版は書物が既に貴族や学者など、一部の限られた階層の所有物ではなくなったことを示している。

テューダー朝の中間に位置するエドワード六世時代は、プロテスタント振興と国民への書物の浸透がその大きな特徴である。この時代に培われた出版の発展が後の英国ルネサンスの土台となっており、ミールドマンはそのような時代を体現した印刷業者であった。

キーワード：エドワード六世、出版、スティーヴン・ミールドマン、図版印刷、外国語印刷

1. はじめに

印刷機の発明以来、印刷業者は時代を映す鏡の役割を果たしてきた。エドワード六世時代もその例にもれない。政府がプロテスタント振興政策に出版を活用したため、この時代には書物が1156版も刊行され、印刷・出版が急速に発展した⁽¹⁾。それ故この時代の印刷業者に注目する意義は大きい。この出版の急増から、ヘンリー八世とエリザベス

一世の間に位置するこの時代が見えてくる。本論では時代の特徴を体現する印刷業者、アントワープ出身のスティーン・ミールドマン (fl. 1536-1559) を取り上げる⁽²⁾。エドワード時代を考える上で注目すべき人物だ。

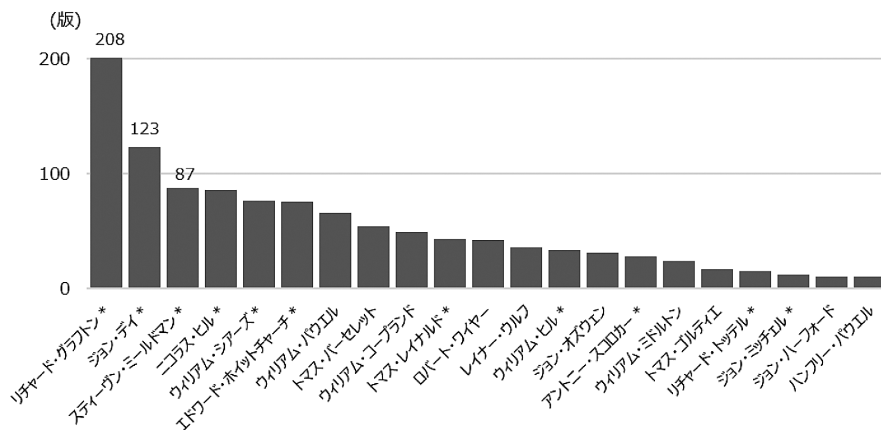


図1 主要印刷業者 出版数 (1547-1553)⁽³⁾

その理由は、まず印刷数が多いことだ。国王御用達印刷業者リチャード・グラフトンや、のちに書籍商組合長になるジョン・デイは別格として、ミールドマンは英国内で87版の書物を印刷し、出版数第3位の大物印刷業者にのし上がった。彼はアントワープでマテウス・クロムの工房に勤めていた頃から、固いプロテスタント信仰を持っていた。生涯2度の亡命を余儀なくされたが、一生その信仰を貫く。図版使用や活字の開発などに積極的に取り組み、技術面でも時代を牽引する印刷業者だった。

ミールドマンはアントワープ時代に印刷した著者や出版業者とのつながりを維持し、ロンドンでの活動に役立てた。オランダ人のコミュニティーに属し、外国人教会のメンバーにもなった。大陸から亡命してきた印刷業者の手も借りて、多くの書籍を印刷する。活版印刷がようやく軌道に乗り始めたこの時代では、業者間の人脈が重要な意味を持つ。ミールドマンにはグラフトンのように、政府の有力者との直接のつながりを示す情報はないが、ビジネスマンとしての手腕を発揮し、活動基盤を広げた。

政府はプロテスタント振興政策に特許を活用した。印刷というメディアを駆使し、時代を大きく動かした。大物印刷業者は特許を得て、特定のジャンルの印刷を独占する。ミールドマンも来英3年足らずで特許を取得し、順調にビジネスを構築した。ミールドマンを紐解くことで、エドワード時代がどのような時代だったかが見えてくる。この時代は宗教で社会が大きく揺れ動いた。印刷・出版業者は印刷が盛んな時代の空気を反映した。本論ではこの時代において印刷業者が映し出した時代の様相を見ていきたい。さ

らにテューダー朝でのエドワード時代の位置づけを明らかにしたい。

2. スティーヴン・ミールドマン

(1) 時代背景

ヘンリー七世から始まったテューダー朝は、まず宗教においてカトリックでありながらローマ教皇と決別して英国国教会を樹立したヘンリー八世、そしてプロテスタントのエドワード六世、次にカトリックのメアリー一世、そして英国国教会体制の基盤を固めたエリザベス一世と、王によってその宗教が変わっていった時代である。激しく揺れ動いた時代であった。その中でエドワード時代ははっきりとプロテスタンティズムに傾き、大陸の宗教改革の大きなうねりの中に突入する。大陸のプロテスタントにとってエドワードの英国は活動の舞台と映った。新しい礼拝様式を歓迎しない者もいただろうが、英国人の信仰生活は短い間にすっかりその姿を変えたように見えた。英国はヨーロッパのプロテスタント宗教革命の中心地となる。大陸とは異なり政府主導の革命だったが、前半はサマセット公爵、後半はノーサンバーランド公爵による積極的なプロテスタント政策が推進された。

出版の歴史においても時代は大きく動いた。大陸では、既にアンドレア・ヴェサリウスの人体の解剖図など精巧な図版が印刷されていた⁽⁴⁾。それにひきかえ、英国の印刷出版は大陸よりかなり遅れていた。写本と異なり活版印刷の社会的地位はまだ低かった。静謐な修道院で1冊ずつ丁寧に仕上げる写本に比べ、活版印刷はヨースト・アマンが描いた「印刷師の木版画」、そしてハンス・ザックスの詩が想起させるインクにまみれた職人の仕事だった⁽⁵⁾。エドワードの時代に入り、新政府の寛大政策に応えるべく、大物印刷・出版業者を中心に多くの書物が生産される。プロテスタント振興政策の波に乗り、印刷技術は大きく発展する。大量の書物が巷に出回り、国民に書物への関心を引き起こした。さらにこの時代の識字率の向上が人々を書物に向かわせる。印刷出版業者は文化の運び手、媒体としての役割を担ったのだ。業者のほとんどはプロテスタントだったが、第一義的には商人で、儲けを念頭に書物を生産した。政府の方針に沿って活動しつつ、一般読者層の求めに絶えず気を配った。時代の関心の反映を心掛けたのだ。この時代に書物の位置づけが大きく変化する。その変化は文章にも表われていた。

大陸では16世紀前半に母国語による新しい文学形式が生まれた。俗語の台頭である。ラテン語に代わり、民衆の言葉で作品を書こうとする運動だ。イタリアではピエトロ・ベンボーが『俗語論』を出版して大きな影響を与え⁽⁶⁾、トスカーナ方言を共通言語とする流れにつながった。ドイツではマルティン・ルターのドイツ語訳聖書以前に、既に多くの翻訳がなされていたが、彼の聖書は高地ドイツ語の普及におおいに貢献した⁽⁷⁾。フ

ランスでは1539年のヴィレル＝コトレの勅令により、ラテン語に代わりフランス語が公用語となった。ラテン語の読めない人々が自国語で書かれた本を読むようになる。読者の増加が印刷出版を活性化させた。さらにプロテスタント運動の広がりから大量の文献が様々なヨーロッパ言語に訳された。翻訳書は大陸のいたるところで新しい読者を獲得する。新約聖書の俗語出版には目を見張るものがある。

書物は未だごく限られた人々のものであった英国でも、同じような現象が見られた。それまでは知的な教養書や公文書はほとんど国際語のラテン語で著されていた。プロテスタントイズム振興の一つの手段として出版の活用を考えた政府は、大陸でのこの流れに乗った。さらに政府の意図に応じる大物印刷・出版業者がいた。これらが結びついて英国でも翻訳書が多く出版されるようになる。俗語の普及は必然的に新しいタイプの文人の台頭を促した。1540年代から1560年代にかけて翻訳家の活躍が顕著になる。時代の全出版物1156版のうち翻訳書は345版(29.8%)を占める。その多くを大物業者が担った。これがこの時代の出版業界の実状である。

庶民の周りには急速に書物が出現した。本が巷にあふれると人々の好奇心は刺激される。このような流れの中でエドワード時代には、社会に文化的・知的生産物が流入し出版されたのである。翻訳本は宗教書ばかりではない。デジデリウス・エラスムスの著書は『痴愚神礼賛』(STC 10500)など28版も出版され、そのすべてが英訳されている⁶⁾。トマス・モアの『ユートピア』もこの時代に英訳された(STC 18094)。これらはラテン語からの翻訳だが、345版のうち210版がラテン語以外の言語から訳されている。この数字は、明らかに俗語の書物の増加を意味する。当然翻訳者の需要が高まった。翻訳者は分かっているだけで、少なくとも120名いた。マイルズ・カヴァデイル、ウィリアム・ティンダルをはじめ聖職者、作家、学者など、知識階級が翻訳に携わった。表1が示すように翻訳者の中には印刷・出版業者もいる。

表1 エドワード時代に翻訳を行った主な印刷業者

印刷業者	出版数	翻訳活動期間
アントニー・スコロカー	11版	1547-1553
ウォルター・リン	8版	1548-1550
リチャード・ジャック	4版	1552-1553
ロバート・クロウリー	1版	1549
トマス・パーセレット	1版	1550
ロバート・ワイヤー	1版	1549
トマス・レイナルド	1版	1551
スティーヴン・ミールドマン	1版	1553

彼らは翻訳に必要な語学力と高い知性を備えており、みな大物印刷業者だった⁽⁹⁾。

印刷術の発明の最初期から印刷業者は学者や文人を雇い、翻訳や広告文の作成を任せていた。また序文のための詩や献呈文も書かせていた。印刷工房にとって欠かせない重要な編集業務である。表1の印刷業者は、製造する書物の内容にまで踏み込んで翻訳に携わっていたのだ。この時代の印刷業者の中には、上述のインクにまみれた職人であるにとどまらず、翻訳をこなす者もいたのである。

一方で、16世紀の初頭新しい印刷技術が普及するにつれ、印刷をことさら軽蔑する風潮が生まれた⁽¹⁰⁾。印刷の質が写本より劣っていたことが最大の理由だが、機械による大量印刷への違和感とやっかみもあった。そのような流れの中で印刷業者の翻訳活動は、印刷に対する低いイメージからの脱却に寄与したと考える。この時代は書物や印刷出版の社会的評価が変わった時代なのだ。ミールドマンもオランダ語翻訳を試みている⁽¹¹⁾。

(2) ミールドマンについて

a. アントワープ時代 (c. 1543-c. 1547)

ミールドマンは、アルプスの北側の最大の商業中心地、また宗教論争の本拠地だったアントワープの印刷業者である。反体制側の人物だった。1559年にドイツのエムデンで亡くなるまで、一貫してプロテスタント書物の印刷を行った。1540年頃親方クロムの工房で働き始め、1543年アントワープの自由市民として認められる。ほどなくして彼の名前も奥付に印字されるようになった。親方の妹エリザベスと結婚し、次第に仕事を引き継いで行く。ミールドマンの技術力と意欲的な仕事が高く評価されたのだ。

宗教改革勃発から20年余りの間、英語のプロテスタント文献は海外、ほとんどはアントワープで印刷されていた。大陸の業者には儲けが期待できる市場だったのだ。出版物には英国から大陸へ逃がれた急進的改革派の著書や、スイスの宗教改革者ヨーハン・ハインリッヒ・布林ガーのパンフレットなども含まれる。これらはオランダ本よりその主張が過激だった。当時アントワープで英国向け出版を行った業者は、14人もいた⁽¹²⁾。クロムとミールドマンも英国を視野に印刷した。彼らの英語本はもちろんプロテスタントの著作だ。

ミールドマンが来英以前クロムと共同で、あるいは単独で出版した書籍は少なくとも42版あることが今回の調査で明らかになった。うち標題紙や奥付にどちらかの名前が記載されているのは約半数。その他の本はタイポグラフィーの観点からふたりの作品とされる。

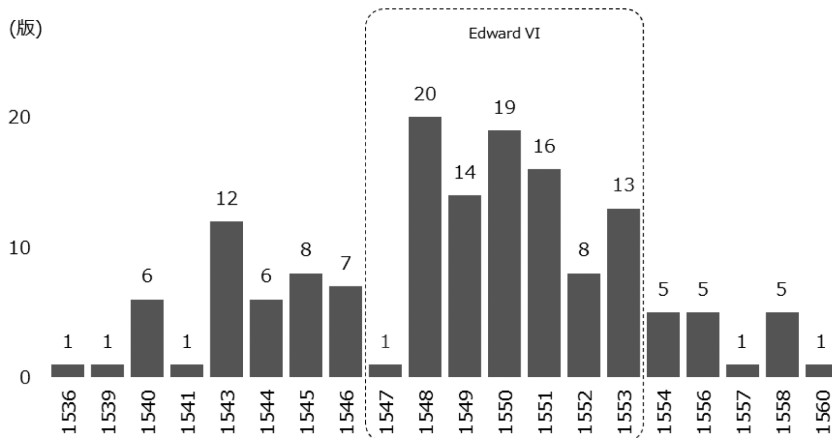


図2 スティーヴン・ミールドマンの印刷数

ミールドマンが精力的に印刷を始めたのは1543年以降だ⁽¹³⁾。コリン・クレアはミールドマンがクロムの活字などを使用していることから、1543年にクロムのビジネスを引き継いだとする⁽¹⁴⁾。

ミールドマンは初めから印刷をプロテスタンティズム浸透の手段と捉えていた。したがってプロテスタントの教えを広めるために、英国向けの印刷にも積極的に関わった⁽¹⁵⁾。調査の結果、アントワープ時代にクロムとミールドマンが印刷した120版のうち、英語で出版されたのが30版、多国語が1版⁽¹⁶⁾、オランダ語以外が少なくとも26版ある。つまり英語の書物はふたりのアントワープでの総生産の1/4を占めていた。著者ではジョン・フリス (STC 11382, 11390)、プリンガー⁽¹⁷⁾、ジョン・ベイル (STC 1296.5, 1270)、エラスムス⁽¹⁸⁾とプロテスタントの旗手が名を連ね、聖書ではカヴァデイルが11版⁽¹⁹⁾、ティンダルも4版出版した⁽²⁰⁾。ジョージ・ジョイのカトリック攻撃の冊子 (STC 14828) もあり、エラスムスの英訳も2版 (STC 2848, 10488) ある。

ミールドマンが本格的に印刷を開始した頃、大陸ではカール五世がプロテスタントへの規制を強めた。1543年にスペイン人のフランシスコ・エンジナスがギリシャ語からスペイン語に翻訳した新約聖書に、ミールドマンは自分の名を奥付に記して出版した (USTC 440059, 440647)。エンジナスは聖書の翻訳を禁ずる布告に違反した罪で投獄、聖書は焚書となった。ミールドマンは印刷中止を言い渡され、在庫の販売を止められたばかりか、既に書店に卸したコピーも取り戻すよう命ぜられた⁽²¹⁾。

1544年公布の勅令は、低地諸国に福音主義の教義を根づかせまいとしたものだ。スペイン語、英語、イタリア語での出版を禁止し、違反者は処罰の対象となる⁽²²⁾。翌1545年にはミールドマンの同業者ヤーコプ・ファン・リースフェルトが斬首された⁽²³⁾。さらに1546年6月の勅令によりプロテスタントの出版活動は完全に抑圧され、背いた者

には死刑が科せられることとなる。出版前に審査と認可を受けない書物も処罰の対象とされた⁽²⁴⁾。これで大陸の福音主義印刷は終焉を迎える。ミールドマンに対し、具体的にどのような処分が検討されたかは定かではない。固い信仰のもと彼は自分の目録と活字を携え、多くの亡命者とともに英国に渡った。

エンジナスがこの聖書の印刷をクロムに依頼した際、クロムは「喜んでお引き受けしましょう。と申しますのは、私は自分のためよりも人の役に立つ仕事がしたいのです。儲けや、人の中傷などは気にしておりません。」と答えたという⁽²⁵⁾。ロンドンでのミールドマンの活動を考えると、ミールドマンはクロムから仕事とともにこの意志も継いだと考えられる。

b. ロンドン時代 (c. 1547-1553)

ロンドンに渡ったミールドマンは、オランダ人が多く住むリビングスゲイトに居を構え印刷を開始した。1547年は1版のみの印刷だったが、翌1548年には20版と急増する。アントワープからの知人ペイル (STC 1274a, 1297) をはじめ、ロバート・クロウリー (STC 6083), フリス (STC 11383), ルター⁽²⁶⁾, フィリップ・メランヒトン (STC 17795, 17796), ウィリアム・ターナー (STC 24359) など、時代を代表するプロテスタントの著作を次々と印刷した。いずれも100~200ページの中冊子で、リチャード・ジャック、デイ、ウィリアム・シアーズ、リンといった出版業者のための印刷だった。ミールドマンは既にこれら大物出版業者との関係を築いていたのだ。オランダ人の地域社会には印刷工が多くいた。この年印刷した書物20版のうち18版までが英語であり、アントワープでの実績が評価されたことがわかる。ミールドマンはこれらの職人や印刷工と分担し、多くの書物を印刷した⁽²⁷⁾。

ミールドマンの来英は亡命という不本意なものだった。来英時期は1547-1548年頃と推測されているが、正確なことは分からない。現在分かっているのは、1547年に、メランヒトンがヘンリー八世宛てに書いた6箇条廃止要求の書簡の英語版を、ミールドマンが印刷したことだけだ (STC 17789)。奥付には5月18日という日付が印字され、出版地はウェーゼル (アントワープ) とある⁽²⁸⁾。1547年の印刷数の少なさと、1548年の印刷の急増から1548年には既に英国で活動していたと考えるのが自然だ。

表2 ロンドン時代にミールドマンが印刷した書物の出版者一覧（1547-1553）

(版)

出版者	1547年	1548年	1549年	1550年	1551年	1552年	1553年	計
ステイーヴン・ミールドマン	1	2	1	4	4	1	1	14
リチャード・ジャッグ		7	1	1	2		3	14
ジョン・デイ		4	2	3	3	1		13
ウォルター・リン		6	1	5				12
ヒュー・シングルトン		1	1	2			2	6
エドワード・ホイットチャーチ			2				1	3
ジョン・ベイル			1		1			2
リチャード・グラフトン			1	1				2
ロバート・クロウリー			1	1				2
ウィリアム・オーウェン					1		1	2
ジョン・キュプキン					2			2
アンドルー・ヘスター				1	1			2
エイブラハム・ヴィール					2			2
ウィリアム・リッデル						2		2
ジョン・ワイト							2	2
リチャード・フォスター			1					1
ジョージ・ジョイ			1					1
ロバート・トイ					1			1
ジョン・ウォリー						1		1
ヘンリー・サットン							1	1

表2はミールドマンが1547年以降に印刷した書物を出版した業者の一覧である。来英当初は他の印刷業者の下請けをした可能性もあるが、既に述べたとおり、1548年には20版も印刷している⁽²⁹⁾。同郷のアルフォンサス・ラートの『暦と予測』を片面印刷の大判紙で印刷し、ジャッグが出版したものもある(図3. STC 470, 470.1)。暦や予言は当時の人々に人気があった。ミールドマンの名前はないが、クロムが輸出用の本に用いたドラゴンの尻尾の中に欠けた月が収まっている印刷者意匠に酷似したものを印刷しているため、ミールドマンの印刷と考えられる。



EEBO の画像。クラリベイト社より掲載許可取得済み。

図3 『暦と予測』 STC 470. A1^r。

表2から来英早々のミールドマンをジャッグ、デイ、リン、ヒュー・シングルトンがサポートしたのは明らかだ。ジャッグはミールドマンの印刷した本をこの年だけで7版出版しており⁽³⁰⁾、デイは4版出版した⁽³¹⁾。リンは同郷で、ロンドンでも近隣の閭柄であり、ミールドマンが印刷した6版を出版した⁽³²⁾。うち半数はルターやウルバーヌス・レギウスの著作をリン自身が訳したものだ。リンにとっては思い入れのある書物をミールドマンに任せただけだ。シングルトンも1版出版した (STC 11235)。当時の有力な出版業者は密接な連絡網を張り巡らし、情報を共有していた。英語本密輸などを通じてミールドマンの名も知れ渡っていたに違いない。彼の英国での印刷は順調なスタートを切った。リンは1550年に出版をやめたが、他の3人は時代を通してミールドマンの印刷物を出版し続ける。ミールドマンも落ち着くにつれ、自分で出版する数が増えた。次第に数多くの出版業者が彼の製品を出版するようになる。彼は人脈を広げ順調な活動を繰り広げた。

図2が示すように、今回の調査でミールドマンはアントワープ時代には42版、ロンドン時代には91版、エムデン時代には17版を印刷した。ロンドン時代が彼の活動のピークだったことがわかる。

c. エムデン時代 (1554-1559)

メアリー一世の勅令により、ミールドマンはエムデンへ亡命した。ブラディー・メアリーの異名を持つメアリーはカトリック政策をとり、そのプロテスタント弾圧はすさまじかった。トマス・克蘭マー、ヒュー・ラティマー、ニコラス・リドリーは火刑に処

され、女性や子供を含む約 300 人が処刑された。それは多くの印刷業者の海外流出につながる。ミールドマンもそのひとりだ。エドワード時代に活躍した印刷業者は国籍を問わず、憂き目を見ることになる。英国のプロテスタントには 2 つの選択肢しかなかった。固くなに信仰を通して殉教するか⁽³³⁾、沈黙を守るかであった⁽³⁴⁾。英国にとどまった英国人業者も満足に印刷ができなくなった。

表 3 エドワード時代に活躍した印刷業者のメアリー時代の活動状況

印刷業者	メアリー時代の活動状況
リチャード・グラフトン	国王御用達の職解任。印刷活動中止。
ジョン・デイ	プロテスタント本の流布に努めたかどで、投獄（1554 年 10 月-1555 年 1 月上旬）。エリザベス時代で活躍。
ウィリアム・シアーズ	投獄。以降はプロテスタント色の薄い書物を細々と印刷。エリザベス時代で活躍。
エドワード・ホイットチャーチ	印刷業休業。
ウィリアム・パウエル	僅かに 10 版程度印刷継続。
トマス・パーセレット	1555 年に死亡。
ウィリアム・コーブランド	印刷継続。1556 年に克蘭マーの宗旨撤回を印刷して枢密院に召喚、全てのコピーの提出、破棄を命ぜられた。エリザベス時代で活躍。
トマス・レイナルド	1552 年以降印刷せず。
レイナー・ウルフ	3 版のみ印刷。エリザベス時代で活躍。
リチャード・ジャック	3 版のみ出版。エリザベス時代で活躍。
ヒュー・シングルトン	デイと共に投獄。後にドイツのウェーゼルへ亡命。エリザベス時代にロンドンへ戻る。

外国人は国外退去を余儀なくされる。オランダ人のニコラス・ヒルはミールドマンと共にエムデンへ渡るが、かの地では 2 版しか出版していない⁽³⁵⁾。エムデンでミールドマンはヤン・ガイリアートに助けられ、主としてオランダ語の宗教書印刷や翻訳を続ける。しかし彼の出版数も激減した。ミールドマンは時代の流れの中で、印刷業者の運・不運の両方を味わったのだ。

メアリー一世の時代になって、ヘンリー八世時代の伝統的な信仰生活への復帰を歓迎する者もいた。しかし 6 年半に亘るプロテスタンティズムによる集中的、根本的な改革や、時代の流れに感化された人々の意識を元に戻すことはできなかった。それでもプロテスタント書物の出版は、表向きには終焉を迎える。エドワード時代の全出版数の 59.0% を占めていたプロテスタント本の出版ができなくなったのだ⁽³⁶⁾。カトリック本の出版が始まるが、エドワード時代のプロテスタント本ほどの勢いはなかった。そしてミー

ルドマンの活動もロンドン時代でピークを過ぎたのだ。

(3) ミールドマンの特徴

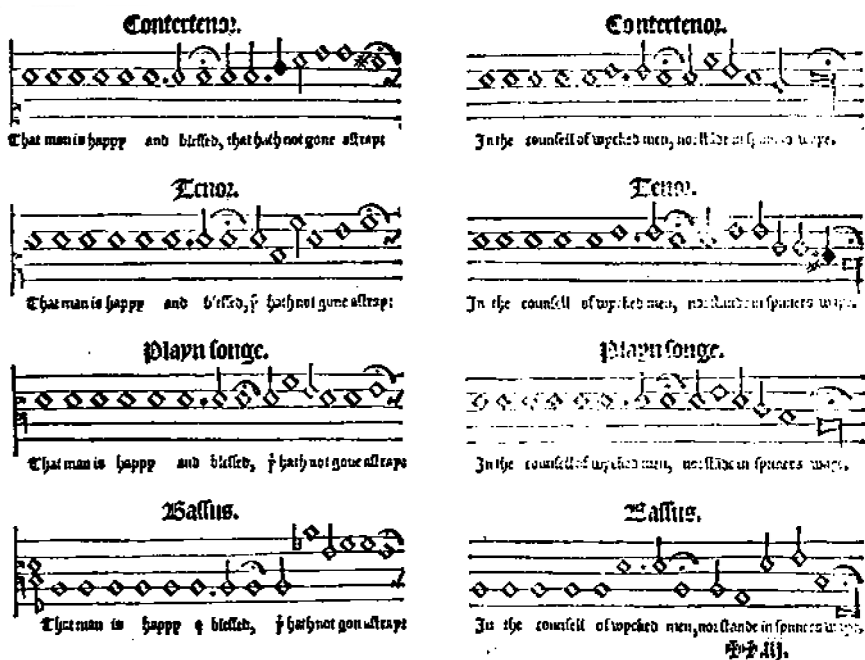
わずか6年半で時代を代表する印刷業者にのし上がったミールドマンの特徴とは何であったのか？ 彼の成功の鍵として5つの特徴、すなわち人脈、特許取得、図版の積極的使用、外国語印刷、出版数の多さを挙げるができる。

a. 人脈

まずミールドマンのビジネスマンとしての側面に注目する必要がある。エドワード時代では有力者との人脈なしに印刷・出版ビジネスでは成功できなかった。亡命者ミールドマンは来英時、英国の有力者との直接的なつながりはなかった筈である。彼がビジネスマンとして優秀だったのは、自分の人脈、すなわち有力者とのつながりを持つ人物との関係を、最大限に活かした点にある。例えば、「イギリス植物学の父」と呼ばれたターナーとの関係を挙げよう。ターナーはイタリアで薬学の学位を取り、エムデン公爵の主治医となった。ミールドマンはターナーのカトリック教会攻撃の小冊子をアントワープで印刷している (STC 24354)⁽³⁷⁾。英国に戻ったターナーはサマセット公爵の主治医となって公爵の屋敷に住み、手厚い保護を受けていた⁽³⁸⁾。ミールドマンは来英早々の1548年にターナーの『植物誌』を印刷する (STC 24359)⁽³⁹⁾。オクティヴォで128ページの中冊子である。植物の名前をABC順に並べ、ギリシャ語、ラテン語、英語、ドイツ語、フランス語で紹介している。この表記法はターナーの発明ではないが、時代の最先端を行くものだ。ターナーはこの本をサマセットに献呈した。当時の英国では外国語の印刷ができる業者は限られていた。ミールドマンはアントワープで培ったターナーとの関係を活かすことが出来たのだ。サマセットにも自分の存在と実力をアピールできた。1553年までにターナーは8版の著書を出版したが、その半分はミールドマンの印刷だ⁽⁴⁰⁾。ターナーとサマセットとのつながりは無視できない。

初期英国演劇の担い手であり、論争的なプロテスタントの牧師ベイルとの関係もミールドマンにとっては重要な人脈だった。アントワープ時代からの仲間である。エドワード時代の出版作品13版のうち9版をミールドマンが印刷した⁽⁴¹⁾。いずれも激しい教皇制度批判だ。プロテスタント時代の到来でふたりは一層きずなを深め、出版を重ねた。

急進的な宗教改革論者として名高い牧師クロウリーは、詩篇をヘブライ語から英訳し楽譜付きのマニフィカトと雅歌などの抜粋を添えた。



EEBO の画像。クラリベイト社より掲載許可取得済み。

図4 クロウリー翻訳の『詩編』 STC 2725. ㊦2^v, ㊦3^r。

この360ページに及ぶ大著はグラフトンとミールドマンの共同印刷である。ミールドマンはさらにクロウリーの小冊子を2版印刷する(STC 6085, 6096)。彼は技術的難易度の高い印刷を手掛けた。それらの成果が有力者との人脈につながったと考える⁽⁴²⁾。ミールドマンは自身の技術力で人脈を開拓し、時代の先頭に立ったのだ。

b. 特許取得

印刷・出版業者と有力者とのつながりを示すものとして、特許の取得がある。大物印刷業者は何らかの特許を得て、特定のジャンルの印刷を独占した。特許の取得は大物印刷業者の証だった。特許を得た業者は中小業者に下請け発注を行う。注文を確実にこなすためだが、結果的に中小印刷業者の救済にもつながった。

ミールドマンは1550年7月26日、王室から5年間の特許を得、まだ未出版の書物の印刷と、国籍を問わず職人を雇うことが認められた⁽⁴³⁾。英国での実績が認められたのだ。この特許は書物のジャンルを限定しておらず、他の同業者より特に有利な内容だった。ミールドマンは優遇されていたと考える。来英3年で実力が認められた証だ。これは驚異的な速さである。既に有力者との強い関係を築いていたと考える。

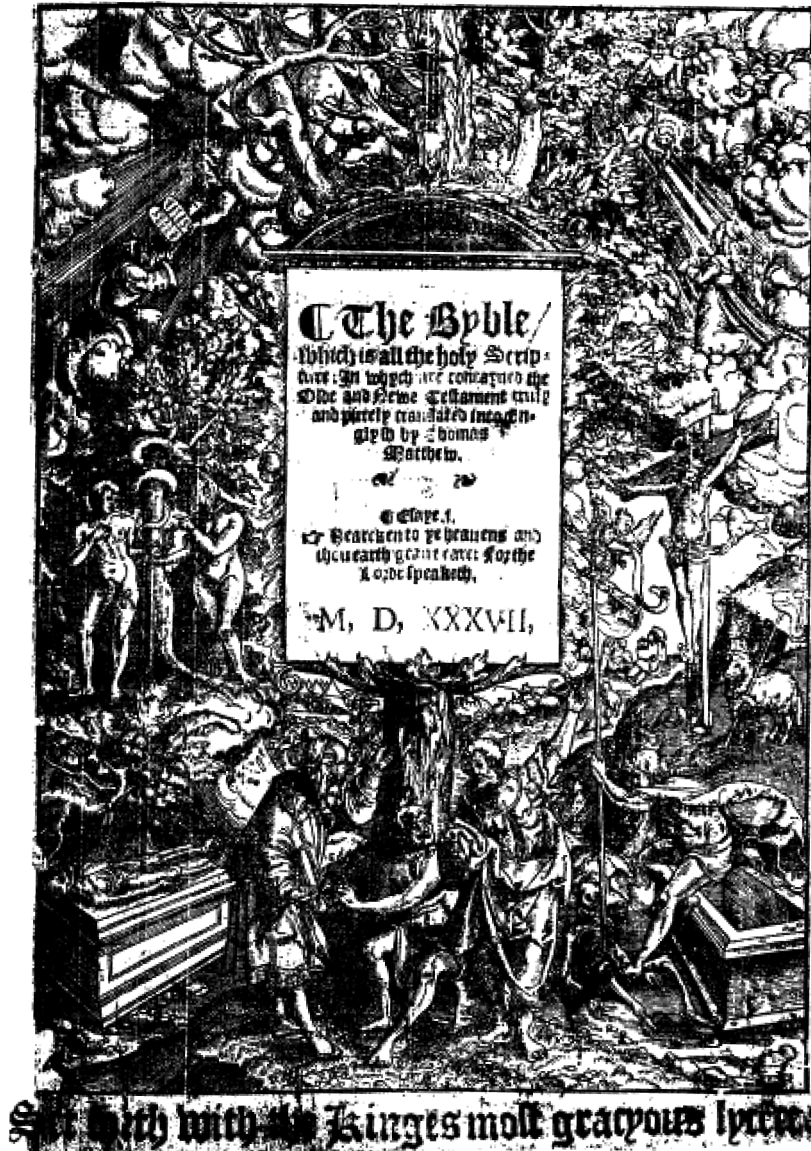
政府はプロテスタント振興に特許を活用し、印刷・出版の活性化に大きな影響を与え

た。大物印刷業者の特許取得状況を見ると、1544年にエドワード・ホイットチャーチはグラフトンと共に祈祷書を印刷する特許を得ている（STC 15835）。ジャックは1552年に国王の許可を得て英訳聖書を出版した（STC 2867）。リチャード・トッテルは1552年に法律書印刷の特許を獲得し、精力的に法律書を出版した⁽⁴⁴⁾。N. ヒルが特許を得たという記録は見つかっていない。1547年にレイナー・ウルフはラテン語、ギリシャ語、ヘブライ語の書物を印刷する国王御用達の印刷業者に指定される。ヘンリー八世の時代に国王の書簡を大陸に届けるなどしており⁽⁴⁵⁾、ウルフには宮廷との強い結びつきがあった。一方デイは1553年になってようやくトマス・ビーコンとジョン・ポーネットの著書を印刷する王の特許を得た。デイにとっては初めての特許獲得である⁽⁴⁶⁾。彼は既に1549年と1550年にシアーズと共にアポクリファを含む聖書の英訳版を次々に出版しているにもかかわらず（STC 2087.2-2087.5）、特許を得ることはなかった。ミールドマンはそのデイよりも早く、しかも著者やジャンルを限定されることなく特許を取得している。特許を取得するには実力だけではなく、政府への相当な働きかけが必要だったと考える。ミールドマンはターナーのような人物を通して、政府との絆を深めていたに違いない。

ポーネットがカテキズムをラテン語と英語で編纂した際に、ポーネットの印刷特許を得たばかりのデイは、早速この権利を行使しようとした。ところが、ラテン語著作の国王御用達印刷業者だったウルフが異議を唱える。結局ジョン・ダドリーのとりなしでラテン語版はウルフが（STC 4807-4810）、英語版はデイが印刷することで落ち着いた（STC 4812）。特許とはそれほど重要なことだった。その特許をミールドマンは来英3年で、しかも非常に有利な内容で取得したのだ。ビジネスマンとしての卓越した才能である。このようにして彼は印刷業界の表舞台に躍り出たのだ。

c. 図版の使用

同時代の印刷業者に比べ、ミールドマンは挿絵の使用頻度・量が圧倒的に多い。書物を魅力的にする試みは印刷の第1世代から行われていた。木版画や挿絵は読者の鑑賞眼を満足させる装飾であり、内容を視覚的に伝えることの有効性はよく理解されていた。ウィリアム・キャクストンも活版印刷に木版画を用いている⁽⁴⁷⁾。16世紀になると印刷本に標題紙がつけられるようになった。特に聖書では、図版はふんだんに用いられた。ミールドマンの親方クロムも木版画や銅版画の図版を積極的に用いた。多いものでは1冊の中に100～200カットもある。例として、グラフトンとホイットチャーチがクロムに印刷を依頼したマシュー訳聖書（STC 2066）を挙げておく⁽⁴⁸⁾。



EEBO の画像。クラリベイト社より掲載許可取得済み。

図5 マシュー訳聖書 STC 2066. *1¹。

標題紙の全面銅版画はエアハルト・アルトドルファーによるとされており、その挿絵は1533年にリュベックで出版されたルター聖書から集めた⁽⁴⁹⁾。この種の木版画をデザインして作製するには、高度な技術や芸術性、そして高額な費用が必要だった。また木版画や挿絵は印刷業者間で広く貸し借りが行われており、色々な書物に再使用されていた⁽⁵⁰⁾。しかしそれには広い人脈と資金が必要であり、クロムにはそれが可能だったの

である。

表 4 クロムの印刷した主な木版画挿絵

出版年	説明
1536年	STC2832, 2833, 2834. ティンダル訳新約聖書 DMH 19, 20, 21. 多数のカット使用。3版とも福音書では同じ挿絵を使用。マタイ・マルコ・ルカ・ヨハネと使徒たちのカットは異なる。これ以前の聖書で用いられたカットも再使用されている。ハンス・ホルバインやアドリアン・ケンペ・デ・ボッホートのカットとされているものを含む。
1537年	STC2066. マシュー訳聖書 DMH 34. グラフトンとホイットチャーチのために印刷したもので標題紙とアダムとイヴの全面銅版画はルター聖書（リユーベック，1533年）に酷似している。91枚の挿絵が、色々な出典から集められている。
1538年	USTC 5567 フランス語新約聖書 リーヴェン・デ・ウィッテの木版画。
1538年	STC 2836 カヴァデイル訳新約聖書 DMH 40. 最も図版が多く（162カット）、また最も興味をそそり、大きな影響力のあった英訳聖書。前年にクロムが印刷した『イエス・キリストの生涯』で、リーヴェン・デ・ウィッテがデザインした挿絵の再使用。多数の章末飾りカットあり。
1538年	STC 2836.5 カヴァデイル訳新約聖書 DMH 42. STC 2836 とほぼ同じだが、デ・ウィッテの3版画が削除され、別の2版画が追加されている。
1538年	STC 2837 カヴァデイル訳新約聖書 DMH 41. 全ページ大の「パトモスの聖ヨハネ」の木版画あり。
1539年	STC 2842 カヴァデイル訳新約聖書 DMH 48. リーヴェン・デ・ウィッテの木版画多数あり。STC 2837 と似ている。
1540年	USTC 410397 アンドレアス・オシアンダーの4福音書 リーヴェン・デ・ウィッテの木版画。USTC 5567, 400676 で用いられている版画と同じ。
1541年	USTC 400676 ウィレム・デ・ブランテヘムのキリストの生涯について リーヴェン・デ・ウィッテの木版画。USTC 5567, 410397 で用いられている版画と同じ。
1542年	STC 2848 エラスムスの釈義付きのティンダル訳新約聖書 DMH 26. 福音書、使徒行伝、ヨハネの黙示録の内容を可視化した版画は、1537年にパリでポケット版で出版されたラテン語新約聖書の挿絵に酷似している。
1543年	USTC 440059 フランシスコ・エンジナスのスペイン語の新約聖 クロムとミールドマンが印刷したと思われるが、クロムはこの年に亡くなったという説もあり、奥付にはミールドマンの名が印字されている。ローマン字体できれいに印刷され、ルカ、ヨハネ、パウロ、ヤコブ、ペテロらの木版画が挿入されている。

表 4 はクロムが木版画を用いた主な印刷物の一覧である。クロムは同時代の印刷業者の中でも特に意欲的に図版を活用した。彼の工房にいたミールドマンはその影響を大きく受けた。1545年にミールドマンが単独で印刷したバイルの『ヨハネの黙示録釈義』（STC 1296.5）では、黙示録の内容を描いた19カットが24回にわたって挿入されている。標題紙にはヨハネが流刑にされたエーゲ海のパトモスで黙示録を執筆するカットが

ある。ドイツ人ハンス・ゼーバルト・ベーハムのデザインによるものだが、掲載の経緯は明らかではない。絵も彫刻もあまり上等とは言えない。

クロムとミールドマンの図版のクオリティの差は、腕のよい版画家を起用できたか、優れた図版を入手できたかの違いのようだ。クロムは既に大物であり、それが可能だった。一方ミールドマンはまだ人脈もなく、優れた図版を入手出来なかった。つまりミールドマンにとっては、図版の使用はまだ試行錯誤の段階だったと考える。このアントワープ時代の下積みが、後のミールドマンの図版へのこだわりにつながる。

英国の大物印刷業者もすでに図版を使用していた。1539年にグラフトンとホイットチャーチが出版したグレート・バイブルは有名な逸話つきの書物だ⁽⁵¹⁾。図版入りの聖書を印刷する技術とノウハウを、ふたりは既に熟知していたのである⁽⁵²⁾。大物印刷業者は、開始時期や頻度に多少の差はあるものの、みな1540年前後から図版を用いていた。彼らは図版を多用した大陸の書物をよく知っており、自らも図版入りの書物を印刷した。彼らはミールドマンよりもよほど先を行っていた。標題紙やコンパートメント、装飾イニシャル、印刷者意匠など、視覚的効果を意識した工夫が見られる。

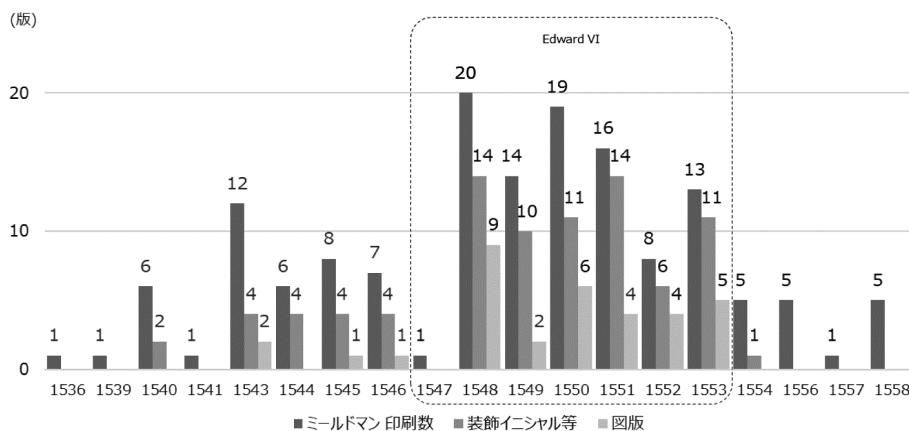
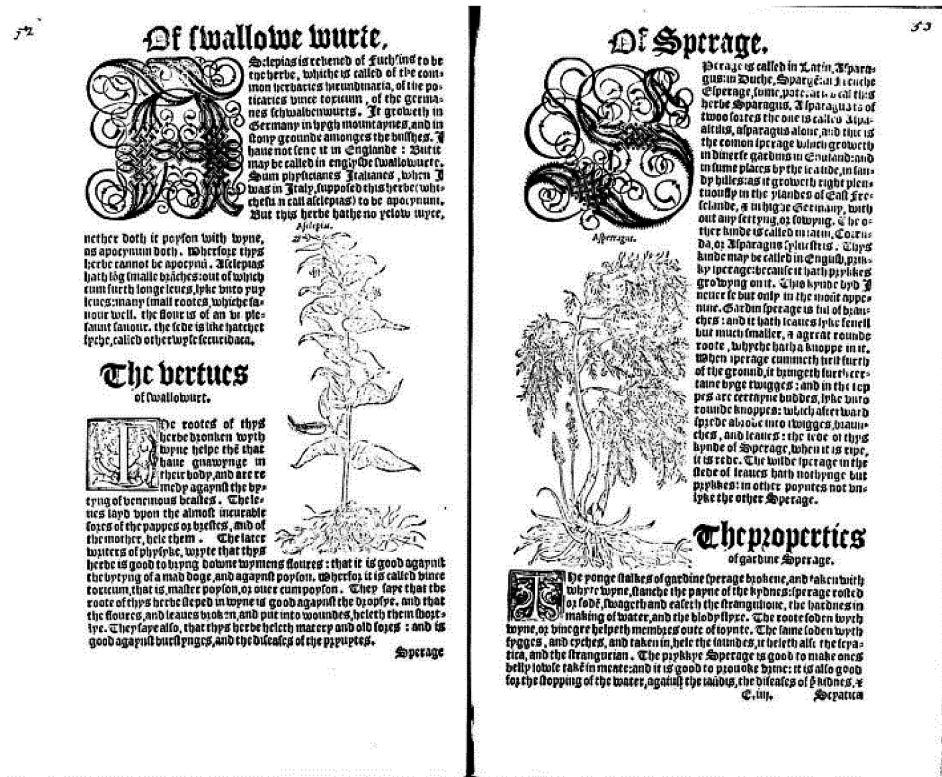


図6 ミールドマンの印刷数と図版・装飾イニシャル使用の推移

来英したミールドマンも、図版印刷に大きなエネルギーを注ぎ込むようになる。ミールドマンの快進撃が始まった。印刷した91版のうち66版で装飾イニシャルが使われており、30版で図版を使用している。アントワープでは4版しか図版を用いなかったにもかかわらず、ロンドンでは大著や中冊子に大きな図版が多い。この時代のミールドマンは明らかに意識的にコンパートメントや大きな図版を印刷物に盛り込み始めた。まだ一般的でなかった注を余白に記したり、正誤表をつけたりした。ミールドマンが時代の最先端の印刷業者であった証拠である。

中でも 1551 年に彼が印刷したターナーの『新本草書』は、著者や印刷者の図版印刷への意気込みを感じさせる例として注目に値する。



EEBO の画像。クラリベイト社より掲載許可取得済み。

図 7 『新本草書』 STC 24365. E3^v and E4^r.

ミールドマンより以前に、英国で植物の図版を用いた印刷業者はいない。彼はバーゼル出版のレオンハルト・フックスの『植物誌』の図版を英国に導入したのだ⁽⁵³⁾。ターナーの前著と同様、植物の名を 5 か国語で表記している。読者のために分かりやすさを追及したのだ。図版はそのサービスをさらに一歩進めた。彼はおそらく英国の読者に見せたかったのである。大陸の洗練された精巧な図版を。そして彼の技術力の高さを。宗教書以外の図鑑という視覚に訴える書で、彼はそれを実行したのだ。

ミールドマンはこの時代の印刷を牽引していた。国王御用達のグラフトンなどより、自由に印刷の可能性を模索・追及し、印刷の発展に大きく貢献したのである。彼は本の表現手段が文字だけではないと認識していた。図版量も多く、表現対象も宗教、時事、植物、楽譜と多岐にわたる。ミールドマンは英国への図版導入の最初の人物ではないが、図版に対して並々ならぬ思い入れがあった。彼はロンドンの書物の後進性を見て、図版

の効果と可能性を再認識したのではないだろうか。図版へのエネルギーの注ぎ方がアントワープ時代とは異なる。積極的な図版使用は明らかに意図的な決断であったと考える。

大物印刷業者は、図版が多くの読者獲得につながると気づいていた。特にミールドマンはカット挿入の有効性に強い関心を抱いていた。しかし多くのカットの挿入は簡単ではない。図版を用いるには金が要る。経済的余裕がなければ図版の印刷はできない。ミールドマンは図版の開発に多大な投資を行っていたと考える。先進的印刷業者として活躍し大物印刷業者になるには、潤沢な資金が不可欠だった。デイの印刷活動からも、それは明白だ⁽⁵⁴⁾。文中へのカットの挿入には高い技術が必要だ。多くの聖書の図版印刷を手掛けたクロムの下での修業が役に立った。ロンドンでの巧みな人脈活用に負うところもあったろう。ミールドマンが大量の図版を入手できた理由については、今後さらに研究の余地がある。推量だが来英の際、活字のみならず所蔵していた図版を持参した可能性は高い。また連れてきた職人や外国人教会に所属していた印刷業者から入手したのかもしれない。アントワープで出版業を継いだ義妹が、大陸からの図版供給に協力したのかもしれない。様々な理由があったろうが、ミールドマンには図版への強い関心を実行に移す条件が整っていた。大量の図版を挿入した書物を次々と出版出来たのである。図版を掲載した書物の数も多いが、1作品の中の図版の数も多い。当時の人々にはさぞ魅力的に映ったことだろう。図版の有効利用で、彼は書物に関心を持ち始めた広い層の人々と、その社会への接近を試みた。活字の工夫に加え、図版を読者とのコミュニケーションの道具と捉えたところに、ミールドマンの時代を読む才能があったのである。

d. 外国語の印刷

ミールドマンの卓越した技量は外国語の印刷に見ることができる。親方クロムはアントワープの同業者と共に、福音書をヨーロッパ中の言語で翻訳出版したと豪語した⁽⁵⁵⁾。冒頭で述べたとおり、16世紀の前半に翻訳が盛んになった。エドワード時代の出版物1156版のうち翻訳書は345版(29.8%)を占める。それに加えて、外国語の出版物が153版(13.2%)あった。両者を合わせると498版となり、全出版物の43.1%に相当する。外国語の出版物は必ずしもその由来が外国とは限らないが、翻訳の多さもあり、英国が海外との交流を重視していたのは明らかである。この時代に出版された法律書は154版(13.3%)、学術書が127版(11.0%)あり、外国語出版はこれらと比べて少なくはない。

表5 エドワード時代の外国語書物の言語別出版数

印刷言語	版数／印刷業者	印刷業者の人数
ラテン語	91 版	12 人
	トマス・パーセレット, ジョン・デイ, リチャード・グラフトン, ジョン・ハーフォード, ニコラス・ヒル, ウィリアム・ミドルトン, スティーヴン・ミールドマン, ジョン・オズウェン, ウィリアム・パウエル, リチャード・トッテル, ウィリアム・ラステル, レイナー・ウルフ	
多国語	31 版	12 人
	トマス・パーセレット, ウィリアム・コーブランド, リチャード・グラフトン, ジョン・ハーフォード, ニコラス・ヒル, ウィリアム・ミドルトン, スティーヴン・ミールドマン, ウィリアム・パウエル, リチャード・トッテル, レイナー・ウルフ, ジョン・ワイヤー, トマス・ゴルティエ	
フランス語	13 版	6 人
	トマス・パーセレット, トマス・ゴルティエ, ニコラス・ヒル, スティーヴン・ミールドマン, ウィリアム・パウエル, リチャード・トッテル	
オランダ語	8 版	3 人
	ニコラス・ヒル, ニコラス・ファン・デン・ベルヘ, スティーヴン・ミールドマン	
法律用フランス語	6 版	1 人
	ウィリアム・パウエル	
ウェールズ語	2 版	2 人
	リチャード・グラフトン, ニコラス・ヒル	
イタリア語	1 版	1 人
	スティーヴン・ミールドマン	
スコットランド英語	1 版	1 人
	ウィリアム・コーブランド	

表5が示すように出版数が一番多い外国語は知識人の共通語のラテン語で、12人が印刷している。そのうち36版(約39.6%)をミールドマン、グラフトン、デイの3人が担当した。2番目に多いのは複数の言語の書物で、言語関係が15版、宗教書が4版、ターナーの植物誌2版がこの範疇に入る。言語関係が多いのは注目に値する。これらは辞典、文法書や語学習得のための教材だ。翻訳に頼らず自ら外国語を直接読み、あるいは聞いて話す必要が生じたのだ。外国文化への関心とともに、実生活においても外国語を使用する機会が生まれた。フランス語は、フランス語宗教書の国王御用達だったトマス・ゴルティエが6版、ミールドマンとヒルが各1版、3人で半分以上を印刷している。オランダ語は、ミールドマンとヒルでほとんどすべてを印刷した。うち1版はニコラス・ファン・デン・ベルヘとミールドマンの共同印刷である。次に印刷数が多かった法律用フランス語は、ウィリアム・パウエルが1550年まで印刷した。1552年にトッテルが法

律書印刷の特許を獲得すると、多くの法律報告書をラテン語と共に2か国語で印刷できるようになる。イタリア語の印刷はミールドマンの1版のみだ。外国語を積極的に印刷した業者は約10名で、みな大物印刷業者だった。時代の印刷・出版業者全体約80名の中では、ごく限られた業者だけが外国語を印刷したことになる。

一方で上記以外の言語は印刷数が極めて少ない。時代全体から見ればイタリア語の出版は、まだまだ例外的なものだった。これがエドワード時代の現実だ。そのような中で、ミールドマンは外国語印刷が2番目に多い業者だった。

表6 主な印刷業者の外国語印刷数

(版)

印刷業者	外国語印刷数	印刷総数
リチャード・グラフトン	31	208
スティーブン・ミールドマン	18	87
ニコラス・ヒル	13	86
レイナー・ウルフ	12	36
ジョン・デイ	1	123
エドワード・ホイットチャーチ	0	75

ミールドマンはアントワープではオランダ語と英語の外にはスペイン語しか印刷していない。ロンドンで彼はラテン語を9版印刷した。版数こそグラフトンの26版には及ばないが、言語の種類はグラフトンの4か国語に対して、6か国語と多かった。彼は多くの言語印刷の技術を身につけていた。外国人教会の最高責任者ジョン・ラスコーは英国で8版の著作を出版したが、すべてラテン語で執筆している。そのうち5版をミールドマンがラテン語で⁽⁵⁶⁾、また彼の母語のオランダ語(STC 15260, USTC 442336)で印刷した。彼には外国語印刷に抵抗がなかった。

エリザベス時代に英国は積極的にイタリア文化の受容を行ない、異国の文化を自国に取り込む姿勢を示す。既にエドワードの社会には外国語のニーズが生まれていた。マーケットに敏感に反応する印刷業者は、それに応えるべく外国語の出版に意欲を燃やし始めていたのである。外国語印刷は英国の印刷業界にとっては最先端の領域であり、その進化は次の時代のさらなる発展への大きな布石となった。ミールドマンは外国語印刷においても時代をリードする存在だったのだ。

e. 印刷数の多さとジャンルの豊富さ

ミールドマンは印刷数でも卓越した手腕を発揮し、時代で第3位の印刷数を誇った。熱烈なプロテスタントのミールドマンにとって、ロンドンは商売と信念と技術を最大限に発揮できる場であった。既に述べたように、英国印刷の初期はもっぱら宗教書と法律

書の印刷が主流だった。エドワード時代ではこれらの出版は時代の総出版 1156 版のうち 836 版（72.3%）を占め、この時代の出版の大きな特徴を表している。

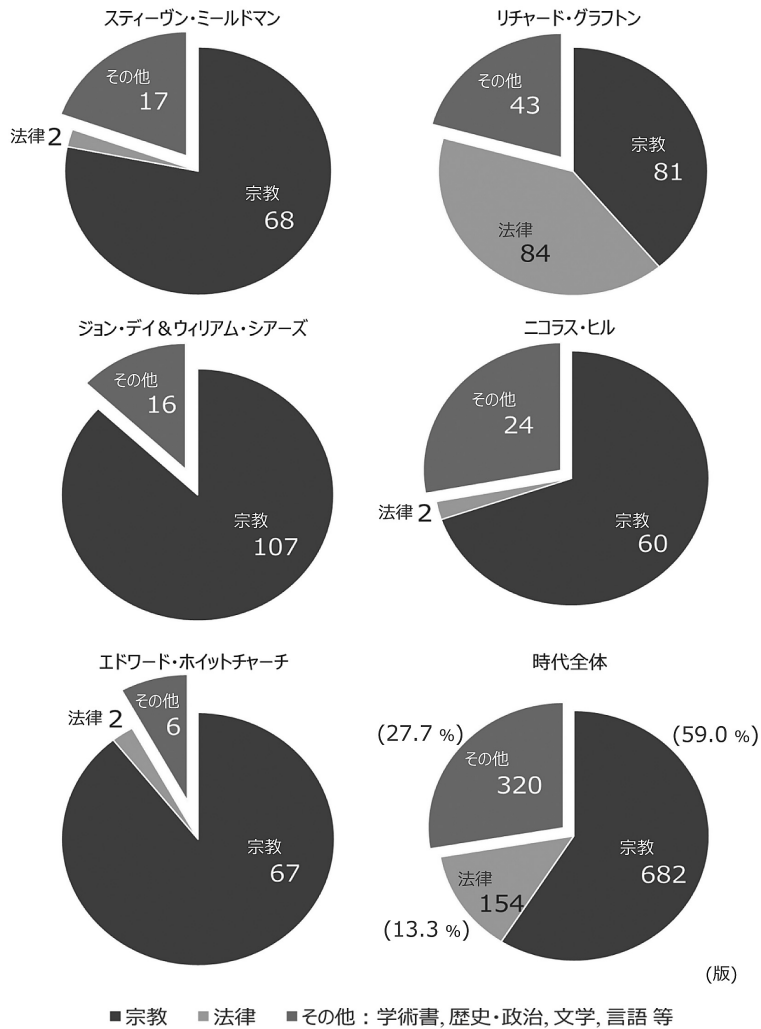


図8 エドワード六世時代の大家印刷業者のジャンル別 印刷数

大家印刷業者の出版傾向を見ると、一様に宗教書の出版割合が高い。このジャンルは図8に示した5人の業者だけで383版あり、時代全体の出版数682版の56.2%を占める。彼らが宗教書を集中して印刷していたことがわかる。宗教書出版は国策であり、法律書と並んで儲けの大きいビジネスだった。ミールドマンにとっても、プロテスタント本の印刷が最優先だった。プロテスタンティズム振興に使命感を感じていた彼は大家印刷業者の傾向に近い。彼は政府とのつながりを強めていく。約6年半の英国滞在でミールドマンは大家印刷業者の仲間入りを果たしたのだ。

一方でこの時代のもう一つの特徴が、宗教・法律以外のジャンルも320版（27.7%）と大きな割合を占めていることである。図8の大物印刷業者の「その他」の印刷数の合計は、106版であり、時代全体の「その他」の印刷数320版の1/3にも満たない。「その他」すなわち世俗的な書物は、大物業者以外の中小業者が担う割合が多かった。印刷全体の発展は大物印刷業者が牽引していたが、次の時代のトレンドの芽は中小業者の手によって育まれていたと考える。

中小業者による世俗的な書物の出版が多いことは、注目に値する。彼らは大物業者の宗教、法律書の独占により、他のジャンルに向かわざるを得なかった。しかしニーズがなければ出版は行われぬ。書物が人々の身近になり、本に幅広い内容を求める傾向が高まっていったのである⁽⁵⁷⁾。世俗的なジャンルの印刷数の増大を支えたのは、中小印刷業者だった。人々の日常生活により直接的に関わるジャンルや、ヒューマニズムに裏打ちされた知的な書物へのニーズが社会で膨らんだのだ。ここに時代のありようが見える。中小印刷業者が一般社会のニーズに応えたことが、出版の発展に拍車をかけた。大物印刷業者の手が回らなかつた領域を、中小印刷業者が担ったのだ。大物業者だけが次の時代を作ったのではなかつた。エリザベス時代では、これらのジャンルが圧倒的に伸びていく。

3. テューダー朝におけるエドワード時代の位置づけ

エドワード時代はプロテスタンティズムを背景に印刷・出版が発展した。プロテスタンティズムは大陸の宗教改革の奔流と一体となり、宗教だけでなく国の意識を大きく前に推し進めた。短かったが、英国のプロテスタンティズムは世界における宗教改革の先頭に立った。宗教書には図版がふんだんに用いられ、多くの翻訳書や外国語の本も出版された。宗教、法律以外の印刷も全体の1/4を占めるまでに増加した。出版数が多くなったことで、中流階級にも書物が届くようになった。書物が広く国民に浸透したのだ。エドワード時代の最大の功績は、多くの人々に本を読み、知識を得、考える習慣を植えつけたことであつた。これがエリザベス時代の文化興隆への種まきとなつた。

カトリックのメアリー時代になって、英国は印刷・出版素材としてのプロテスタンティズムを失う。しかし人々の書物への意識と関心は、既に元へは戻らなかつた。本は文化交流の重要な媒体である。エドワード時代に書物は上流階級だけでなく、中流階級にとつても「重要な媒体」となつた。大陸からカトリック信者が戻るが、彼らは前の時代のプロテスタント信者ほど印刷・出版の動機や原動力にはならなかつた。

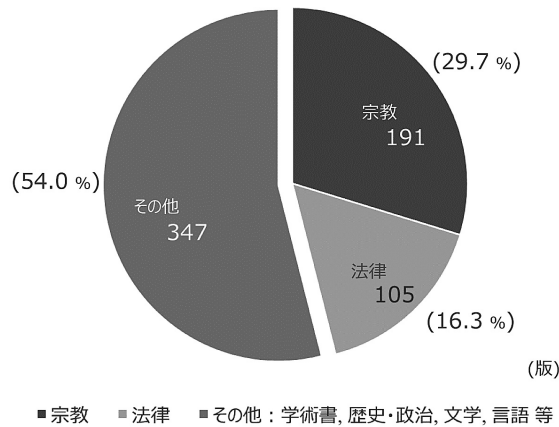


図9 メアリー一世時代のジャンル別 印刷数 (1553-1558)

メアリー時代の宗教書の出版は、総出版数 643 版の 1/3 にも満たない。宗教書の占める割合が減り、その他の世俗的な書物の占める割合が増加した。これはメアリーとその後のエリザベス時代を考えるうえで重要なポイントだ。印刷・出版の動機や原動力が宗教から離れ、世俗的な素材に流れ始めたのである。

エドワードに続くメアリーとエリザベスの時代の出版の動機と、書物に対する人々の意識の変化を探ることにより、英国ルネサンスを支えた出版というインフラのありようを明らかにしていくことが出来る。周知の通り、エリザベス時代に英国ルネサンスは花開き、出版はそれを支える重要なインフラだった。エドワード時代は、このインフラの整備に大きく貢献したのである。

エドワード時代には極端なカトリック排斥の傾向があった。プロテスタント一色の時代だったのだ。極端に偏った時代であったからこそ、多くのプロテスタントの印刷業者が活躍できたのだ。エドワードの時代の印刷・出版の発展は、世俗的な書物の印刷をも促し、後の時代の大きな布石となっている。しかし、エドワード時代における印刷・出版の発展の大きな原動力は間違いなく宗教であった。英国の印刷・出版は、エリザベス時代に突如として発展したのではなく、エリザベス時代以前に宗教により発展したのだ。

メアリー時代になって、時代はプロテスタントへの偏りをなくす。印刷の動機は宗教から離れていくものの、エドワード時代に培われた出版の発展が、後のエリザベス時代の英国ルネサンスのインフラとなる。これがエドワード時代に着目する意義である。印刷・出版の大きな飛躍がチューダー朝におけるエドワード時代の位置づけだ。スティーヴン・ミールドマンは、そのような時代を体現した印刷業者であった。

《注》

- (1) 本論は STC, ESTC, USTC, EEBO などに基づいて調査・考察を行った。本研究分野の基本的資料であるこれらの資料と同様、現存する書物のみを対象とする。STC: *A Short-Title Catalogue of Books Printed in England, Scotland, and Ireland and of English Books Printed Abroad 1475-1640*, comp. by A. W. Pollard and G. R. Redgrave, 2nd edn, rev. and enlarged by W. A. Jackson and F. S. Ferguson, completed by Katherine F. Panzer, 3 vols (London: Bibliographical Society, 1986); ESTC: *English Short Title Catalogue*. The British Library. <<http://estc.bl.uk>> [accessed 1 September 2022]; USTC: *Universal Short Title Catalogue*, comp. by Andrew Pettegree and others, <<https://www.ustc.ac.uk>> [accessed 1 September 2022]; EEBO: *Early English Books Online*. <<https://www.proquest.com>> [accessed 1 September 2022]. 出版年はこれらの資料および一般に認められている推定年を照合の上採用した。時代の境については判別できる書物は各時代に、不明なものは便宜上、1547年と1553年はエドワード時代、1558年はメアリー時代として集計している。
- (2) ミールドマンの名前は Steven Mierdman または Stephen Mierdman, Steven Mierdmans, Stephen Myerdmann と綴る。
- (3) *は共同作業による印刷を含む。本グラフは英国出版のみとする。
- (4) Andrea Vesalius, *De humani corporis fabrica* (Basel: Oporinus, 1543).
- (5) Jost Amman, *Panoplia omnium liberalium mechanicarum aut sedentariarum artium genera continens* (Frankfurt a.M.: Feyerabend, 1568).
- (6) Pietro Bembo, *Prose di m. Pietro Bembo nelle quali si ragiona della volgar lingua scritte al cardinale de Medici che poi è stato creato a sommo pontefice et detto papa Clemente settimo divise in tre libri* (Venice: Tacuino, 1525).
- (7) *Das Neue Testament* (Wittenberg: Lotter, 1522). *Biblia, Altes und Newen Testament ausz Ebreischer und Griechischer Sprach, gründtlich verteutschet* (Frankfurt a.M.: Egenoff, 1534).
- (8) うち4版は英訳にラテン語が併記されている。STC 2821, 10440, 11440.2, 10447.
- (9) 大物でもグラフトン、デイ、シアーズ、ホイットチャーチ、N. ヒル、パウエル、ウィリアム・コーブランド、ウルフ、ウィリアム・ミドルトンは翻訳をしていない。彼らは印刷・出版に専念した。
- (10) Andrew Pettegree, *The Book in the Renaissance* (New Haven and London: Yale University Press, 2010), p. 161.
- (11) *Den val der Roomscher Kercken, met alle haer afgoderye, waerby een yeghelick mach kennen en mercken*, 2版 1553年 (STC 21307.3) と 1570年 (STC 21307.5). *Den Bibel in duyts, dat is, alle boecken des Ouden ende Nieuwen Testaments* は ヤン・ガイリアートとの共訳である。1556年 (USTC 408030).
- (12) クリストフェル・ファン・ルーレモンドやジョウァンネス・ヒレンなど。Frederick C. Avis, 'Book Smuggling into England during the Sixteenth Century', *Gutenberg Jahrbuch* (1972), 180-87 (p. 181). Lotte Hellinga, *William Caxton and Early Printing in England* (London: British Library, c. 2010), p. 173.
- (13) 1536年以前のミールドマンの印刷は発見されていない。1536年の出版 (NK 439) をミールドマンの印刷とする根拠は意見の一致を見ていない。NK: Wouter Nijhoff and Maria Elizabeth Kronenberg, *Nederlandsche Bibliographie van 1500 tot 1540*, 3 vols (The Hague, Nijhoff, 1965-71). 本グラフは英国以外の出版も含む。

- (14) Colin Clair, 'On the Printing of Certain Reformation Books', *The Library*, 5th S., 18 (1963), 275-87 (p. 277). クロムは 1545 年 1 月にまだ生存していたという説もある。H.F. Wijnman, 'The mysterious sixteenth-century printer Nicolaes van Oldenborch: Antwerp or Emden?' in *Studia Bibliographica in Honorem Herman de la Fontaine Venoei*, ed. by S. van der Woude (Amsterdam: Hertzberger, 1966 [1968]), pp. 448-78 (p. 475). またミールドマンが後を引き継いだのは 1543 年から 1546 年の間とする説もあり、まだ最終的な合意を見ていない。Paul Valkema Blouw, 'The Van Oldenborch and Vanden Merberghe pseudonyms or Why Frans Fraet had to die', *Quaerendo*, 22 (1992), 165-90 (p. 171).
- (15) Andrew Pettegree, *Foreign Protestant Communities in Sixteenth-Century London* (Oxford: Clarendon, 1986), p. 91. Clair, pp. 276-78.
- (16) *Novum Testamentum Latinogermanum. Dat nieuwe testament in Latijn ende Duyts* (1539). USTC 400640.
- (17) STC 4045, 4070.5, 4079.5. 本論では連続 3 版以上の STC 番号などは注に記載する。
- (18) STC 2848, 10488, USTC 408477.
- (19) STC 2836, 2836.5, 2837, 2842, 4045, 4070.5, 4079.5, 5889, 10488, 10808. STC 2066 はティンダルとの共訳。
- (20) STC 2832, 2833, 2834, 2848.
- (21) Clair, p. 277.
- (22) Blouw, p. 171.
- (23) Willem Heijting, 'Early Reformation Literature from the Printing Shop of Mattheus Crom and Steven Mierdmans', *Nederlandsch Archief voor Kerkgeschiedenis*, 74 (1994), 143-61 (p. 148).
- (24) Blouw, *ibid.*
- (25) Wijnman, p. 462.
- (26) STC 16964, 16982, 21826.6.
- (27) ミールドマンは来英の際、印刷業者のヘンリーとウィリアム・コーク兄弟、ゴッドフリー・ハツー、レーナード・ファンデア・アエを伴った。Returns of Aliens Dwelling in the City and Suburbs of London from the Reign of Henry VIII to That of James I, ed. by R. E. G. and E. F. Kirk, 4 vols (Aberdeen: Aberdeen University Press, 1900-08), 1 (1900), 161. ランバート・ブレイトとコーネリアス・クローゼンもミールドマンの助手として働いていた記録が残っている。Ibid., 203, 209.
- (28) 1548 年にミールドマンの印刷とされているオシアンダーの世界の終わりについての著作 (STC 18877) とバイルのローマカトリックの勧めへの反論 (STC 1274a) は、いずれもアントワープの出版である。ミールドマンの義妹ヘルトルートが 1546 年に書籍販売の許可を獲得してクロムの出版業を継いでいるので、両書物のアントワープ出版は必ずしもミールドマンの渡英時期を特定するものではない。ミールドマンがジャッグのために 1548 年に印刷したティンダル版の新約聖書 (STC 2852) も奥付には出版地がロンドンとあるが、アントワープで印刷されたとされている。
- (29) いずれの書物もミールドマンの名前は印字されていない。STC の推測とクレアの主張にもとづく。Clair, p. 277.
- (30) STC 470, 470.1, 1297, 2852, 11383, 17795, 17796.
- (31) STC 6083, 11884, 24359, 24784.
- (32) STC 822, 16964, 16982, 20843, 20849, 21826.6.
- (33) その殉教の様は、すべてを信用するわけにはいかぬが、フォックスによって『殉教列伝』(1563) に描かれている。STC 11222.

- (34) Andrew Pettegree, *Marian Protestantism. Six Studies* (Aldershot: Scolar, 1996), p. 3. リチャード・トッテルのような例外もある。
- (35) STC は 1554 年に 16571a と 17863.5 を掲載している。名前は記されていないが、E. ファン・デル・エルヴェと組んで印刷を続けたとしている。STC 16571a の標題紙には ‘Ghedruckt buyten Londen [i.e. Emden] : Doer Collinus Volckwinner [i.e. N. Hill and E. van der Erve], Anno, 1554’ とある。STC 17863.5 の標題紙にも ‘Ghedruckt buyten Londen: By Collinus Volckwinner, anno 1554’ とある。
- (36) 図 8 の時代全体の印刷数グラフ参照。
- (37) 奥付では ‘Imprinted at Bafyll the yeare of owre lorde. M. D. xliij. the xiiij. of September’ と印字されているが、クレアとウインマンは活字からクロムまたはミールドマンの印刷としており、STC もミールドマンの印刷としている。Clair, p. 282. Wijnman, p. 461.
- (38) John Guy, *Tudor England* (Oxford: Oxford University Press, 1990), p. 203.
- (39) 奥付では ‘Imprinted at London: By John Day and Wyllyam Seres, dwellynge in Sepulchres Parish at the signe of the Resurrection a litle about Holbourne Conduite’ となっているが、今ではミールドマンの印刷とされている。紋章付きの標題紙のコンパートメントは 1548 年からデイとシアーズが使いだしたものだ。ここでもデイとシアーズとの人脈が生きており、彼らがミールドマンをサポートしていたことがわかる。
- (40) STC 24354, 24359, 24365, 24368.
- (41) STC 1273, 1273.5, 1275, 1290, 1294, 1297, 1298, 15445, 22992.
- (42) ミールドマンは 1548 年に 13 箇条を論駁するクロウリーの著作を印刷したと考えられる (STC 6083)。アン・アスキューの処刑を描いた特注の木版画を挿入しているが、この図版の大きな反響が、後述するように、彼に図版の重要性を再認識させたのかもしれない。
- (43) *Calendar of the Patent Rolls Preserved in the Public Record Office. Edward VI*, ed. by J. G. Black and others, 6 vols (London: His Majesty’s Stationery Office, 1924-29), III (1925), p. 314. *Returns*, I, 207, 209.
- (44) 1553 年だけで 9 版の法律関係の報告書を印刷した。
- (45) E. Gordon Duff, *A Century of the English Book Trade: Short Notices of All Printers, Stationers, Booksellers, and Others Connected with it from the Issue of the First Dated Book in 1457 to the Incorporation of the Company of Stationers in 1557* (London: Bibliographical Society, 1948), p. 171.
- (46) Bryan P. Davis, ‘John Day’, in *Dictionary of Literary Biography: The British Literary Book Trade, 1475-1700*, ed. by James K. Bracken and Joel Silver (Detroit: Gale, 1996), CLXX, p. 81.
- (47) キャクストンは現存している 100 版の印刷物のうち、19 版で 381 の挿絵を用いている。Edward Hodnett, *English Woodcuts, 1480-1535* (Oxford: University Press, 1973), p. 1.
- (48) T. H. Darlow and H. F. Moule, *Historical Catalogue of Printed Editions of The English Bible 1525-1961*, ed. by A. S. Herbert (London: British and Foreign Bible Society, 1968), No. 34. 以降 DMH と記す。
- (49) Ruth Samson Luborsky and Elizabeth Morley Ingram, *A Guide to English Illustrated Books 1536-1603*, Medieval and Renaissance Texts and Studies, 2 vols (Tempe, Arizona: Arizona State University Press, 1998), I, pp. 92-96.
- (50) マシュー訳聖書の図版はクロム自身 STC 2836, 2842 で再使用しており、ミールドマンも STC 2077, 2867 で用いている。
- (51) *The Byble in Englyshe that is to saye the Content of All the Holy Scrypture, Both of ye*

- Olde and Newe Testament, Truly Translated after the Veryte of the Hebrue and Greke Textes, by ye Dylygent Studye of Dyuerse Excellent Learned Men, Expert in the Forsayde Tonges* (Paris: Regnault; London: Grafton and Whitchurch, 1539). STC 2068.
- (52) ふたりはこれらの木版画を再版で幾度も使用した。エドワード時代では、ヒルやミールドマンも多くのカットをこの版から使用した。
- (53) Leonard Fuchs, *De historia stirpium* (Basel: Isengrin, 1542). USTC 602520.
- (54) サフォーク州のリトル・ブラッドレー教会にあるデイの銘板に「デイはその富を印刷につき込んだ」と刻まれている。C. L. Oastler, *John Day, the Elizabethan Printer* (Oxford: Oxford Bibliographical Society, 1975), p. 4.
- (55) Wijnman, p. 462.
- (56) STC 4042.4, 15259, 15263.
- (57) 当然大物印刷業者も世俗的な書物に対する時代のニーズを感じていたに違いない。ミールドマンも『ユートピア』のような時代の人文主義精神を表す書物や、ヨハン・カリオンの世界史 (STC 4626), セバスチャン・ミュンスターの『コスモグラフィア』 (STC 18244) など、時代が関心を示す書物を 17 版も印刷した。

(原稿受付 2022 年 10 月 25 日)

ユスティヌス・ケルナーの詩作品における 自然観について

田 野 武 夫

On the View of Nature in the Poetic Works of Justinus Kerner

Takeo TANO

要 旨

ドイツ・シュヴァーベンの医師であり詩人のユスティヌス・ケルナー (Justinus Kerner, 1786-1862) は、医学生時代に同郷の詩人ヘルダーリン (Friedrich Hölderlin, 1770-1843) の精神疾患の治療に携わった。両者の詩作品を比較すると、特に自然観において共通性が認められる。詩的自我としての「放浪者」、光のイメージの使用、人為性もたらす苦悩と自然の対称性、二項対立の歴史的循環構造、来るべき黄金時代をモチーフとした黙示録の世界像、共和制への志向、郷土シュヴァーベンの詩的形象化などがそれである。ヘルダーリンは古典主義的ギリシア志向が強く、ケルナーはロマン主義的ドイツ中世への憧憬が強いという相違点も存在する。しかしながら両者には伝記的史実を超えた本質的な詩的類似性があり、それはドイツ語圏の精神文化全般を特徴づけるものといえる。

キーワード：ドイツ・ロマン主義、自然思想、ユスティヌス・ケルナー、フリードリヒ・ヘルダーリン

1. 序

本論は、ドイツ・シュヴァーベンの医師であり詩人のユスティヌス・ケルナー (Justinus Kerner, 1786-1862) の詩作品における自然観について分析を行う。ケルナーについてはドイツ本国含め、その研究は極めて少ない⁽¹⁾。日本においては作品自体を扱った研究はほとんど皆無と言ってよい状況である⁽²⁾。本稿では、シュヴァーベンの詩人という観点からケルナーについて、同郷の詩人ヘルダーリン (Friedrich Hölderlin, 1770-1843) の自然思想と比較しつつ、その詩作品の特徴について輪郭を浮かび上がらせることを目的とする。特にウーラント (Johann Ludwig Uhland, 1787-1862) やヘルダーリンと交友のあったシュヴァープ (Gustav Schwab, 1792-1850) が共同で出版し

た『詩的年鑑』Poetischer Almanach (1812)⁽³⁾と『ドイツ詩人の森』Deutscher Dichterwald (1813)⁽⁴⁾の詩を中心に、これらの詩の根底にある自然観の考察を主に行う。

ケルナーは医学生として、精神を病んだ詩人ヘルダーリンを訪ねている。その出会いが小説『影絵芝居師ルクスによって書かれた旅の影』Reiseschatten verfasst von dem Schattenspieler Luchs (1811)における詩人「ホルダー」Holder という登場人物に反映されている。この伝記的つながりが、日本の独文学研究ではまだ十分には知られていないケルナーに関する本研究の契機となっている⁽⁵⁾。またヘルダーリンの文学的系譜については、同郷のシュヴァーベン文学という観点では、シラー (Friedrich Schiller, 1759-1805) との関係にほぼ限定されている⁽⁶⁾。この現状に新たな視点をもたらすことにも本論の目的である。

2. ケルナーとヘルダーリンの関係

ケルナーとヘルダーリンの伝記的關係は、グリュッサーが詳細に論じている⁽⁷⁾。彼によるとケルナーのヘルダーリンとの関係には三つの段階がある。ケルナーは、1806年9月15日(もしくは16日)、ヘルダーリンがチュービンゲンの大学病院に入院した折に初めて会った。主治医のアウテンリート (Johann Heinrich Ferdinand von Autenrieth, 1772-1835) は、当時20歳の医学生ケルナーに、ヘルダーリンの精神分裂症の治療と監督に協力するよう依頼した。アウテンリートは、ケルナーの文学への興味や詩作品を熟知しており、適任と判断したと思われる。アウテンリートの診療所から退院したヘルダーリンは、チュービンゲンの家具職人エルンスト・ツィンマーとその家族のもとで介護を受けた。ケルナーは、そこでもヘルダーリンを度々訪れている。

ケルナーはヘルダーリンの行動、思考、言語、文学作品における精神病的变化、特に彼の言語における分裂病的变化を経験し、『旅の影』において、狂った詩人「ホルダー」の文学的描写を行うに至った。しかしこのヘルダーリンの描写は、友人や作家のアロイス・シュライバー (Aloys Wilhelm Schreiber, 1761-1841) らの激しい批判を受ける。これがヘルダーリンとケルナーの関係の第二段階といえる⁽⁸⁾。

グリュッサーは、ケルナーの『旅の影』におけるヘルダーリンの描写に、必ずしも悪意を読み取っていない。まずティーク、ノヴァーリス、E. T. A. ホフマンなど当時のロマン派の作家・詩人たちの間では、「狂気」は高い関心を得ていた⁽⁹⁾。また『旅の影』における狂人ホルダーの描写は、自己を防御するという意味での「イロニー」の側面もあるとグリュッサーは見ている。ケルナーは自分の家族に精神疾患の者がいること、また自らも鬱の傾向があることから、ヘルダーリンの病状に自らの運命を重ね合わせてい

た。精神病患者ヘルダーリンの描写を行うことは当時においても医療倫理に反したと考えられるものの、これによって同じ運命を辿ることへの恐怖を克服することができたとグリュッサーは考えている。

ケルナーは、その後自らへの批判が正当なものであることを認識するようになった。1820年から1822年にかけては、ヘルダーリンの詩の収集に尽力し、家族や出版社のF・G・コッタとヘルダーリンの詩集の出版について交渉している。この作業が終わるとケルナーは一步退き、友人のウーランドとシュヴァーブに編集を依頼し、1826年によりやく出版された。こうしたケルナーの努力をグリュッサーは、『旅の影』における「ホルダー」の記述が批判を招いたことへの一種の「償い」もしくは、ケルナーのヘルダーリンの詩に対する深い理解の表れと結論づけている⁽¹⁰⁾。

これらの経緯がケルナーの作品にどれほどの影響を与えたのか、直接的に知ることはできない。しかしながら両者の作品に何らかの同質性があることは想定しうる。その点について、作品に即しながら検討する。

3. 詩的自我と放浪者

ヘルダーリンにおいて「放浪」は、詩人の存在形態を示す一つの柱となっている。小説『ヒュペリオン』最終稿発表時のフランクフルト期の詩『放浪者』Wanderer 第一稿及び1800年頃に成立した第二稿、また1801年の詩『さすらい』Die Wanderung等では、根源領域としてのギリシアもしくはコーカサスへの憧憬が、詩人自らが身を置くドイツとの対比によって描かれる⁽¹¹⁾。ヘルダーリンとケルナーを結ぶ共通性の一つとして、この「放浪者」としての詩人の自己規定が挙げられる。作品における「私」ichが、自然形象の内部において孤独な存在として「放浪者」der Wandererの刻印を強く帯びている点を特徴とする。

ケルナーの詩『巡礼者』Der Pilgerでは、「荒野を歩む」「哀れな放浪者」ein armer Wandersmannは、耳を傾けても泉の流れる音が聞こえず、森も家も見えない影の世界に生きる存在者として描かれている⁽¹²⁾。その巡礼者が歩みを止め、乾いた苔の上に身を沈めたところ、いきなり山の高台に城の幻影が浮かび上がる。その時、「歓喜せよ、城があなたを親切にもてなす」と言う声が聞こえ、巡礼者は自ら奮い立たせ、山に登る。しかし城の幻影は消え去り、一瞬にして消え去る「雲」が立っているのを見る。巡礼者はこの存在の希薄さを自分自身にも当てはめる。ここでは聖なるものの幻視と自己を含めた負の現在という二項対立の世界が詩の背景となっている。

『孤独の者』Der Einsameでは、陰鬱な夕刻の時間に孤独者が森の道を歩き、その視界に映る柔和で豊かな自然形象の世界が描かれる⁽¹³⁾。孤独者を「幸せにできるもの」

の要素として「天上の神聖な青」, 「草原の花々」, 「曇天の森の夜の/孤独な小夜鳴鳥の歌」が挙げられ, さらにそれは「雲の静かな歩み」, 「生き生きとした水の流れ」, 「緑の種子の波打つ海」, 「軽やかな鳥の飛翔」とも表現される。しかしそこに安らうのは「汝」duであり, 「私」はそれを「明るい夢」として見るという構図となっている。ここにも明と暗を基調とした対称性を見ることができる。

自我の孤独はこのように, 自然現象を背景として描かれる。しばしば自然形象の明の側面は, 太陽光線によって表現される。『春の嘆き』Frühlingsklageでは, 「歌い手たち」が太陽光線の中で明るい歌を歌おうと羽ばたく。この鳥を思わせる「歌い手たち」は緑のアーチの中で喜びに満ちて憩い, 星や月, 太陽の明るい夢を見る。これとは対照的に「私」は「歌い手たち」を憧憬の眼差しで見上げるものの不安に駆られ, 痛みが自分の歌を生み出すという悲劇的な状況の中で歌は死滅する。「私」は狭い独房に貧しく痛みながら座り, あらゆる光が自分に痛みをもたらす⁽¹⁴⁾。

ヘルダーリンと同様にケルナーも, このように太陽や光と暗闇の対称性の元に作品を展開する。ケルナーの『古き故郷』Alte Heimat⁽¹⁵⁾では「暗い谷」に夢見ながら横たわる「私」が故郷の「光」Stral (sic!)を再び見出す。しかし「黄金と薔薇の明るさ」に満ちていた故郷の幻影はすぐに消え去り, 憧れに満ちながら荒涼の地へと彷徨っていく。この孤独な詩人としての「私」は文字通り『放浪者』Wandererというタイトルの詩⁽¹⁶⁾にも明確に示されており, 視界に広がる街は全くよそよそしく, 詩人は遠くの山に故郷の幻影を見る。この幻影は, 「永遠の朝焼け」いう太陽光線のイメージとして象徴的に表現されている。このように根源的世界としての故郷は, 太陽光線のイメージとして象徴的に示される。

『アマーリエに寄せる』An Amalieでは, やはり光線とその消滅, そして「放浪者」と自分というケルナー特有の構図において詩が展開している。詩人は雲の間から差し月の光に囲まれながらアマーリエの幻影を見るが, その幻影はすぐに消滅する。そこに残り残された詩人は, 自らを光なく夜に歩む「放浪者」Wandrerと表現する⁽¹⁷⁾。

『詩的年鑑』の『放浪, 猟, 戦争, 放浪の歌』Wanderung, Jagd, Krieg, Wanderliedでは, 故郷を離れた若者の姿が描かれている⁽¹⁷⁾。故郷から飛んできた鳥が詩人と故郷を結びつける形象として描かれている。この詩の特徴は, ヘルダーリンの自然描写の特徴的要素である四大元素が詩全般を規定する根本要素として描かれている点にある。そこには太陽, 海, 空気, 野や土地といった四大元素の間を飛翔する鳥が, 詩人と故郷を結びつけ, 一種ギリシアの様相を帯びた自然世界が展開されている。ヘルダーリンの多くの作品では四大元素がライトモチーフの様に散りばめられているが, ケルナーの作品では, 自然形象はこのうち二つから三つが交互に用いられている。そこにはギリシア志向の強いヘルダーリンとドイツ中世への志向が強いケルナーとの相違, すなわち古典

主義傾向とロマン主義的傾向の差があると認められるものの、ケルナーのこの作品では、四大元素を基調とした自然形象の多様性に富んだものとなっている。

4. 詩的構図としての二項対立

ケルナーの詩は、上で論じたように光を基調とした自然形象と、自らを取り巻く暗を基調とした自然形象という二つの対立軸を構図として展開する。この二つの領域、特に昼と夜、明と暗の反転はヘルダーリンの『ヒュペーリオンの運命の歌』Hyperions Schicksallied 等に見られる基本的特性でもある。詩の前半部において、柔和な自然世界が展開し、またそれはしばしば光のイメージにおいて展開する。

あなたたちは天上の光をあびて
やわらかなしとねの上をあゆむ、しあわせな精霊たちよ、
かがやくそよ風は
かるくあなたたちに触れる、
たおやめの指がきよらかな弦をかなでるように、

天上の精霊たちは運命のない世界にやすらっている、
寝入っている赤子のように。
つつましい蕾のうちに
けがれもなくまもられて
そのいのちは
とわに花咲いている、
そしてそのやすらかな眼は
変わらぬしずかな
明るさをたたえてかがやいている。

この詩の前半部で展開される天上と光のイメージを帯びた神的世界は、後半部の人間的現実世界の場へと視点が移り、否定の極へと世界が急転する。

だがわたしたちは定められている、
どこにも安らぎの場所がないように。
過ぎてゆく、落ちてゆく
悩みを負う人の子は、

盲目のまま、
時から時へと、
水が崖から
崖へ投げ落とされるように、
幾年も不確実なものへと。⁽¹⁹⁾

天上の世界とは異なり「私たち」には休息の場はなく、「崖から崖へ」 von Kippe zu Klippe と落ちる永遠の下降のイメージをともなって「幾年も不確実なものへと」 Jahrlang ins Ungewisse hinab 落ちていく。「下へと」 hinab という副詞を持って詩がいわば強引に終結することによって、それ以降は言語化できない永遠の下降運動が生じる。言語を中断することによって永遠の運動を生じさせるというヘルダーリンの詩的手法は、同時代では見られない極めて近代的かつ斬新な手法といえる。

この強い主観性は、初期啓蒙主義を廃した感情の高揚へ回帰もしくは「崇高」 das Erabene の詩作理念という 18 世紀ドイツ文学の伝統の刻印を帯びている⁽²⁰⁾。ケルナーのこの強い主観性はその伝統の延長上にあるともいえよう。

ヘルダーリンの作品では、眼前の世界は荒涼とした世界であるという現状の認識のもと、ここを基盤として幻想化された自然空間が展開される。これはケルナーの詩的空間の基本構成でもあり、両者の共通性として挙げられる。ケルナーの『詩的年鑑』の『ロザムンドへ』では、百合、カーネーション、バラといった花々が咲く夏の日の庭園と小夜啼鳥が甘い歌声を放つ庭園の情景が描かれる⁽²¹⁾。これとは対照的に、詩人の視点は「遠い海」に立脚し、「怯えた憧憬」 banges Sehnen が自分達を「涙と共に引きずり下ろす」と正反対の世界が対置される。また『アルペンホルン』にも、この特性が明確に表れている。

私を呼ぶ

アルペンホルンの音が聞こえる。
それは森の会堂から鳴り響くのか？
青い空気から鳴り響くのか？
山の高みから鳴り響くのか？
花咲く谷から？
どこに立っても、歩いても、
甘美な苦悩の中で私はそれを聞く。

遊びと幸せの輪舞曲で、

私一人で孤独で、
決して鳴り止むことなくそれは響く、
深く心の中に響き渡る、
今まで一度も私は見つけたことがない、
それが鳴り響く場所を。
そして、その心は鼓動がなくなるまで
健やかになることはない。⁽²²⁾

この引用部のイメージは、光の中を歩む聖なるゲーニエンという至福の天上世界の描写から一変し、「安らう場所が与えられていない」自分達が「崖から崖へ」と落ちていく『運命の歌』に見られるようなヘルダーリンの上下空間の二項対立的世界像と酷似している。ケルナーのこの詩では、明るい春の描写と絶望の自分という二項対立の対称性が詩の骨格となっている。この対称性は、季節や昼夜の対称性など複数のヴァリエーションにおいて展開される。

5. 二項対立の循環構造

二項対立の構造は、季節をモチーフとした融和的自然と苦悩する自己との対称性としてもケルナーの作品にしばしば示されている。『五月の助言』Rath im Mai では鳥が飛び交うのどかな五月の日に病んだ心が対置され、さらに「芳香と歌と光の中に」「苦悩」が示される。ここで「人間の努力は全て捨てよ」ということばと共に、自由への希求が歌われる。空中で歌う鳥と流れ出す芳香に満たされた花を喩えとして「汝の苦しみ」dein Leid を放出せよとの要請が出されるが、このイメージの根拠として自然の循環が描かれる。

花は苦しむことなく
再び大地に帰る、
太陽の光と歌を夢見る、
氷と雪の下深くに。⁽²³⁾

人為性をもたらす苦悩と自然の循環という対称性とその融合への希求はヘルダーリンの代表作『ヒュペリオン』の根本テーマである。ケルナーの詩にもその同質性が見られるのは、シュヴァーベンという領域の詩的文化的特性といえることができる。

ケルナーの『詩的年鑑』の『朝の気持ち』Morgengefühl では、「若い木立」や「愛

の炎」に満ちた朝の情景から「禍に満ちた哀れな心」は夜の情景の幻視へと視点を移行させる。そこでは疲れ果て、歌うことも飛び立つことも出来ない鳥の姿が描写される。

汝、災いに満ちている哀れな心よ、
汝はどれほど不安にとらわれているのか。
小鳥が座っている
鉄格子の後ろで病みながら。

鳥はきっと歌を聴く、
他の鳥たちの喜びの飛翔を聴く、
そこに、疲れ果て、病んで鳥は座っている。
歌うことも、さまようこともできずに。⁽²⁴⁾

この絶望的な状況において「夢」の場面が展開し、ここでは「鳥は木の上で歌い/谷と丘を飛び越えていく」情景が歌われ、詩人による呼びかけが行われる。

消えろ、汝、太陽の谷よ。
夜よ、立ち上がってこい！
丘と谷を越えて
私たちが再び陽気に飛び回ることができるように。⁽²⁵⁾

詩のこの終結部では、夜の到来を積極的に受け止め、山と谷を越えた向こうの世界へと飛翔しようとする様が描かれている。来たるべき黄金時代を待望する現在の状況が、昼と夜の反転という自然情景の中で展開する。夜の世界を忌避するのではなく、逆に命令的かつ挑発的に誘導しようとするある種の積極的な姿勢は、ヘルダーリンには見られないケルナーの特徴である。『詩的年鑑』におけるケルナーの二連の小詩『秋』Herbstにおいても同様に、太陽や、花、鳥に対し、冬に向かって絶望的に枯れ朽ちていくよう、命令的な呼びかけがなされている⁽²⁶⁾。その呼びかけに続いて、「自分のみ」が温もりを届け、歌い、花咲かせることができると強い主体性を持ったことばが続く。

夜の世界の描写と昼の世界の待望は、『太陽の軌道』Sonnenlaufにおいても同様に描かれている。太陽は、街や人間と共に山や川、谷といった自然形象まで引き連れて逃げていくとされた後、視点は夜の世界に転じ、遠い世界の幻影が夜の静かな海を航行する。

嗚呼、邪悪な太陽よ！太陽は愛のない光線で
私とあなた、遠い世界の高山、深い谷を置く
村を持ってき、街を持ってき、川を引き、湖を導く、
あなたと私の間に荒々しい群衆を生じさせる、
そして、空に輝く太陽がより近くに移動すればするほど、
嗚呼、あなた遠い世界は山や谷を越えて、より遠くに逃げていく。
しかし、太陽が逃げ出すと、山も谷も一緒に逃げていく、
川や都市、そして人々も一緒に逃げていく。
宵の明星にそっと見守られながら、遠い世界はもう帰ってきている。
遠い世界は月の小舟に乗って、夜の静かな海を航海している。⁽²⁷⁾

詩の冒頭では「意地悪な太陽」die böse Sonne や「愛のない光線で」mit lieblosem Stral (sic!) など、否定的な表現で中心的自然形象が表現されている。ヘルダーリンにおいても自然の暴力的側面への言及はあるものの、形容詞レヴェルでの否定的表現は皆無と言ってよい。ケルナーのこの引用部では、山や谷と一体化した彼岸的要素として描かれているため、神聖な存在であることは明白である。しかし『朝の気持ち』での夜への挑発的な表現にも見られたように、自然形象への感情の高揚における形容の仕方はヘルダーリンと異なっている側面もある。

引用の『太陽の軌道』では、「あなた」Sie の対象が「遠い世界」die Ferne となっている。この「遠い世界」は、「遠方」という空間的意味合いと共に「遠い未来」や「遠い過去」など時間性も意味しうることばである。この点を考慮するとこの詩的空間は、詩的自我の物理的な孤独性と共に来るべき光の時代への憧憬と幻影という時間的、歴史的側面も有しているといえよう。「遠い世界」が夜の世界に戻り、「静かな海を航行している」と歌われている情景がこれに当てはまる。昼と夜の変転という自然現象に、孤独の世界と人間と自然調和の世界の変転という歴史的循環を融合させるという手法が、ケルナーおよびヘルダーリンの詩的空間の展開の特徴といえる。

6. 黙示録的世界像

上で述べたように、ケルナーの作品には特に自然描写において、来るべき黄金世界への憧憬という基本姿勢が認められる。ここではシュヴァーベン地方の精神風土の特徴である黙示録的志向との関連が想定される。この点においてもケルナーはヘルダーリンと極めて類似している。黙示録的と言うのは、ヘルダーリン研究においてヨッヘン・シュミット等において、後期試作を中心にその思想的基盤として指摘されている敬虔主義

(ピエティスムス)との関連を意味する⁽²⁸⁾。シュヴァーベン・ピエティスムスの創始者ベンゲル (Johann Albrecht Bengel, 1687-1752) やその弟子エーティンガー (Friedrich Christoph Oetinger, 1702-1782) は、千年王国説 (ヒリアスムス) を中心に終末論を展開し、『黙示録』を聖書解釈の中心に置いた。ヘルダーリンの『パトモス』においても同様に「終末」, 「終わり」への指向性が詩の根幹を形成している⁽²⁹⁾。ヘルダーリンを始めとする同地の子息の多くは、敬虔主義の教義を規範とする学校に通っており、その環境の中で精神形成を行なっている。ヘルダーリンはこのシュヴァーベン敬虔主義の精神文化圏で活動した詩人であり、ケルナーも同様である。

もちろん両者がそのピエティスムスの具体的教義に即して詩的世界を展開したということではない。ケルナーは『旅の影』で敬虔主義を他の宗教団体と並列的に言及していることから⁽³⁰⁾、具体的な宗教活動が作品の基盤となっているわけではない。しかしながら両者を結びつける根本要素として黙示録的志向があるのは十分想定しうる。

暗黒の時代に來たるべき黄金時代を歌うという姿勢は、迫害から逃れた地において千年王国の到来を幻視するある種の積極的姿勢を基盤とする。ヘルダーリンの『パンと葡萄酒』に見られるように、夜の時代に天上の世界に消えた昼の時代を歌うという姿勢にこれを見てとることができる。前章で扱ったケルナーの作品でも太陽光線をモチーフとして、失われた光の世界への待望という基本姿勢が明確に表されていた。ここでは、昼と夜の変転という自然現象に歴史の変転を融合させる詩的手法が取られている。

ケルナーの『冬の嘆き』 Winterklage は、荒涼とした現在と來るべき黄金時代への待望という黙示録的精神思考が、季節の移り変わりという循環に即して描かれる。冬の自然形象が徹底した負の形相を持って描かれるのもヘルダーリン-ケルナーの系譜の詩的特徴といえる。詩の第一連では、明るい夏の日に「苦惱」 Leiden が自らの心を運び、その心が草原の小川と夕暮れの森で鼓動する様が描かれる。そこでは柔和な旋律に倣って小夜鳴鳥が囀る情景が展開される。しかし第二連以降では、この柔和な旋律とは反対の苦惱の情景が表出する。

今薄暗い冬の日に、
 嗚呼、誰が彼の嘆きを静めるのか。
 小夜鳴鳥と 草原の小川？
 草原の小川は自由が利かず、
 小夜鳴鳥は死を見つけた、
 もはや歌って花々を目覚めさせることはない。

花もあちこちで朽ち果てる、

母なる大地は死に、
そして、その子供は孤児となり、一人きりである。

日が沈み、孤児となった孤独な詩人は、夜の世界における絶望的な状況を自然形象の中で歌っている。しかしこの夜の世界において突然、来るべき黄金世界の幻影が展開する。

孤独にその子は青い彼方を見つめている。
来い！とすべての星が呼ぶ、
永遠の五月の光がここにある！

心臓は、それから、鼓動を止めろ！
見よ！この澱んだ日々に
鳥の声もなく、小川の流れもない。
汝は屈服つもりはない、
痛々しいほどの震えで、汝は立てる
次から次へと押し寄せる波を。⁽³¹⁾

夜の絶望の中で詩人は星々から「来い」という声を聞く。天上の世界には来るべき黄金時代の「永遠の五月の光」ew'ger Maienschein があるという声を聞く。鳥も囀ることなく、川の流れも止まる荒涼とした世界においても「屈する」ことを否定し、困難に立ち向かう意志が示され詩が終結する。

『黙示録』の本質はローマ皇帝ネロの迫害を受けパトモス島に逃れたヨハネが、来るべき千年王国の到来を予言することにある。そこでは迫害の恐怖の情景が展開されるが、それは主たる要素ではなく、あくまでも未来への希望を思想の中心とするのがシュヴァーベン・ピエティスムスの『黙示録』に対する本質的な理解である。もちろんそこには自らが生きる時代性も反映されている。

7. 共和制への志向

『詩的年鑑』のケルナーの詩『高台の十字架』Das Kreuz auf der Höhe は、現世の否定、死を通しての次の生の肯定、夜と昼の交錯、歴史の転換、兄弟愛など黙示録の世界観や共和制への志向といったヘルダーリン的世界象が展開されている。疲れ切った「私」には「憧れ」や「敬虔な心」を満たすものはなく、冷たい暗黒の夜の世界が広が

る。「私」には邪悪な予感に駆られ、見知らぬ道を歩いていく。

この現在を基調とした暗の世界は、「仲介者像の十字架」から明の世界へと変転する。「休息と喜びが私の胸に流れ込込み」、「まるで太陽のように、私に空気を満たしてくれた」時、シラーの『歓喜によせる』と同質の自由、平等、博愛を基盤とする革命的平和像が展開する。

天使が舞い降りた。

そして、兄弟として挨拶をしてくれた。

シラーの『歓喜に寄せる』では、「歓喜」die Freudeの「優しい翼が留まる」ところで「全てのものが兄弟となる」。この「兄弟」とは革命的同志としての愛で結びついたものであり、ヘルダーリンの「愛」Liebeの概念もこれに近い。自然形象における平和の空間の現出は、ヘルダーリンの『平和の祝い』Friedensfeierとも近似性があり、ここにシラー、ヘルダーリン、ケルナーというシュヴァーベンの詩的系譜を見出すこともできる。

この厭世的世界像の土台は、封建的ヴュルテンベルクにおけるフランス革命的・共和主義的世界への希求という思考の原型として、ヘルダーリンから受け継がれたともいえる。封建的世界における言論や民主制の抑圧に対するアンチテーゼとしての共和制への志向が「革命の詩人」としてヘルダーリンを特徴づけているように⁽³²⁾、この同時代的思考がケルナーの作品にも内包されている。ヘルダーリンの場合、共和的理想郷が古代ギリシア中心とする調和的自然世界として描かれ、対照的な人工的現在として、現代ドイツが示される。これと同じようにケルナーの作品にも革命思考の強い内容が、中世の郷土的要素をまとめて作品化されている。

『ヴィルトバートの喧嘩屋エーバーハルト伯爵』⁽³³⁾は、14世紀のヴュルテンベルクの伝説を題材としているが、ケルナーは1818年、ヴュルテンベルクの憲法闘争のさなかに、この詩を書いた。そこには改革によって自由な国家をつくるというケルナーの市民国家の理想が政治的メッセージとして込められている。古代ギリシアを規範とする点で古典主義的傾向の強いヘルダーリンに対し、中世への志向が強いケルナーはロマン主義的土壌にあるといえる。しかし共和制の希求という点では、両者の活動期に約20年の差があるにしても、共通している。

8. 郷土性

黙示録的幻視空間は明から暗という展開のみでなく、暗から明という展開においても

描かれる。『シュテファン寺院の塔』Der Stephansturmでは、「孤独な羊飼いは空に舞い上がった「光に満ちた羊の群れ」に取り残され「災いを夜な夜な嘆く」。この時、羊飼いに「地球上で最も美しい時代」の幻視が展開する⁽³⁴⁾。そこは中世ドイツの世界であり、ドイツ皇帝の間で王や王子たち君臨し信頼と正義が生き、神聖な歌が教会に厳粛に響き渡る世界である。

ヘルダーリンの『ドナウの源で』Am Quell der Donauでも同じように教会のイメージが描かれているが、それはアジアから河流に沿って移動してきた「人間を形成する声」が「こだま」Echoとして響き渡る情景として展開する。これは文化的根源領域のアジアが、翼を持った「鷲」の形象を伴い、アルプスを超えて西欧に至る「文化移動」のイメージであり、ヘルダーの人類史哲学を基盤としている⁽³⁵⁾。

ケルナーにはこのような人類史哲学的な背景は希薄である。ヘルダーリンは文化的根源領域をギリシアからアジア領域へと深化させていったが、ケルナーの場合はシュヴァーベンの郷土的領域に限定している傾向がある。これは『ドイツ詩人の森』というタイトルの詩集にケルナーの多くの詩が掲載されているという外的要因もあろう。詩集全般において、ドイツ中世世界の回帰というドイツロマン主義特有の現象が見られ、ケルナーの作品もその一部を形成している。

ヘルダーリンと共通の友人であるコンツ（Carl Philipp Conz, 1762-1827）に宛てたケルナーの詩『ホーエンシュタウフェン』Hohenstaufenでは、12世紀のシュタウフェン朝の神聖ローマ皇帝フリードリヒ一世（1122-90）が「赤髭英雄」として登場する。古城の周辺は寒風が吹き荒ぶ荒涼の地となっており、詩人にはそれが「岩のように冷たく不毛で/ドイツは周囲に立っているように見える」と寂寥感と過去への憧憬によって詩が終結する⁽³⁶⁾。その他『ヒルシャウ修道院の設立』Die Stiftung des Klosters Hirschau⁽³⁷⁾や『ムルハルトの聖ヴァルデリヒ礼拝堂』Sankt Walderichs Capelle zu Murrhardt⁽³⁸⁾は、極めて郷土的でキリスト教を背景とした詩となっている。

また『聖アルバン』Sankt Alban⁽³⁹⁾は、地獄や竜退治を題材とした聖アルバンによる開拓の歴史が、また『聖エルスベート』Sankt Elsbeth⁽⁴⁰⁾ではヴァルトブルク城の聖女エリザベートの伝説が詩作されている。『ドイツ詩人の森』における最終部のケルナーの作品としては『モンフォールト伯爵』Graf Montfort⁽⁴¹⁾や子殺しを題材とした『ラウフェンの聖レギスヴィント』⁽⁴²⁾など地元シュヴァーベンなどドイツ中世の偉人を題材とした散文調のロマン主義的逸話が所収されている。

ヘルダーリンとケルナーを結びつける郷土シュヴァーベンの偉人として、ケプラー（Johannes Kepler, 1571-1630）が挙げられる。ケプラーの惑星軌道の法則は、科学史において最初の発見として知られている。このケプラーは、ヘルダーリンと同じ学歴を持つ同郷の先達である。ヘルダーリンは詩『ケプラー』において、自らと同じ学歴を有

する故郷の偉人を称賛している⁽⁴³⁾。同作品はニュートンの導き手としてのケプラーが主題となっているのと同時に、一種のシュヴァーベン讃歌となっている。同詩の16から24詩行に渡るニュートンの独白において「迷宮において夜の中に光を呼び起こした」ケプラーが先導者として賛美される。ここでのニュートンの言説は、ほとんどヘルダーリンの声とも解される。ニュートンは「アルビオンの思想家」、「テムズ川」などと表徴的に表現される。最終連は数々の偉人を生み出した故郷シュヴァーベンの賛辞で締めくくられる⁽⁴⁴⁾。

ケルナーの詩『記念碑』Denkmaleは、ケプラーとドイツの哲学者、数学者、天文学者のフリッシュリンおよびシューバルトの3名がそれぞれ9行の詩によって描かれている。その先頭が『ケプラー』と題する詩となっている。

貧しく、あらゆる不満に翻弄され、
恩知らずの祖国から追い出され、
彼はこの冷たい大地から見上げた、
そして、暖かい太陽を正しく愛することを学んだ。

大地から借りた光を彼は喜んで放棄した、
しかし、彼には明るい故郷が残っていた、
彼の高貴な頭には、太陽の黄金が流れていた、
天はすべて彼に開かれていたのだ。⁽⁴⁵⁾

故郷からも見放された孤独な存在が、来るべき黄金時代の到来を確信しつつ生きる描写は、これまで論じてきたようにヘルダーリンやケルナーの作品に繰り返し描かれる基本構図といえる。

また3人目のシューバルトについてもヘルダーリンとの結びつきは強い。シラーにも強い影響を与えたシューバルト（Christian Friedrich Daniel Schubart, 1739-1791）は、自身の自由主義的言論活動によってヴュルテンベルク公カール・オイゲンの怒りを買って、1777年から約10年間投獄された。これによってシューバルトは、封建制から近代国家への推進者の象徴としてシラーやヘルダーリンなどによって崇拜される存在となる。ヘルダーリン自身、チュービンゲン大学時代にシューバルトを訪問したことが母宛の書簡に記されている⁽⁴⁶⁾。その他ヘルダーリンの書簡では、度々シューバルトが言及されている。ケルナーの『記念碑』における『シューバルト』では、牢獄に監禁されるシューバルトの元に聖人たちが舞い降りる情景が描かれている⁽⁴⁷⁾。ここでもシラー、ヘルダーリン、ケルナーのシュヴァーベンの系譜を見ることができよう。

9. 結 語

これまで論じた通り、ケルナーはヘルダーリンの詩作品と題材的にも詩的構成においても共通点が多い。もちろん相違点もある。第一にケルナーの自然描写には、バラ、百合といった花の形象が圧倒的に多い。これはヘルダーリンの作品には見られない傾向である。またヘルダーリンよりも中世の郷土史的題材が多く、この点でロマン主義的傾向が強いといえる。ヘルダーリンの場合は、古代ギリシア思想の要素が強く古典主義的傾向が強い。そのためヘルダーリンの自然描写には四大元素が作品内に同時に描かれるが、ケルナーの場合はこれが二つから三つの自然形象によって作品が形成される。傾向的には「大地」Erdeの使用頻度が低い。

詩的自我と結びつけられる自然形象として、ケルナーの場合は「鳥」Vogelが主に用いられている。この場合、鳥の飛翔は山や谷を越えた光の世界への飛翔として描かれる。また詩における「私」ichは、故郷や中世ドイツ世界への希求とともに光の世界への怨嗟や挑発的な夜の世界への要求など強い主観性を帯びることがある。

これに対しヘルダーリンの自然は、極めて美的で柔和的といえる。また飛翔に関しては、鳥ではなく「鷲」Adlerに重要な役割を担わせている。ローマの守護神（ゲーニウス）の詩的形象としての「鷲」が、文化的真髄としてドイツの地に飛翔するというヘルダーリンの作品にしばしば見られる構図は、広範囲の文化的領域に広がっている⁽⁴⁸⁾。これに対しケルナーの詩的領域はシュヴァーベン地方にほぼ限定されていると言ってよい。

このような違いはあるものの、本論で論じた通り両者には自然における二項対立、詩的自我の孤独性、昼と夜の循環と光のイメージ、来るべき黄金時代の幻視といった根本要因において強い共通性が見られる。ヘルダーリンとケルナーの作品は古典主義の残像からロマン主義への移行と文学的に異なるジャンルに位置するものの、詩作品における視点の基盤は共有している。これはシュヴァーベン地方の文化的特性ともいえるが、この特性はドイツの一地方の文化的特性を超えて、19世紀から20世紀へと受け継がれる。両者には医学生と患者という直接的な接点があったが、伝記的史実を超えた本質的な詩的類似性が認められる。両者の詩の特性は、ドイツ語圏の精神文化全般を刻印する一つの特徴ともいえよう。

附記

本稿は文部科学省科学研究費補助金・基盤研究(C)「ドイツ・ロマン主義メディア総合芸術としてのユスティヌス・ケルナー『旅の影』研究」(22K00455)の助成に基づく成果の一部である。

《注》

- (1) ケルナー研究については、主に以下を参照。
 Justinus Kerner. Jubiläumsband zum 200, Hrsg. V. Heinz Schott, Weinsberg 1990.
 Heino Gehrts, Gesammelte Aufsätze 2: Justinus Kerner und die Zeit der Aufklärung, Igel Verlag 2016.
- (2) 日本においてケルナーを扱った研究は、横溝真理「アイヒェンドルフのユスティヌス・ケルナー論」(「上智大学ドイツ文学論集」(52), 2015年, 137-153頁)及び吉田孝夫「湯治場と皮膚の幻想: J・ケルナーの温泉誌『ヴィルトバート』(1811年)」(「欧米言語文化研究」5, 2017年, 164(15)-140(39)頁)がある。ただし、いずれもケルナーの作品自体の論究には及んでいない。
- (3) Poetischer Almanach für das Jahr 1812, hrsg. v. Justinus Kerner, Faksimiledruck nach der Erstausgabe (Seltene Texte aus der deutschen Romantik. 11, Neuausg. 1991). (略記: PA)
- (4) Deutscher Dichterwald. hrsg. v. Justinus Kerner, Friedrich Baron dela Motte Fouqué, Ludwig Uhland und Andern. Tübingen in der J. F. Heerbrandt'schen Buchhandlung, 1813. (略記: DD)
- (5) ケルナーの伝記全般については、以下の文献を参照。Otto-Joachim Grüsser, Justinus Kerner 1786-1862. Arzt—Poet—Geisterseher nebst Anmerkungen zum Uhland-Kerner-Kreis und zur Medizin-und Geistesgeschichte im Zeitalter der Romantik, Springer Berlin Heidelberg, 1987. またケルナーの作品集については、上記文献と共に以下を参照。Justinus Kerner, Werke. Hrsg. mit Einleitungen und Anmerkungen versehen von Raimund Pissin. 6 Tle. in 2 Bänden. Berlin 1914, 2. Reprint: Hildesheim 1998.
- (6) 拙論「ヘルダーリンの書簡分析——作品と交流範囲の関係性について」(「人文・自然・人間科学研究」拓殖大学人文科学研究所編集委員会 編(35), 2016, 1-20頁)参照。
- (7) Vgl. Otto-Joachim Grüsser, Justinus Kerner und Hölderlin. In: Justinus Kerner. Jubiläumsband zum 200, S. 263-284.
- (8) Vgl. ebd., S. 279f.
- (9) Vgl. ebd., S. 280.
- (10) Vgl. ebd., S. 282.
- (11) Vgl. Hölderlin. Sämtliche Werke (Große Stuttgarter Ausgabe). Hrsg. v. Friedrich Beißner, Stuttgart 1946ff., (略記 StA) Bd.2-1, S. 138f. 本論での翻訳については、『ヘルダーリン全集』(手塚富雄他訳, 河出書房新社, 1969年)を主に用い、適宜改訳を行っている。
- (12) Vgl. PA, S. 121
- (13) Vgl. DD, S. 24.
- (14) Vgl. ebd., S. 6.
- (15) Vgl. ebd., S. 37.
- (16) Vgl. ebd., S. 38.
- (17) Vgl. ebd., S. 90.
- (18) Vgl. PA, S. 108f.
- (19) StA 1-1, S. 265.
- (20) Vgl. Schmidt, Jochen: Hölderlins idealistischer Dichtungsbegriff in der poetologischen Tradition des 18. Jahrhunderts. In: HJb 22, 1980/1981, 98-121. 宗教性を取り扱われた悟性によって捉えられる絶対性を「美的」に表すという「崇高」概念の受容は、ドイツにおいてボドマー、プライティンガー、バウムガルテン、クロップシュトック、メンデ

ルスゾーン、カント、シラー、ヘルダー、シェリングへと受け継がれた。特に無限を有限へと形作る「崇高」の理念は、ヘルダーリン、ベートーベン、シラー、シェリングに顕著とされる。

- (21) Vgl. PA, S. 12.
- (22) Vgl. DD, S. 39.
- (23) Ebd., S. 10.
- (24) Vgl. PA, S. 94.
- (25) Ebd., S. 95.
- (26) Vgl. ebd., S. 77.
- (27) Ebd., S. 96.
- (28) Vgl. Schmidt, Jochen: Hölderlins geschichtsphilosophische Hymnen » Friedensfeier 《—》 Der Einzige 《—》 Patmos ‹. Darmstadt 1990.
- (29) 拙論「黙示録と詩作——ヘルダーリンの詩『パトモス』における終末思想」, (『人文・自然・人間科学研究』 拓殖大学人文科学研究所編集委員会 編 (36), 2016, 1-12 頁) 参照。
- (30) Vgl. Justinus Kerner, Reiseschatten: von dem Schattenspieler Lux, Hofenberg, 2017. S. 87.
- (31) DD, S. 44.
- (32) Vgl. Bertaux, Pierre: Hölderlin und Französische Revolution. Frankfurt 1969.
- (33) Vgl. PA, S. 39.
- (34) Vgl. ebd., S. 144.
- (35) 拙論「自然としてのアジア——ヘルダーリンの後期詩作における根源志向の変遷」(『長崎県立大学論集』第37巻第4号, 2004年, 35-61頁) 参照。
- (36) Vgl. DD, S. 94.
- (37) Vgl. ebd., S. 154f.
- (38) Vgl. ebd., S. 157f.
- (39) Vgl. ebd., S. 160f.
- (40) Vgl. ebd., S. 170f.
- (41) Vgl. ebd., S. 162f.
- (42) Vgl. ebd., S. 167f.
- (43) Vgl. StA1-1, S. 81f.
- (44) Vgl. Friedrich Hölderlin. Sämtliche Werke und Briefe. Hrsg. v. Jochen Schmidt, Bd. 1. S. 540f. 同詩の韻律はクロップシュトックの作品の影響を受けている。ヘルダーリンがケプラーの影響を受けた直接の書は, „Schreiben über einen Versuch in Grabmälernebst Proben“ (Von Johann Jakob Azel im 2. Stück des Württembergischen Repertoriums der Literatur 1782) とされる。
- (45) DD, S. 119.
- (46) Vgl. StA6-1, S. 45. 1789年4月下旬もしくは5月上旬の母宛の書簡。
- (47) Vgl. DD, S. 120.
- (48) 拙論, 『ゲーニウスの回帰——ヘルダーリンの「若返り」の思想』(『九州ドイツ文学』第16号, 2002年, 1-15頁) 参照。

(原稿受付 2022年11月7日)

The Gardens of Adonis, the Drama of the Green World, and Eugene O'Neill's Urban Dystopia

Yuji OMORI

Abstract

The aim of this article is to argue how O'Neill depicts the city as a wasteland in his three works. First, the never-blooming geranium plant in "Tomorrow," which recalls the Gardens of Adonis in ancient Greece, is not only a symbol of the owner's futility and inefficiency, but also symbolizes the urban wasteland, where humans and other creatures are not deeply rooted. Second, in order to emphasize the essential infertility of the city, the plotline of *The Iceman Cometh* partly parodies that of Shakespearean comedies, which Northrop Frye defines as "the drama of the green world." Finally, in *Hughie*, Charlie's threatening fantasies of mass destruction imply the impossible rebirth of the city as a mechanical urban system. Overall, O'Neill's urban dystopia exists as opposed to the green world, which is based on what Cybell refers to as the eternal life cycle of birth, growth, and death in *The Great God Brown*.

Keywords: Eugene O'Neill, "Tomorrow," *The Iceman Cometh*, *Hughie*, The Gardens of Adonis, The Green World

I. O'Neill's Green Symbolism

Although previously proud of himself as a stoker in a coal ship, Yank in *The Hairy Ape* (1922) experiences an identity crisis when Mildred, the daughter of the capitalist who runs the steel company, verbally shows a strong hatred toward him upon their first meeting at the fireroom. Abused as "the filthy beast" (137), Yank for the first time comes to realize that not only the coal ship but the world itself is also run by the capitalist class. Visiting a zoo in New York City after many twists and turns, Yank perceives a similarity between himself and a caged gorilla: just like Yank, who is merely working as a cheap laborer for the capitalist, the gorilla, in spite of its wild physical strength, is commodified for public view in the urban zoo surrounded by towering steel-made skyscrapers in the possession of capitalists. Yank still expresses admiration for the animal:

Youse can sit and dope dream in de past, green woods, de jungle and de rest of it. Den yuh belong and dey don't. Den yuh kin laugh at 'em, see? Yuh're de champ of de woild. But me—I ain't got no past to tink in, nor nothin'

dat's comin', on'y what's now—and dat don't belong. (*The Hairy Ape* 162)

Eugene O'Neill (1888–1953) essentially viewed modern humans as drifting away from the green world they are originally from with no sense of direction, and often depicted his characters as such. Yank is a good example. On the other hand, William Brown in *The Great God Brown* (1926), when burying the dead body of Dion Anthony in his backyard, seems to conduct a fertility ritual based on the motif of death and rebirth of the plant god for regaining the green world, thereby attempting to create a new image of modern man firmly rooted on the earth in order to replace a false ideal of the materialistic success he has stood for (Omori 2018). As we shall see in more details, the green world does not simply mean the green forest or the jungle Yank refers to.

As Yank attempts to communicate face-to-face with a gorilla and Dion is buried like a flower seed, O'Neill often removes the boundaries between humans and other animals or plants in his works, juxtaposing them as intrinsically equal beings. Furthermore, non-human beings are sometimes mentioned as creatures that are superior to humans. For instance, Edmund Tyrone in *Long Day's Journey Into Night* (1956) famously expresses a wish to have been born as “a seagull or a fish” while mocking himself as “a stranger who never feels at home” (*Long Day's Journey* 812). In *The Last Will and Testament of an Extremely Distinguished Dog* (1940), O'Neill also has his late beloved dog Blemie articulate the animals' wisdom free from materialistic greed: “Dogs are wiser than men. They do not set great store upon things. They do not waste their days hoarding property” (*Last Will* 4); Blemie goes on to maintain, “Dogs do not fear death as men do. We accept it as part of life, not something alien and terrible which destroys life,” while speculating death as “eternal sleep in the earth” he has loved so well (*Last Will* 12 and 20). As Sebastian Williams argues, O'Neill thus invites readers to “reconsider the hierarchies of life that position humans as superior to nonhuman animals” and “debate the ethical value of nonhuman life” (Williams 48 and 51). For O'Neill, animals are basically ecosophical creatures living as part of cyclical nature, and non-human creatures are more ethical than humans who exploit nature and life as if they were just resources for their economic activities. In *The Emperor Jones* (1920), when a Congo witch-doctor and a green-eyed crocodile confront Brutus Jones and demand sacrificing his life, O'Neill's sympathy should side with the medicine man and the beast because they fight together in order to protect the forest as their common home from the greedy imperialist ruler who has severely damaged both humans and non-humans in the island. Their firm solidarity certainly recalls the close bond between the playwright and his wise dog in *Last Will*. The confrontational scene in *Jones* even anticipates the ending scene of James Cameron's *Avatar* (2009), in which the indigenous humanoids on a fictional planet similarly fight with savage animals against humans from Earth to protect the forest as their common home.

O'Neill's perspective of questioning human superiority over non-human

beings inherently has much to do with what Braidotti and other post-humanist scholars discuss as “*zoe*-centered egalitarianism” which makes a response to the commodification of life, its human and non-human forms alike, in the logic of capitalism (Braidotti 1999, 60). It is indeed under the *zoe*-centered egalitarianism that Yank attempts, though unsuccessfully, to form a union with the gorilla to resist the commodification of life in capitalism. *Zoe* is a universal vital force, a-personal and non-anthropocentric, in which both human and non-human partake (Braidotti 2018, 223 and 382). As the indigenous humanoids in the forest worship a mother goddess named Eywa (the name suggesting both wisdom and harmony in Japanese) in Cameron's film, *zoe* as a generative force is often imagined as feminine rather than masculine. This is true of O'Neill's plays since *zoe* almost exactly corresponds to the workings of Mother God which Nina Leeds advocates in *Strange Interlude* (1927) or the eternal feminine Life repeating its natural cycle of birth, growth, and death recited by Cybell in *The Great God Brown*. The green world is founded on such a vital force. Of course, the green world does not simply mean a symbiotic habitat for both human and non-human. As Northrop Frye defined in his discussions of Shakespearean comedies, the green world is “a symbol of natural society, [...] the original human society, which is the proper home of man, not the physical world he now lives in but the ‘golden world’ he is trying to regain” (Frye 1965, 142).

A son of James O'Neill, who was once a successful Shakespearean actor, O'Neill was familiar with Shakespeare's plays, and must have had a clear understanding of how the green world works in Shakespearean comedies. As Frye argued, the basic pattern found in a group of Shakespearean comedies including *The Two Gentlemen of Verona*, *As You Like It*, and *A Midsummer Night's Dream* is, in short, as follows: the action moves from a patriarchal tyranny into a forest world or the green world, which is “more flexible and tolerant than its counterpart,” so that the comic resolution is attained at the end (Frye 1965, 141). In *As You Like It*, for instance, it is in the Forest of Arden where Orland is reconciled with Oliver, his older brother who formerly intended to have him killed in a wrestling match. Similarly, Duke Senior, who was once banished by Duke Frederik, retrieves his former dukedom as his brother suddenly gives it up out of remorse upon meeting an old religious man in the forest. Above all, it is also in the forest that four wedding ceremonies, including the one between Orland and Rosalind, are performed by Hyman at the end. As pages sing that “love is crowned with the prime, / In the spring time” (*As You Like It* 5. 4: 31-31), love is basically regarded as part of the natural cycle of life and functions as such in the green world. Since the natural cycle is like the female physiological process of life, the green world is imagined as a feminine domain, just as Rosalind plays the most active role in the Forest of Arden—interestingly in this connection, while echoing both Arcadia and Eden, Arden was a real woodland near Shakespeare's childhood home in Warwickshire, and it is also the family name of Shakespeare's grandmother, Mary Arden (Wells 262).

A striking parallel with this structural pattern in Shakespearean comedies can be found in O'Neill's *Mourning Becomes Electra* (1931), for instance. Just as in *As You Like It*, the Mannon family has a feud between siblings: Ezra banished his younger brother David out of jealousy and greed by using the brother's scandalous marriage with the family's nurse as a plausible excuse. While the green color as the age-old symbol of life is effectively introduced with the appearance of Christine Mannon moving with "a flowing animal grace" in a green dress, the South Sea Isles, which her son Orin compares to her, is presented as a typical green world of innocence and love, where one can forget all their "dirty dreams of greed and power" (*Mourning* 896 and 910). Just as Duke Senior has enjoyed a simple life in the Forest of Arden in spite of adverse circumstances in *As You Like It*, the native islanders live a simple life without learning "love can be a sin" (*Mourning* 909). Many characters recall the place as a utopia distant and different from the patriarchal world of law and justice that the Mannons apparently stand for.

The crucial difference from Shakespearean comedies is that no character can reach a final resolution even if they make a visit to the green world in O'Neill's tragedy. Though Orin does visit the islands, he can neither get rid of his guilt nor get used to local customs. Upon his return, Orin confines himself into his dim study to write a story of dark familial secrets and sins, stating, "I find artificial light more appropriate for my work—man's light, not God's—man's feeble striving to understand himself, to exist for himself in the darkness! It's a symbol of his life—a lamp burning out in a room of waiting shadows!" (1027). On the other hand, his sister Lavinia apparently transforms herself into a mature woman almost in no time in the islands. Though Lavinia used to be an extremely patriarchal and puritanical daughter not only denying loving anyone other than her father but even asserting, "I hate love!," a native young man in the islands has made her learn for the first time in her life that "everything about love could be sweet and natural" (*Mourning* 909 and 1031). Wearing a green dress upon her return, Lavinia shows striking resemblances to her late mother, defiantly proclaiming herself to be "Mother's daughter" in front of the portraits of the Mannons (*Mourning* 1043); however, her green metamorphosis does not last long. As if following Orin's aforementioned words, Lavinia shuts herself in the mansion and chooses to live under a dim artificial light, without natural sunlight, for the rest of her days, imposing a ban from the green world as a self-punishment for her sins. The image of life under a dim artificial light recalls Plato's famous allegory about prisoners chained in an underground den, where they can see only shadows a fire behind their backs makes; as a result, the shadowy life in the cave is truer for these prisoners than the real world out of the den under the sunlight. There is a notable difference, though: the real world under the sunlight is a metaphor for the transcendental, ideal world beyond this life in Plato's allegory, but the green world under the sunlight in O'Neill's tragedy is literally an earthly paradise unattainable for the Mannons.

Sharing the same artificial and lifeless features with the tomb-like Mannon mansion, O'Neill's urban wasteland or dystopia appears as opposed to the green world. Generally speaking, modern cities were constructed as artificial, comfortable living spaces exclusively for humans, unsusceptible to the workings of ever-changing nature. Therefore, it is inevitable for green fields and forests, or the green world in a physical sense, to diminish in urban areas. In O'Neill's imagination, the modern city is not so much a part of nature as an autonomous, artificial space; yet, the ecological point of view alone cannot capture the full picture of O'Neill's urban wasteland. Some frames of reference, including an ancient myth and ritual as well as Frye's above-mentioned theory of comedy, are necessary to fully grasp O'Neill's urban dystopia. In the subsequent sections, this article examines how O'Neill depicts the big city as a modern wasteland in "Tomorrow" (1916), *The Iceman Cometh* (1939), and *Hughie* (1941) while also clarifying how the representation of the city is closely interwoven with each work's theme, structure, or symbolism. Compared with *Iceman* and *Hughie*, "Tomorrow" is a much earlier piece; however, these three works, all set in New York City, are closely connected with each other, revealing as-yet-unknown important common features of O'Neill's city as an urban dystopia throughout his long playwriting career.

II. Modernists' Floral Images: Pot Geranium in "Tomorrow" and the Gardens of Adonis

"Tomorrow," the only short story published in O'Neill's lifetime, is set in 1912 at Tommy's tavern and inn in New York City, strongly reflecting the playwright's wandering, youthful years. James (Jimmy) Anderson, the main character, is a roommate of Art, the narrator, who seems to be modeled after O'Neill. Just like Jimmy in *Exorcism* (1919) and James Cameron (Jimmy Tomorrow) in *Iceman*, Anderson is modeled after James Findlater Byth (1866?-1913), who was a roommate of O'Neill. When O'Neill attempted a suicide by an overdose of sleeping pills in 1912, Byth found and saved him; then, in 1913, Byth fell from the window of their room on the third floor. Remaining in a coma, he died a few days later. O'Neill considered this incident a suicide (Dowling 100). It is not difficult to imagine that O'Neill felt a strange turn of fate for his own lifesaver, who died about a year after his own suicide attempt. Doubtlessly, it was a driving force for the young playwright to write this story. What matters for us is how an urban wasteland is constructed upon this intense biographical event in this short piece of writing.

Once an active journalist, Anderson has been given to drinking since he found his wife Alice unfaithful in South Africa ten years before. Just like James Cameron (Jimmy Tomorrow) in *Iceman*, he still believes that he will return to journalism someday. Aside from thus exploring the motif of the pipedream, "Tomorrow" presents further connections with *Iceman*. As Julie M. Gram

discusses (though her discussions are slightly different from my viewpoints for some details), Anderson possesses “a combination of qualities and displays a range of behaviors which ultimately characterize several different individuals in *Iceman*” (Gram 83). When succeeding in abstaining from alcohol for a short period of time in order to return to work, Anderson strongly advises Art to follow suit, which recalls Theodore Hickman’s temperance movement in *Iceman*. When Anderson suspects that Alice may not get divorced until receiving his wealthy aunt’s money but immediately denies the thought, his ambivalent feelings toward his wife recall Hickey’s mixed emotions of love and hate for his wife Evelyn. His suicidal jump upon realizing that he has lost his journalistic talents after a few days back at work is transferred to Don Parritt. Furthermore, Alice’s unfaithful episode overlaps with Hickey’s favorite dirty joke of a wife having an affair with an ice vendor. Indeed, “Tomorrow” is an important foundation of *Iceman*, introducing multiple characters’ actions and situations.¹

On the other hand, several other important items suggesting Anderson’s current situation can be found only in “Tomorrow”: a broken typewriter that Anderson is always going to have “fixed— tomorrow,” a pile of “books of impossible poetry and incredible prose” by unknown authors, and a pot geranium that has never bloomed (“Tomorrow” 948). The first two items imply Anderson’s simultaneous willingness and impossibility to return to journalism. The typewriter may be repaired if the owner gives it a serious thought; however, the worthless books suggest Anderson’s fatal state as a professional, as he already seems unable to tell good writings from bad ones. The African-native plant, of which Anderson takes affectionate care, is “his garden and his joy” (“Tomorrow” 948), reminding him of his happy life in the past. He wishes for the plant to bloom someday as, in his mind, it is strongly connected with the sense of fulfillment he once had. However, Art declares the never-blooming plant as a symbol of Anderson’s “futility” and “inefficiency” (“Tomorrow” 948).

Importantly, it is highly likely that the potted-plant motif was inspired by an ancient Greek ritual called the Gardens of Adonis, conducted as part of a festival (*Adonia*) to commemorate the mythological, beautiful juvenile, who had died prematurely. In *The Golden Bough*, a copy of which O’Neill possessed, Fraser explains the Gardens of Adonis as follows:

[B]askets or pots [were] filled with earth, in which wheat, barley, lettuces, and other flowers were sown and tended in pots or baskets for eight days, chiefly or exclusively by women. Fostered by the sun’s heat, the plants shot up rapidly, but having no root they withered as rapidly away, and at the end of eight days were carried out with the images of the dead Adonis, and flung with them into the sea or into springs. (Fraser 213)

Fraser interprets the ritual as “charms to promote the growth of revival of vegetation” (Fraser 214). Interestingly, on the other hand, Detienne reveals that

the short-lived plants in the Gardens of Adonis symbolize rootless and fruitless immaturity (Detienne 102), which almost corresponds to Art's interpretation of his roommate's "garden."² To begin with, the myth of Adonis itself is a short-lived, fruitless love story, in which the juvenile is killed by Ares in the shape of a wild boar because he is favored by Aphrodite, the lover of the God of War. As opposed to the solemn ritual for Demeter, Detienne argues that the ritual dedicated to Adonis, which was mainly conducted by single women and prostitutes, was meant to be a parody and negation of the institution of marriage. In these viewpoints, the image of Adonis is again emblematic of Anderson, whose marriage failed instantaneously because of his wife's soldier-lover. Anderson's immaturity is suggested in his nature "much like an errant pet or troublesome child" who is "difficult but lovable in spite of itself" (Gram 82). The never-blooming geranium, native to Africa, mirrors its solitary, rootless owner drifting from the continent; in multiple ways, the potted plant is a symbol of the owner's immaturity and failed life. Their symbolic identities are further emphasized when both the plant and the owner crash down to the earth from the same window of the multi-story building one after the other. Notably, a parallel with the ritual of Adonis is implicitly suggested here because the statue of the deity and his potted plants were flung away together at the end of the ritual. It is also noteworthy that accidental falls and suicidal leaps are more likely to happen in the city than many other places, as the city has many high-rise buildings that offer vertical distance from the ground. Among O'Neill's body of works, Anderson's fall following that of his plant thus creates the earliest image of a city distancing itself from the earth; it is a city where both humans and vegetation alike are not firmly rooted and therefore remain flowerless and fruitless.³

In a broader sense, when potted or cut flowers and plants are taken away from their homes and brought into cities, they are caught up in the commodification of life in capitalism just like the gorilla taken from the jungle in *The Hairy Ape*. Therefore, these flowers and plants are effectively used as symbolic items to suggest the artificial, theme-park-like city in a perilous balance by other modernist writers as well. In "Paul's Case" (1905), for instance, Willa Cather depicts a winter scene near a park by Fifth Avenue in New York as follows:

Here and there on the corners whole flower gardens blooming behind glass windows, against which the snowflakes stuck and melted; violets, roses, carnations, lilies of the valley—somehow vastly more lovely and alluring that they blossomed thus unnaturally in the snow. The Park itself was a wonderful stage winterpiece." (Cather 130)

As the narrator states elsewhere, "In Paul's world, the natural nearly always wore the guise of ugliness, [so] that a certain element of artificiality seemed to him necessary in beauty" (Cather 125), Paul is passionate for art, theatre, music, and fashion—an aestheticist who loves artificial beauty. Such an aesthetic inclination

led him to despise the mundane reality of his hometown in the Midwest. Having quit high school, Paul misappropriated a huge amount of money from the local business he had just started working for, ran away from home, and arrived in New York City. The scene quoted above of flowers blooming inside the buildings along the Avenue in defiance of cold winter conveys Paul's taste for artificial beauty; in a broader sense, it also exemplifies the way the modern city is constructed as a man-made space cutting off the natural surroundings. As Paul, who was still a student under suspension, appeared in front of the faculty of his high school with a "scandalous" red carnation in his button hole at the beginning of the story (Cather 118), red carnations appearing several times in the story are particularly important as a symbol of Paul's rebellion against mediocrity and naturalness. His immature revolt is doomed, however. Realizing that his act of embezzlement has been discovered a week later, Paul goes to a remote area near Newark to find that a small bouquet of carnations he bought on the way have already withered in the snow. Remembering, in astonishment, that the flowers on Fifth Avenue must have already died as well, Paul digs a small hole in the snow-covered ground, buries one of the carnations in it, and then chooses the same destiny as the flower (just like Anderson and his geranium in "Tomorrow"). The short-lived admirer of artificial beauty and wealthy urban life, thus presented as unwholesome, implies the perilous state of unnaturally uprooted beings in the city.

Another important, if slightly different, example of the floral image in modernism can be found in Ezra Pound's famous imagist poem, "In a Station of the Metro" (1913): "The apparition of these faces in the crowd: Petals on a wet, black bough" (Beach 26). By juxtaposing the images of passers-by in a subway station in Paris with those of petals clung on a bough, which can be easily blown in the wind again when they dry, Pound suggests that urban dwellers are essentially uprooted and transient drifters, ironically, in spite of their physical closeness to the earth (as they are in a metro station). The petals on a bough, showing an ironical physical closeness to the tree as their source of life, is indeed the equivalent of the city dwellers.

In order to be a living space in the true sense of the word, the city must interface with the natural world as the "modern assumption of the Great Divide between nature and culture" is currently denied and the importance of seeing nature and culture as mutually permeable is widely acknowledged (Braidotti 2018, 112 and 270). These modernist writers, well acquainted with New York City or Paris in the early twentieth century, seem to have identified the direction that the modern city ought to follow. Anderson's premature death with his potted plant, as well as that of Paul with his red carnation, suggests that they are Adonis-like figures who are green only in the negative sense of the word. The city is thus suggested as an uprooted, artificial garden far from the authentic green world.

III. *The Iceman Cometh* and the Drama of the Green World

In *Iceman*, set at Harry Hope's bar in New York City in 1912, no symbolic item that resembles the potted geranium in "Tomorrow" can be found; however, a black joke about a quack told by Gregory Mosher at the end of act one suggests a similar urban wasteland. According to the regular at the bar, the quack practiced medicine on street corners, selling snake oil as a panacea that "would cure heart failure in three days" (*Iceman* 615); yet, upon his death due to overwork, he lamented, "I hate to go before my task is completed [...] I'd hoped I'd live to see the day when, thanks to my miraculous cure, there wouldn't be a single vacant cemetery lot left in this glorious country (*Iceman* 616)." A snake, creeping about and sloughing its skin repeatedly, is an ancient symbol of the regenerating natural vital force. As Asclepius carries a rod with a snake tangled around it, the snake also becomes a symbolic animal for medical science, which originally developed as a system of knowledge and techniques to convert natural poisons into medicines. However, the street doctor's viper oil remained poisonous, leading his patients to death rather than bringing them back to a healthy life. The idea of cemeteries with no vacancies evokes the image of an infertile earth or of a natural world never regenerating itself.

The image of the infertile city is further emphasized after act one by the plotline imitating comedy in an ironic way. As is well-known, O'Neill talked about comic elements in *Iceman* in a press interview in 1946 as follows:

I think I'm aware of comedy more than I ever was before; a big kind of comedy that doesn't stay funny very long. I've made some use of it in *The Iceman*. The first act is hilarious comedy, I think, but then some people may not even laugh. At any rate, the comedy breaks up and the tragedy comes on. (Berlin 170-172)

Normand Berlin points out a variety of comic elements in *Iceman*, including a range of comic wordplay, traditional comic types, and comical physical activities, and compares the atmosphere of Hope's bar to that of Shakespeare's festive romantic comedy. Furthermore, while recognizing comic aspects in Hickey's singing and dancing, Berlin compares him to Malvolio in *Twelfth Night*, as he cannot belong to the "cakes and ale" world of the bar due to his newly gained virtuousness and sobriety (Berlin 173-174). However, it may seem inaccurate to compare Hickey to the specific square character by Shakespeare.⁴ In order to fully understand O'Neill's representation of the city, it is important to compare *Iceman* with Shakespeare's comedy from a slightly different viewpoint, namely with reference to Northrop Frye's comic theory again, as we briefly did with regard to *Mourning* earlier.

Frye terms Shakespeare's romantic comedy as the drama of the green world

because of its affinities with the medieval tradition of seasonal ritual play. He points out that its plot is “assimilated to the ritual theme of the triumph of life and love over the waste land” and its action “begins in a world presented as a normal world, moves into the green world, goes into a metamorphosis there in which the comic resolution is achieved, and returns to the normal world” (Frye 1957, 182). More specifically, in terms of character development, the green world in Shakespeare’s comedy is where characters are led on to the next stage of their life cycles. As we have already seen, the Forest of Arden in *As You Like It* eventually produces four couples, and the fairy world in *A Midsummer Night’s Dream* brings a solution to the complicated relationships of two men and women in love, to name a few. Frye also finds “the symbolism of the victory of summer over winter” introduced in the drama of the green world. For instance, the series of actions to repel Falstaff in *The Merry Wives of Windsor*, such as putting him in a laundry basket and throwing it away into a river, can be regarded as a refined form of the ritual of the defeat of winter known to folklorists as “carrying out Death” (Frye 1957, 182–183).⁵

The plot development of *Iceman* parodies, at least partly, what Frye calls the drama of the green world. In act three, the regulars at the bar go out one after another in order to prove that their pet pipedreams are not mere bluffs. What awaits them on the other side of the door, however, is not the green world wherein their lives are renewed, but the harsh reality of the industrial urban city, symbolized by an automobile Harry Hope insists he was almost run over by. As is most clearly epitomized in Hope’s totally changed, dead-struck look after his return, the outside world actually functions contrary to the green world, leading them into a sort of death rather than a new life. The reversed effect of the green world, or the deadly metamorphosis the outside urban world causes to its visitors, is further emphasized in how the pipedream shared by Chuck and Cora loses its charm soon after they announce their marriage and leave the bar together. Their pipedream of living together in marriage on a farm somewhere in New Jersey or Coney Island reaches a deadlock when the bartender/pimp and the prostitute have a big quarrel on their way to New Jersey, causing them to not even cross the state border. To begin with, as Margie jokes about their pipedream, “Jees, I bet Cora don’t know which end of de cow has de horns!” (*Iceman* 603), the couple can only yearn for the green world as a distant dream place (just as the earthly paradise floating on the South Sea was such a place for the Mannons in *Mourning*). Needless to say, the pimp and the prostitute, who commodify female sexuality, are incompatible with the green world grounded on the workings of feminine life. Taking back their earlier announcement of marriage as a joke, they are thus reconciled to join the hilarious spree with other regulars at the end of act four. This scene makes a perfect parody of the drama of the green world, which often ends with a wedding ceremony or banquet just like *As You Like It* and *A Midsummer Night’s Dream*.

Just as importantly, as Hickey claims that Larry starts “playing Sherlock

Holmes" (*Iceman* 626) to search for the secret behind the salesman's sobriety, there exists a pseudo-detective storyline in which the truth of Evelyn's death is gradually revealed. It is a false detective story, as the culprit is determined to confess the motive for the murder from the start and turns himself in to the police in the end. The ending reminds us of the banishment of a *pharmakos* like Shylock or Tartuffe that often happens at the end of a comedy, as well as the aforesaid ritual of carrying out Death. It is rather natural because, as Frye states, comedy and detective stories are similar genres in that they share the same theme of expelling a *pharmakos*, which originates in the abovementioned ritual (Frye 45–46). The salesman degraded to a murderer and gospeler of death seems suitable for the part, though a sharp irony lies in his previous identity as a convivial reveler full of vitality, who brought euphoria to the regulars at the bar every time he visited for Hope's birthday in the summer. The basic symbolism of the defeat of winter (death) and the victory of summer (life) in the ritual of carrying out Death is thus twisted here: at a glance, Hickey's leaving seems to symbolize a defeat of winter (death); yet, it simultaneously implies a defeat of summer (life).

After driving out the *pharmakos*, the party increasingly livens up, but their hollow essence is emphasized by the fact that they are totally unaware of Don Parritt's suicidal jump. Don, who was supposed to lead feminist-activist Rosa's movement as her son in the future, betrayed her to secretly communicate with the police. It would have been hopeful if his betrayal had resulted from an awakening of patriotism, as he originally told Larry; however, the true motive lies in his hatred for his mother, who he believes was always too busy with the movement to show much affection for him. He even seems to have bought prostitutes with the money he gained from being an informant for the police—almost as if to annoy his feminist mother. Don's immaturity, as well as his young age of eighteen, makes him the equivalent of Anderson and his pot plant in "Tomorrow."

From then on, Don could have lived a life of assurance, since he had cooperated with the state as an informant. His final choice of suicide over survival recalls that of Orin in *Mourning*. Just like Don, Orin, driven by silly, possessive jealousy, kills Adam Brant, his mother's lover, which leads her to commit suicide. Although Orin has witnessed many soldiers die in battle, his mother's death has given him an unparalleled shock. Unable to eradicate his sense of guilt, Orin chooses to shoot himself rather than survive. Ultimately, death seems inevitable for these sons, on one hand, because betraying or ruining their mothers ultimately leads to a sinful denial of the vital principle of the Mother to realize the green world, and on the other hand, because close human ties should not be essentially traded as Don does.

Hickey has ruined his life because he cannot adapt to the present social system of capitalism in which high importance is placed upon diligence (Omori 2020). As discussed above, his leaving ultimately implies a defeat of life as opposed to the basic symbolism in the drama of the green world. On the other hand, Don, remaining unripe in the antiestablishment movement, has made a

suicidal jump. Among the characters with no offspring, the sole young character's life is thus lost at last while his mother remains imprisoned, which eloquently tells that the workings of the Mother is dysfunctional in the city. When the curtain closes with Larry's deep lamenting words soon after Don's immature death, the audience sees the immutable urban wasteland with their mind's eye.

IV. The Urban Mechanical Dystopia and Fantasies of Mass Destruction in *Hughie*

In *Hughie*, set at a cheap hotel in New York City in 1928, O'Neill depicts the big city as a mechanical system through the (dis) communication between two characters. Similar to Charlie Chaplin in *Modern Times* (1936), blank-eyed night clerk Charlie Hughes works like a mechanical automaton, constituting a very small part of the urban mechanical system. While Charlie Chaplin in the film works as a factory worker tightening bolts on an assembly line for hours, Charlie in O'Neill's play must stay at the front desk with "nothing to do" for hours until his eyes have "forgotten how it feels to be bored" (*Hughie* 831). Having worked as a night clerk in the city so long, he can even "tell time by sounds in the street" without looking at a clock (*Hughie* 831). Both Charlies malfunction at times like broken robots. Seeing round buttons on a lady's garment, Charlie in the film automatically tries to tighten them with nuts as if they were bolts. Charlie in the play, on the other hand, "automatically" shows a signature "grimace, intended as a smile" when Erie comes in as a guest (*Hughie* 832), and repeatedly makes pointless answers in their conversations due to his absent-mindedness.

According to Henri Bergson's famous theory of comedy as the "mechanical encrusted upon the living" (Bergson 92), modern industrialized cities, where workers, alienated from themselves, do menial work like robots, are filled with comical situations. Based on Bergson's theory, Romanska and Ackerman aptly summarize how comical modern man can be, which sounds true of both Charlies:

Modern individuals start to behave like automatons and act without thought or spontaneity. [...] Human events take on a clockwork arrangement; so, we become inflexible and, thus, comical. In brief, the comic side of a person reveals his or her likeness to a thing or a machine. Laughter, then, is a social gesture that restores our humanity. (Romanska and Ackerman 188-189)

Though the theme of robotization of human workers in the industrialized city is found in the play, O'Neill takes a quite different approach from Chaplin's, drawing attention to the inner bored and frustrated state of the robot-like worker through detailed stage directions. Charlie is not just a robot-like worker or a comic type to be laughed at. As Eric Fraisher Hayes rightly argues, Charlie's inner monologues narrated in stage directions constitute "indispensable parts of this hybrid of play

and short story" (Hayes 69), just as revealing as those monologues intended to be read aloud on stage in *Strange Interlude*. As it was the case with most performances of the play, the character of Charlie mostly would remain enigmatic unless his inner life narrated in stage directions somehow became accessible for the audience (Hayes 74). For our argument about O'Neill's urban dystopia as a mechanical system in the play as well, it is critical to see what is going on in Charlie's mind. If his circumstances are fully understood, Charlie ceases to be a comic type that he may appear to be on stage at a glance.

To while away several hours before dawn, Charlie makes it a habit to listen to the din and bustle of the city, falling into flights of fancy. For instance, upon hearing a sanitation worker collecting garbage cans, he thinks to himself, "A job I'd like. I'd bang those cans louder than they do! I'd wake up the whole damned city!" (*Hughie* 837). When a siren wail of a fire engine is heard, he talks to the fireman in his mind and asks him whether the fire is "big enough to burn down the whole damn city" (*Hughie* 844). Filled with "suppressed hostility" against the city (Cargill 224), his thoughts sound like "almost apocalyptic fantasies of mass destruction" (Eisen 182). Knowing that Charlie must immediately give up buying a pair of new shoes because they cost eight dollars, as narrated in the stage direction, however, the audience would still sympathize with him: his almost threatening fantasies are due to his financial difficulties of supporting his family at the lower depth of the urban community around the end of "the Great Hollow Boom of the twenties" (*Hughie* 831), which has made a wider gap between rich and poor.

The fact that Charlie shares the same family name and "the same look" (*Hughie* 838) as the deceased former night clerk suggests their unstable conditions as easily replaceable, cheap laborers. It is of note here that the deceased and current night clerks were both born and bred in the country. Generally speaking, as Lipset and Bendix argue, most people moving from the country into a big city constitute the lower class of the urban community. They leave their original home and instead strive to make a small home of their own in the city, as Erie states at one point of the play, "what he [Hughie] called home was only a dump of a cheap flat" (*Hughie* 842-843). Homemaking is in fact a contradictory idea because home should exist as a given condition (Mita 81). It is this path that these night clerks followed. Though they came to "the Big Town," presumably believing that "Old Man Success would be waiting" at the Grand Central to give [them] the key to the city" (*Hughie* 841), they are essentially welcomed just as cheap laborers to support the industrialized capitalist system at its bottom. As shown by few acquaintances having attended Hughie's funeral, almost no attention is paid to a worker's life or death in the system. For that matter, only Erie seemingly knew that it was worth giving Hughie "the big send-off" (*Hughie* 849). Hughie's bereaved children must expect many difficulties ahead of them. Here again, O'Neill implies that the life-sustaining workings upon which the green world is based are almost dysfunctional in the city, particularly for the workers uprooted

from their hometowns. Then it seems no wonder that Erie, finding that Charlie has three children, laughs and states, “You’re worse off than Hughie was. He had only two. Three, huh? Well, that’s what comes of being careless! (*Hughie* 834). Erie’s theory that having a family of one’s own means being “a sucker” sounds reasonable to some degree.

Given these perspectives, Charlie’s fantasies of mass destruction must ring like a longing for an awakening of the whole urban community or a rebirth of the whole urban system. However, the impossibility of scraping and rebuilding the system is persistently emphasized in the ending part of Charlie’s fantasy about the big fire: “Well, you can’t burn it all down, can you? There’s too much steel and stone. There’d always be something left to start it going again” (*Hughie* 848). Accordingly, Charlie’s giving up buying a new pair of shoes does not only refer to his own financial difficulties, but it must also imply that the whole city is incapable of taking a new step. Similarly, Erie’s sarcastic remark about the hotel as “the Morgue” (*Hughie* 844), just like the image of cemeteries with no vacancies in Mosher’s joke in *Iceman*, must suggest that the city is unable to renew itself into an awakened state as well.

Unlike night clerks, “Erie” Smith, a long-term regular at the hotel who was also born and bred in the country (as his nickname suggests), nevertheless seems to lead a colorful urban life as a gambler. Sharing some physical features, such as a medium height, a stout figure, and a round face, with Hickey in *Iceman*, Erie is also a cheerful sport. Unlike the salesman and family man caught in a dilemma between diligence and dissipation, he freely enjoys a full-time self-indulgent life. Though acting like a Broadway sport leading a colorful life, however, it is ultimately nothing but his superficial mask. The way he flashily dresses and disdainfully talks about his hick burg is typically observed in some of those moving from the country into the city. As they experience being judged, ridiculed, and even denied by their origins, appearances, and other superficial attributes, they consequently come to despise their own roots and learn how to talk and look like other city dwellers in order to assimilate into the urban community. Erie seems successful in the assimilation, but only superficially.

In fact, Erie’s urban life is not as colorful as it appears to be. Though free from Hickey’s dilemma in *Iceman* as well as the night clerks’ financial difficulties in homemaking, Erie instead has to bear deep solitude at the urban hotel as a homeless loner. One of his usual methods to relieve loneliness is to have a talk with the night clerk in the lobby. Even facing Charlie mostly giving pointless responses like a robot that can’t flexibly understand humans, Erie does not immediately retire to his room on the fourth floor. As Hayes rightly points out that “almost nothing good comes from going upstairs” in O’Neill’s works (Hayes 72), Erie’s reluctance to go upstairs to his room recalls the final dooms of Anderson in “Tomorrow” and Parritt in *Iceman*. Bewailing that his luck has run out since the former clerk’s death and has little hope of returning the money borrowed from underworld rascals, Erie would certainly worry a lot about the retaliation of those

he owes in his room upstairs, as he states, "My trouble is, some of these guys I put the bite on is dead wrong G's, and they expect to be paid back next Tuesday, or else I'm outa luck and have to take it on the lam, or I'll get beat up and maybe sent to a hospital (*Hughie* 849).⁶

Of course, after all, the hardboiled gambler is unlikely to choose the same fate as Anderson and Parritt, but it should be noted that Erie is another Adonis-like, rootless drifter just like them in terms of his immature essence. The reason why Erie left his hometown at the age of eighteen was to break up with his girlfriend Daisy. Rumors that Daisy had many relationships with young men in the town suggest that she was an earth-mother figure that embodies the workings of the feminine life itself in the green world. Though Daisy was pregnant, possibly with Erie's child, at that time, he did not acknowledge the unborn baby as his own. Denying the productive earth-mother figure as promiscuous and avoiding a union with her in wedlock, Erie eventually arrives in the city operating mechanically by day and night to become like an old Adonis who seems to remain eighteen years old in his mind, as he has only sporadic relationships with multiple Broadway dancers but never really creates a fruitful life. Just like Lavinia in self-isolation at the end of *Mourning*, Erie thus lives an urban night life under the artificial light.

Given the trajectory of his life, it is quite ironic that Erie once revealed "a secret desire for domestic love and stability" upon his visit to Hughie's home (Eisen 186). By making the night clerks remember not only his room number but his nickname to build friendship, Erie has been attempting to add a warm home-like touch to his urban abode as well. A genuine friendship that existed between Erie and Hughie is indeed verified by the fact that the gambler has owed as much as one hundred dollars to offer flowers for the night clerk's funeral. Considering that a dozen of the pairs of shoes Charlie wants can be purchased, one hundred dollars is not a small amount. These facts suggest that even the hard-boiled gambler needs warm bonds.

Finally breaking the urban situation of discommunication after many failed efforts, Erie starts rolling dice with Charlie for fun near the ending of the play. The dice with which gamblers play is a symbol of fate, and gamblers, when they are winning, can give an illusion that fate is on their side as if the dice were a cornucopia to generate wealth for them. Finding a possible way out of the urban lower depth there, the night clerks admire gamblers: while Charlie is fascinated to find that Erie is acquainted with Arnold Rothstein, a legendary gambler, the late Hughie regarded Erie as "a sort of dream guy" (*Hughie* 844). Indeed, it was upon a visit to Belmont Park with Erie that Hughie was so excited to see racing horses for the first time in life, stating, "They're the most beautiful things in the world, I think" (*Hughie* 840). With horses sprinting to bring wealth collaboratively with human jockeys, the park intensely evokes an image of the green world nullifying the human-animal divide under *zoe*-centered egalitarianism, where the human and the non-human harmoniously enjoy natural blessings of wealth. Erie's admiration for racing horses is not only showing his nature as a gambler, but also implicitly

reveals a longing for the green world when he states, “I’d rather sleep in the same stall with old Man O’ War than make the whole damn Follies” (*Hughie* 840). He seems to seek a sense of warmth and belonging or a sense of home he cannot feel when he is with Broadway dancers, just as Ephraim Cabot sleeps with cows in the stall to feel a solace in *Desire Under the Elms* (1924).

However, none of the characters in the play are aware that racing horses are commodities (just like the gorilla in *The Hairy Ape*) and it is part of the horses’ duties as commodities to sell a momentary dream of the green world. After all, these gambling-related illusions and images have little to do with the green world working like an authentic cornucopia to produce wealth in life, in so far as the money obtained from gambling merely falls into the pockets of gamblers like Erie and is spent for themselves. By rolling dice with Charlie, who has no experience of gambling, Erie’s priority is to regain confidence as a gambler, just as he used to do with the late Hughie. His repetitive acts of rolling dice with the night clerks ultimately give an impression of the urban wasteland unable to transform itself. This last one-act play by O’Neill, though set more than a decade after the time of “Tomorrow” and *Iceman*, still more reveals the urban dystopia with no exit.

Notes

- 1 It is not known that Byth’s married life ended due to his unfaithful wife, whereas O’Neill had already experienced a bitter marital life with Katherine Jenkins. Married to her without preparedness in his youth, O’Neill started on a wandering voyage to avoid the reality of married life. Following his father’s advice, O’Neill eventually disguised an unfaithful affair at a brothel to obtain a divorce. It is said that he fell into self-hatred because of a series of these events and attempted a suicide. Anderson’s broken marriage in “Tomorrow” may be a fiction reflecting the playwright’s own first marriage and divorce with some modifications.
- 2 Though Detienne’s research was conducted much after O’Neill’s death, O’Neill at least must have known the following famous Greek proverb, “You are more sterile than the gardens of Adonis,” which is used to refer to people who can’t produce anything worth.
- 3 A potted flowerless plant does not appear in *Exorcism*, in which Jimmy is instead waiting for the arrival of warm spring because the season reminds him of happy days in the past. Just like the sterile world symbolized by the potted plant in “Tomorrow,” however, Jimmy as well as his roommate Ned is in desolate winter surrounded with “a miserable, soaking strip of mud, the trees dead, and the bay as filthy as an overgrown sewer” (*Exorcism* 14).
- 4 Berlin also admits that Hickey’s friendship with the regulars at the bar is authentic, and emphasizes that he is “no Malvolio after all, except in function” as a negative force expelled from the festive world (Berlin 175).
- 5 Fraser also elaborates on this ritual elsewhere (Fraser 349–381).
- 6 The number four is considered an ominous number in Japan and China because the sound is the same as death. Therefore, there is usually no fourth floor in Chinese hotels and condominiums. O’Neill, who had deep interests in Asian cultures and thoughts, must have known this practice. That is probably why Erie’s room is set on the fourth floor. As for his room number 492, it seems too sizable for the small hotel to have more than ninety rooms on one floor. More strangely, the number sounds like “Death Country” in Japanese. It is hard to imagine that O’Neill was conscious of this punning in Japanese, but it is a strange coincidence—O’Neill also passed away in a

The Gardens of Adonis, the Drama of the Green World, and Eugene O'Neill's Urban Dystopia

room on the fourth floor at Shelton Hotel in Boston. On the other hand, the floor of Anderson's room is not specified in "Tomorrow," which is probably because O'Neill considered the fact that his model Byth was not instantly killed when he jumped off from his room on the third floor of Jimmy the Priest's inn.

Works Cited

- Beach, Christopher. *The Cambridge Introduction to Twentieth-Century American Poetry*. Cambridge: Cambridge University Press, 2003.
- Bergson, Henri. *Laughter. Comedy*. Ed. Wylie Sypher. Garden City: Doubleday Anchor Books, 1956: 59-190.
- Berlin, Normand. *O'Neill's Shakespeare*. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1993.
- Braidotti, Rosi. *The Posthuman*. Cambridge: Polity Press, 1999.
- Braidotti, Rosi et al. *Posthuman Glossary*. New York: Bloomsbury, 2018.
- Cameron, James. *Avatar*. CA: The 20th Century Fox, 2009.
- Cargill, Oscar et al. *O'Neill and His Plays: Four Decades of Criticism*. New York: New York University Press, 1961.
- Cather, Willa. "Paul's Case." *Coming, Aphrodite! and Other Stories*. New York: Penguin Books, 1999: 116-136.
- Chaplin, Charlie. *Modern Times*. CA: United Artists, 1936.
- Detienne, Marcel. *The Gardens of Adonis: Spices in Greek Mythology*. Trans. Janet Lloyd. New Jersey: Princeton UP, 1994.
- Dowling, Robert M. "Jimmy Tomorrow' Revisited: New Sources for *The Iceman Cometh*." *The Eugene O'Neill Review*, 35, no. 1 (2014): 94-106.
- Eisen, Kurt. *The Inner Strength of Opposites: O'Neill's Novelistic Drama and the Melodramatic Imagination*. Athens: University of Georgia Press, 1994.
- Fraser, James George. *The Golden Bough: A Study of Magic and Religion*. A Public Domain Book (kindle).
- Frye, Northrop. *Anatomy of Criticism: Four Essays*. Princeton: Princeton University Press, 1957.
- _____. *A Natural Perspective: The Development of Shakespearean Comedy and Romance*. New York: Columbia University Press, 1965.
- Gram, Julie M. "'Tomorrow': From Whence *The Iceman Cometh*." *The Eugene O'Neill Review* 15, no. 1 (1991): 79-92.
- Hayes, Eric Fraisher. "An Argument for the Third Voice: Reimagining Eugene O'Neill's *Hughie*." *The Eugene O'Neill Review* 40 no. 1 (2019): 68-86.
- Lipset, Seymour M. and Reinhard Bendix. *Social Mobility in Industrial Society*. London: Routledge, 2018.
- Romanska, Magda and Alan Ackerman. *Reader in Comedy: An Anthology of Theory and Criticism*. London: Bloomsbury Publishing, Kindle Version, 2016: 188-189.
- Mita, Munesuke. *Hell under the Urban Gaze*. Tokyo: Kawade Shobo, 2008.
- Omori, Yuji. "Diligence and Dissipation: A Critique of Capitalism in Eugene O'Neill's *The Iceman Cometh*." *The Journal of Humanities and Sciences* 43 (2020): 82-96.
- _____. "A Homeless Architect: Nietzschean Philosophy of the Earth in *The Great God Brown*." *The Eugene O'Neill Review* 39, no. 2 (2018): 279-293.
- O'Neill, Eugene. *Exorcism: A Play in One Act*. New Haven: Yale University Press, 2012.
- _____. *The Emperor Jones*. *O'Neill: Complete Plays 1913-1920*. Ed. Travis Bogard. New York: Library of America, 1988: 1029-1061.
- _____. *The Hairy Ape*. *O'Neill: Complete Plays 1920-1931*. Ed. Travis Bogard. New York: Library of America, 1988: 119-164.
- _____. *Hughie*. *O'Neill: Complete Plays 1932-1943*. Ed. Travis Bogard. New York: Library of America, 1988: 829-852.
- _____. *The Iceman Cometh*. *O'Neill: Complete Plays 1932-1943*: 561-712.
- _____. and Adrienne Yorinks. *The Last Will and Testament of an Extremely Distinguished*

- Dog*. New York: Henry Holt and Company, 1999.
- _____. *Long Day's Journey Into Night*. *O'Neill: Complete Plays 1932-1943*: 713-828.
- _____. *Mourning Becomes Electra*. *O'Neill: Complete Plays 1920-1931*: 887-1054.
- _____. "Tomorrow." *O'Neill: Complete Plays 1932-1943*: 947-968.
- Plato, *Republic*. *Plato VI*. Trans. Chris Emlyn-Jones and William Preddy. Cambridge: Harvard University Press, 2013.
- Shakespeare, William. *As You Like It*. London: The Arden Shakespeare, 2006.
- Wells, Stanley, Ed. *The Shakespeare Book*. New York: DK Publishing, 2015.
- Williams, Sebastian. "Proximity and Animal Ethics in *The Last Will and Testament of an Extremely Distinguished Dog*." *The Eugene O'Neill Review* 42, no. 1 (2021): 41-51.

(原稿受付 2022年10月25日)

Toni Morrison の *Home* でたどる アフリカ系アメリカ人の旅

三井美穂

African-American Journey in Toni Morrison's *Home*

Miho MITSUI

要 旨

トニ・モリスンの『ホーム』(*Home* 2012) に描かれたフランク・マニーの旅の諸相を、歴史的観点から論じる。フランクが妹のシーを救出し、故郷に「ホーム」を築くまでの旅で描かれる地名やルートは、一見鉄道路線の関係で立ち寄っただけの、意味のない選択に見えるが、実はモリスンはその地名を使うことによって、複数の伏線を準備しながらアフリカ系アメリカ人の歴史を示唆している。1950年代を舞台にした『ホーム』の背景には「忘れられた戦争」と呼ばれる朝鮮戦争や、アフリカ系アメリカ人を実験台とした医学的研究がエピソードのひとつとして取り上げられているが、本稿ではそれ以外にも「官製」の歴史に記載されなかった事柄や、現在徐々に明らかにされつつある事実が作品の中に示唆されていると考え、小説で描かれた地名に関連させながら、アフリカ系アメリカ人にとっての旅の意味を明らかにしていく。その際、二人の語り手を登場させたメタフィクションの構造も、歴史への示唆を理解するための重要な鍵となる。

キーワード: トニ・モリスン, アフリカ系アメリカ人, 旅, メタフィクション, 朝鮮戦争

はじめに

アメリカ合衆国は植民地時代から西へ向かう動きで始まった。イギリスからの植民の動きは大西洋を渡り、北米大陸の東海岸にたどり着いた。東海岸にできた町は徐々に西へと開拓を進め、やがて西海岸へたどり着き、1890年にはフロンティアの消滅が宣言された。19世紀半ばのゴールドラッシュや大陸横断鉄道、ホームステッド法は西漸運動の動力源であり、フロンティア消滅に向かった時代の象徴でもある。西への動きは、アメリカ人のフロンティア精神を形成し、その精神はアメリカ人の国民的アイデンティティとなったと言えよう。アメリカは常にフロンティアを必要としている。それは、その後太平洋の島々に進出し、冷戦時代にはさらに太平洋を越えて朝鮮半島やベトナムと

いったアジアにまでたどり着いたことから理解できる。

地理的なフロンティア以外にも、多くの分野でアメリカは開拓者だった。そのひとつが医学である。支配権の拡張のためには犠牲が伴ったが、医学の分野でも同様である。アフリカ系アメリカ人や精神病患者、囚人を対象とした人体実験の事実が、米NBCの“Ugly past of U.S. human experiments uncovered”などのメディアで次々と報道されている。NBCによると、その動きも海外へ向かい、1940年代にグアテマラで行われた梅毒実験が21世紀になってようやく明かされたという。

トニ・モリスン (Toni Morrison) は『ホーム』(Home 2012) で、この過去の地理的なフロンティアと医学的なフロンティアを、朝鮮戦争とJ. マリオン・シムズを彷彿とさせる人体実験として、並列させて読者に提示している。この西への動きに合流したのが、『ホーム』の語り手であるフランク・マニー (Frank Money) だが、フランクが西で何を発見したのかが、この作品の核として描かれていると本論では考える。

一方、このような開拓の動きに乗っていないアフリカ系アメリカ人は、異なる動きを見せていた。アフリカ系アメリカ人の移動は、奴隷船で強制的にアフリカからアメリカ東海岸に運ばれてからは、ほぼ南部の地域内で売買に伴う移動を強制されたか、あるいは囲い込まれ移動を封じられたかだった。やがて逃亡奴隷のルートは、自由をつかむ可能性を求めてあらゆる方向へ向かったが、奴隷制のない自由州を北部と呼んだことから、主に北へと向かうのが基本的なルートだった。しかし逃亡奴隷法の施行により、国内で「捕獲」された逃亡奴隷はその所有者に所有権が認められたため、北部では奴隷制度廃止論者が活躍し、逃亡奴隷を支援した。また20世紀はじめの「アフリカ系アメリカ人の大移動」(Great Migration) も、逃亡奴隷のルートに似通っており、「約束の地」北部へ向かった。

ヨーロッパ系アメリカ人が開拓精神を発揮して新しい土地を求めたのとは対照的に、アフリカ系アメリカ人は、受け入れてもらえる土地を探した。さらに時代が下ると、ディアスポラを経験した人々にとっては、ルーツを探すことも旅の主な目的になった。1970年代に小説家アレックス・ヘイリーは『ルーツ』でアフリカに自身のルーツをたどったが、モリスンは『ホーム』でアメリカの中にそのルーツを求めようとしている。それは奴隷制度のあった南部をアフリカ系アメリカ人の原点と見ることであり、厳しい選択であることは間違いない。しかしモリスンは『ホーム』でフランクに南部の故郷を再び見せている。

『ホーム』では、朝鮮戦争から帰還したフランク・マニーの旅が描かれる。モリスンは一度もフランクの肌の色には触れていないが、アフリカ系アメリカ人であることは明らかである。フランクは南部ジョージア州ロータスから朝鮮半島へ向かい、シアトルに帰還した後、ポートランド、シカゴを経由し、ジョージア州アトランタで人体実験の犠

牲になり生死の境をさまよう妹シーを救出し、最終的にまた故郷ロータスへ戻る。このルートは過去のアフリカ系アメリカ人の旅を逆行するものとなる。しかしながらそこには南北戦争前に逃亡奴隷を支援した組織「地下鉄道」のイメージもみられる。

「地下鉄道」の組織は、逃亡の道案内をする人たちを車掌、休息の場所を駅と呼び、鉄道を思わせる暗号を使って秘密裏に活動した。フランクは徒歩ではなく本物の列車で旅をするのだが、シアトルとポートランドの黒人教会のネットワークに支援され、シカゴ行きの列車ではウェイターに、またシカゴではダイナーで知り合った男性ビリーに助けられる。このような人々は地下鉄道の車掌、教会やビリーの家は駅になぞらえられる。

『ホーム』の地下鉄道を思わせる人々は、歴史的な逃亡ルートとは逆にフランクが南部へ戻る旅を支援するのだが、そこにはどのような意味があるのだろうか。本稿では、歴史的地理的移動をふまえ、トニ・モリスンの『ホーム』に描かれたフランク・マニーの旅のルートと、その旅がアフリカ系アメリカ人にとって何を意味するかについて考察したい。約束の地としての夢の北部、西へ向かったアメリカの伝統的なルートをたどった朝鮮半島、忌まわしい記憶しかないにもかかわらず「ホーム」と認めた南部、という3つの地域に焦点を当て、フランクにとって、ひいてはアフリカ系アメリカ人にとってその場所がどのような意味を持つのかを明らかにしていきたい。

モリスンは2012年 Bollen とのインタビューで『ホーム』の時代を1950年代に設定した理由を、“I was generally interested in taking the fluff and the veil and the flowers away from the '50s” (Melville House 127) と答えている。アメリカ人が古き良き時代として郷愁を覚えるこの時代から表面的なものをすべてはぎ取り、本当の姿を見せたかったという。戦争ではなく“police action”と呼ばれた朝鮮戦争、マッカーシズム、リンチや暴動によるアフリカ系アメリカ人の死、LSD や梅毒の実験など、モリスンはこの時代の暗部をいくつも挙げています。

またこのインタビューでモリスンは編集者としての経験も語っている。たとえばテキサス州の学校で使う教科書を編集するときは、“slavery”という言葉は使えないため“trade”などの言葉に置き換えなければならない、そうやって歴史は書き換えられている、とも言っている。モリスンはこれまでも、隠されてきた歴史、公けにされなかった事件を小説に描いてきた。『ホーム』もその延長線上にある。ただしモリスンは実際の事件を直接作品に書き込むことはない。どの作品でも、綿密に計算し、ヒントだけをちらつかせる。『ホーム』ではそのヒントは地名にあたることを考え、本稿ではその土地にまつわる事件に照射することによって、記憶を刻む媒体としての旅を論じる。

フランクのトラウマに焦点を当てフロイトの精神分析論をよりどころとした評論はWyattをはじめ多くみられるが、場所についての先行研究はいまのところ多くない。Sundman はフランクの旅のルートについて、シアトル、シカゴ、アトランタ等の地名

は出てくるものの、フランクがそこで過ごした時間も短く描写も少ないため、場所が前面に出てきて意味を持つのはロータスだけだという (Sundman 117)。しかしロータスは架空の地名であり、どこでもない場所とは逆にどこにでもありうる場所と考えられるが、実在の地名は、その場所特有の何かに意味があるからこそ、作家が舞台として選ぶはずである。Sundman は文学的な描写に特化して論じ、歴史的な出来事を看過しているため、本稿ではこれらの場所の重要性を明らかにしたい。また Beavers は場所と環境がアフリカ系アメリカ人にどのような影響を及ぼすかに焦点を当て、南部を「ホーム」とすることの意味を論じている。ポストコロニアルの視点でアメリカ人を眺めた Song Namgung の批評については、本稿の「朝鮮半島」のセクションで論じる際に援用する。また医療の歴史をたどったものとして、アフリカ系アメリカ人が実験台となった事件に焦点を当てた Fitz Gerald の評論は、実験の犠牲になったシーを論じる際のよりどころとし、ここではそれを含めた歴史とフランクの旅とを二重写しにしながら論じていく。またこの旅と歴史は、小説の構成ともかかわってくる。作品自体も二重構造になっており、テーマとなる旅と歴史を複眼的に捉える必要が生じる。そのため、まずは作品の構造を見ていきたい。

1. メタフィクションとしての『ホーム』

『ホーム』は2人の語り手によって語られるフランク・マニーの物語である。朝鮮戦争から帰還し、妹シーを故郷に連れ帰ったあとでフランクが語る、斜字体で書かれた短い章と、その話を聞く「作家」がフランクの旅の物語を描く長い章とが、ほぼ交互に並べられている。フランクの語りはあまりにも分量が少なく、時代背景や社会状況については何も言及していない。フランクの社会事情に対する無関心あるいは沈黙は、モリスンの言う「国民的記憶喪失」(“The Pain of Being Black” 2) を示唆しているように見える。現代人は、奴隷制度を含めアメリカの歴史を忘れてしまっているため、その失われた記憶を再び取り戻せるように創作を行っている、とモリソンはエッセイに書いている。

フランクがほとんど語らないため、読者は「作家」が再構築した物語を頼りに、フランクの人物像や経験を理解しようとする。読者は作家が描く社会や時代背景を信頼して読むのが自然である。ところが、読者は作品を読み進める中でしばしば違和感を抱く。

たとえば、シカゴへ移動する途中の駅のホームで起こった事件の見方が、フランクと「作家」では異なる。アフリカ系アメリカ人の男がホームに降りて何かを買おうとしたところ、店員や客たちが男を蹴り倒し、転がった男の尻を踏みつけた。夫を助けに駆けつけた妻は顔に石を投げられる。2人が列車に駆け込んだあとも、ホームの群衆は列車

が発車するまでわめき続け、列車の窓に生卵を投げつける。車内で鼻血を出しすすり泣く女性を見たフランクの感想として、「作家」は “He will beat her when they get home, thought Frank” (*Home* 26 以下引用は *H* と記載) と書いているのに対し、のちにフランクはそれを否定して “Not true. I didn't think any such thing. What I thought was that he was proud of her but didn't want to show how proud he was to the other men on the train. I don't think you know much about love. Or me” (*H* 69) と反論する。

奇妙なことに、「作家」が語る章では、フランクがこの暴力事件そのものや、群衆が迫ってくる様子をどう思ったかについて、何も触れられていない。それどころか、実際に事件が起きたときフランクは寝ており、事件の発端を見逃した、と書いている。これは先に述べた「国民的記憶喪失」をフランクが体現しているとも考えられるが、人種問題が引き起こした事件に対するフランクの心情に、「作家」が思い至らなかったためとも考えられる。事件については書いても、その事件がアフリカ系アメリカ人をどのような心理状態に追い込むかについては、素通りしている。また事件の概要を列車のウェイターから聞いたとき、フランクは、車掌に知らせたのか、と尋ね、ウェイターに「馬鹿か」と言われる。アフリカ系アメリカ人が暴徒に襲われたと白人の車掌に通報しても意味がないことに、南部出身のフランクが気づかないはずがない。さらにその話を中断して、フランクはウェイターにシカゴのレストランと宿の情報を尋ねる。このような会話が暴徒を目撃した直後に冷静に続けられるかは、はなはだ疑問である。

読者が感じる最も大きな違和感は、危篤の妹シーを救出するための旅にもかかわらず、フランクがずいぶんのんびりとしているところだ。冒頭の病院を抜け出す場面では、フランクは雪の中をはだして走り、夜明け前に教会の牧師を叩き起こすが、旅の後半に列車が故障で立ち往生したときは、焦りを見せることなく雑貨店に飲み物を買に行く。アトランタについては、タクシーがないからといって、夜の街をぶらついてバーに入る。急がないとシーが死んでしまう、という手紙を受け取って出発したフランクの旅の緊急性と、「作家」が描くフランクの行動は、印象が大きく異なっている。「作家」はフランクの物語を書きながらも、フランクの心情を理解しきれていないように思われる。この作品における違和感の正体はそこにあると思われるが、この点を指摘して「作家」の正体を論じた先行研究はいまのところ見当たらない。

このように見ると、「作家」はフランクとはまったく異なる環境にいる人物であろうと想像できる。たとえば、逃亡奴隷マーガレット・ガーナーの子殺しの新聞記事をもとに創作した *Beloved* では、語り手のモリスンは、ガーナーをモデルにして創作した人物セサの心情に寄り添いながら描いている。そのため読者は、人間性を失った残酷な子殺しとしてセサを非難するのではなく、奴隷制度の犠牲者としての母親セサに共感する。

しかし『ホーム』の「作家」は登場人物を理解していないため、読者に違和感を抱かせる。これはつまり Beavers が指摘するように、『ホーム』はメタフィクションとして解釈できるということだ⁽¹⁾。「作家」はモリスンではない。そうすると、モリスンはなぜ共感できない「作家」を使ってメタフィクションを書いたのかが次の疑問となる。Beavers はこの点を人種問題として捉えておらず、「作家」はモリスン自身で、創作には事実とは異なる誤った解釈がありうる、という危険性を表しているのだと論じる (Beavers 212)。だが『ホーム』のメタフィクションは、人種問題が鍵となっていると思われる。

“Site of Memory” や “Unspeakable Things Unspoken” などのエッセイで、モリスンはアフリカ系アメリカ人を描く白人の視点を論じてきた。登場人物がアフリカ系アメリカ人であっても、白人作家の見方で白人の読者に向けて書く、“white gaze” を問題にしてきた。そのためこれまでの作品はすべて “white gaze” を取り除き、アフリカ系アメリカ人の視点から、登場人物に寄り添いながら書かれている。しかし『ホーム』では実験的な取り組みをしているのではないか。つまりモリスンは、白人の「作家」にアフリカ系アメリカ人の物語を語らせているのではないかと考えられる。

モリスンは *Paradise* や *Lecitatif* では登場人物の人種を明確にしておらず、それによって読者が先入観や偏見によって登場人物の人種を限定することをあえて邪魔している、あるいは読者の先入観をあぶりだそうとしているかのようである。『ホーム』でもモリスンは読者に挑戦しているようだが、その手段は登場人物ではなく、正体不明の語り手である。『ホーム』はモリスンが書いたアフリカ系アメリカ人の物語であるから当然モリスンが語っているはずだ、と思いつつ読者の意表を突いている。しかしその意図は、アフリカ系アメリカ人作家の文学が文壇の表舞台に登場する 20 世紀までの文学のキャンオンを、メタフィクションの形式をもって示し、揶揄することにあつたとも考えられる。

では『ホーム』の「作家」はどんな人物と仮定できるだろうか。少なくともリベラルな立場で 1950 年代から盛り上がりを見せた公民権運動のような動きに共感した人物ではあろうが、アフリカ系アメリカ人の心情や文化を理解しきれていない。たとえば『アンクル・トムの小屋』を書いたストウ夫人を念頭に置くと、『ホーム』の「作家」の立ち位置が理解しやすい。奴隷廃止論者だったストウ夫人の功績は大きいですが、現在「アンクル・トム」がアフリカ系アメリカ人に蔑称として使われていることを考えると、なお理解しやすい。あるいは大恐慌後の公共事業促進局 (WPA) によって支援された作家が元奴隷に行ったインタビュー (slave narratives) に、『ホーム』の設定はより近いといえる。フランクは「作家」のインタビューに答えているだけで、自分から望んで話しているわけではない。それは冒頭のフランクの語りでも明らかだ。幼いころ死体遺棄の現場を目撃したが、その恐ろしい光景はそのとき見た馬の記憶に隠され、最近まで思

い出せなかった、と話す際に、次のように言う。

Since you're set on telling my story, whatever you think and whatever you write down, know this: I really forgot about the burial. I only remembered the horses. They were so beautiful. So brutal. And they stood like men. (H 5)

「作家」がフランクの物語を創作・脚色するであろうことを、フランクは承知のうでインタビューに答えていることがわかる。

「作家」は各地の描写や歴史的背景については語っていない。それはアフリカ系アメリカ人の歴史や社会について、理解が十分ではないからだろう。ではなぜ白人の「作家」を使って作品を二重構造にしなければならないのか。それは「作家」が語る物語を官製の歴史に見立てるためだろう。作中作をコントロールするモリスンは、この「作家」の旅の描写の章に、アフリカ系アメリカ人にとって重大な事件を忍び込ませる。メタフィクションを利用して、モリスンは読者に（から）歴史的な旅の記憶を書き込もう（引き出そう）としていると思われる。白人作家中心の文学のキャンオンを表すようにも見える『ホーム』のメタフィクション（官製の歴史）は、旅が示唆する隠されたアメリカの歴史を描くにはふさわしい形式と言えるのではないだろうか。本稿では、この「作家」の記述を中心に、フランクの旅を追いながら、「作家」が描いていない場所の記憶に、モリスンが言わんとしていることを読み取る作業をする。

2. 南部の暴力

フランク・マニーの最初の旅は、まだ4歳のころのことだった。大恐慌後、テキサス州バンデラ郡にある黒人コミュニティごと白人に立ち退きを強要され、一家は祖父のいるジョージアへ向かった。この移動はそれより約100年前に、チェロキー族がジョージア州からオクラホマ州のインディアン居留地まで強制移動をさせられた「涙の道」を彷彿とさせる旅であり、またその逆を行く道りである。チェロキー族は数少ない馬車と1人1枚の毛布といくばくかの支援金をあてがわれ、決められた期限内にオクラホマの不毛の土地に到着しなければならなかった。フランクたちには馬車も車もなく、ほぼ手ぶらの状態で出発した。24時間以内に立ち退かないと殺すと脅されたからだ。立ち退きを拒否した老人が目をくり抜かれ惨殺されたと聞き、みな慌てて逃げた。車を所有している家庭は少なく、ピストン輸送をしてくれる隣人もいたが、それでも徒歩の旅が大半を占めた。民主主義を標榜する排他的な社会は、インディアンに続いて、自らが運び込んだアフリカ系アメリカ人を追い出した。この時代の土地を追われる旅と言うと、ス

タインベックの『怒りの葡萄』が比較の対象になるだろうが、『怒りの葡萄』では、ジョード一家は果樹園で仕事を得るためにカリフォルニアへ向かった。ルート 66 を西へ向かう、自由への道だった。西へ向かう旅が成功を約束するとは必ずしも言えないが、『ホーム』のフランクたちは、成功の夢もない、より深い南部へと後戻りするのである。

たどり着いたジョージア州ロータスの貧しい黒人コミュニティでは、血のつながらない祖母に虐待され、“*Nothing to do but mindless work in fields you didn't own, couldn't own, and wouldn't own if you had any other choice*” (H 83-84) といった、希望のない土地でフランクは少年時代を過ごす。しかし“*Lotus, Georgia, is the worst place in the world, worse than any battlefield*” (H 83) としか思えなかったこの地が、物語のエンディングではフランクが自己のルーツとして定めた「ホーム」となる。このロータスは架空の地名であることから、アフリカ系アメリカ人にとっては、それぞれがたどることのできるアメリカ南部の地を思い描けるように舞台設定されていると考えられる。ロータスでフランクに起こったことは、アメリカのいずれの土地でも起こりえたこととして、モリスンは描いている。

冒頭でフランクは、10歳のころロータスのすぐ外で目撃した男の死体遺棄の場면을語り、その謎はエンディングで「作家」によって明かされる。瀕死の状態だった妹シーが回復し、2人で新たな生活を始めようとしたとき、フランクは祖父セイレムに、死体遺棄の場所だった種馬場の話を聞きに行く。その場所はその後闘犬場ならぬ、人間同士が闘わされる賭博場となっていた。そこではかつて、アラバマから連れてこられたジェロームという男とその父親が、白人観衆の前で、ナイフを持たされどちらかが死ぬまで闘わされたという。父親は「こんなのは命じゃない」(H 139) から自分を殺して生き延びると息子に言うのだが、これは南部で連綿と続く、アフリカ系アメリカ人に植え付けられた感情だろう。父親はジェロームに「やれ」と言い、ジェロームは拒み続けたが、最終的に息子は父親を殺した。泣きながらロータスに来たジェロームをコミュニティの人たちは手当てし、カンパし、ラバを与えて逃がした。殺人ゲームに興じた白人たちが隠したのがその父親の遺体だったことが、10年以上前に目撃した場面の真相だったとようやく判明する。

1975年の映画 *Mandingo* に、奴隷主が奴隷同士を闘わせるシーンがある。これはのちに“Mandingo Fighting”と呼ばれ、より残酷に死を伴うゲームに変換されて描かれるようになった。南北戦争前には、主に奴隷主の娯楽(“de white folks' joyment”)のために奴隷同士の拳闘が行われていた、と元奴隷の John Finnely は“Federal Writers' Project”のインタビューの中で証言している(“Federal Writers' Project” 42)。こん棒や銃は禁止されていたが、そのほかは何をしてもいいというルールで、奴隷たちもこのイベントの開催を楽しみにしていたという。拳闘が過激になりすぎたときは、奴

隷主が止めた。奴隷主の間で行われる賭けによってもうけを出すことも目的とされたため、奴隷という所有財産を失うわけにはいかなかったからだ。しかし南部再建期後のジム・クロー法の時代だったらどうだろうか。殺人ゲームではないが、ラルフ・エリソンは『見えない人間』で、バトルロイヤルを描いている。そこでは奨学金を勝ち取るために、目隠しをされた黒人少年たちが白人スポンサーたちの前で、ボクシングのような殴り合いをさせられる。

『ホーム』で描かれた、殺人ゲームが賭博場になるような歴史的事実は現在まで明らかにされていないが、ジム・クロー法の時代に起こった類似した事件はいくつも思い出すことが可能である。その意味で、『ホーム』のこのゲームの場所を南部の架空の場所に置いたのは、この類の事件はどこでも起こりえたと示すうえで重要と言える。公民権が獲得されるまで、リンチ事件は各地で止むことがなかったからである。2015年に *The New York Times* をはじめとした各メディアは、人権団体 Equal Justice Initiative が行った調査結果を報道した。調査によれば、1877年から1950年までの間に4千人近いアフリカ系アメリカ人が南部でリンチによって殺害されたという。さらにEJIの創始者 Bryan Stevenson によると、リンチのうち20%は数百人から数千人の白人観衆を前にして行われた「公開行事」であり、観衆はピクニックをしながらその模様を眺めたという。このような光景も『ホーム』に描かれた殺人ゲームのシーンに見え隠れする。

フランク・マニーの名前もリンチを示唆する。「作家」は「マニー」について、困窮や貧困のエピソードしか語っていないが、モリソンは「作家」の語りの裏に、実は1955年にエメット・ティル少年が南部ミシシッピ州でリンチを受け惨殺された事件を忍ばせる。シカゴ出身の14歳になったばかりのティル少年が食料品店で白人女性に口笛を吹いて「誘った」として、店主たちがティル少年を惨殺した事件である。この店がミシシッピ州マニーという地にある。ティル少年の遺体の顔は、判別できないほどに攻撃を加えられていたが、これはまた『ホーム』でテキサスからの立ち退きを拒んで目をくり抜かれて殺された老人に加えられた暴力と同じである。だが当時このようなリンチを実行した者が刑罰の対象になることはなかった。加害者の罪がどのように裁かれるべきか、あるいは贖罪の可能性があるのかについては、フランクの朝鮮人少女殺しのエピソードであらためて問われるため、「朝鮮半島」のセクション以降で論じる。

3. 北部の「分離すれど平等」

19世紀末の、人種によって「分離」された車両をめぐるプレッシー対ファーガソン裁判で、連邦最高裁判所は車両の区別が“separate but equal”すなわち合憲であるとの判決を下した。南部のジム・クロー法を連邦裁判所が認める形となった。しかし

1954年のブラウン対教育委員会裁判では、人種によって通う学校を区別する「分離すれど平等」は違憲であると認められた。この判決の年が『ホーム』の時代背景となるが、実際には北部でも、ジム・クロウ法によってアフリカ系アメリカ人の権利は制限されていた。シアトルのロック牧師は、バスストップのカウンターには座れないだろうからと、フランクにサンドイッチを持たせてくれる。ポートランドのメイナード牧師は、フランクが宿泊を拒否されない宿の情報を「グリーン・ブック」からメモしてくれる。フランクはバスでは後部座席に座り（“dutifully sat in the last seat” H 19）、ポートランドからは黒人車両に乗り込む。ジム・クロウ法が守り切れなかった「分離」を慣習で維持する様子が、北部に行くフランクの旅でも描かれる。

「作家」が語る物語のオープニング（第2章）では、フランクはPTSDの発作で騒動を起こしたらしく、警察に捕まりシアトルの精神病院で拘束されている。モルフィネで熟睡したふりをして監視員が手かせを緩めることを期待し、明け方の4時に逃げ出す計画を立てる。所持品も十分な服もないまま、雪の中へ裸足で飛び出す。裸足で歩きまわるとは、ジム・クロウ法の時代にも危険なことだった。浮浪罪（vagrancy）で逮捕されるからだ。1972年まで続いたこの法律は、もともとは南部再建期後、解放された黒人が仕事を探しまわるのを取り締まり、奴隷に後戻りさせるような法律だった。これが1950年代半ばの、リベラルなはずの西海岸北部にいるフランクを脅かすことになる。逃亡奴隷法と同じ目的を持つ法律が、時間と地理的空間を越えて、アフリカ系アメリカ人の自由な動きを奪っている。病院から裸足で逃走することはまた、逃亡奴隷のスタート地点を示唆することになる。なぜならこのあとフランクは、シアトルとポートランドの黒人教会のネットワークで援助され、シカゴ行きの列車に乗せてもらうからだ。このネットワークを使って援助したのはフランクが初めてではない（“you not the first by a long shot” H 18）とシアトルのロック牧師は言う。2人の牧師に加えて、列車のウェイターとシカゴで世話になったビリーは、地下鉄道の活動家になぞらえられる。こうしてフランクは南部の鏡像としての北部を抜け出す。

一般的にジム・クロウ法は南部の法律と思われるが、北部でも有効だった。フランクはシカゴで警官に怪しまれ、身体検査をされる。シカゴで世話になったビリーの息子は、玩具の銃を持って遊んでいたところ、白人警官に撃たれ、いまでも片腕が麻痺したままである。しかし人種による「分離」や不平等は、日常的な嫌悪感のみならず、大規模な暴動へと発展する危険性をはらんでいた。差別的な待遇に対する抗議運動は、1919年の「赤い夏」と呼ばれる全米規模の人種暴動に膨れ上がった。その中でもシカゴの暴動は最も激しい部類に入る。たとえば、ミシガン湖の遊泳場に設けられた人種の境界線を越えて泳いだ少年が投石により溺死した事件は、最大規模の暴動を引き起こした。約50人が殺害され、500人が負傷した。

このように、シカゴの人種差別的な暴挙は、ジム・クロー法が規定したカラー・ラインが破られたとたんに起こった。たとえば、アフリカ系アメリカ人の大移動によりシカゴのゲットーが飽和状態になると、その一部が白人コミュニティに流れ込んだのだが、そのような家は放火や爆弾の対象となった。その中には1951年、白人居住区 Ciero に越してきたアフリカ系アメリカ人が、警官の脅しにも屈せず退去しなかったところ、4千人の暴徒が押し寄せて住まいを破壊した事件がある。『ホーム』ではこのような暴挙に抵抗を示したアフリカ系アメリカ人の登場人物は、テキサスからの立ち退きを拒んで惨殺された老人以外には描かれない。2人の牧師、ビリー、リリーなど、北部のアフリカ系アメリカ人の登場人物は、皆カラー・ラインを守って平穏な生活をしているように見える。暴動が頻発した時代背景は、「作家」の物語の中では看過されており、それが『ホーム』の特徴となっている。

居住区の問題は、シカゴからシアトルに場所を移して、リリーのエピソードに現れる。フランクと出会う前、リリーが閑静な住宅街に家を購入しようとしたとき、不動産エージェントに、人種による規制 (Racial Restrictive Covenants) があることを告げられる。結局リリーはシアトル中心部のセントラル・ディストリクトにアパートを見つけるのだが、実際ここだけがマイノリティに許されたゲットーだった。この規制は1948年には法的強制力は失っていたが、業界ではまだ、人種が入り混じる地域では不動産の価値が下がるとして、慣例的に差別が行われていた。最高裁でそれが違法だと判断されたのは1968年のことである。

リリーを通して描かれる当時の社会は、次に赤狩りとして現れる。1950年代、下院非米活動委員会 (HUAC) 主導で行われた赤狩りは、映画界をターゲットにし、庶民にわかりやすく赤狩りの厳しさを知らしめた。『ホーム』ではリリーが働いていた劇場で *The Morrison Case* の上演が阻止される。共産主義をテーマとした *The Morrison Case* は東欧のユダヤ系劇作家アルバート・モルツによる作品だが、モルツは議会での証言を拒否して投獄された、ハリウッド・テンの1人だった。『ホーム』のシアトルの小さな劇場でも、この作品を上演しようとした監督が逮捕され、劇場は閉鎖され、リリーは仕事を失う。もちろん「作家」は「赤狩り」という言葉は使っていないし、リリーは共産主義と劇場閉鎖を関連付けて考えてもいない。ただ静かに次の仕事に就くだけである。

社会的な不平等の是正を要求する共産主義は人種による不平等とも闘ったため、アフリカ系アメリカ人とのかかわりは大きい。公民権運動を支援した白人たちも「赤」として暴力やリンチの対象となった。肉体的あるいは精神的な暴力は北部にもあることを、モリスンは「作家」の描写の裏で糸を引き示している。これを解決するには劇場や映画館で平等のプロパガンダをする共産主義か、あるいは劇場の外に出て暴動を起こすしか

ない。しかしフランクもリリーも、不平等と闘う気配を見せない。

フランクやリリーの態度の対極に置かれるのが暴動だが、暴動はフランクを挑発するかのようズート・スーツの男の姿で忍び寄る。1度目はシカゴ行きの列車で夫婦が襲われた事件の直後、フランクの隣の席に無言で座り、座った痕跡も残さず消えていった。2度目はシカゴのビリーの家で、警官に撃たれて腕が麻痺した子どもと話をしたあと、ズート・スーツの男のシルエットが現れ、フランクはひどく怯える。3度目は故郷のロータスで「殺人ゲーム」の被害者を埋葬しなおすときだが、このときはフランクではなく妹のシーが見ている。いずれの場合も、人種問題が引き起こした暴力事件のエピソードの直後に、ズート・スーツの男が登場する。暴力で対抗せよ、とひそかに主張しているかのような現れ方だが、一方でフランクを無言で脅しているようにも見える。ズート・スーツはアフリカ系アメリカ人のダンディズムとして1940年代にハーレム等のゲットーで流行したオーバーサイズのスーツだが、無視されることを拒否し目立つファッションによって存在をアピールするアイテムだった。このファッションはメキシコ系の若者の間でも流行になったが、1943年ロサンゼルス兵士とメキシコ系のズート・スターとの対立が激化し、“zoot suits riot”に発展した。暴動を制圧するために、警察がメキシコ系アメリカ人ばかりを逮捕したことが論争となった一方で、ズート・スーツの暴力的なイメージも定着した。フランクが暴力の象徴であるズート・スーツの男に付きまといられているように感じるのは、朝鮮半島での少女殺しが大きく影響していると思われる。ズート・スターが対抗したのは人種差別主義者の暴力に対してだった。つまりフランクも、ズート・スターに攻撃される側の人間になってしまったことを認識しているからこそ、その姿に怯えているのではないだろうか。少女殺しによってフランクが知ったことが、『ホーム』でフランクがたどり着く終着点と考えられる。その事件がどんな真実をフランクに見せ、トラウマを引き起こしたのかを次に論じる。

4. 朝鮮半島への西漸運動

故郷のロータスはアフリカ系アメリカ人の貧しいコミュニティだったが、テキサスを追われて来た身にとっては、安心して眠れる場所があるだけで満足しなければならない。

Having been run out of one town, any other that offered safety and the peace of sleeping through the night and not waking up with a rifle in your face was more than enough. (H 84)

ティル少年が夜中に銃を突きつけられベッドから引きずり出されたように、「顔に銃を

突きつけられて目が覚める」ことさえなければ、平穏な生活といえた。だが所有できるものも、目標も何もない、冒頭でフランクが回想したような、いわば囲われた種馬場の美しく勇壮な牡馬の状態だった。息が詰まる町で、未来のない生活になかば敵意を感じ、フランクは幼馴染の2人と町を出る手段として、朝鮮戦争を選ぶ。朝鮮戦争はアメリカではじめて人種統合の部隊が採用された戦争だった。フランクはここで「アメリカ人」として西に向かうことになる。

フランクが西の地で知ったこととは何だろうか。結局のところ、アメリカ軍という柵の内側でその意味も知らずに勇壮にふるまうのは、種馬場の牡馬と同じだった。フランクは、戦闘に身を置くことで「生きている」気がし、そこには目的があると思っていた。それは反戦の主張もせず、幼馴染や戦友を殺したアジア人に憎悪を募らせたことからわかる。つまりフランクは、アメリカがかつてインディアンを退治しながら西に向かったのと同様に、朝鮮半島まで進攻してアジア人を殺すことに疑問を持たなかったのである。当初フランクはそれに気づかなかった。

Battle is scary, yea, but it's alive. Orders, gut-quickenning, covering buddies, killing — clear, no deep thinking needed. Waiting is the hard part. (H 93)

このことは Fitz Gerald が指摘するように、任務に忠実な者 (“someone sworn to selfless service, respect, and honor” Fitz Gerald 152) は「他者」に致命的な傷を負わず可能性があることを表す。正しいか否かを考える必要はない。これはまた、シーを実験台にして研究をした Dr. ボー（シムズ）が、医学に貢献するためにシー（奴隷の女性たち）の生殖機能を奪ったことと同じである。フランクは軍隊でアメリカ人となり、アメリカを背負って立つことによってアジア人を殺した。これが朝鮮半島でフランクが知った1つめの真実だった。

だが戦闘中ではなく、何もすることがない見張り番のときに、フランクはさらに醜悪な真実に気づくことになる。兵士が出たごみの中から食糧になるものを漁りに来る朝鮮人少女を撃ち殺してしまったときである。少女の手だけが柵の隙間から地面を這い、ゴミを漁る。子どものころにシーと2人で落ちた桃を拾って食べていたことを思い出し、少女を追い返すことはしなかったとフランクは言うが、一方でその少女はフランクにとって対等な人間ではなかったこともわかる。

Each time she came it was as welcome as watching a bird feed her young or a hen scratching, scratching dirt for the worm she knew for sure was buried there. (H 94-95)

少女は毎日ゴミを漁りに来た。鉄やガラス以外なら何でも食料となった。兵士の非常食や、国の家族が送ってくれたブラウニーのかけらや腐りかけのオレンジは、物があふれる「アメリカ人」にとってはゴミだが、少女にとってはごちそうだった。それを微笑んで見つめるフランクは、テキサスを追われたときに食べるものに苦労したアフリカ系アメリカ人ではなくなっている。

ところがある日少女は“Yum-yum”と言いながら、笑顔でフランクの股間に手を伸ばしてきた。性的な誘惑に負けたフランクは、ついにその少女を撃ち殺してしまう。フランクはこの少女殺しについて、すぐには正直に告白することができず、別の兵士が殺した場面を見た、と嘘をつく。しかし、Dr. ボーの実験により失ってしまった、いつか迎えることのできたはずの赤ん坊の姿を、あらゆる事象の中に見出し弔うシーの姿を見て、フランクは自分こそがこの少女の死に責任があることに気づき、告白を決意する。そして撃ち殺した理由を次のように語る。

I didn't think. I didn't have to.

Better she should die.

How could I let her live after she took me down to a place I didn't know was in me?

How could I like myself, even be myself if I surrendered to that place where I unzip my fly and let her taste me right then and there?

And again the next day and the next as long as she came scavenging.

What type of man is that? (H 134)

自分の中にある性欲ばかりか、そのはげ口に幼い少女を利用し、その責任を死という形で少女に押し付ける。アメリカ人としての気高さを守ることは、敵であるアジア人少女の命よりも大事だったのだ。アメリカ人として遂行すべき任務に従い考えることをやめたとき、自分を苦しめてきたアメリカを、フランクは自分の中に見た。そしてまた、考えずに抹殺することも、アフリカ系アメリカ人が失望しつつ耐えた、南部白人の暴挙と同じだった。フランクは南部を朝鮮半島にもたらしたのである。

Namgung はサイドのオリエンタリズムをフランクに見る。

His experiences intertwine him with aspects of gender, race, and Orientalist nationalism. In Korea, his status as a U.S. soldier transforms him into a part of national power. He demonstrates his new-found superiority of nationality and gender by invoking them against the Korean girl who is marginalized by

her nationality, sexual objectification, and ultimately murder. (Namgung 262)

オリエンタリズムとは言い換えれば、モリスンの言う “white gaze” である。自己の優越性は「他者」を作ることで確立するという点で一致する。フランクは戦争の目的も知らず、ただカラー・ラインのない軍隊の中で、生きる実感を求めて朝鮮半島に向かい、逃げ惑うアジア人を殺し、性欲のはげ口として利用した少女を殺した。テキサスからの立ち退きを拒んだ老人を殺した男と、自分の行為に何の違いもないことに気づくことほど、フランクにとって恐ろしいことはなかった。

フランクは、アジア人が、自分の体を盾にして子どもたちの命を守る様子を見てきた。ところが逆に、娘を売る大人もいると、フランクはアジア人を非難した。アメリカ兵に少女をあてがい、その見返りに、生きていくうえで必要な食料を得ようとするからだ。しかしその非難の矛先は結局、自分自身に向かう。フランクと少女の間の生命と性の支配権は、奴隷所有者と奴隷の関係と同じに見えてくる。アメリカを振り返ってみれば、奴隷制度は国家的な人身売買だった。先祖を苦しめたそのシステムの加害者側に立ってしまったことに、フランクはアジアで気づいた。この認識が、フランクを苦しめた2つめの発見だった。

フランクはアフリカ系アメリカ人の歴史のスタート地点である南部での祖先の体験を、西に向かった到着地点でアジア人に対して繰り返した。そのため、加害者の立場を返上すべく、再び南部に戻り、アフリカ系アメリカ人としてのアイデンティティを取り戻す必要があった。アメリカ人の旅は西へ向かい、その地を征服して定住するが、アフリカ系アメリカ人の旅は、南部に戻らなければならぬことが理解できる。

Beaversはこの朝鮮人の少女の死は「誰が人間としてカウントされるか」という問題であるとするが、一方フランクがロータスで墓を作って弔うのは、「殺人ゲーム」の被害者と、戦死した2人の友人であると論じており (Beavers 224)、フランクが殺したことを問題にしていない。しかしながら『ホーム』で問題になるのは、「誰が人間としてカウントされるか」に加え、「誰に他者を征服する権利が与えられているか」、そしてその「誰か」は赦されるのか、であろう。この点については、本論の最後にあらためて論じる。

5. 南部に偏在する空白の場所

2021年にカナダのインディアン寄宿学校の跡地から200人以上の子どもの遺体が発見されたニュースが報道された。Reutersによると、このような寄宿学校での子どもの死は4千人以上に上るといふ。アメリカでも同様の事件が徐々にけにされており、コ

ルソン・ホワイトヘッドも少年の矯正施設で行われていたマイノリティの虐待を『ニッケル・ボーイズ』で小説化している。そのような事件と並んで、マイノリティを実験台にした研究が20世紀半ば過ぎまで数多く行われた。“Ugly past of U.S. human experiments uncovered”として特集したNBCによる記事には、1930年代から1970年代の人体実験がリストアップされている。アフリカ系アメリカ人や精神病患者、囚人を中心に実験が行われたという。その中でもアラバマ州タスキーギの梅毒実験は、1972年に内部告発されるまで40年続いた。

「婦人科の父」とも言われるJ. マリオン・シムズがアラバマ州モンゴメリーで奴隷の女性たちに非倫理的な実験を行ったのは1840年代のことだが、2017年にようやくけにされた。この事実の発覚はBLM運動と相まって、シムズの銅像の撤去を要求する動きに発展した。ニューヨークにあった銅像は撤去されたが、モンゴメリーには現在も銅像が建っている。だがその銅像の1マイル先には現在「婦人科の母たち」と題するMichelle Browderの作品がみられる。シムズの実験台になったことが明らかになっている3人の女性、Anarcha, Betsey, Lucyの像は、名前も知られていないそのほかの犠牲者の象徴でもある。ブラウダーはインタビューの中で、「誰もこの女性たちのことを話さないし、この女性たちが払った犠牲も、この女性たちが被った実験についても話さない。だがいま、このナラティブを、アートを使って書き換える時期が来たと思う」と答えている(“Michelle Browder, Mothers of Gynecology”)。Anarchaの像の胴体には実験の痕を物語る空洞があり、30回以上も同じ手術を繰り返された残酷さを示す。取り出された子宮にはガラスや針、はさみなど、実験に使われた道具が置かれている。捨てられた体というイメージから、材料はすべて廃材を利用したという。これは官製の歴史が讃えるシムズ像に対して、新たに提示されたもうひとつの視点、もうひとつのナラティブと言えよう。

このように、官製の歴史を別の角度から見直すことは、歴史家の仕事であると同時に芸術家の仕事でもあろう。モリスンもシムズを思わせる医師Dr. ボーを『ホーム』に登場させているが、モリスンが描くのは、実験の詳細や成果ではなく、シーの体である。シーの体は隠された歴史の証拠でもある。実験台になった女性たちの体に、ブラウダーは大きな穴を開け、手術道具をそこに並べた。シーは、二度と妊娠することがなくなってしまった体の空洞を、目に映るものすべてに見えてくる“toothless smile babies have”という言葉で表す(H 132)。これが南部における空白であり、この空白にスポットライトを当てることで、別のナラティブの存在が明らかとなる。

『ホーム』のシーの物語の中心は、どのような経緯でDr. ボーのクリニックにたどり着いたか、実験台になった傷をどのように癒していくかの過程であり、Dr. ボーの実験そのものについては描かれていない。Fitz Geraldが指摘するように、ロータスの女た

ちに介抱され回復することは、アフリカ系アメリカ人の生殖機能に対する人種差別主義的なロジックを崩すことになる (Fitz Gerald 151)。教育を受けていない女性たちがそれぞれ持ちよった、先祖から受け継いだ民間療法で、西洋医学が壊したものを癒すのである。ポリオで体が自由に動かない者や工場の事故で片目がみえなくなった者もいたが、医者にかかる権利を持たずとも、力強く生き、他者を癒す。この女性たちは、子宮を破壊されたシーの肉体の回復のみならず、精神的な傷を乗り越えるすべを教える。フランクはインタビューを受けて「作家」に語っているが、シーは誰にも聞かれていないのに自分に起こったことを女性たちに語る。“Cee described to them the little she knew about what had happened to her. None of them had asked” (*H* 121)。しかしその内容は描かれていない。語ったという事実のみが重要である。それはブラウダーの像の胴体にくり抜かれた空洞と同じで、シーの子宮にいない赤ん坊と、空白の語りが、アフリカ系アメリカ人の視点で捉えた歴史のナラティブであると言える。白人「作家」がシーの語りを空白にしたまま物語を紡ぐのは、アフリカ系アメリカ人の空白の語りをより一層際立たせる。さらにはその空白の語りを南部に置くことによって、15世紀にジェームズタウン植民地で始まったアフリカ系アメリカ人の歴史を、読者に記憶させることになる。

おわりに

子どものころに目撃した男の死の真相を知ったとき、フランクはシーを伴って種馬場で骨を掘り起こし、その骨をシーが作ったキルトに包み、丁寧に埋葬する。この作業は息子を守って死んだ男、ひいては南部で奴隷制度やジム・クロー法を生き延びた祖先に敬意を表するためばかりではない。シーが二度と身ごもれない赤ん坊、そして朝鮮人少女を同時に弔う儀式でもある。この儀式は官製の歴史に刻まれなかった無名の人たち、登場人物としても名前がつけられていないこれらの人たちを、モリスンが準備した『ホーム』すなわちアメリカ人の母国の歴史に刻む作業であろう。しかしそれによって、誰が歴史に刻まれるべきか、誰の命がカウントされるべきかはわかるが、命を奪った者は赦されるのだろうか。この儀式はフランクの少女殺しの贖罪とも受け取れるが、フランクは赦されるのか。

ロータスに帰郷したフランクは、これまで気づかなかった故郷の美しさを知る。幼いころの記憶と異なり、質素で堅実だけれども、希望にあふれた場所として描かれる。すべてを焼き尽くすような太陽、舗装されていない、歩道もない道路、そのかわりに野菜を害虫から守るために計算して作られた花壇、木の深い緑、女たちの歌声、男たちの楽器のメロディ、料理の匂い、そしてシーを回復させた女たちの力といった、生命の躍動を感じさせる描写が続く。子どものころはなるべくさぼってクビになるように仕向けた、

単調で実りのない仕事だったはずの綿摘みも、ピンクの花の美しさに気づき、先祖の心を想像することができた。

Like all hard labor, picking cotton broke the body but freed the mind for dreams of vengeance, images of illegal pleasure — even ambitious schemes of escape. (H 118-119)

しかし、「復讐の夢」があり、「違法な喜びの空想」「大胆な逃亡計画」があり、心を自由にできるから奴隷が辛い綿摘みの仕事に耐えられる、と考えるのはいったい誰だろう。赦しが欲しいのは、逆にフランクに自分を見た「作家」なのかもしれない。フランクは被害者だった自分が朝鮮半島で「アメリカ人」として加害者の立場に立ったことにショックを受けたが、そのフランクのインタビューを聞くことで、リベラルな「作家」も実は自分が非難してきた「アメリカ人」のひとりだということに気づく。その結果、「作家」は過去の罪を払拭すべく南部を新しい景色に書き換えているように思われる。モリスンのメタフィクションは、ここにたどり着くために用意されたのかもしれない。

『ビラヴィド』は奴隷船に乗った6千万の人々に捧げられたアフリカ系アメリカ人の記念碑だったが、『ホーム』はアメリカ人のために残された記録のようにもみえる。南部のジェームズタウン植民地から始まった建国の歴史、ひいては奴隷制度の始まりを見据え、南部をアメリカ人の「ホーム」とすることによって、アメリカ人の記憶に歴史を刻み付けると同時に、許しを求めるアメリカ人もその歴史に書き込んでいるといえよう。

《注》

- (1) メタフィクションに関しては、2022年8月21日の新英米文学会全国大会シンポジウムで口頭発表した内容に詳しいが、今後別の論文として発表する予定である。

引用・参考文献

- 荒このみ『西への衝動——アメリカ風景文化論』1996年NTT出版
異孝之『アメリカ文学——駆動する物語の時空間』2003年慶応義塾大学出版会
松本昇、中垣恒太郎、馬場聡編著『アメリカン・ロードの物語学』2003年金星堂
Beavers, Herman. *Geography and the Political Imaginary in the Novels of Toni Morrison, Geocriticism and Spatial Literary Studies*, Gewerbestrasse: Palgrave Macmillan, 2018.
Fitz Gerald, James. “Loving Mean: Racialized Medicine and the Rise of Postwar Eugenics in Toni Morrison’s *Home*,” *MELUS*, 46.3 (2021), pp. 140-158.
Kennedy, Rosanne. “Racialized Intimacies and Alternative Kinship Relations: Toni Morrison’s *Home*,” *Toni Morrison on Mothers and Motherhood*, eds by Lee Baxter, and Martha Satz, Bradford: Demeter Press, 2017, pp. 158-180.
Library of Congress. “Image 40 of Federal Writers’ Project: Slave Narrative Project, Vol. 16,

- Texas, Part 2, Easter-King.”
<https://www.loc.gov/resource/mesn.162/?sp=40&st=text&r=-0.044,0.008,1.082,1.24,0>
- Melville House Publishing, ed, *Toni Morrison: The Last Interview and Other Conversations*, New York: Melville House P, 2020.
- Montgomery, Maxine. “Bearing Witness to Forgotten Wounds: Toni Morrison’s *Home* and the Spectral Presence,” *South Carolina Review*, 47.2 (Spring 2015), pp. 14–24.
- Morrison, Toni. *Home*. New York: Knopf, 2012.
- _____. “The Site of Memory,” *Inventing the Truth: The Art and Craft of Memoir*, ed. by William Zinnser, Boston: Houghton Mifflin, 1987, pp. 101–124.
- _____. “Unspeakable Things Unspoken: The Afro-American Presence in American Literature,” *The Source of Self-Regard: Selected Essays, Speeches, and Meditations*, New York: Knopf, 2019, pp. 161–197.
- _____, and Bonnie Angelo. “Toni Morrison: The Pain of Being Black,” *TIME*, Monday, May 22, 1989.
<https://content.time.com/time/subscriber/article/0,33009,957724,00.html>
- Namgung, Song. “Unburying the Orientalist Gaze of an African-American Soldier in *Home*,” *ANQ: A Quarterly Journal of Short Articles, Notes, and Reviews*, 34: 3 (2021), pp. 262–266.
- NBC. “Ugly past of U.S. human experiments uncovered” Feb. 28, 2011,
<https://www.nbcnews.com/health/health-news/ugly-past-u-s-human-experiments-uncovered-flna1c9465329>
- New York Times, the. “History of Lynchings in the South Documents Nearly 4,000 Names.”
<https://www.nytimes.com/2015/02/10/us/history-of-lynchings-in-the-south-documents-nearly-4000-names.html>
- Reuters. “Remains of 215 children found at former indigenous school site in Canada”
<https://www.reuters.com/world/americas/remains-215-children-found-former-indigenous-school-site-canada-2021-05-28/>
- Rothstein, Richard. *The Color of Law: A Forgotten History of How Our Government Segregated America*, New York: Liveright P, 2017.
- Sampson-Choma, Tosha K. “Brother-Mother and Othermothers: Healing the Body of Physical, Psychological, and Emotional Trauma in Toni Morrison’s *Home*,” *Toni Morrison on Mothers and Motherhood*, eds by Lee Baxter, and Martha Satz, Bradford: Demeter Press, 2017, pp. 253–269.
- Silva, Catherine. “Racial Restrictive Covenants History: Enforcing Neighborhood Segregation in Seattle.”
https://depts.washington.edu/civilr/covenants_report.htm
- Smarthistory. “Michelle Browder, Mothers of Gynecology.”
<https://www.youtube.com/watch?v=bTHX4yW2fbU>
- Sundman, Alice. *Toni Morrison and the Writing of Place*, Routledge, New York: Routledge, 2022.
- Wyatt, Jean. *Love and Narrative Form in Toni Morrison’s Later Novels*, Athens: U of Georgia P, 2017.

「データ・情報・知識・知恵」モデルの再考

黒崎 茂樹

Reconsidering the “Data-Information-Knowledge-Wisdom” Model

Shigeki KUROSAKI

要 旨

本稿では、情報学・経営学・教育学・工学・物理学等の諸分野において様々なバリエーションで提示・提案される「データ・情報・知識・知恵」モデルについて再考する。初等・中等教育における情報教育に資するべく、日本学術会議で作成された参照基準の根幹となる情報の定義を採用する。この情報の定義は、基礎情報学の知見を踏まえた定義である。上述の諸分野で提示・提案されてきた「データ・情報・知識・知恵」モデルについて検討したうえで、基礎情報学の理論的枠組みを援用することによって、生命・生物や「AI」そして人間の発達段階と世代内・世代間の発展・進化の過程を踏まえた「知の山」モデルを提案する。本稿で提案する「知の山」モデルによって、生命・生物・「AI」・人間それぞれの「知」の様態に関する類似性・非類似性のいくつかをモデル化できる。

キーワード：情報の定義、ナレッジマネジメント、基礎情報学、生命と機械、「知の山」モデル

1 はじめに

これまで情報学・経営学・教育学・工学・物理学等の諸分野において様々な「データ・情報・知識・知恵」に関するモデルが提示・提案されている。2.1 節で本稿の議論を展開するための「たたき台」として5層循環モデルを提示したうえで、2.2 節から2.6 節で上述の学術分野において提案されてきた「データ・情報・知識・知恵」モデルにおける各層の機能や特性について整理し検討をおこなう。2.4 節では、初等・中等教育における情報教育に資するべく、日本学術会議で作成された参照基準の根幹となる情報の定義を採用することに関して議論する。この情報の定義は、基礎情報学の知見を踏まえた定義である。2.5 節では、野中・竹内（2020）で提案された三次元動態モデル SECI スパイラルを導入する。件のモデルによって知識の層が特徴づけられると本稿では主張する。3 節では、ポランニー（2003）の境界制御の原理の観点から、「データ・情報・知

「知・知恵」モデルにおける階層性と循環性について議論する。4.1 節では本稿が援用する基礎情報学の理論的枠組みについて概説する。4.2 節では、5 層循環モデルの修正点を列挙したうえで、「知の山」モデルを提案する。「知の山」モデルでは、成人の人間だけではなく、生命・生物や「AI」そして人間の発達段階と「知」の上昇スパイラル、プロパゲーションとして理解しうる「世代内」と「世代間」の発展・進化の過程を分析対象とする。それぞれの分析対象が形成する「知の山」の図式化によって、生命・生物・「AI」・人間それぞれが有する「知」の様態に関する類似性・非類似性の可視化を試みる。5 節では本稿のまとめと今後の課題を述べる。

2 5 層循環モデル

2.1 「知のピラミッド」

2.1 節では、議論のたたき台として、調査・実験・観察、データ、情報、知識、知恵の 5 層から構成される階層モデル（図 1）を提示する。

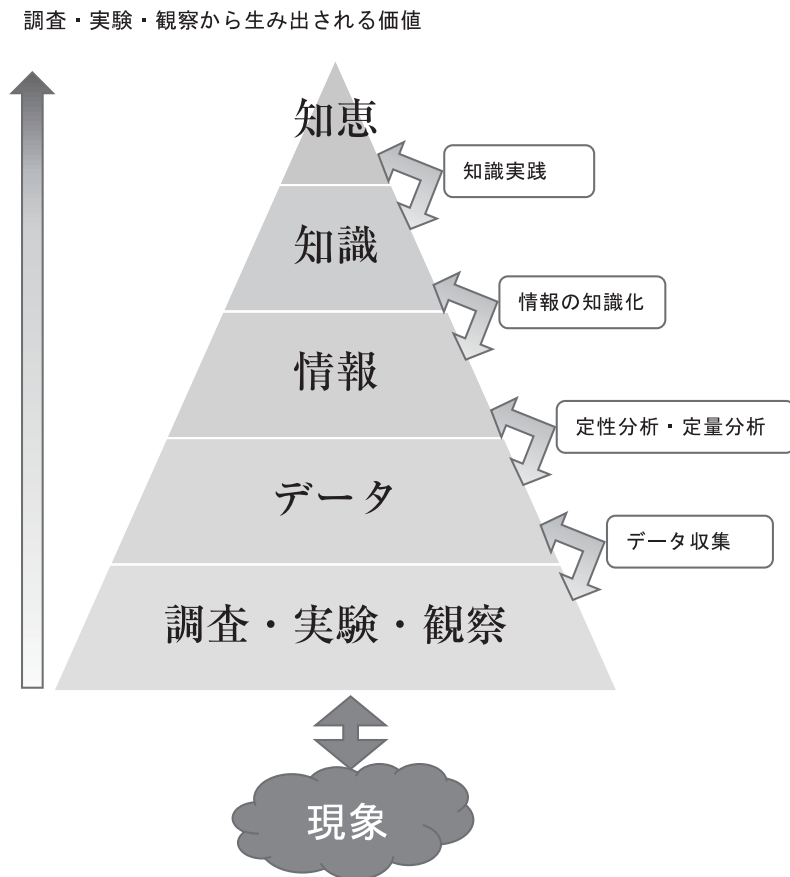


図 1 5 層循環モデル

図1のモデルは小野(2022)と梅本(2012:276)に着想を得たモデルである。小野(2022)では、マテリアルズインフォマティクスと計測インフォマティクスの枠組みにおいて、計測、データ、情報、知識、知恵の5層から構成される階層モデルを提示し、計測の層から知恵の層に向けて「計測から生み出される価値」が高まることを示している。本稿では、図1のモデルの最下層を調査・実験・観察の層として、データの層の下に配置し、小野(2022)の計測の層を、調査・実験・観察の層に変更する。『デジタル大辞泉(小学館)』⁽¹⁾によれば、調査・計測・実験・観察の意味はそれぞれ以下のとおり定義されている。

調査 物事の実態・動向などを明確にするために調べること。

計測 器械を使って、数・量・重さ・長さなどをはかること。

実験 1 事柄の当否などを確かめるために、実際にやってみること。また、ある理論や仮説で考えられていることが、正しいかどうかなどを実際にためしてみること。

2 実際に経験すること。

観察 1 物事の状態や変化を客観的に注意深く見ること。

2 『「かんざつ」とも』仏語。智慧によって対象を正しく見極めること。

梅本(2012:276)は「21世紀知識社会の経営パラダイムとしてのナレッジマネジメント」の対象であるデータ、情報、知識、知恵の4つのレベルから構成される「知のピラミッド」を提示している⁽²⁾。梅本(2012:276-277)では、データ、情報、知識、知恵をそれぞれ以下のように定義している。

データ 生命体(人間)が創り出した信号・記号(文字・数字)の羅列

情報 データから抽出された断片的な意味

知識 行為につながる価値ある情報体系

知恵 実行されて、有効だとわかり、時間の試練に耐えた知識

小野(2016:234-235)は、「情報は物理的なもので、宇宙にあるすべては情報の理論にしたがっている。存在する情報はすべて物理系によって記憶されており、すべての物理系は情報を記憶している」と定義している。

梅本(2012:276-277)では、データから情報、情報から知識、知識から知恵への一方向への変換を「知のピラミッド」に導入している。それぞれ、「分析」、「体系化」、知識を実行するという「行為」として、以下のように定義されている。

「分析」	データから情報を抽出する
「体系化」	情報から知識を創造する
知識を実行するという「行為」	知識を知恵に昇華する

梅本（2012：276-277）の「体系化」は、工学・物理学の立場である小野（2022）では知識獲得に相当し、教育学の立場である溝上（2014：58-62）では情報の知識化（情報を受け手の知識世界に位置づけ、行動に影響を及ぼす、意味のある知識とする）という作業・能力に相当する。

2.2 調査・実験・観察の層

本稿のたたき台として提示する図1のモデルの特徴を2.2節から2.6節で整理する。2.1節で言及した小野（2022）は工学・物理学の立場、梅本（2012）は経営学・社会科学の立場、小野（2016）は情報科学の立場、溝上（2014）は教育学の立場からの考察・分析である。図1のモデルは分野横断的なモデルを指向している。

図1のモデルの最下層に配置される調査・実験・観察の層は、各種のデータ収集技法から構成される。情報通信システムや計測機器が生成するログデータは、調査・実験・観察の層を経ることによって、上位のデータの層へとつながり、ログデータとして記録・保存されることによって、データの層において存在することになる。日本学術会議数理科学委員会統計学分野の参照基準検討分科会（2015：4）では、「現在、統計学が対象とする多くの問題においては、まず調査・実験や観察などによりデータを収集する」と、調査・実験・観察という行為とデータの関係について明記されている。調査については人文学系分野や社会科学系分野、実験については生命科学系分野と理工学系分野、観察については人文学系分野、生命科学系分野と理工学系分野における言及がある（前掲論文、10-13頁）。調査・実験・観察の層といった一つの層に集約することで、分野横断的な取り扱いが可能となる。なお、計測については、「近年の計測技術及び計算機技術の発展により、デジタルデータとして計測され記録されるデータが量的にも多様性においても急激に増加」（前掲論文、2頁）と、データを生成する基盤技術としての指摘がされている。

2.1節で言及した各モデルでは、暗黙的に調査・実験・観察という行為を含意していると考えられるが、本稿ではデータの層の各構成素を生み出す源泉として、調査・実験・観察の層を明示的に設定する。さらに調査・実験・観察の対象として、階梯（ピラミッド）の下に、現象、を配置し、調査・実験・観察する人間の存在を顕在化するのが特徴である。どのような環境下でどのような人間がどのように現象を調査・実験・観察するのかという設定・条件が、とりわけ科学の発展に重要である（伊勢田（2003）、ポラン

ニー（2003：106-107）、ファイヤアーベント（1981）、村上（2002）という認識のもとで、調査・実験・観察の層を図1のモデルに組み込む。

2.3 データの層

データの定義に対し、梅本（2012：276-277）では知識経営の立場から「生命体（人間）が創り出した信号・記号（文字・数字）の羅列」であると「生命体（人間）」の存在を要件とした定義を与えている。一方で、以下に引用したように、『デジタル大辞泉（小学館）』によると、データは「生命体（人間）」の存在を要件としていない。

- データ 1 物事の推論の基礎となる事実。また、参考となる資料・情報。
2 コンピューターで、プログラムを使った処理の対象となる記号化・数
字化された資料。

情報システムと社会環境研究会（編）（2019）では、「何らかのシステムによって計算・推論・伝送・制御などの処理を施すことを前提に、符号化し入力または出力されるもの」としてデータを定義する。梅本（2012：276-277）の定義と異なり、「物理的な存在として捉える非属人的な事実であるとの見方で符号的側面にウェイト」をおいた定義をデータに与えている。ナレッジマネジメントの文脈では、その対象が「生命体（人間）」である個人・集団・組織・社会である（梅本（2012：278））ので、「生命体（人間）」の存在を要件とする定義はその文脈において合理性・妥当性を有する。4節で詳述するが、別の観点から、データという概念を理解するうえで、本稿でも「生命体（人間）」の存在が重要となる。

2.4 情報の層

情報システムと社会環境研究会（編）（2019）では、「意味的内容的側面にウェイト」をおいた情報の定義を示している。

情報とは送り手が表現手段と伝送手段を使って受け手に送る“①見聞きした事柄や状況、②伝えたい意図や頼まれごと、③獲得した知識や資料、④それらを表す言葉や文章、⑤絵や意味を持った記号のパターン”など、属人的なものであるといえる。

日本学術会議情報学委員会情報科学技術教育分科会（2016：7）では、以下のとおり、情報を扱う主体によって、暗黙知と形式知を含む生命情報、社会情報、機械情報の3つ

に情報を分類している。詳しい特徴づけは4.1節でおこなう。

梅本（2012：277）は、「ナレッジマネジメントの基礎的コンセプトとして広く使われている暗黙「知」と言語・数字・図表で表現された形式「知」には、それぞれに暗黙的なデータ、情報、知識、知恵と形式的なデータ、情報、知識、知恵の4つのレベルがある」と指摘している。野中・竹内（2020：51）は形式知と暗黙知の違いを「あくまで程度の違いであり、両者は別個のものではない」とし、「暗黙知という膨大な知識の氷山の一角として見えているのが、形式知である」と述べている。

本節で議論したように、情報の定義は多様である^③。水野（2021：85）の「教育・学習の初期段階で、まずはデータと情報の明確な区別を教えることが重要である」という主張に関して、著者は基本的に同意である。しかしデータと情報の定義は、その定義が多様であるがゆえに、教場で教えられる教諭によって多様となる。そのため、本稿では児童・生徒・学生に教授されうる情報の定義として、日本学術会議情報学委員会情報科学技術教育分科会が取りまとめた「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 情報学分野」をとりあげた。将来教場で教科「情報」等の関連教科を担当することが想定される大学生に、日本学術会議が参照基準として提示している情報の定義を、教職課程教育等において情報学や情報教育学を専門とする情報担当教員が適切に教えることが要諦となる。

ここまでの議論を図1のモデルで要約する。情報通信システムや計測機器が生成したログデータは、調査・実験・観察の層を経たうえで、ログデータとしてデータの層において存在することになる。データの層から情報の層への変換として、図1では定性分析・定量分析が示されている。ログデータから記述統計学的手法・推測統計学的手法や機械学習などの機械で形式的な処理をおこなったうえで、情報が抽出される。抽出された情報によって、情報の層では、生命情報、社会情報、機械情報の区別がさらになされる。情報は「物理力でなく意味作用（意味のもつ働きや影響力）を通じて世界を変化させ、そこに価値と秩序を与える」（日本学術会議情報学委員会情報科学技術教育分科会（2016：6））ので、「データから抽出された断片的な意味」（梅本（2012：276-277））以上の意義を有することになる。情報は世界に価値と秩序をもたらす一つの源泉となる。図1のモデルの左に配置した濃淡のある矢印によって、調査・実験・観察の層からデータの層を経た情報が、層を経て変換されることによって価値が高まることを図式化している。教育学の立場から提案された溝上（2014：58-62）の情報の知識化（情報を受け手の知識世界に位置づけ、行動に影響を及ぼす、意味のある知識とする）は、図1では情報から知識への変換に相当する。

2.5 知識の層

情報システムと社会環境研究会（編）（2019）では、「科学的な論理のもとに何らかの処理が施され、得られた事象が統計学的処理に裏付けられた確実性のある結論であるならば知識とよぶ。つまり、知識とは認識によって得られ、客観的に確証された成果であり構造を持っているといえる」として客観性を重視した知識の定義づけをおこなっている。それに対して、梅本（2012：276-277）では「行為につながる価値ある情報体系」として、また小野（2016：218）では「受け入れた情報を資料として、個々の人々がそれぞれの評価・判断で作り出したもの」として主観的な定義づけをおこなっている。

本稿で提案する図1の知識の定義は、認識論・存在論に裏付けされた野中・竹内（2020：105）の人や社会のダイナミクスを内包する定義を援用する⁽⁴⁾。

ある特定の状況や文脈において、他者や環境との相互作用を通じ、人々によって創造され、実践される、正当化された真なる信念。

野中・竹内（2020）は知識創造理論を拡大して、現代的な知識創造・実践モデルを構築した。知識創造・実践モデルは、図式化すると縦軸の基底部となる認識論的な次元での相互作用のプロセスと、縦軸となる存在論的な次元での相互作用のプロセスに加えて、スパイラルに存在論的な次元を上昇させ水平方向のサイクルにも寄与する時間の次元を持つ三次元動態モデルである（野中・竹内（2020：105, 125-128））。野中・竹内（2020）の三次元動態モデルは、「固定的、静態的」と特徴づけをしている小野（2016：218）の「知識」観とは異なる。この三次元動態モデル SECI スパイラルには、さらに原動力としてのフロネシス（実践知、賢慮）が導入される。SECI スパイラルは「知識実践がどのように促進され、維持され、拡大されるかを概念化したもの」である。「知識は絶えず創造され、拡大され、実践されるとともに、知識の創造と実践にかかわる人が次第に増え、知識創造・実践のコミュニティが拡大し」、「メンバーが高次の目的を共有している知識の創造・実践のコミュニティを育むことで、スパイラルが活性化される」と論じられている（野中・竹内（2020：103-104））。この SECI スパイラルは、梅本（2012：276-277）の「知識を知恵に昇華する」「知識を実行するという「行為」」を哲学的な観点から精緻化したモデルといえよう。

知識創造・実践モデルの認識論的な次元では、暗黙知と形式知の共同化（Socialization, 暗黙知から暗黙知へ）、表出化（Externalization, 暗黙知から形式知へ）、連結化（Combination, 形式知から形式知へ）、内面化（Internalization, 形式知から暗黙知へ）という4つの変換プロセスによって新しい知識が創造される（野中・竹内（2020：107-

108))。さらに認識論的な次元では、存在論的な次元で生じる、個人間 (I)、チーム内 (T)、組織内 (O)、環境 (E) における相互作用が加わる (野中・竹内 (2020: 108-109))。

SECI モデルの存在論的な次元を上昇させ SECI スパイラルの原動力になるのが、アリストテレスによって分類された知識の三形態の一つであり、経験的な知識であるフロネシス (実践知, 賢慮) である。フロネシスの特徴は「共通善」「時宜」「人」である (野中・竹内 (2020: 144-147))。この特徴により、図 1 の知識の定義として野中・竹内 (2020: 105) を援用することは、知識は人間のみが有することに制限される。生物情報である DNA は遺伝情報を有するが知識は持たず、機械情報である 0/1 のデジタル情報自体は知識を持ってない。また、現在の技術水準を総合的に勘案すると、管見の限り、「AI」に「正当化された真なる信念」があると考える証拠はない。よって、「正当化された真なる信念」を定義に含む「知識」は「AI」にはないと本稿では判断する。ただし、この知識の定義は人間を対象にした知識の定義に適用できると考えるが、生物全体に適用するには厳しすぎる。この点については 4.2 節で議論する。

2.6 知恵の層

知恵は、小野 (2022: 14) では「科学法則, 新しい概念」と、水野 (2021: 79) では「知識の一部ではなく「創発的なもの」(emergent なもの)、実験物理学における新法則の発見に対応する」と、そして梅本 (2012: 276-277) では「実行されて、有効だとわかり、時間の試練に耐えた知識」であると、それぞれ定義されている。野中・竹内 (2020: 10) では、「知恵は高次の暗黙知であり、ものの本質を見抜くことを可能にする (だから、「ミステリアス」に見える) と同時に、変化の激しい世界に対処することを可能にする (だから、とても「ダイナミック」に見える)」と、知恵の概念を機能面から特徴づけている。「真の知恵は行動によって示される」(野中・竹内 (2020: 462)) ために、「実践によって知識が習慣になるとき、知識は知恵に変わる」(野中・竹内 (2020: 39))。そして野中・竹内 (2020: 39) は、「知恵はいつまでも古びない。知恵は何世代にもわたって受け継がれる。知恵は時間の経過に耐えられる。」と記述している。ポランニー (2003: 103) は、「一つの世代から後続の世代への知識の伝達は、主として、暗黙的なものである」と述べているが、野中・竹内 (2020) の文脈では、この「知識の伝達」は知恵の概念に相当するであろう。本稿の文脈においては、知恵の層は、4 節で導入するプロパゲーションとして理解しうる「世代内」と「世代間」の発展・進化の過程において重要な役割を果たす。

各論文において提案された諸定義における大きな違いは知識と知恵の関係にあると考えられる。小野 (2022: 14) では知識から知恵への変換プロセスとして「構造と物性の

関係式」を提示している。情報から知識への変換プロセスでは「構造と物性の因果関係」である。つまり因果関係が判明したうえでの関係式の導出と理解できる。この意味において、水野（2021：79）の主張と異なり、知識と知恵は分断された2つの概念ではないと考えられる。本稿では、野中・竹内（2020）の知恵の理解を援用する。なお、梅本（2012）の定義は、野中・竹内（2020）に包含されると考えて問題はないであろう。

3 5層循環モデルの階層性と循環性

3節では、2節で導入した調査・実験・観察、データ、情報、知識、知恵から構成される5層循環モデルの階層性と層間の循環性について議論する。

ここでは、本稿の5層循環モデルの階層性に関与する原理として、境界制御の原理（the principle of marginal control）を導入する（ポランニー（2003：73））。ポランニー（2003：66-68）は、人間の技能の階層や生物に見出される進化の過程における階層を例として、上位層と下位層のペアが系列化して階層を形づくる場合、一つは各レベルの諸要素それ自体に適用される規則、他方は諸要素によって形成される包括的存在を制御する規則によって、「それぞれのレベルは二重の制御の下に置かれることになる」ことを例証している。ポランニー（2003：73, 75）は、「一定の構造を持つすべての包括的存在の機能を、根底で支えている」境界制御の原理を「上位レベルの組織原理によって下位レベルの諸要素に及ぼされる制御」と定義している。

本稿では、5層循環モデルにポランニーの境界制御の原理を導入する。調査・実験・観察の層はデータの層から、データの層は情報の層から、情報の層は知識の層から、知識の層は知恵の層から制御を受けることを意味する。

梅本（2012）や小野（2022）のモデルでは、下位層から上位層への非循環的で一方向への展開が矢印によって示されている。この意味において、ポランニーの境界制御の原理を非明示的に含意している可能性は否定できないが、ポランニーの境界制御の原理が彼らのモデルで機能しているかは不明である。

水野（2021）は境界制御の原理が反映されると判断できるモデルを提案している。水野（2021：77, 84）では、人間の知能を知性、理性、感性、悟性といった独立した4成分に分解した「人間知能のモデル」を提案し、この4成分が、データ→情報→知識→知恵→総合・統合という一連の5つの発展プロセス（「情報の発展モデル」）の間をつなぐ4つのリンク（間）に、それぞれ独立に接続すると主張している。そのモデルを提示したうえで、「統合（経験論、帰納法）の流れ」と「分析（合理論、演繹法）の流れ」を図式化し、デカルトの理性論とカントの認識論と「人間知能のモデル化」との間に対応関係があることを見出す。「統合（経験論、帰納法）の流れ」と「分析（合理論、演繹

法)の流れ」が水野(2021)の「情報の発展モデル」で説明されるのであれば、データ→情報→知識→知恵→総合・統合の各層の間にポランニーの境界制御の原理が反映されると判断できる可能性がある。また、このモデルでは、データから総合・統合への流れを「科学の生産」とみなし、総合・統合からデータへの流れを「分析の方法」とみなすので、データから総合・統合への各階層は循環性を持つことになる。ただし、水野(2021)の本文と参考文献を確認するかぎり、デカルトやカントの著作についての記載が確認できない。そのため、水野(2021)においてカントの「感性」と「悟性」、またデカルトの「理性」をどのような概念として援用しているのか検証できない⁵⁾。

ポランニーの境界制御の原理が適用されていると判断できるモデルを提示しているのが、Tuomi(1999)である。Tuomi(1999:107-110)は、知識→情報→データ、といったこれまで検討してきた各モデルとは異なる「反転」された階層間の関係を持つ「反転された階層」(Reversed Hierarchy)モデルを提案した。このモデルでは、データの層は情報の層から、情報の層は知識の層から、知識の層は知恵の層から制御を受けると解釈できると考えられる。Tuomi(1999:107-113)は、データベースの概念モデルを定義するケースや熱物理学における計測機器を用いた計測のケース、また組織的に蓄積されたデータを複数人で解釈する場合に発生する問題をとりあげ、「反転された階層」モデルの「反転されていない階層」モデルに対する優位性について議論している。

ポランニーの境界制御の原理は生物から人間の技能の階層まで射程に入る原理である。4.1節で概説する、上位HACS(階層的自律コミュニケーション・システム: Hierarchical Autonomous Communication System)と下位HACSの間に成立する「作動上の非対称な制約(拘束)関係」を、境界制御の原理は包含すると本稿では仮定する。

境界制御の原理 ≧ 作動上の非対称な制約(拘束)関係

4 「知の山」モデルへ

4.1 基礎情報学の理論的枠組み

4.1節では、本稿で援用する基礎情報学の理論的枠組みについて整理しておく。2.4節で言及した日本学術会議情報学委員会情報科学技術教育分科会(2016)で作成された参照基準で提示された情報の定義の出所であり、本稿が依拠する理論的枠組みである基礎情報学は、「文系と理系の情報概念を包摂」(西垣(2021:83-84))する学問である。基礎情報学は、理工系に分類される情報工学(情報科学)、そして文系と理系にまたがる応用情報学、さらに文系に分類される社会情報学の3つの学問の概念ベースとなる学問と位置づけられる。よって、情報についてのすべての知を網羅するものではない。方法

論としてはネオ・サイバネティクス論（オートポイエーシス理論，ラディカル構成主義理論，機能的分化社会理論など）の一分野と位置づけられる（西垣（2012：14-16））。

基礎情報学では、「意味」を中心に情報を捉える。「情報」とは、生物にとっての「意味作用を起こすもの」であり、同時に「意味構造（記憶）を形成するもの」と定義される。この定義における「意味」とは「生き物の行為と不可分な存在」であり、「生物とくに人間にとっての価値／重要性（significance）」のことである（西垣（2021：83））。

物質科学的には開放システムとみなせる生命体において、その内部での意味形成が情報創出と結びつくことになるが、このことは生物・動物・人間を閉鎖系とみなすことによって可能になると基礎情報学では想定する⁽⁶⁾。オートポイエティック・システム（Autopoietic System）において、生命体を物質科学的に開放システムたらしめている抽象的関係である有機構成は閉鎖系と考える⁽⁷⁾。生命体ではない機械は開放系であるのとは対称的である。基礎情報学はその一分野であるが、ネオ・サイバネティクス論の中でも、開放系と閉鎖系の取り扱いに違いがある（西垣（2021：84））。「難解と言われる基礎情報学」（西垣（2012：1））の理由の一つが、この開放系と閉鎖系の区別であると著者は考える。高等教育機関で基礎情報学の「情報一般の原理」（日本学術会議情報学委員会情報科学技術教育分科会（2016：25））を採求する学生の中には、さらに教職課程教育を受けて、将来、初等・中等教育の現場に立つ学生もいるであろう。基礎情報学が定義する、この開放系と閉鎖系の取り扱いの違いに混乱する学生が一定数いることが想定されることに、情報教育に携わる教員は留意しておく必要があるだろう。

さて、「情報の意味形成における閉鎖性という生物の主観的側面を保ったまま、いかにして客観的で開放的な「情報伝達」という概念を位置づけるか」が課題となると西垣（2021：84）は指摘している。この課題を解決するために、以下の包含関係を満たす、2.4節で提示した3種類の情報を基礎情報学では定義している。

生命情報 ⊃ 社会情報 ⊃ 機械情報

人間社会におけるコミュニケーションやコンピュータ間の交信は、直観的にはそれぞれ社会情報や機械情報であると判断すると思われるが、これらは根源的には生命情報とみなされることに注意が必要である。一方で、分子生物学で用いられる DNA 遺伝情報は生命情報であるが、ワトソンとクリックの二重らせんモデルではむしろ機械情報に近いものと位置づけられる（西垣（2021：86））。「記号で明示化された生命情報であり、人間社会で通用する全ての情報を含む」という社会情報の定義（日本学術会議情報学委員会情報科学技術教育分科会（2016：7））をここで提示する。「人間社会で通用する全

での情報」に限らず、「鳥同士が交わす鳴き声」は、生命情報でもあり、同時に社会情報でもあることに留意する必要がある（西垣（2021：87））。上述のように、生命情報、社会情報、機械情報という3つの情報概念は互いに排反ではない（西垣（2012：32））。生命情報から社会情報への「転化」について、以下に西垣（2021：86）を引用する。

われわれ人間の認知活動、より精確には人間の心的システムによる観察行為を通じて、生命情報ははじめて「社会情報」に転化する。このとき記号化が実行され、記号で表された情報は顕在的な存在として立ち現れる。

つぎに、機械情報について整理する。「社会情報の記号が独立したものであり、機械で形式的に処理することが可能な、最も狭義の情報である」という日本学術会議情報学委員会情報科学技術教育分科会（2016：7）の定義をここで提示する。基礎情報学における機械情報は、「意味内容を潜在化させたまま、記号を保持運搬でき」、「記号を形式的なルールにもとづいて機械的・論理的に加工したり編集したりする方がひらかれる」という特徴づけがされる。その特徴により、人間社会において、社会情報の交換を時間／空間をこえて実行することが可能となる（西垣（2021：87））。機械情報の具体例として、0/1のデジタル情報、先述したワトソンとクリックの二重らせんモデルにおけるDNA 遺伝情報、文字、古代の狼煙が挙げられる（西垣（2012：44）、西垣（2021：86-87））。西垣（2021：88）は、日常生活における内科医の診察室での医者と患者の会話を例にして、胃痛という生命情報を基に医者と患者の会話で具現化する社会情報への転化、そして診断記録としてのデジタル電子データを病院のデータベースへ入力する作業において社会情報から機械情報への転化が起こっている事例を紹介し、情報概念の転化について説明している。西垣（2021：88）によると、以下に示すように、この転化の方向は双方向である。

生命情報 ↔ 社会情報 ↔ 機械情報

基礎情報学で定義する3種類の情報概念とその関係を解説したが、さらに、コミュニケーションを構成素とし、心的システムと構造的カップリングした階層的自律コミュニケーション・システム（Hierarchical Autonomous Communication System：HACS）を理解する必要がある（西垣（2021：88-92）^⑧）。HACSは単独システムではなく、必ず観察記述をおこなう人間の心的システムと構造的カップリングした複合システムとして定義される。心的システムは対象のオートポイエティック・システム（Autopoietic System：APS）と密接に相互作用し、その作動のありさまを人間にわ

かる記号による社会情報として記述する。こうして、対象 APS の作動（行為）を「内側から観察記述する」ことが可能となる。なお本稿の「データ・情報・知識・知恵」モデルにおいて重要な性質は、「人間の心的システムだけは例外的に自己観察という二次操作をおこなう単独システムとして成立している」という性質である。上位 HACS とみなす会社や学校などの可視的な社会システムと、下位 HACS とみなす社員や生徒のような心的システムとの構造的カップリングした複合システムを議論するわけではない。あくまで観察記述者の心的システムと非可視的な心的システム（「データ・情報・知識・知恵」モデル）との構造的カップリングした複合システムとして HACS を理解する。非可視的な心的システム（「データ・情報・知識・知恵」モデル）はその作動のありさまを、観察し記述する観察記述者によって、観察され記述されるのである。

上述の HACS の定義により、認知観察にもとづく記述は基本的に一人称的な主観的存在となる（西垣（2021：90））。本稿では「現象」と理解する我々を取り巻く周囲の環境や出来事は、身体感覚器官からの刺激を通して、生体システム（とくに脳神経の内部）にて原-情報（生命情報）が発生し、原-情報（生命情報）を素材に思考が産出された後、観察者の記述行為によって社会情報が形成され、この社会情報は原-情報（生命情報）の発生の仕方にフィードバックされる（西垣（2012：83-87））。よって、このプロセスは循環的／再帰的なプロセスである。観察記述者による対象 APS に関する記述行為が必須となる（西垣（2012：94-96））ので、そのモデル下で理解される世界観は上述のとおり、主観的な世界観となる。本稿では、「客観的な世界」は「疑似客観世界」とみなす立場をとる。ここで2つの観点から問題になるのは、「客観的な世界」の存在である。本稿では以下のように措定する。イマヌエル・カントの『純粹理性批判』における「感覚界」（現象界）と「物自体」の世界（叡智界）の対置を援用する（西（2020：128-131）⁹⁾）。人間の理性的な認識が及び、人間の主観に現われる「感覚界」に、「客観的な世界」は存在しない。人間の理性的な認識が及ばない、主観とは独立にそれ自体として存在し、知性でしか捉えられない超感覚的な世界、すなわち「物自体」の世界（叡智界）に「客観的な世界」は存在すると「措定する」（伊勢田（2003：121-123））。人間は「感覚界」（現象界）と「物自体」の世界（叡智界）のどちらに属するののかについて、西（2020：104-105）では「カント認識論において、外から見た人間の行動は、空間・時間のなかで生じたことですから現象界に属します。しかし同時に、人間の心（魂）は、私たちが認識し得ない「物自体」の世界、叡智界にも属しているとされます」と説明している。2つ目の観点は、「客観的な世界」が「物自体」の世界（叡智界）に存在し、人間の理性的な認識が及ばないと仮定すると、どのように人間は「客観」を理解するのかという問題である。いわゆる「主客一致の問題」である（西（2020：130））。西（2020：39）によると「カントはこの問題を、主観と客観を一致させるのではなく、

主観同士を一致させるという形で解決した」と解説している。つまり、「認識の客観性は、主観の外に出ることで可能になるのではなく、それぞれの主観が捉えた世界（現象界）が他者と共有することで可能になる、と発想を転換させた」と、西（2020：39）はカントによる「主客一致の問題」の解決方法を整理している。本稿では、「主客一致の問題」についてこのカントの解決方法を選択する。

HACS は人間の心的システムと構造的カップリングした複合システムとして定義されることを確認した。つぎに HACS の名称の一部として使用されている、階層性について、その定義を確認する。基礎情報学では、「作動上の非対称な制約（拘束）関係」として階層性を捉え、HACS は階層性を許す APS として定義される。西垣（2021：91-92）を基に、上位 HACS である A と、その要素システムとして作動している下位 HACS である B のケースをとりあげる。観察記述者の心的システムと、上位 HACS である A と下位 HACS である B はそれぞれに構造的カップリングし複合システムを形成している。下位 HACS である B は上位 HACS である A の構成素であるコミュニケーションの素材を提供する（西垣（2021：91））。上位 HACS である A は下位 HACS である B から提供された素材を自己準拠的に取捨選択する。上位 HACS である A による取捨選択は下位 HACS である B の作動に影響するので、下位 HACS である B は上位 HACS である A に「制約（拘束）」される。HACS 間でコミュニケーションの素材の授受が行われることが可能であるという重要な性質に慎重に注意を払う必要がある。これは上位 HACS である A と構造的カップリングした心的システムの観察であり記述である。件の心的システムからは下位 HACS である B は機械部品のように他律的なアロポイエティック・システムとして観察され記述される。一方、下位 HACS である B と構造的カップリングした心的システムは、上位 HACS である A を一種の環境として観察し記述する。観察記述者の心的システムは、構造的カップリングした下位 HACS である B は自律的な APS として作動していると観察し記述する。このように階層性の違いにより、上位である HACS と下位である HACS の間には非対称性が観察され、記述される。HACS においては観察記述者の視点の違いにより、あるシステムは自律システムに見えたり、他律システムに見えたりするという二重性を持つ。「上位 HACS の下位にある要素的な HACS 間での「情報伝達」とは、上位システムの観察者によるコミュニケーションの分析と記述によってとらえることができる」と西垣（2021：92）は基礎情報学における情報伝達モデルを整理している。HACS の階層モデルは共時的なモデルであり、人間の心的システムの上位に社会組織のシステム、そしてその上にマスメディア・システムという 3 層構造を想定している。このモデルは、コミュニケーションの短期的（瞬間的）な生起にかかわる制約／拘束関係を空間的に表現したモデルである。コミュニケーションの短期的（瞬間的）な生起にともなう情報の意味解釈は、再帰的なパ

ターンによって自己準拠的に時間をかけて形づくられる意味構造（記憶）を参照しながら、自己準拠的に実行され、さらに意味構造自体も更新され追加されていく（西垣（2021：98-99））。この意味構造（記憶）は、人間の場合には一種の「概念フレームワーク」として捉えられる。概念フレームワークの形成はマクロで長期的な意味伝播作用とみなすことができ、これをプロパゲーションと西垣（2021：100）では呼んでいる。

4.1 節の最後に、階層的自律コミュニケーション・システム（Hierarchical Autonomous Communication System：HACS）を構成する重要な概念であるが、一般的な社会生活においても使用されるがゆえに混乱を招きやすいと考えられる「コミュニケーション」という概念を定義する。HACS はオートポイエティック・システム（Autopoietic System：APS）に包含される下位概念である（西垣（2021：94））。よって、HACS の諸定義によって示される集合は、APS の諸定義によって示される集合と同じであるか、APS の下位集合になると考えられる。西垣（2021：94）は、「通常、オートポイエシス理論において心的システムの構成素は「思考（thought）」とされるが、心のなかは整然たる論理的統一体ではなく、むしろ矛盾をはらむ相異なる複数の論理モジュールが併存していると考えられる」と記述している。つまり、基礎情報学における「コミュニケーション」を、矛盾をはらむ相異なる複数の論理モジュールの相互作用から生まれる思考、と西垣（2021：94）は定義している。基礎情報学で用いられる「コミュニケーション」という概念は、APS における心的システムの構成素である「思考（thought）」の下位集合である。日常的に用いられる「コミュニケーション」とは定義が異なるので注意が必要である。基礎情報学では、情報伝達モデルは「人々が属する社会的組織におけるコミュニケーションの継続発生としてとらえられる。（中略）人々の心という HACS の作動による発言、すなわち身体の中の生命情報が転化した社会情報の記述を素材とした、社会組織システム HACS 内部での「情報創出」である。一般にある階層の HACS における情報創出とは以下の 3 部分から成り立つとされる。①下位階層の HACS からの複数の出力の相互交換、②当該階層の HACS の意味構造の更新、③両者の組み合わせによる再帰的处理、であると西垣（2021：108-109）は整理している。

4.2 「知の山」モデル

4.1 節で、本稿が依拠する基礎情報学における理論的枠組みを概説した。この理論的枠組みを援用すると、2.1 節で議論のたたき台として導入した図 1 の 5 層循環モデルを修正することになる。4.2 節では、5 層循環モデルに以下の 9 点の修正を施す。①客観的な世界における実在としてではなく、観察記述者の主観的な世界に存在するものとして、5 層循環モデルを理解する。②矛盾をはらむ相異なる複数の論理モジュールの相互

作用から生まれる思考と定義されるコミュニケーションを構成素とし観察記述者の心的システムと構造的カップリングした階層的自律コミュニケーション・システム（Hierarchical Autonomous Communication System：HACS）として5層循環モデルを理解する。③5層循環モデルのデータの層を排除し、機械情報として理解しなおす。④調査・実験・観察、情報、知識、知恵の4層から構成される各層には、各層間の移動が可能な観察記述者の視点を配置する。⑤上位階層のHACSと下位階層のHACSは非対称な構造的カップリングを形成する。⑥情報創出の機能により、動的な、ある層の下位階層のHACSからの複数の出力の相互交換、また当該階層のHACSの意味構造の更新、さらに両者の組み合わせによる再帰的处理を認める。これにより動的な「概念フレームワーク」の追加・更新が可能となる。⑦調査・実験・観察の層と情報の層は、観察される対象の心的システムとみなす。⑧知識の層は2.5節で議論した野中・竹内（2020：105）のSECIスパイラルで特徴づけられ、その定義は人や社会のダイナミクスを内包する。よって、知識の層は、観察される対象としての社会組織のシステムとみなす。⑨知恵の層では、科学法則の発見や高次の暗黙知が成果メディアとして理解される。社会組織のシステムの構成素をコミュニケーションとすると、知恵の層におけるコミュニケーションはあらゆるコミュニケーションに影響を及ぼしうるメタ・コミュニケーションとみなせるであろう。よって、知恵の層を、マスメディア・システムと本稿ではみなす。9点の修正を施したモデルが図2に示した「知の山」モデルである。

図2の右下に提示したのは、成人モデルである。このモデルでは、情報の定義の一つである社会情報を情報の層に内包する。先に述べたように、社会情報は生命情報に含まれ、同時に機械情報を含む概念である。よって、観察記述者の視点からより顕在的に機能する社会情報を成人モデルの特徴づけとするが、生命情報や機械情報としての性質が排除されるわけではないことに注意されたい。紙幅の関係上、観察記述者の移動可能な視点は、各層の左隣に配置した顔のアイコンを用いて表す。上位階層のHACSと下位階層のHACSを指し示す双方向の矢印は情報創出を表す。観察記述者が観察する対象である人間が現象を認知し、調査・実験・観察などの選択行動の結果、その内部に生命情報が生起し、それを観察される人間が観察し記述することによって生命情報が社会情報に転化する。この社会情報を含む情報の層が、上位の階層である知識の層と非対称な構造的カップリングし、知識の層から情報創出される。情報創出の機能により、知識の層は下位の層である情報の層からのコミュニケーションの素材を取捨選択する。情報の層とコミュニケーションの素材を共有した知識の層はその意味構造（記憶）を更新し追加される。情報創出される前よりも知識の層の「概念フレームワーク」は拡大することになる。さらに知識の層は上位の階層である知恵の層と非対称な構造的カップリングし、知恵の層から情報創出される。情報創出の機能により、知恵の層は下位の層である知識

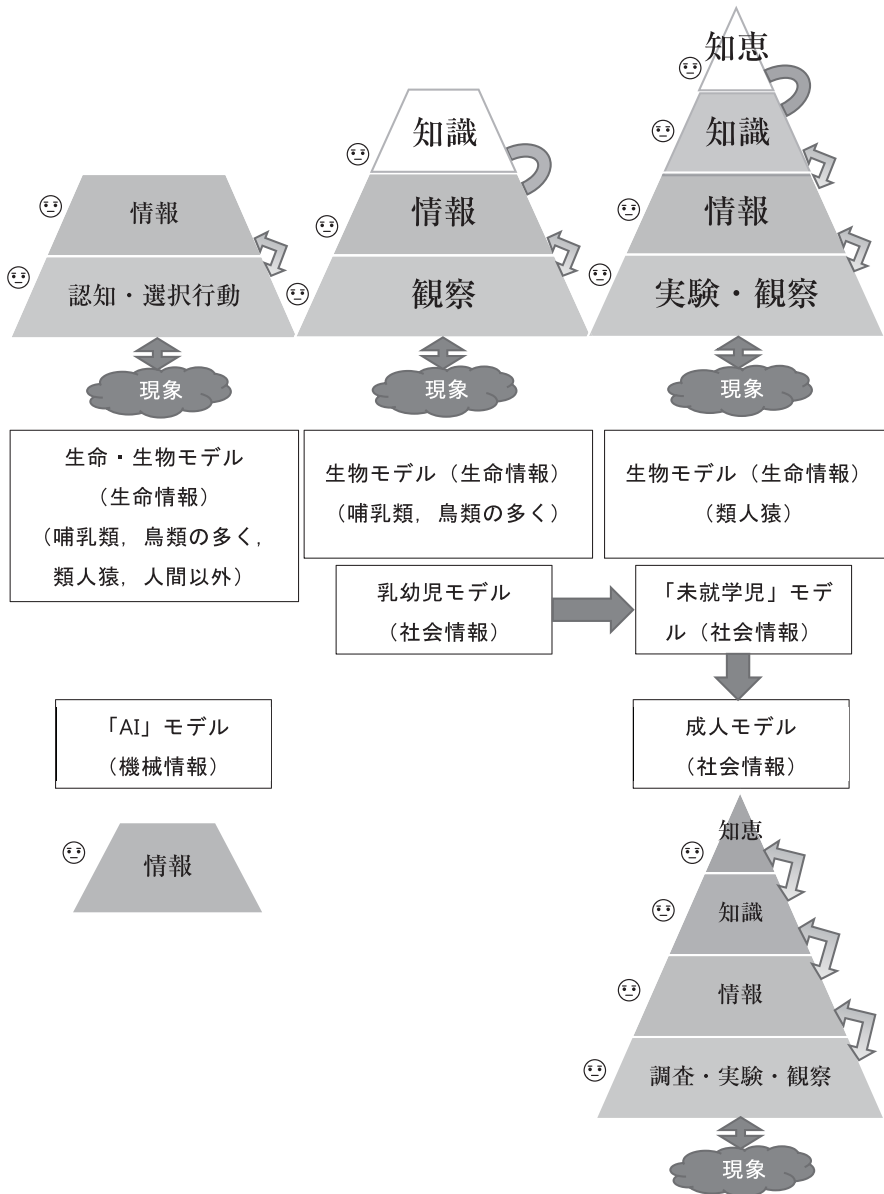


図2 「知の山」モデル(1)

(生命・生物(哺乳類, 鳥類の多く, 類人猿, 人間以外)モデル, 生物(哺乳類, 鳥類の多く)モデル, 生物(類人猿)モデル, 「AI」モデル, 乳幼児モデル, 「未就学児」モデル, 成人モデル)ただし, アイコン☺は, 「観察記述者」を示す。

の層からのコミュニケーションの素材を取捨選択する。知識の層とコミュニケーションの素材を共有した知恵の層はその意味構造(記憶)を更新し追加される。情報創出される前よりも知恵の層の「概念フレームワーク」は拡大することになる。このように成人モデルのHACSと構造的カップリングした観察記述者の心的システムでは, 成人モデルのHACSを観察し記述する。

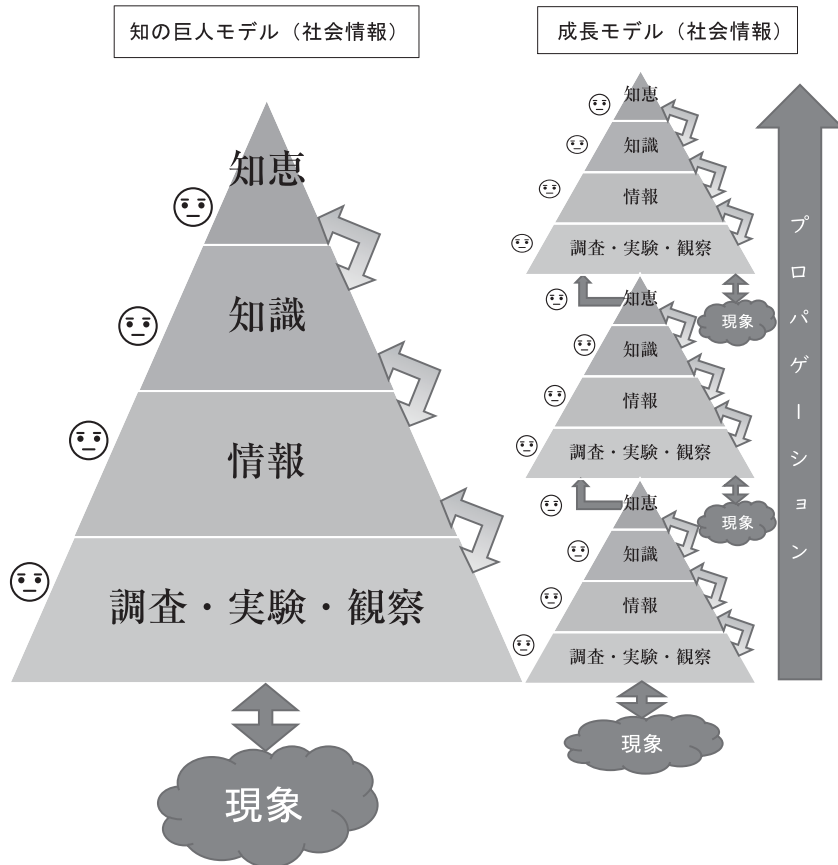


図3 「知の山」モデル(2)(知の巨人モデル, 成長モデル)
ただし、アイコン☹は、「観察記者」を示す。

図3の左に示した知の巨人モデルは、成人モデルの調査・実験・観察、情報、知識、知恵の4層が、それぞれの層におけるコミュニケーションのオートポイエーシスの機能と、情報創出の機能により、「概念フレームワーク」が拡大している。いわゆる「知の巨人」と称される人間のHACSを模式化したモデルとなる。

図3の右に示したモデルは、観察記者の心的システムから長期的な視点で観察し記述した、調査・実験・観察、情報、知識、知恵の4層から構成される観察される人間のHACSの発達過程をプロパゲーションの観点から図式化した成長モデルである。一定の期間で一つのHACSが構成される。その一定の期間で形成されたHACSの頂点にあるマスメディア・システムとして機能する知恵の層と当該のHACS全体は、質的に異なるHACSの最下層にある調査・実験・観察の層と非対称な構造的カップリングを結ぶ。この関係は、図3の右に示したモデルでは、下位のHACSの左から上位のHACSへと結ばれている矢印で示している。質的に異なる上位のHACSである調査・実験・観察の層と構造的カップリングした観察記者の心的システムから眺めると、時間的に

先行する下位の層である HACS 全体とその最上位の層である知恵の層は、他律システムとして観察され記述される。よって、情報創出の機能が働く。しかし、同一の HACS 内の場合とは異なることに注意が必要である。時間的に後続する質的に異なる上位の層である調査・実験・観察の層は、時間的に先行する下位の層である HACS 全体に作動上の非対称な制約（拘束）をかけ、さらに下位の層である HACS 内の最上位の層である知恵の層にも作動上の非対称な制約（拘束）をかける。二重に作動上の非対称な制約（拘束）が下位の層にはかけられる。そのため、質的に異なる HACS 間のプロパゲーションは難しい。ポランニー（2003：103）は、「一つの世代から後続の世代への知識の伝達は、主として、暗黙的なものである」と述べている。この成長モデルの例としては、初等教育・中等教育・高等教育の接続が考えられる。教育をうける人の名称が児童・生徒・学生と変わること象徴されるように、各教育課程は質的に異なる。小学生から中学生へ変わる時や、高校生から大学生へ変わる時は、同一教育課程内で学年が上がる時とは質的に異なる心的システムの働きが確認できると推察する。別の例を挙げると、学術分野における「パラダイム転換」や「コペルニクス革命」についても、プロパゲーションの概念を用いた成長モデルで、観察し記述できると考えられる（伊勢田（2003：80-87）、ファイヤアーベント（1981：11-12）、村上（2002：61-62））。そのモデル内の観察記述者の候補としては、たとえば、科学哲学史の研究者などが想定されるだろう。

本稿で提案する生命・生物モデルを、図2の上段に3種類提示する。「哺乳類、鳥類の多くの類、類人猿、人間以外」のモデルを図2の上段左に示した。「哺乳類、鳥類の多く」のモデルを図2の上段中央に、「類人猿」のモデルを図2の上段右に示した。「哺乳類、鳥類の多く」のモデルと人間の「乳幼児」モデル（図2の上段中央）は、「心の理論」における一次志向意識水準を持つ（中島（編著）（2012：126-127））という意味において類似した階層構造を持つと想定する。また「類人猿」のモデルと人間の「未就学児」モデル（図2の上段右）は、「心の理論」における二次志向意識水準という意味において類似した階層構造を持つと想定する。先述した人間の「成人」モデルは、「心の理論」における高次志向意識水準を持つと想定する。このように、本稿では「心の理論」の志向意識水準の違いにより、生物の多様性と人間の発達過程を細部は異なる同型の階層構造として理解する。細部の違いの一つ目は、生物モデルは HACS ではない階層構造を形成し、人間のモデルは HACS を形成する。二つ目は、生命モデルは生命情報から、人間のモデルは社会情報から情報の層が形成されるという違いである。なお、図2の上段左に示した「哺乳類、鳥類の多くの類、類人猿、人間以外」のモデルは、「心の理論」におけるゼロ次志向意識水準を有すると想定する。

生命・生物モデルに含まれる「哺乳類、鳥類の多くの類、類人猿、人間以外」モデル（図2の上段左）では、それぞれの層と観察記述者が構造的カップリングしながら、認

知・選択行動の層を下位層、情報の層を上位層とした階層構造を形成する。認知・選択行動の層と情報の層は、非対称な構造的カップリングを形成する。これは「生物が食物、異性、天敵などを認知し選択する行為を試行錯誤的におこなって、結果的に生存に役立ったとき、事後的に意味（価値）が形成される」ことを図式化している（西垣（2012：32-33））。また他の生物モデルでは（実験）観察の層が階層構造の最下層を形成するが、このモデルでは、「哺乳類、鳥類の多くの類、類人猿、人間以外」が観察という選択行為をしているとみなさずに、階層構造の最下層を「認知・選択行動」として記述している。Wellman（2014：34）は発達心理学の観点から「信念-欲求推論」（belief-desire reasoning）スキーマを提示している。そのスキーマでは、2つの過程から Action→Reaction へとつながる「信念-欲求推論」過程が描かれている。Action へつながる一つの過程は Perception→Belief→Action→Reaction であり、二つ目の過程は Basic Emotions/Physiology→Desire→Action→Reaction である。「哺乳類、鳥類の多くの類、類人猿、人間以外」は Perception からつながる Belief がないと考えられるので、Perception→Action→Reaction と Basic Emotions/Physiology→Desire→Action→Reaction の過程を経ることになる。Perception→Action→Reaction が連鎖するので、「認知・選択行動」の層が階層構造の最下層を形成すると、このモデルでは記述する。

「哺乳類、鳥類の多く」モデルと人間の「乳幼児」モデル（図2の上段中央）は、「哺乳類、鳥類の多くの類、類人猿、人間以外」モデルの階層構造の上の層に、人間の「知識」とは質的に異なる知識の層が形成される。上位層である知識の層と下位層である情報の層は非対称な構造的カップリングをする。しかし、人間の「成人」モデルの知識の層とは質的に異なるので、層の中の色を抜き、非対称な構造的カップリングを人間の「成人」モデルとは異なる記号で表している。2.5節の知識の層で指摘したが、生物のモデルにフロネシスの概念を導入することはその特徴を考えると不適切である。「哺乳類、鳥類の多く」が「信念」をもつかどうかについては今後の課題であるが、本稿では「ある特定の状況や文脈において、他者や環境との相互作用を通じ、当該生物によって創造され、実践される信念」と暫定的に生物モデルの知識を整理する。シジュウカラ同士の情報伝達において指示性や構成性といった言語機能が実証的に確認された、との研究報告がある（Suzuki（2018）、Suzuki and Matsumoto（2022））。本稿の枠組みでは、シジュウカラが視覚や聴覚を使って周囲の状況を知覚し、その知覚に刺激され体内で発生した生命情報から、指示性や構成性といった言語機能を有する「類似記号」としての「社会情報」へ転化し、その「社会情報」を群れの仲間に「情報伝達」をしていると解釈する。「哺乳類、鳥類の多く」モデルと人間の「乳幼児」モデルに同型の階層モデルを設定している根拠としては、社会的認知的理解の共通性に関する Wellman（2014：216）の指摘が挙げられる。Wellman（2014：34）の「信念-欲求推論」スキーマでは、

Perception→Belief→Action→Reaction の過程の中に Belief が参与する。よって、「哺乳類、鳥類の多くの類、類人猿、人間以外」モデルで設定した「認知・選択行動」の層ではなく、「哺乳類、鳥類の多く」モデルと人間の「乳幼児」モデルでは、最下層の層を、観察の層と設定している。

「類人猿」モデルと人間の「未就学児」モデル（図2の上段右）は、「哺乳類、鳥類の多くの類、類人猿、人間以外」モデルの階層構造の上の層に、人間の「知恵」とは質的に異なる知恵の層が形成される。上位層である知恵の層と下位層である知識の層は非対称な構造的カップリングをする。しかし、人間の「成人」モデルの知恵の層とは質的に異なるので、層の中の色を抜き、非対称な構造的カップリングを人間の「成人」モデルとは異なる記号で表している。「類人猿」モデルと人間の「未就学児」モデルに同型の階層モデルを設定している根拠としては、類人猿と哺乳類の間で観察される意図的な行動や目に見える経験に関する理解や他者に関する知識に関する Wellman (2014: 216) の指摘が挙げられる。類人猿や人間の「未就学児」は「道具」を使用し「実験」をするので、モデルの最下層を、実験・観察の層と設定している。「類人猿」のモデルと人間の「未就学児」モデル（図2の上段右）が、人間の「成人」モデル（図2の下段右）と異なるのは、未就学児がたどる基本的な心の理論スキル（メンタルスキル）の発達に関する順序性が根拠となっている（Wellman (2014: 15-31)）。

図2の左下に示したのは、「AI」モデルである。情報の層と構造的カップリングされた観察記述者から、その作動ルールを理解し必要に応じて制御できる一般的なコンピュータなどの電子機械のモデルは、他律的で開放系なアロポイエティック・システムである。そこで扱われる情報は機械情報であり、システム外部から指示された操作手続きおよび記号の形式にもとづく解釈処理をおこなう。このような一般的な電子機械のモデルとは異なり、いわゆる「AI」、たとえば深層ニューラルネットワークなどの出力結果は、数理的に事前に設定された指標に極めて近い性能を示すケースがあり、「第三次 AI ブーム」と称される状況を生み出す要因の一つとなっている。関連する研究者によって精力的にその数理的な理解が目指されているが、一般的にはその作動ルールは「よくわからないが、なぜか性能は高い」というのが現状の認識と思われる。それゆえ学術界のみならず一般社会からも「説明可能な AI」が訴求されることになる。このような観察記述者にとって作動ルールの挙動が理解できないような対象を理解するには、原島 (2018: 141-143) が導入した観察記述の仕組みについての「非律的」という概念が有用であると本稿では考える。この概念は情報の開放であり、物質的閉鎖を表す概念である。詳細な議論については原島 (2018) を参照いただくとして、現時点で「非律的」である「AI」は、関連分野の研究が進展することによって、その作動ルールが明示的・形式的に記述できるようになることが期待される。その期待が実現されれば、「AI」モデルは

一般的なコンピュータなどの電子機械のモデルと同じ「他律的な」アロポイエティック・システムとして観察記述者によって観察・記述・判断される。よって、一般的なコンピュータなどの電子機械のモデルと「AI」モデルには「不可知性」に関して違いがあるものの、本稿では同一のモデルを両者に与える。なお、「AI」モデルは、本質的に機械情報から構成される情報の層で形成される。よって、その構成素は人間のモデルで想定される「コミュニケーション」ではなく、「信号」である。そのため、人間のモデル内の「コミュニケーション」の素材として利用されることは想定可能であるが、「AI」モデル自体はHACSを形成しない。

5 まとめと今後の課題

本稿では、「データ・情報・知識・知恵」モデルについて再考したうえで、基礎情報学の理論的枠組みを援用することによって、生命・生物や「AI」そして人間の発達段階と世代内・世代間の発展・進化の過程を踏まえた「知の山」モデルを提案した。本稿で提案した「知の山」モデルによって、生命・生物・「AI」・人間それぞれの「知」の様態に関する類似性・非類似性のいくつかを示唆した。

今後の課題としては、主観的な世界観にもとづき構築された「知の山」モデルが、どのように客観的な世界観にもとづく既存の情報工学（情報科学）や応用情報学、社会情報学と結び付けられるかを検討することである。また本稿では生物に関する「知」の様態に関するモデル化の可能性を探求した。これまでの生物学における知見を整理することに加えて、近年「動物言語学」なる分野も開拓されつつあるようである。「知の山」モデルを深耕するうえで、興味深い分野と注目している。

謝辞

査読者の2名の先生方には、本稿を丁寧に査読していただき、有益なご助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

《注》

- (1) 調査・計測・実験・観察と、2.3節で提示するデータの意味の記述は、GRASグループ(2022)が提供する『Weblio辞書・百科事典』の中から『デジタル大辞泉(小学館)』を選択し、各語を検索した2022年10月26日時点における結果を引用している。
- (2) 階梯(ピラミッド)の中で、データ・情報・インテリジェンス・知識・知恵のように、インテリジェンスと知識をそれぞれ独立の層として分けているナレッジマネジメントの文献もある(野中・紺野(1999:103), Tuomi(1999:106))。
- (3) 西垣(2004:24-30)と西垣(2021:81-84)を参照のこと。基礎情報学の入門書としては西垣(2012)が挙げられる。また学修意欲の高い高校生向けのテキストとしては中島(編著)

(2012) が挙げられる。

- (4) 野中・竹内 (2020 : 51) では、マイケル・ポランニーの定義「知識はすべて暗黙知か、暗黙知に過ぎたものかのどちらかである」を引用している。以下に原著からの引用を示す。(Polanyi (1966 : 7))。

Now we see *tacit knowledge* opposed to *explicit knowledge*; but these two are not sharply divided. While tacit knowledge can be possessed by itself, explicit knowledge must rely on being tacitly understood and applied. Hence all knowledge is *either tacit or rooted in tacit knowledge*. A *wholly explicit knowledge* is unthinkable.

- (5) 犬竹 (2022 : 1) によると、「1781年に公開された『純粹理性批判』第一版の前後におけるカントの哲学活動を二分して前批判期と批判期とに分けるのが大方の見方である」とのことである。「対象構成の理論 (経験の対象を、われわれの悟性のはたらきによって構成されたものと捉える理論)」は批判期に登場した理論であり、「70年 [1770年、著者補記] の『就任論文』において批判哲学への扉がはじめて開かれ、ほぼ10年間にわたる「沈黙の歳月」を経て、81年 [1781年、著者補記] の『批判』に至ってカントの批判哲学が確立された」と犬竹 (2022 : 2) は指摘する。30年以上にわたるカントの批判哲学の樹立の過程や、『就任論文』から『純粹理性批判』における「感性界の存在者である物体」に関する取り扱いの変化 (犬竹 (2022 : 28)) を勘考すると、カントに関する文献を水野 (2021) で明示する必要がある。
- (6) オートポイエティック・システムの理論的枠組みは、神経生理学者のウンベルト・マトゥラーナと理論生物学者・認知科学者のフランシスコ・ヴァレラによって構築されたオートポイエシス理論である (マトゥラーナ・ヴァレラ (1991))。
- (7) 有機構成は構成素を自己循環的／再帰的に産出する動的なプロセスのネットワークによって与えられる (西垣 (2012 : 76))。
- (8) 「難解と言われる基礎情報学」(西垣 (2012 : 1)) の理由の一つに、HACS が挙げられる。中島 (2021) は、これから教育の現場で基礎情報学を教授しようと思っている高等学校の教諭にとって一読の価値がある。
- (9) 「物自体」の世界 (叡智界) に対する基礎情報学における位置づけや理解の仕方に関しては、西垣 (2018) および西垣 (2021 : 122-132) を参照のこと。

参考文献

- 伊勢田哲治 (2003) 『疑似科学と科学の哲学』名古屋大学出版会。
- 犬竹正幸 (2022) 「空間論から見たカント批判哲学への道」『拓殖大学論集人文・自然・人間科学研究』(47), pp. 1-28。
- 梅本勝博 (2012) 「ナレッジマネジメント」『情報の科学と技術』62 (7), pp. 276-280。
- 小野厚夫 (2016) 『情報ということば』富山房インターナショナル, pp. 234-235。
- 小野寛太 (2022) 『材料の計測の自律化』第24回情報計測オンラインセミナー資料 (2022年10月1日開催), p. 14。
- GRASグループ (2022) 『デジタル大辞泉 (小学館)』<https://www.weblio.jp/cat/dictionary/sgkdj> [『Weblio辞書・百科事典』(2022年10月26日参照)]。
- 情報システムと社会環境研究会 (編) (2019) 『ISデジタル辞典』第2版, 情報処理学会。
- 中島聡 (編著) (2012) 『生命と機械をつなぐ授業』高陵社書店。

- 中島聡 (2021) 「疑問点や質問 (階層的自律コミュニケーションシステム 2020)」 <http://www.life-machine.info/phpBB3/viewtopic.php?t=329> (2022年10月26日参照)。
- 西研 (2020) 『カント『純粋理性批判』』NHK 出版。
- 日本学術会議情報科学委員会情報科学技術教育分科会 (2016) 「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 情報学分野」 <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-h160323-2.pdf> (2022年10月8日参照)。
- 日本学術会議数理学委員会統計学分野の参照基準検討分科会 (2015) 「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 統計学分野」 <https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-23-h151217.pdf> (2022年10月8日参照)。
- 西垣通 (2004) 『基礎情報学』NTT 出版。
- 西垣通 (2012) 『生命と機械をつなぐ知』高陵社書店。
- 西垣通 (2018) 「人工知能は自分の世界を生きられるか」, 西垣通 (編) 『基礎情報学のフロンティア』東京大学出版会, pp. 159-179。
- 西垣通 (2021) 『新基礎情報学』NTT 出版。
- 野中郁次郎・紺野登 (1999) 『知識経営のすすめ』筑摩書房, p. 103。
- 野中郁次郎・竹内弘高 (著) 黒輪篤嗣 (訳) (2020) 『ワイズカンパニー』東洋経済新報社。
- 原島大輔 (2018) 「階層的自律性の観察記述をめぐるメディア・アプローチ」, 西垣通 (編) 『基礎情報学のフロンティア』東京大学出版会, pp. 137-157。
- ファイヤアーベント, ポール カール (著) 村上陽一郎・渡辺博 (訳) (1981) 『方法への挑戦』新曜社。
- ポランニー, マイケル (著) 高橋勇夫 (訳) (2003) 『暗黙知の次元』筑摩書房。
- マトゥラーナ, ウンベルト・ヴェレラ, フランシスコ (著) 河本英夫 (訳) (1991) 『オートポイエーシス』国文社。
- 水野義之 (2021) 「AI (人工知能) の理解を目的とする「人間知能」のモデル化提案と情報教育の改善」『現代社会研究科論集: 京都女子大学大学院現代社会研究科紀要』(15), pp. 77-87。
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂, pp. 58-62。
- 村上陽一郎 (2002) 『西欧近代科学』新版, 新曜社。
- Polanyi, Michael (1966) The logic of tacit inference, *Philosophy*, Vol. 41, No. 155, pp. 1-18.
- Suzuki, Toshitaka N. (2018) Alarm calls evoke a visual search image of a predator in birds, *Proceedings of the National Academy of Sciences (PNAS)*, Vol. 115, No. 7, pp. 1541-1545.
- Suzuki, Toshitaka N., and Matsumoto, Yui K. (2022) Experimental evidence for core-Merge in the vocal communication system of a wild passerine, *Nature Communications*, Vol. 13, No. 5605.
- Tuomi, Ilkka (1999) Data is more than knowledge, *Journal of Management Information Systems*, Vol. 16, No. 3, pp. 103-117.
- Wellman, Henry M. (2014) *Making Minds*. Oxford: Oxford University Press.

(原稿受付 2022年10月26日)

小浜藩英学教師，塚越酸素彦（鈴彦）の 化学，医学，英学修業

— 伝記『金蘭簿物語』の出生から渡米までの記述の検証

塩 崎 智

A Verification of the Biography of Suzuhiko Tsukagoshi, from His Birth in Ohta to His Arrival in San Francisco

— Focusing on His Study of Chemistry, Medicine and English

Satoshi SHIOZAKI

要 旨

1870年6月に横浜から出航し、サンフランシスコに向かった船に、8人の日本人が乗っていた。そのうちの1人の塚越酸素彦は、伝記が存在し、現在の群馬県太田市出身の平民で、小浜藩に英学教師として雇われていたことが分かった。

本稿では、塚越の伝記の記述内容を、出生から江戸、横浜、江戸（牛込矢来）、小浜のそれぞれの時代に分けて、関連史料を使い事実確認を行った。その結果、蘭学から英学への移行の様子、米国人宣教師等に英語を学ぶために全国から横浜に集まっていた英学生コミュニティの存在等、幕末維新期の英語を巡る興味深い史実が明らかになった。

キーワード：横浜の英学，化学医学修業，小浜藩，米国留学

はじめに

前稿では、群馬県太田市出身の小浜藩英学教師，塚越酸素彦（1842-1886）の全人生を、塚越の次男丘二郎による伝記『金蘭簿物語』の記述を基に概観し、塚越が雇われた小浜藩に残る英書と塚越の関係について、先行研究を検証する形で論述した。本稿では、時系列的に『金蘭簿物語』の内容を紹介しつつ、史料として検証する形で記述を進める。紙幅の関係もあり、今回は塚越が生まれてから1870年に渡米するまでの、江戸、横浜、江戸（牛込矢来）、小浜の各時代を扱う。史料は可能な限り原文を引用するが、内容とその理解に影響を与えない範囲で、漢字の記述等現代的なものに変える場合がある。

1. 塚越の交友関係と「恩人」

本稿が主に扱う期間は，塚越の出生から渡米までの，太田，江戸，横浜，江戸（牛込矢来），小浜に居住していた時期である。

『金蘭簿物語』では，塚越にとって重要と思われる人物，あるいは著者丘二郎が塚越の「恩人」として特別に扱っている人物が何人かいる。本論に入る前に，塚越酸素彦という人物の理解の一助になると思い，塚越と深い関係があった人物を，最初にまとめておく。

まず，『金蘭簿物語』の序の執筆を担当したのは，塚越がサンフランシスコ（以降，SFと表記）で知り合った**久保田貫一（1850-1942）**である。久保田は豊岡藩出身で，外務省，内務省等で官僚として勤務した後，埼玉県等の知事となった。久保田は官僚になる前に渡米し，SF滞在時代に塚越の世話になったようだ。本稿で扱う時期には登場しない。その久保田の序によると，塚越の「知己朋友」として，**星亨（1850-1901）**，**濱尾新（1849-1925）**，**福地源一郎（1841-1906）**が挙げられている。本稿では横浜，小浜時代を，英学教師としてともに過ごした星が登場する。

太田から江戸に出てきて，塚越が世話になった人物として，幕臣の**山岡鉄舟（1836-1888）**が登場する。江戸から横浜に移った時に，山岡から紹介されたのが幕臣の**多田元吉（1829-1896）**で，『金蘭簿物語』でふれられている塚越の碑文は多田の筆によるものである。多田は上総国富津出身で，後に幕臣となり，明治になってからは慶喜に従って静岡に移り，茶の栽培で活躍した。塚越との深い交流は，生涯に渡って続いた。

横浜で塚越は小浜藩に英学教師として雇われ，江戸の牛込矢来の藩邸で藩士に英語を教えることになる。この際，塚越を推挙したのは**小浜藩士池田正吉（生没年不明）**である。そして，塚越が近所の知り合いだった星亨に声を掛け，星も小浜藩の英学教師として雇われた。二人はその後，江戸から小浜城下に移る事になった。

塚越は1870年に渡米するが，その時に塚越が知人から受け取った，送別の書簡や詩歌が『金蘭簿物語』に掲載されている。書簡は，**塚原周造（1847-1927）**と星からの文面が引用されている。後述するが，横浜在住時代に塚越，星とともに撮影した写真が，塚原の伝記に掲載されている。『金蘭簿物語』では塚越と塚原の交際に関する記述は限られているが，塚原は横浜時代の塚越を理解するキーパーソンではないかと推察している。

『金蘭簿物語』に収録された渡米送別の詩歌の送り主の中で，**小浜藩士井阪静太郎（生没年不明）**とは「平生別懇」の間柄と書かれていて，塚越も歌を井阪に返している。前出の池田とともに，塚越と小浜を結びつける人物である。

『金蘭簿物語』の登場人物の中で、塚越と特に関係が深かったと思われる人物は以上である。太田の一平民の人脈とは思えない拡がりを見せていることが分かる。

2. 出生、新田郡太田（1842-1861）—— 学問、読書好きの平民分家の二男

『金蘭簿物語』第2章「生家と郷里」 pp. 2-6

塚越は、上野国新田郡太田町（現在、群馬県太田市）出身で1842年生である。寅之助、良之助（小浜藩に雇用されるまでの在江戸、横浜時代）、酸素（すず）彦（小浜藩時代）、鈴彦（渡米以後、すずひこ）と名乗った。

塚越家に関しては、以下の記述がある。酸素彦の塚越家は、始祖は酸素彦の祖父彌兵衛、父も同じ彌兵衛である。

「塚越家は上野国に於て新田氏以来の旧家で其の祖先は新田氏の有力な臣下の一人であった。近世に至り、寛政文化頃の当主に塚越次郎左衛門高豊と言える者があったが、其の弟彌兵衛が分れて一家をなした。是れ余が父鈴彦の祖父である。其の嗣子同じく彌兵衛は下野国佐野町平民飯田友右エ門長女シゲを娶り、二男二女を生んだ。長男を彌平と言ひ、二男は即ち余の父である。右のシゲ女は41歳で没した。その時父は僅かに13歳であったと言ふ。後、彌兵衛は後添を迎え、忠七、禮三郎及び政蔵の三子を設けた。忠七は松本家に入つて、其の姓を冒す事となつた。

塚越家は前記の如く新田氏以来の旧家で其の名は可成近郷に聞えた。徳川5代將軍綱吉公が未だ上州館林に在りし頃、其の家に臨まれ、数々の品を賜つた事がある。（中略）家柄はかく相当で資産もあつたが、幕末に及び歴代の当主が、平生華美を好み且つ頗る任侠の風があつた為財を散じて家運漸く衰頽に瀕し、父が生長する頃には著しく産が傾いた。又父の生家は本家に比すれば素より微々たるものであつた故、旁父は年少時代から何かに依つて自ら身を立てねばならぬ境涯にあつたのである。」（『金梅蘭物語』 pp. 5-6、太字は筆者による）

以上の記述の内容を順番に検証する。

(1) 塚越家と新田氏との関係

太田に関する歴史的記述をまとめた『金山太田誌』（p. 132）に、1583（天正11）年金山籠城の際、「譜代の臣塚越九八郎討死」という記述がある。

詳細な出典は不明だが、群馬の塚越家と塚越九八郎に関しては、以下の情報がある⁽¹⁾。群馬県の塚越家の大半は清和源氏の子孫とされ、初代は新田義貞の二男義興の末裔とい

う塚越尾張守と言われる。尾張守は現在の群馬県太田市新田反町町に住んで新田本家に仕えていたが，天正年間（1573-1592）塚越九八郎のとき太田市由良へ移り，地元の豪族由良氏の家臣となった。現太田市に城跡が残る金山城は由良氏の居城だった。江戸時代になると帰農して名主を務めた。

塚越九八郎と酸素彦の祖先，塚越次郎左衛門高豊の関係は不明だが，塚越家は新田氏との浅からぬ縁があり，江戸時代には士族では無く，名主という豊かな家だったことが概ね確認される。

(2) 5代将軍綱吉と太田の関係

金山城跡一帯は，江戸時代，明治時代に松茸の名産地として知られ，将軍，天皇家へ年々献上していた⁽²⁾。新田義重は徳川の祖先に当たり，家康は新田氏のために大光院を創建し，金山一帯が天領となった。この周辺の松林では，香りも味覚も優れた松茸が取れたため，一帯は御料林に指定され，その監視の守護役が置かれた。5代将軍綱吉の時に，その首役は名字帯刀を許され，80人程で手分けして御料林を監視していたと言う。

太田の金山一帯と徳川家が特殊な関係にあったことが分かるが，松茸と塚越家との関係は不明である。

なお，5代将軍綱吉は江戸で生まれ1861年に館林城主にはなったが，江戸住まいだった。綱吉と塚越家に関する記述を裏付ける史料は今のところ無い。

(3) 塚越家本家と分家

『金山太田誌』(p.152)によると，太田古百姓と呼ばれた家柄が10程あり太田の町政を掌握していた。その一人に塚越一郎が挙げられているが，塚越本家との関係は分かっていない。

塚越の祖父を始祖とする塚越家分家の具体的な職業も不明である。塚越が若かった時，農業（松茸との関係は不明）の見張りを命じられていたと『金蘭簿物語』(p.7)に書かれている。

塚越の異母弟に当たる禮三郎は，1904年3月の太田町営業便覧に，足袋商塚越屋として，久太郎とともに名前が出ている。

『金山太田誌』(p.351)に塚越鈴彦ノ碑が掲載され，施主は塚越久太郎となっている。塚越の長男は卯太郎である。久太郎と塚越家分家の関係は不明であるが，塚越が上京した後の塚越家分家は足袋商を営んでいたと考えてよさそうだ。

塚越家分家に嫁に来た女性は，地元ではなく，近隣の佐野や伊勢崎在住の女性だった。塚越分家が，広い付き合いを持った，それなりの家格であったことを示している。

3. 江戸での生活（1861-1865）— 昌平黌で漢学，幕臣山岡鉄舟，蘭方医

伊東玄朴との出会い

『金蘭簿物語』第3章「勉学」 pp. 7-10

塚越が江戸に出て昌平黌に学んだ経緯は以下の通りである。

「上野国太田は所謂天領と称して幕府の直轄地であり、且つ田舎の小さい町に過ぎないから学問の隆昌には縁がなかった。父は斯くの如き土地に平民の家に生まれたので勉学上に資すべき事情に乏しかった。唯彼の祖母チカ（伊勢崎高山氏の女）は女性ながら学問が好きで平素書籍に親しんだので、其の感化が孫たる父に及んだと言う事である。要するに父は最初寺子屋で学問の手ほどきを受けた丈であっらしい。（中略）彼は田舎にいては到底志を達することが出来ぬので、終に意を決して江戸に出て、先ず昌平黌に入る事になった。それは1861（文久元）年20歳の時である。

而も幾干もなく郷里よりの学資の支給が絶えたので勉学上、一頓挫を来した。蓋し本家の家運が傾くとともに一族の者も窮迫して余裕なきに至ったからであろう。斯くて父は遺憾ながら昌平黌を去らざるを得なかった。」（『金蘭簿物語』 pp. 6-8）⁽³⁾

昌平坂学問所入学に関しては、『金蘭簿物語』（p. 6）に塚越本家が「帯刀御免の家柄」だったからと書かれている。この塚越家の半士族扱いが金山松茸の管理に由来するかどうかは、先述したように不明である。

昌平坂学問所は、幕府直轄の旗本とその子弟の教育機関だったが、諸藩士や浪人にも門戸が開かれていた。全国から俊英が集っていたと言われる。1845（弘化3）年から1865（慶應元）年の間に入寮していた学生504人の名簿が残っているが、そこには塚越の名前は無い⁽⁴⁾。入学する前の予備校的存在だった林家の私塾の書生氏名にも塚越の名前は見当たらない⁽⁵⁾。士族では無い塚越が、士族の陪臣という形で姓名を変えて入学していた可能性はある。

昌平坂学問所では、町民、農民を問わず、講義を聞く機会も設けられていた（仰高門日講）ので、塚越はそこに参加して学んでいた可能性もある。いずれにしても、塚越の江戸での学問は漢学からスタートしたものの、実家の経済的な理由で頓挫した。その後の塚越の様子は以下の通りである。江戸に出た塚越の関心は、漢学から化学、医学、そのための英学へと移っていく。

「小浜藩に召抱えらるる迄、約七年間、あらゆる艱難辛苦を嘗めた。或る時は医師の玄関番となって薬切をなし、当時有名の漢方医（ママ）伊東玄朴の厄介にもなり、或いは山岡鉄舟の門下ともなり、新徴組の中にも加わったことがある。

初め父は漢籍を修めた。然しその志は他の方面にあった。「金蘭簿」中に明治8年8月附除籍願書の写しというのがあるが、その文中「右の者十四カ年以前郷里を去り医术修業の為江戸横浜等に留学罷在候末、英語を了解仕候廉を以て旧小浜藩へ慶應三年九月被召抱」云々とあるによれば、自ずから父の修学目的が分かる。当時維新の風雲急にして志ある青年は或いは勤王に或いは佐幕に東奔西走した。斯様の時に臨んで父は医学や化学を以て世に立とうと考えたのである。」（『金蘭簿物語』p.8）

塚越は、平民であったこともあり、幕末の尊王攘夷熱に巻き込まれることもなく、純粹に自分の好学心の赴くままに生きたようである。その対象が医学であり、塚越が江戸で門を叩いたのが、江戸の蘭方医の大家、伊東玄朴（1801-1871）だった。

伊東は江戸市中で、1833年に蘭学塾象先堂を開いた。大坂の緒方洪庵の適塾、佐倉の佐藤泰然の順天堂等と並び、全国から多くの医師や学生を集めた。しかし、象先堂の門人姓名録に塚越の名前は無い⁽⁶⁾。

塚越の江戸での経験で、次に登場するのが、山岡鉄舟と新徴組である。伊東玄朴の塾との前後関係は不明である。

上州出身の一平民である塚越は、昌平坂学問所で学ぶうちに、幕臣と交流を持つようになったのではないか。その中に尊王攘夷の思想の持ち主がいて、清川八郎（昌平坂学問所書生）や山岡との接点ができただことは十分考えられる。

幕府は1862年、尊攘派の不穏な浪士を集めて浪士組を結成することを決定した。この浪士取扱に任命されたのが、尊攘派旗本の山岡鉄舟である。浪士は、武蔵・上野・甲斐・安房・上総・下総・常陸で徴募された。塚越はすでに江戸にいたので、江戸で入隊したと思われる。浪士組は1863年、將軍上洛の警護のため江戸を発し京都に向かう。京都に着くと、幕府から江戸帰府の命令が出て大半は江戸に戻る。一部が京都に残留し後の新撰組となる。江戸に戻った浪士は諸々の問題を起し、山岡は御役御免となる。その後、浪士組は庄内藩に委託され、新徴組として再編成された⁽⁷⁾。

山岡の伝手で入隊したのなら、塚越が入隊したのは新徴組の前身の浪士組ということになる。浪士組の待遇は、二人扶持（給与米）と金十両が基本だった。山岡と同行して上京したとすると、1863年までこの仕事をしていたことになる。塚越の人生の流れから行くと、新徴組の後に、伊東玄朴の塾が来るのが妥当であろう。

山岡は剣豪として知られ、後出する塚越の恩人で塚越の碑文を書いた多田元吉も剣の

達人として知られていた。今のところ、塚越の剣の腕前に関する情報は無い。

昌平坂学問所を退学した後、新徴組、伊東玄朴の次に、『金蘭簿物語』に記述が無い、塚越の経歴を発見した。

『金蘭簿物語』の記述は、この後、「医学又は化学を研究するには是非外国語を解せねばならぬ。それで父は英語の研究を始め、目的遂行に最も便利な横浜に出た。」(p. 8)と続くが、塚越は横浜の前に佐倉順天堂で学んでいたことが分かった。

佐倉順天堂の門人帳に「上毛金山麓太田之人 塚越良三」と記載されている⁽⁸⁾。塚越の名前は、新たな門人12人の中の一人として記録されている。恐らく慶應元年時のものであるので、塚越は1865年に江戸から佐倉に行き、蘭学と医学の手ほどきを受けたことになる。在学期間は不明だが、塚越の医学に対する関心を証明する史料である。そして、ここで蘭学も学んだことが分かる。

順天堂の門人帳には2種類あるが、その一つを書き残したのは、塚越関連の重要人物の一人、塚原周造である。門人帳には小浜藩士の井汲新太郎と井坂静太郎の名前も書かれている。井坂は冒頭で触れた、塚越と深い関わりがあった井阪と同一人物で、井汲は、塚原から塚越への惜別の書簡に、「過日井汲氏より君の書簡拝受仕候」(『金蘭簿物語』p. 17)と書かれている。塚越、塚原、小浜藩士井阪、同井汲との交流はこの佐倉順天堂時代に始まっていたと考えていいだろう。

詳細は横浜時代で触れるが、ここで塚原の伝記『塚原夢舟翁』を参照し、塚越と特に関係が深い塚原の佐倉順天堂前後の人生について見ておく⁽⁹⁾。塚越と塚原は共通点が多く、点でつながっている塚越の人生を塚原は線で結んでくれる。

塚原は、茨城県結城郡の現在の千代川村に1847年に生まれた。塚原家は士族ではなく地元の水運を活かした富裕な穀物商だった。塚原は、塚越と同じように学問好きが高じて、昌平覺入学を目指して江戸に出奔したが、士族ではなかったため入学を認められなかった。その後父親により呼び戻され、医学なら就学を許可するとのことで、佐倉順天堂に入学し蘭学を学ぶことになった。塚越の入塾と同じ1865年だが、塚越よりも入学は早かったようだ⁽¹⁰⁾。

10か月ほど学んだ時、師の佐藤尚中が、將軍上洛に随従することになったため、塚原は退学した。その後、江戸に出て、親族の士族の寺田姓を名乗り開成所に入学し、教授心得となった。恐らく1866年初めには横浜に移り、横浜在住のタムソン(David Thompson, 1835-1915)に英語を習う。そして、この横浜時代に、塚原、塚越、星の3人は一緒に写真に納まっている⁽¹¹⁾。

4. 横浜での生活（1865, 1866年頃-1867年）— 英語との出会い

『金蘭簿物語』第3章「勉学」 pp. 8-10, 第4章「渡米」 pp. 19-21

塚越が佐倉順天堂に入学したと考えられるのは1865年であるので，横浜に移ったのは1865年の暮れか1866年の始め頃であろう。

佐倉は，塚越が蘭学・医学の道に入ったという点で重要であるが，後の渡米のことを考えると，英学に入るこの横浜時代はさらに重要である。しかし，『金蘭簿物語』は横浜時代のことは決して多くを語っていない。

横浜時代に関する記述は2か所ある。前半は塚越の横浜での生活に関する記述（第3章）で，後半は，横浜での星との出会いと小浜藩に雇われた経緯の説明（第4章）である。まず前半（第3章）の記述を以下に引用する。

「医学又は化学を研究するには是非外国語を解せねばならぬ。それで父は英語の研究を初め，目的遂行に尤も便利な横浜に出た。其の年月は明確ではないが，前後の関係より推測して慶應元年頃と見て差支えあるまい。（中略）当時横浜には鐵の橋（現今の吉田橋）に閘門を設け，其処に警備隊が駐屯していた。其の隊長は多田元吉と言ったが，父は山岡鉄舟の紹介で此の人に頼り，兵員に加えて貰った。そして勤務の余暇，外人に就いて，英語を学ぶ事にしたのである。斯くて父は刻苦を積み，英学上相当の進歩を得た。折しも若狭小浜藩（現当主伯爵酒井忠克氏）に於いて時勢の進運に顧み英語教授を為すべき人物を聘する為め藩臣池田正吉を横浜に遣したのに会い，父は此の人の推挙で小浜藩士となり，不取敢東京藩邸（牛込朱来）で英語訓導に従事する事に成った。時に慶應3年9月，齡26歳であった。」（『金蘭簿物語』 pp. 8-9）

塚越が横浜に来たのが1865年か1866年初頭で，小浜藩に英学教師として雇われたのが1867年であるので，2年弱の英学修業で，英語教師が務まる程度に上達したということになる。まず，塚越が横浜で最初に世話になった多田元吉についてまとめておく。多田は冒頭で取り上げた恩人の一人である。

(1) 多田元吉（1829-1896）

塚越は，横浜でも山岡の世話になっている。山岡から吉田橋の警備隊長，多田元吉を紹介され，職を提供される。多田は塚越の墓碑銘の選文者である。「父に対して深き理解と同情とを有し，平素，父の学識，能力を充分認めて種々相談にも興り，父が剛直で

苟も世と移らざるが如き性格を愛し敬重した」(『金蘭簿物語』 pp.76-78)と書かれている。世渡り上手では無さそうな塚越の生涯に渡る良き理解者であった。

多田もまた上総富津の平民の出で、若い時に江戸に上り千葉周作道場で腕を上げ、幕臣に取り立てられた⁽¹²⁾。平民出身で関東近県から江戸に出てきた点は塚越、塚原と共通している。多田は塚越より13歳年上である。

多田の江戸での生活についてはほとんど分かっていないが、1860年には横浜にいて、神奈川奉行所で警備の下番として勤務していた。役職は下番世話役助で四石二斗、二人扶持だった。居留地の外国領事の宿所、商館等の警備に当たっていた。塚越が横浜に出てきた1865年か1866年には、多田は定番役以上の役に就いていた。

塚越の職業に関しては、『星亨とその時代1』に塚原周造の談話(p.52)が掲載されている。そこでは、吉田橋の関門ではなく、横浜運上所下番と書かれている。吉田橋の関門も横浜運上所も、警備は神奈川奉行所の管轄だった。警備隊の勤め先は固定していたわけではなく、多田と同じように、塚越も、運上所や関門、商館や外国人居留地の警備もしていたのだろう⁽¹³⁾。

塚越は平民出身でありながらも、半幕臣のような職場、人間関係の環境で働いていた。警備職という仕事柄、外国人から危険な浪人と誤解されることもなく、横浜在住の外国人にも接しやすかったと思われる。

(2) 横浜での英学修業 — 横浜英学生コミュニティ

多田の口利きで、警備の仕事を得た塚越は、非番の時間に、外国人に英語を習ったという。この横浜での英学修業に関して、その背景的情報を提供してくれるのが、塚原周造である。

『金蘭簿物語』によれば、1865年頃、塚越が江戸から横浜に出てきた理由は医学や化学のための英学修学である。佐倉順天堂で学んだのは、蘭学と医学だったが、ここから英学修業に進む経緯はどうなっていたのだろうか。

1859年に開港した横浜には神奈川居留地や外国から、宣教師、商人、兵士などの外国人が続々と集まり、1865年には外国人居留地は急速に発展しつつあった。居留地在住の外国人や通訳から英語を学ぶために、英学修業希望の日本人も横浜に集まってきていた。

佐倉順天堂を出て蘭学・医学から英学修業に変わった例としては、すでに何度も登場している塚原周造が挙げられる。ともに順天堂で学んでいた塚原の影響で塚越も英学に転向した可能性がある。

慶應元年に順天堂の師、佐藤尚中が江戸に上ることになったので、塚原も江戸に出て、親戚の幕臣寺田氏を名乗り、開成所に入学し英学を学んだ。刻苦勉励の甲斐あり、世話

小浜藩英学教師、塚越酸素彦（鈴彦）の化学、医学、英学修業心得から助教授に任ぜられた。この頃の塚原の関心は医学を離れ航海術にあり、幕府の海軍操練所に入学を希望していたが、幕府瓦解の兆しもあり諦めざるを得なかった。

開成所もほぼ閉鎖状態になり、塚原は航海術修業のため横浜に赴き、横浜運上所の渡辺清次郎と知り合った⁽¹⁴⁾。渡辺は塚原の航海術志望を聞き、「太平洋汽船会社のアルウイン」に取り次ぎ、塚原とアルウインは互いに日本語と英語を教え合うことになったと『塚原夢舟翁』に書かれている⁽¹⁵⁾。

その後まもなく、アルウインの世話で、米国人宣教師バラ（James Hamilton Ballagh, 1832-1920）にも日本語を教えることになり、塚原はその傍ら、タムソンに英語を学んだ。『塚原夢舟翁』には塚原とタムソンが二人で撮った写真が掲載されている。バラとタムソンはともに横浜英学所で日本人に英語や数学を教えており、塚原はその最上級クラスにいたという⁽¹⁶⁾。

前稿でも触れたが、ここでまた、横浜英学所で誰が、いつ、どこのクラスで学んでいたか、という問題が出てくる。これに関しては、タムソン等横浜で英語を教えていた米国人宣教師に詳しい、中島耕二氏が次のように状況をまとめている。

「横浜では星亨、益田克徳、鈴木貫一（バラから受洗）、塚原周造らは皆バラやタムソンのところで出入りし英語を学びました。彼らは横浜英学所、ヘボン塾、タムソン塾など掛け持ちで出入りしていました。ヘボン先生やブラウン先生は敷居が高いため、バラやタムソンなど年齢の近い先生に就いたのですが、バラは若干アカデミック面で難があり、畢竟彼らはタムソンのもとに集まってきました。」（中島耕二氏による）

横浜英学所を現代の学校と同じような、独自の校舎と教室があり、生徒管理などもきちり行われていた学校と考えること自体が、事実の把握の障害になっているかもしれない。ヘボン（James Curtis Hepburn, 1815-1911）、バラ、タムソン、ブラウン（Samuel Robbins Brown, 1810-1880）には、個人的に指導を受けていた日本人もおおり、授業料無料ということもあって、横浜英学所の正式な学生と個人指導の学生との垣根は低かったのではないだろうか。英学教授を求めて門を叩いた者は、誰でも学べるような環境だったと思われる。鳥羽藩医の息子、安藤太郎（1846-1924）の1863年の談話には次のように書かれている⁽¹⁷⁾。

「英学の先生は暁の星ほどもない。こっちは習いたいが、一途で方々を探すと、横浜に米国人が4人いて親切に教えてくれるとの話、行暮れた旅人が燈火を見付けたかのよう、さっそく出掛けた。（中略）そこでいまの税関や県庁のあるあたりには、

運上所と称えたもので、そこへ米国人を尋ねると、見る影もなき長屋に4人が棲んでいて、破れ畳の上で教えている。もともと耶蘇教伝道の目的で渡来したもので、それには語学の教授をもって青年を手馴づけるのが早道であると、門を訪ずるものは喜んでこれを迎え、無月謝同様の厚遇をした。その先生がヘボン君・バラ君・タムソン君・ブラウン君でヘボン君はいまに壮健でいられる。(中略) 当時わたくしどもの仲間には大鳥圭介・星亨・沼間守一・益田孝・林薫・三宅秀それに先年鎌倉で溺死した田中館理學博士ら、いわゆる後年の名士がいた。」

この安藤太郎が、順天堂の名簿の「志州鳥羽藩 安藤堯氏」と同一人物だとすると、年代的には問題があるが、塚原、塚越と同じように順天堂の蘭学・医学から英学修業を目指して横浜に来た、ということになる。土佐の調査によると、佐倉順天堂の門人の中には、順天堂から横浜に移った例が次のように挙げられている。

- ① 高埜周道（下総猿島郡出身）慶應元年から明治3年まで順天堂に学び、その後、横浜でヘボンに学ぶ。明治4年、帰郷して開業。(p. 257)
- ② 村治謙造（江州膳所藩）文久3年から順天堂に学び、後に横浜でアメリカ人宣教師ブラウン、タムソンに英語を学んだ。(p. 258)

このように横浜に集まってきた英学志望者に関しては、塚原がさらに貴重な情報を提供している。アルウインとの日本語・英語交換授業の後、次のように伝記の記述は続く。

「居留地百一番の英国牧師ベレー氏が、万国新聞というのを発刊するから翻訳を頼みたいと君（筆者注、塚原）に申し込んで来た。それ以来君は一週間五円の報酬を受け、自修の傍ら万国新聞に執筆することになった。(中略) その内に越後からは小林雄七郎氏が来る。江戸からは星亨氏等が君を頼ってやって来るという有様で、余り広くもない君の借間は頗る狭隘を告げたから、どうしても引っ越さなければならなくなった。そこで北方村の東漸寺の本堂を借り受け、三人で自炊生活を営むことになった。そうして君は小林氏をバラーに周旋し、また星氏を百一番に入れたりして生活費の補充を計り、君は引き続きアルウイン氏と日英語の交換稽古をしていた。」(『塚原夢舟翁』 pp. 9-10)

「万国新聞」は、英国領事館付の宣教師のベイリー (Michael Buckworth Bailey, 1827-1899) が1867年1月中旬に横浜で発行した新聞である。当初は大槻文彦が翻訳を行っていたが、6, 7号で辞めて、後を塚原周造に譲った。大槻は辞書『言海』で知られ

小浜藩英学教師、塚越酸素彦（鈴彦）の化学、医学、英学修業するが、バラやタムソンに就いて英学を習っている。大槻もまた、横浜に英学を学びに来ていた英学志望者だったが、塚原との交流の有無、程度は不明である⁽¹⁸⁾。

ここには、塚原と小林、星の3人の共同生活と書いてあるが、塚原のもとに、諸藩の英学生が次第に集まり、東漸寺の本堂や客殿も一杯になった。小林雄七郎（1846-1891）は米百俵で知られる小林虎三郎の弟で、戊辰戦争敗北後、江戸に出て1870年慶應義塾に入学し、その後、大蔵省紙幣寮の官吏となった。塚原と小林、星以外にも、塚原のもとに集まってきた英学生としては「会津の野口、彦根の鈴木、大阪の大井憲太郎、雲州の飯塚修平、加州の林賢徳、姫路の長谷川規二郎、羽州酒井の大井等の諸氏で、何れも各藩から選ばれた有為の青年だった。」（『塚原夢舟翁』p.11）という。この中には、欧米に留学した者も少なくない⁽¹⁹⁾。

こうして東漸寺に、塚原を中心とした、全国から集った英学生のコミュニティが成立していたことが分かる。彼らは、各自、タムソンやバラ、ヘボン等に、横浜英学所で、あるいは個人的に英語の指導を受けていた。塚原関連史料に塚越の名前は出てこないが、塚越も、佐倉順天堂から横浜に移り、塚原等と英語を外国人宣教師等から学んでいたことは容易に想像される。

星亨の研究者である有泉貞夫も、塚原を中心とした、この横浜英学生コミュニティが存在し、塚越もその一員だったと示唆している。

「塚原の他洋書を齧った二、三の失業青年と星は、市内の寺で共同生活をはじめた。このころ星は、塚原の紹介で、宣教師が発行していた新聞の翻訳などで生活費を得ていたが、このグループに、横浜運上所の下番をするうちに英語を習い覚え、若狭小浜藩に召し抱えられた上州出身の塚越良之助（酸素彦）がいた。」（『星亨』p.14）

このように、幕末の1864年頃から、横浜には英学修業目的に、続々と青年が集まっていたが、その中には、順天堂で蘭学・医学を学んでいた者も少なくなかった。1865年、順天堂の師、佐藤尚中が江戸に呼びだされると、塚原のように、佐倉を去って、江戸や横浜に英学を学びに出た塾生も少なからずいたと思われる。

塚越は平民出身ではあるが、山岡鉄舟の知遇があり、横浜運上所雇いの警備員として、半ば士族的な立場にあり、塚原や安藤とともに、米国人宣教師に英語の指導を受けることに支障は無かったと思われる。

(3) 星亨との関係 — 星関連史料と『金蘭簿物語』のクロスチェック

塚越の横浜時代は、塚原を中心とする英学生コミュニティとの交流が重要だった。この中に星亨もいて、『金蘭簿物語』の第4章では、星と塚越との関係について次のよう

に記している。

「余の父は前述の如く、横浜に来て、鐵の橋関門の隊中に勤務する傍ら、英語研究に従事し、太田町の長家で自炊生活をして居た。丁度其の長家の一軒置いて隣に居を定めたのが星一家で其の為偶然父は星と相知るに至った。(中略) 学問にかけては、父の方が先輩格であった事は勿論で、後年に至っても、星の母は余の父に対して常に先生々々と言って尊敬したと言うに徴しても単なる友達関係では無かったのである。当時父は星に英語を教え、星はそれによって相当得るところがあったと聞いている。而して父が酒井侯に召し抱えられるに及び、星を助手として伴い、牛込矢来の藩邸に兩人同居して自炊生活を続けた。一人が豆腐屋に走れば、一人が八百屋に行くと言う様な具合で極めて親密に日を送ったのである。」(『金蘭簿物語』 pp. 20-21)⁽²⁰⁾

これによると、年長である塚越が、星の英語の指導をし、塚越が小浜藩に雇われると、星も助手として雇ってもらったと書かれている。両者の関係を星亨関連史料によって以下に検証する。

星の横浜時代の英学修業の様子を語る一次史料は限られている⁽²¹⁾。星自身の自伝、日記の類は無く、星研究には欠かせない『星亨とその時代 1』に引用された、星関わった人々の回想が主な史料となっている。本書に回顧談が引用された人物名、星との関係、史料筆記の年代、回想の主な内容は以下の通りである。

「渡辺顕哉君談話」 本人検閲、明治 38 年 中野寅次郎筆記 (pp. 29-32)

横浜に転居した星一家が、横浜在住の蘭医、渡辺貞庵に星を預けた。顕哉は貞庵の養子である。星は顕哉から四書五経の素読、『解体新書』、『医範提綱』等の指導を受けた。

「渡辺牧太君談話」 本人検閲、明治 42 年 5 月 野沢鷄一筆記 (pp. 32-34)

牧太は渡辺貞庵の息子。星は上記のように貞庵に弟子入りしていた。牧太は、横浜英学所に通い、修学した内容を星に伝授した。やがて星自身も、奉行附医員の門人として就学を許された。横浜時代の記述が詳しい。

「男爵前島密君の先生談」 明治 42 年 6 月 同君寄稿 (pp. 36-41)

星が幕臣小泉家の養子となり、横浜から江戸の牛込矢来町に引っ越した後、英学、漢学の指導を前島から受けた。

「何礼之君談話」 本人検閲、明治 42 年 5 月 野沢鷄一筆記 (pp. 41-42, pp. 56-58)

前島が神戸開港事務のため兵庫転勤となり、その後、星の英学指導を何が継いだ。

何によると当時、星は開成所に通い、英語世話役心得という役についていた。何は海軍伝習所の教官になり、星も何の推挙により海軍伝習所生徒英語世話役となった。星が小浜から大阪に移った後の記述も詳しい。

「塚原周造君談話」 明治 38 年 中野寅次郎筆記 (pp. 51-53)

塚原と星は、慶應元年か 2 年に開成所で知り合った。星の小浜藩雇用の経緯が語られている。塚越酸素彦も登場する。「塚原君提出の三人の写真」(p. 51 左上隅)とあるが、写真は掲載されていない。この写真は塚原の記述によると、星の小浜藩就職が決まった時に撮影されたもので、『塚原夢州翁』に掲載されている、星、塚原、塚越が写っているものではないだろうか。

「池田正吉君談話」 本人検閲、明治 38 年 中野寅次郎筆記 (pp. 53-56)

池田は『金蘭簿物語』によれば、塚越の小浜藩就職に関わった人物である。星と池田はかなり密接な関係にあったようで、星に関する私的情報、小浜時代と小浜脱出時の星の動向が詳しく語られている。

「松田周次君談話」 本人検閲、明治 38 年 中野寅次郎筆記 (pp. 58-62)

松田は何の塾で星とともに学んでいた。星が小浜から大阪に移った後の記述が詳しい。

このように多くの史料が、星の横浜、小浜、大阪在住の英学修業時代を網羅している。問題は、談話の聴き取りが行われた時期が、幕末維新时期から 40 年近く経過している点である。記憶も不正確で、個々の談話の内容に矛盾する点が見受けられる。史料間のクロスチェックが必要である。本稿では必要な部分に関して、可能な部分のみ史料照合を試みる。

まず、星の横浜時代における塚越との関係に関する記述を採り上げる。

先述した、タムソンに詳しい中島耕二氏から渡辺牧太が横浜英学所に入学したのは 1864 年ではないかとの指摘を受けた。星の入学もそれ以降ということになり、星が横浜英学所で学んだ期間は 2 年程度ということになる。塚越は、その約 1 年後に横浜に来たので、横浜生活と英学修業は年下の星の方が先輩ということになる。

この横浜時代の星の英語力に関しては、二つの情報がある。一つは星が、横浜英学所の最下級クラスの学生であったことである⁽²²⁾。もう一つは、前島の談話の以下の部分である。

「亨君は余が家に初めて来たりたる時は未だ英の文法をも知らざる初学生なりしが、その理解力は非常なものなりし。余の許に在りしうちに君の修し得たる英書は英吉利文典、クェケンボス、万有究理、ハイスクール・ゼオグラヒー等にして、その頃

にはなかなか学力高等の程度なり。」(『星亨とその時代1』p.37)

前島の記憶が正しければ、前島に指導を受ける前、つまり星の横浜英学所時代の英語力は初心者レベルだったということになり、最下級クラスという情報とも一致する。

『金蘭簿物語』でも、塚越が星に英語を指導したとある。星は1865年で満15歳、塚越は8歳年上である。星が英学所の最下級クラスで英語を学んだ1年程後に、蘭学を学んだ塚越がやってきた。星の英学のモチベーション次第だが、『金蘭簿物語』に書かれているように、蘭学から英学に移り、しかもモチベーションが高かった塚越の方が、英語力では星の上だったことは考えられる。

星関連史料で興味深い点は、塚越を小浜藩が雇った時に名前が出てくる池田正吉の談話が掲載されていることである。残念ながら、塚越雇用の件は書かれていないが、塚越は星の雇用の際に登場する。

「しこうしてここに下総の人塚越鈴彦と云うものあり。当時小浜藩に抱えられ少禄を食み居りしが、当時の藩邸は牛込矢来町に在りて塚越もまた藩邸の近傍に住居し居り、一日来たりて曰く、貴藩は有為の青年を抱えんとのご計画なるが、ここに一人あり、この人物は果して物の役に立つや否やは知れざれども、兎に角気象は面白き男なり、いかんと。予はすなわち塚越の紹介により初めてその青年と会見したり。これすなわち星亨君なり。」(『星亨とその時代1』p.53)

塚越は上州出身で、池田は、下総出身の塚原と混同している可能性がある。『金蘭簿物語』における、「塚越=星の小浜藩雇用の恩人説」を裏付ける記述である。松田周次の談話でも、「同年五月頃に至り若州小浜藩の塚越酸素彦と云える人、藩に英学校を建てるが為に君を教師として、招聘せんと請い来たり、君は之を承諾して同藩に赴くこととなれり」(『星亨とその時代』p.59)と、星の雇用に関する塚越の直接的関与について述べている。

しかし、小浜藩による星雇用に関しては、『星亨とその時代1』所収の談話には複数の異説も見られる。以下に簡潔にまとめておく。

前島密談話：前島の門生の小浜藩士日比野勉の周旋で小浜藩が雇用。(p.40)

塚原周造談話：塚原の開成所での知り合いの小浜藩士井汲新太郎が、塚原に小浜藩雇いの洋学の師を求めて相談、塚原が星を紹介して小浜藩が雇用。(p.52)

何礼之談話：星に就いて英学を学んでいた小浜藩士日比野勉から、小浜藩英学教師

小浜藩英学教師、塚越酸素彦（鈴彦）の化学、医学、英学修業
募集の話を薦められ、何の同意もあり小浜藩が雇用。(p.56)

いずれも小浜藩士である日比野と井汲が関係している。井汲はすでに触れたように、佐倉順天堂の塾生で、開成所でも塚原と同僚だった。日比野は小浜藩士が戊辰戦争時に結成した浩気隊の一員である。小浜市役所が保存している「明治維新当時に於ける諸役乃分限帳」には、学校出勤として、英学・三十五石・井汲取、英学・四十石・紅林糾、英学・三十五石・日比野勉、と3人の名前が記されている⁽²³⁾。

諸説をまとめると、星の雇用に関わった、小浜藩士の日比野、井汲は、塚越あるいは塚原と、佐倉順天堂や開成所、前島の私塾等で、蘭学、英学を介したつながりがあり、彼らもまた、横浜の英学生コミュニティの一員か、その周縁的存在だったのではないだろうか。小浜藩からの、塚越に次ぐ英学教師の招聘は、池田、日比野、井汲、塚原、塚越等の様々なルートで同時進行的に進められていたのだろう。

星雇用の決定打が、『金蘭簿物語』に書かれているように塚越だったと、史料的に確定することは現状では難しい。むしろ、星の小浜藩雇用は、横浜英学生コミュニティと小浜藩士英学生等との交流の中から生まれたと考えるのが妥当ではないだろうか⁽²⁴⁾。塚越もまた、同じような経緯で雇用された可能性が高い。

(4) 横浜医学就学例

塚越の横浜での目的は、英学・医学・化学の修学にあった。外国人と医学という点に注目した場合、どのような可能性があったかを、見ておきたい。

① ヘボン塾

ヘボンは横浜英学所で日本人を教え、妻のクララ (Clara Mary Hepburn, 1818-1906) は1863年11月に、男女共学の私塾を自宅に開校し、これはヘボン塾と呼ばれている。増田孝 (幕臣)、林薫 (幕臣)、高橋是清 (仙台藩)、三宅秀 (江戸の医師) 等が学んでいた。クララは横浜英学所でも一時期授業を持っていた。

塚越の医学志向を考慮すれば、彼の英学の師として理想的だったのは宣教医ヘボンだけだろう。ヘボンは、日本人の医学生への指導もしていたようで、1867年10月の時点で、医学生を8人教えていた⁽²⁵⁾。彼らは薬の調合や小さな手術の助手を務めていたという。今のところ、塚越の名前はヘボン関連史料には見られない。

② アレクサンダー・ヴェダー (Alexander Madison Vedder, 1831-1870)

ヴェダーは、米国海軍医師として来日し、1865年6月に居留地で開業した。1868年正月に長州藩に雇われるまで横浜に住んでいた。横浜英学所、ヘボン塾で学んでいた三宅秀が、ヴェダーについて2年間、英語と医学を修業した。塚越の横浜時代と期間は重なるが、ヴェダーの病院に塚越が関わっていたことを示す史料は無い⁽²⁶⁾。

③ ドクトル・マイル (オランダ人)

ドクトル・マイルは『星亨とその時代 1』に掲載されている、渡辺顕哉の談話（『星亨とその時代 1』 p. 31）に登場する。元町の山の手に病院を開業していた。ドクトル・マイルの病院を渡辺と星が訪問したところ、書生が集まって死んだ飼い犬の解剖を行っていた。当時は蘭方医やその弟子が多かったので、横浜で医学をオランダ人に学ぶのは自然な成り行きだっただろう。塚越は順天堂で蘭学を学んだと思われるので、オランダ人医師に師事した可能性もある⁽²⁷⁾。

④ ジョナサン・ゴブル (Jonathan Goble, 1827-1896) の私塾

ゴブルは医師ではなく宣教師だが、以下のような可能性もあるかと思う、採り上げた。塚越が1870年に渡米する際、自分の身分を「米人商人ゴブル小仕」、「米人ゴブル小仕」と書いている⁽²⁸⁾。

塚越は渡米時には、すでに小浜藩雇の英学教師だったが、何らかの理由で身分を偽る必要があり、かつて横浜時代に世話になった外国人の名前を勤め先に使ったとも考えられる。ゴブルから連想される当時の横浜在住外国人は、ジョナサン・ゴブルである。彼はアメリカバプテスト自由伝道協会 (ABFM) から派遣された宣教師で商人ではなかったが、1862年から横浜開港地百六番で英語塾を開いていた。塚越が横浜入りした1865年には百五十番に移り1867年まで横浜にいた。塚越がゴブルの家塾でジョナサンと妻のエリザに英語を学び親しく交際していた可能性はあるが、これも裏付ける史料が無い。

以上、横浜で塚越が、横浜在住の外国人医師について英学及び医学修業をした場合の可能性を探ってみた。現状では塚越とここで採り上げた外国人との関係を示す史料は無く、横浜の医学史の研究に踏み込み、関連史料を渉猟する必要がある。

5. 江戸牛込矢来, 小浜 (1867年-1870年) — 小浜藩英学教師時代

『金蘭簿物語』第3章「勉学」 pp. 9-10, 第4章「渡米」 pp. 10-22

1867年10月、塚越は横浜で小浜藩に英学教師として雇用され、正式に士族となり、横浜から江戸に移り、牛込矢来の小浜藩邸で英語の指導に当たることになった。ここでの滞在は約1年で、1868年年9月に小浜に移った。『金蘭簿物語』における小浜藩時代の記述は以下の通りである。

「父は東京酒井侯の藩邸にある事約1カ年、それから国表若狭国小浜に転住した。然るに上掲、星の書状に依れば、父渡米の際、星は既に若狭を去って大阪に来たり、紀州侯に召抱えられて居たらしい。」（『金蘭簿物語』 p. 21）

有泉によると、星の小浜藩雇用は1868年3月であるので、塚越と星は、半年ほど、牛込矢来の小浜藩邸で藩士に英語を指導していたことになる。

『金蘭簿物語』には、いくつかの一次史料が引用されており、ここでも重要な史料が掲載されている。塚越が1870年4月6日（旧暦3月6日）に書いた、小浜藩侯宛の渡米許可の願書の文面である。そこには、小浜藩雇用以降のことが以下のように書かれている。

「御召抱相成候義は東京御邸中に於て、英学有志の向へ其初歩之訓導仕候て小生は諸先生へ質問研究仕り、一科学成功仕度志願に御座候。（中略）然る處、爾来御都合に依て当地へ轉住仕り、洋鬻に於て授讀罷在候處、追々出席の生徒も滅却仕り、今日に至り候てはさしたる公務も無御座候に付何卒宿願の化学修業仕度奉存候。」
（『金蘭簿物語』 p. 11）

塚越は、江戸の小浜藩邸で英学志望者に初歩を教えていたが、江戸で様々な学者と交流しているうちに、化学の研究への思いが高まった。その後、藩の都合で小浜に移り英学を指導していたが、生徒が徐々に減ってしまい、やるべきことが無くなってしまったため、宿願の化学を勉強したいので、米国渡航を許可してほしい、と書いている。

この小浜における英学のモチベーションの低さに関しては、池田正吉の談話がほぼ同じ状況を示している。

「この頃洋学は全国なお蘭書盛んにして英書は未だ広く行われず。小浜藩のごときもまたこの傾向にして、英語を学ばしむることは頗る難事なりしが、予は種々丹精してついに予の宅に英学校を設くるまでに至りたり。そもそも予の宅はもと藩中有名なる松林寺と称する祈願所の跡にして、これを藩主より特に予に賜わりしは時機を見て学校にでも起せとの御趣旨と了解し、かくは英学校を設立したるものなりしが、来たりて英語を修業せんとする者は寂々として極めて寡く、これには予も閉口したり。これ畢竟するに一方には前記のごとく蘭学を好む傾向未だ全く去らざると、他の一方には当時吾藩においてはひたすら兵式の改革に熱中し、東京より英式練兵の教師まで聘し来たり大に奨励したるを以て、兵馬空惚の際とて文学として英学を研究する星君の門よりも、むしろ兵式を教うる者の門に多く学生は集合したり。」
（『星亨とその時代1』, p. 54）

小浜は歴史的に蘭学・医学が盛んで明治になっても英学熱は低かったと書かれている。小浜で英語を勉強したい生徒が少ないという点は塚越の記述と一致している。その理由

としては、依然として高い蘭学熱もあるが、英語の勉強よりも、英式練兵の方に小浜藩士が熱中したと書かれている。小浜藩の英式練兵については、前稿で触れたが、1869年に小浜藩に導入された⁽²⁹⁾。文法やリーダーで英語を学んでも、将来、何の役に立つか明確でなかったのだろう。星ひいては塚越はその現状を憂い、『金蘭簿物語』によれば、星は大阪に、塚越は米国へと活動の場を移すことになる。

しかし、この点について、星関連史料の情報は『金蘭簿物語』とは異なる。何礼之の談話には次のように書かれている。かつて星を指導した何は大阪で大阪府立洋学校に勤務する傍ら、私塾も主催していた。1869年の秋、星から小浜生活の不満と大阪移住の希望を聞き、何は歓迎の意の返事を送ったところ、次のような事態となった。

「幾程もなく氏はその配下の士、丁野大八、塚越酸素彦、外一人と共に窃かに小浜藩を脱して予の許に來たり投ぜり。氏はここより洋学校の手当を受け、ここにて自己及び同行の書生三人を養い居たり。」(『星亨とその時代 1』 p.57)

つまり、星は塚越等を伴って小浜を脱出し、塚越は大阪で星に書生扱いで養われていた、という。何の談話は、複数の点において、『金蘭簿物語』の記述と矛盾する。まず、塚越と星の上下関係であるが、ここでは塚越が星の「配下の士」となっていて、上下関係が逆転している。そして、塚越もまた星とともに、小浜を脱出したことになっている。塚越も星同様に、小浜の英学の低迷状況に不満を感じていたが、塚越が一度小浜を脱出した後に、再び小浜に戻り、藩主に留学初期費用の援助も含めて渡米許可を願い出たとは考えにくい。

そもそも塚越が星に付いて大阪に行ったとして、その目的は何だったのだろうか。塚越は小浜で職を失ったわけではない。大阪に塚越の化学、医学への向学心を満たすものがあったとは思えない。星は父母を養うために日々の仕事の口を確保する必要があったが、塚越にはその心配も無く、自分の向学心を満たしてくれる場所がありさえすればよかった。それは日本国内ではあり得なかった。

しかし、星の脱出は、小浜藩の一部の関係者以外には、知らされずに実施されていたことが、以下の池田正吉の談話から分かる。塚越の大阪同行も完全には否定できない。

「かくのごとくなるを以て君は小浜の地を到底なすに足らざるものと看做しけん、断然意を決し、まず大阪に出でんとて書を予と並びに能く君の人となりを解したる藩の大参事某氏とに遺し置き、飄然小浜を脱走せり。その遺書の予に与えたる分にはまず永々の厚意を謝し、(中略)予は君の意衷を諒としことさらに君の脱走を秘し置き、なお暫くの間は藩庁をして両親の許に扶持米を給与するに至らしめたり。」

（『星亨とその時代 1』（p. 55）

池田の取り成しで，星の脱藩は一部の関係者以外には秘され，給料は依然として星の家族に払われたという。塚越が同じ状況だったかどうかは書かれていない。

『金蘭簿物語』には，星が塚越宛に 1870 年 4 月 1 日に書いた送別の書簡の文面が引用されている（『金蘭簿物語 1』 pp. 19-20）。その内容には，塚越が大阪に同行したかしなかったかを示唆する記述は無い。なお，この手紙には，塚越がフランス語も勉強している旨が書かれている。

有泉は，「星の大阪行きには，小浜下向以来ずっと一緒だった塚越良之助ほか二人の書生が同行した。」（有泉『星亨』 p. 16）とし，『星亨とその時代 1』には，「丁野大八，塚越鈴彦等都合三人の部下を卒い直ちに小浜を脱し大坂に赴く。時に明治二年の初秋なり。（中略）かかる所に先生は丁野等三人を卒いて何君の許に來投したるなり。」（『星亨とその時代 1』 pp. 45-46）としている。

有泉の記述の方はそれほどでも無いが，穿った見方をすれば，星研究は，やはり星亨という親分肌の政治家のイメージに引きずられ，史料の解釈もその影響を受けることがあるのではないだろうか。星研究においては，塚越が星に同行したかどうか，塚越と星との上下関係は，歴史的に重要なことではない。『金蘭簿物語』は史料として扱うには主観的過ぎる傾向はあるが，そこに引用された一次史料の内容は重要である。『金蘭簿物語』に引用された，塚越の留学願書と星の塚越宛の書簡の内容は，史料として主観や偏見を排して，慎重に分析されるべきではないだろうか。

6 渡米と渡米に至る経緯（1870 年 3 月-6 月）

『金蘭簿物語』第 4 章「渡米」 pp. 10-22

塚越の渡米に関して，『金蘭簿物語』は，かなりの紙数を割いている（pp. 11-22）が，その内容は，知人からの惜別の歌や書簡の引用となっている。送り主は以下の通りである。

浦井義路（蟹灣学士）：出身地不明

金上方溪（仙台人）

船山宣謹（新発田人）

越智垣（会津人）

菅中太郎（柳圃）

鶴嶋某（鶴羽島）

いずれも詳細は不明であるが、出身地からすると佐幕系の人脈が多いように見える。佐倉順天堂の門人帳にはこれらの名前が見当たらないので、横浜英学生コミュニティの関係者だろうか。

塚越の米国留学の理由は、『金蘭簿物語』に全文引用された、前出の1870年4月6日(旧暦3月6日)の藩主宛での願書に書かれている。塚越は化学研究に目覚め、その研究を極めるには西洋に行くしかないと考えた。化学について書かれた英書を読む必要があり、実際に実験等も行ふ必要がある。また、現地の人々と日本人との交流も盛んでそれは有意義なことである。米国は、土地が広大で国民の気質も温厚である。知人も多くいるので多少の出費の援助をお願いできれば、渡米後のことはどうにかなる、と書いている。

星の大阪行きは、かつての師の何礼之が頼りであるが、大阪とは比べ物にならないくらい、物理的にも精神的にも遠い米国に、塚越は誰を頼って行くつもりだったのだろうか。米国に知人が多くいるということだが、果たして誰の事を言っているのだろうか。

かつての横浜英学コミュニティのメンバーですでに米国に渡っているのは、彦根藩士の鈴木貫一だが、鈴木は妻の健康を案じて、1869年にはSFから帰国している。塚越と同じ、横浜の太田町に住み、1867年に渡米した仙台藩士の高橋是清と鈴木知雄も1868年にSFから帰国している。

1870年6月に、塚越と同船した日本人留学生は、旧幕臣が3人、佐幕の桑名藩出身の2人がいた。いずれも潤沢な費用があるわけでもなく、ニューヨークのフェリスのように米国の学校を紹介してくれる当てがある訳でもない。いずれも、有り金はたいて片道切符を買ったような乗船客である。この船にどうして、このような6人が乗り合わせたのかも、不思議である。6人はすでに横浜で知り合っていたのだろうか。他の5人はまだしも、塚越が「ゴブル小仕」と身分を偽って出国するのも不可解である。

塚越の渡米に関しては不明なことが多いが、ここまでの彼の人生を通して感じられるのは、塚越の人並外れた行動力である。江戸、横浜、江戸牛込矢来、小浜、SFと、十分な資金と見通しもなく世界を広げていく。思い切った決断と実行を繰り返してきていることが分かる。その原動力として『金蘭簿物語』では、化学、医学といった向学心が強調されている。

おわりに

本稿では、塚越の出生(太田)から、江戸、横浜、江戸牛込矢来、小浜、渡米に至るまで、それぞれの時代に区切り、『金蘭簿物語』の記述を、諸史料を使って検証する形で論述を進めた。

その結果，明らかになった点を改めて以下にまとめておく。

1. 塚越は江戸に出て，平民の身分であるにも関わらず，昌平黌で学ぶことができ，山岡鉄舟と知り合い，新徴組に参加した。それぞれの経緯に関しては，検証する史料が無いが，事実無根ということも無いと思われるので，塚越の物おじせぬ行動力の賜物と理解したい。『金蘭簿物語』（p.69）には，塚越の性格が，社交的でユーモアに富んだ発言をする人物として書かれている。この性格が幸いし，行く先々で人脈を開拓できたのかもしれない。
2. 塚越が，地方の平民の生まれにも関わらず，江戸で伊東玄朴に師事し，佐倉の順天堂に入塾し，蘭学・医学を学んだ点は，塚越の向学心の現れと言えよう。塚越の化学，医学への関心の高さは『金蘭簿物語』で，随所で強調されていて，その点は，順天堂入塾で証明された。
3. 佐倉順天堂で，塚越と同じ平民出身の塚原周造，小浜藩士井阪静太郎，井汲新太郎に出会う。彼等との交流が，後の横浜英学修業，小浜藩による英学教師としての雇用につながっていく。この背景には，塚原を中心とする横浜の英学生コミュニティがあったと考えられる。彼等は順天堂の蘭学・医学から志望を英学に変え，横浜在住の外国人から直接英語を学ぼうという学生の集まりで，全国から集まってきた。その中に塚越も位置づけることができると思われる。
4. 横浜で塚越と師弟関係になった星亨の関連史料は，潤沢ではないが，『金蘭簿物語』の背景を理解するのに貴重な情報を提供している。しかし，その史料が，幕末から3, 40年も経過した後に収録された関係者の談話なので，正確さを欠き，相互間の矛盾も散見される。これらの史料を活用した従来の星研究には，若干の不正確さと星顕彰的傾向が感じられ，『金蘭簿物語』に引用されている一次史料の，星研究への積極的活用を提案したい。
5. 塚越の渡米に関しては，『金蘭簿物語』の記述を裏付ける史料は発見できなかったが，前出の横浜英学生コミュニティの中に，塚越以前に欧米に留学した者がいる。星から塚越へ送別の書簡の中にも，欧米留学への憧れが感じられるし，塚原も勝海舟の息子小鹿が1867年に高橋是清等と米国留学した際には，アルウィンに留学の便宜を図ってもらおうとしていた⁽³⁰⁾。塚越もこのような環境の影響を受けていただろう。

横浜時代に芽生えた留学志望が，小浜藩での英学不振をきっかけに，化学修業のための留学実行へとつながったのではないだろうか。初期費用だけ藩主に捻出してもらい，渡米後のことは現地の知人の世話になるという大胆な計画である。この「在米の知人」が誰だったのかという点も興味深い。いずれにせよ，ここでも，塚越の向学心に突きつけられたバイタリティが感じられる。

6. 今後の課題であるが、まず、慶應年間前後の、横浜の英学状況を精査し、塚原を中心とした英学生コミュニティの存在と実態を明らかにし、歴史的に位置づける必要がある。その際に、前稿で扱った、酒井家文庫の英書への星、塚越による書き込みとの関係も調査、研究を進める必要がある。
7. 次稿で、塚越の SF 留学を扱うが、後半では、塚越を幕末維新留学生史にどのように位置づけるかという点にも触れたい。

本稿では、タムソン等の横浜在住宣教師研究者である中島耕二氏、江戸東京博物館職員で勝海舟の研究者である落合則子氏、横浜居留地での開業医ヴェダーの研究者である布施田哲也氏等、多くの研究者のお世話になった。ここに記し、御礼の言葉としたい。

《注》

- (1) NHK ニュース by 名字由来 net 全国名字めぐりの旅 第 143 回 群馬県 (9) 2017 年 8 月 3 日 8:30 公開。
<https://mnk-news.net/detail.htm?page=2&articleId=374> (2023 年 2 月 19 日, 最終閲覧)
- (2) 富岡牛松「金山松茸の今昔」(『上毛及上毛人』187 号, 1932 年 12 月) p. 27。
- (3) 祖母チカ(伊勢崎高山氏の女)の高山家と、江戸時代の尊王思想家、高山彦九郎(太田市出身, 1747-1793)の高山家との関係は不明である。
- (4) 関山邦宏「昌平坂学問所書生寮入寮者について — その数量的分析 —」(『国府台 和洋女子大学文化資料館紀要』12 号, 2003 年) pp. 1-17 参照。
- (5) 「懷徳堂本「昌平書生寮姓名録」(『懷徳』42 号, 1972 年 10 月) pp. 21-84 を参照。林家の私塾には、横浜で塚原周造と合宿していて、塚越と交流があったと思われる長岡藩士小林雄七郎や、後に米国留学する千村五郎、仙台藩士一条十二郎の名前も見える。千村の米国留学に関しては、塩崎(2020 年 10 月) p. 81 参照。玉虫左太夫、薩摩藩士五代友厚、同上野景範、長州藩士木戸孝允、大村藩士長与専斎も林家で学んでいた。漢学塾であるが、後年、英学に進んだ少なからぬ人々がいる。塚越の出身地から近い館林藩からも松島貞吉、小橋多助、土屋勝蔵、田中謙三の 4 人が学んでいた。
- (6) 伊東栄『伊東玄朴伝』(八潮書店, 1978 年)。伊東玄朴の塾の様子は、吉田忠「柴田収蔵の蘭学修業 — 『柴田収蔵日記』に見る伊東玄朴塾 —」(『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』12 号, 2017 年) pp. 17-30 参照。
- (7) 上州から新徴組に参加した上州人に関しては、堀田璋左右「新徴組と上州人」(『上毛及上毛人』127 号, 1927 年 11 月) pp. 21-22 参照。江戸から上洛した時の浪士組の人数は約 250 人で、そのリストの中に塚越は見当たらない。堀田が作成した上州出身者のリスト 61 人の中にも塚越の名前は無い。新徴組に関しては、東京都総務局文書課「市中取締沿革：明治初年の警察」(『東京都市紀要』11 号, 1951 年 11 月) pp. 30-34 参照。約 250 人の中で京都に残った者を新撰組、江戸に戻った者を新徴組と呼ぶ場合もある。
- (8) 土佐博文「佐倉順天堂門人とその広がり 門人帳にみる門人とその史料をめぐって」(国立歴史民俗博物館研究報告, 116 集, 2004 年) pp. 255-274。塚越は、在江戸時代は良之助と名乗っていた。土佐は塚越、井汲、井坂に関して、太田や小浜に問い合わせ、断片的な情報を掲載している。pp. 270-272 参照。
- (9) 塚原周造に関して利用した史料は次の 2 点である。山崎米三郎編『塚原夢舟翁』(山崎米三郎, 1925 年)、鈴木秀幸「地方史と大学史 — 茨城県千代川村における明治青年の夢を追って —」(『地方史研究』297 号, 2002 年 6 月) pp. 1-21。

- (10) 土佐によると、塚原は元治二年四月十四日（1865年5月8日）に正式に順天堂に入門した。在学期間は10か月ほどであるので、1866年3月頃まで学んでいたことになる。なお、『塚原夢舟翁』には、多少の年代の混乱が見られる。
- (11) 後述するように、星の小浜藩雇用を祝った際に撮影されたものではないだろうか。『塚原夢舟翁』にこの写真は掲載されていて、「塚原20歳頃（1867年）撮影」と書かれている。なお、『塚原夢舟翁』には、塚越は写真のみで本文では登場していない。
- (12) 川口国昭、多田節子『茶業開化 明治発展史と多田元吉』（全貌社、1989年）と、富津市のホームページ参照（<https://www.city.futtsu.lg.jp/0000002685.html>, 2023年2月19日最終閲覧）。維新後は、15代将軍慶喜とともに静岡に移り、茶の栽培の功労者として知られている。『金蘭簿物語』の巻末の附録には、インドにいる多田からの「塚越鈴彦先生」宛書簡が掲載されている（pp.120-122）。
- (13) 神奈川奉行所が採用した、警備隊員に関しては、西川武臣「神奈川奉行所の軍制改革——集められた農民兵たち——」（横浜対外関係史研究会、横浜開港資料館編『横浜英仏駐屯軍と外国人居留地』、東京堂出版、1999年）pp.185-215を参照。これによると、下番は、警備員というよりは軍隊の兵員のような存在だった。
- 神奈川奉行所の職員名簿は慶應年間のもので残っていないので、当時の多田の役職や塚越の所属も確認できない。1863年に、警備体制強化のため、下番を指揮、管理する定番が置かれた。塚越が横浜に来る1年前の1864年には、定番役は700人、下番は1300人いたという。1866年5月（旧暦）には、定番役は別手組、下番は歩兵組へ配属となった。西川武臣「幕末から明治初年の横浜の治安と警備」（『幕末維新期の治安と情報』横浜開港資料館・横浜近世史研究会編、大河書房、2003年）pp.35-57を参照。
- (14) 渡辺清次郎（1847-1938）は四国塩飽諸島出身の幕府海軍で活躍した幕臣。『渡辺清次郎回想録』には、横浜運上所勤務についての記述は無い。橋本進「渡辺清次郎回想録について（前編）」（『旅客船』260号、2012年5月、pp.22-32）、同「渡辺清次郎回想録について（後編）」（『旅客線』261号、2012年6月、pp.9-21）参照。
- (15) アルウィンは、1880年代に駐日ハワイ王国弁理公使を務めたロバート・W・アーウィン（Robert Walker Irwin, 1844-1925）である。アーウィンは1866年に米国の郵船会社パシフィック・メール・スチームシップ（Pacific Mail Steamship Co.）の横浜駐在代理人として来日していた。
- (16) 出典は三宅秀の回顧談である（福田雅代『桔梗——三宅秀とその周辺』）p.280。この三宅の発言に依ると、最上級クラスには、三宅、矢田部良吉、大鳥圭介、古屋作左衛門、藤倉健達、塚原周造の名前が挙げられている。
- (17) 小玉晃一、敏子『明治の横浜 英語・キリスト教文学』（笠間書院、1992年）pp.57-58。
- (18) 大槻文彦「大槻博士自傳」（『国語と国文学』5巻7号、1928年）pp.914参照。
- (19) この中には、後年欧米に留学した者が多い。会津藩士野口富蔵は、アーネスト・サトウの通訳・秘書となり、1869年にサトウに伴いイギリスに留学した。姫路藩士長谷川雉郎は、大学南校留学生として、1870年10月23日横浜発のチャイナ号で、元幕臣の目賀田種太郎等と米国に留学したが、ニューヨーク州のトロイで病死した。松江藩士の飯塚納は、1871年にフランスに留学して、帰国後は自由民権運動家として知られた。彦根藩士鈴木貫一は、1868年に米国SFに留学し、翌1869年に帰国した。大井憲太郎は、大分県宇佐市の農家出身で、長崎で蘭学、英学を学んだ後に上京し仏学、化学を学んだ。林賢徳は、加賀藩士で、海軍を志して上京した。庄内藩士（羽州酒井）大井は不明。

塚原のグループとの関係は不明だが、塚原等が住んでいた東漸寺の近くに、「天沼の兵学校」と呼ばれた私塾が慶應年間に設けられた。農家の空き家を借りて太田源蔵（筆者注、太田源三郎か？）が開いた。兵学の傍ら語学の授業が行われ、オランダ語からフランス語、英

語へ変化していった。石井光太郎、東海林静男編『横浜どんたく 上巻』(有隣堂, 1973年) pp. 266-269 参照。なお、この東漸寺は、1900年に、横浜市中区大平に移った。当該寺院関係者からは有効な情報は得られなかった。

- (20) 塚越と星の住まいは、太田町の長家だったと『金蘭簿物語』に書かれている。星家の住居に関しては、『星亨とその時代1』に次の2通りの記述がある。

- ・渡辺顕哉談話：「吉田橋内入舟町の関門外」(p. 29)
- ・渡辺牧太談話：「当時吉田橋内堤上に前面のみ地上に基礎を置き、後部は堤の斜面に木柱を以って支えたる仮屋同断の家屋両三点(ママ)ありき。そのうちのーはすなわち君の両親僑居したる所」(p. 33)

このそれぞれの住居についての位置情報が、一致するかどうかは確認する必要がある。高橋是清、上塚司編『高橋是清自伝』(pp. 26-28)によると、横浜英学所の日本人教師、太田源三郎(1835-1895)も太田町に住んでいて、その役宅の庭に小屋を建てて仙台藩士の高橋是清と鈴木知雄、木村信卿の3人が、高橋の祖母の賄いで一緒に住みへボン塾に通っていた。1866年冬の大火事で太田町は全焼した。

- (21) 石井重光「星亨 英学と近代主義」(『近畿大学語学教育部紀要』5巻1号, 2005年7月) p. 20に、「星の英学修学関係の史・資料が少なく、新たな実証的事実が見つけ出される余地はほとんどないことがあげられる」と書かれている。なお、本論稿のp. 24では、塚越良之助(周造)と書かれていて、塚越と塚原の混同が見られる。石井の論稿は『金蘭簿物語』を引用した有泉著『星亨』を参照しているが、『金蘭簿物語』を参照した形跡、記述は無い。
- (22) 小玉晃一、敏子『明治の横浜 英語・キリスト教文学』(笠間書院, 1979年) p. 37に、星は最下級クラスだったと書かれている。出典は三宅秀の回顧談である(福田雅代『桔梗ー三宅秀とその周辺』p. 280)。
- (23) 小浜市立図書館所蔵の「明治三年分限名前帳」には、「洋学司 四十石 役料三人口塚越 酸素彦 洋学修業 小島 銓三郎, 洋学修業 小澤 徳平, 洋学修業 紅林 糾」とあり、日比野の名前は無い。何は日比野を星の弟子と言っているが、前島の談話によれば日比野は前島の弟子で、星の当時の年齢(十代後半)を考えれば前島の弟子の方が、可能性が高い。
- (24) 星の小浜藩雇用について、『星亨とその時代1』では次のようにまとめている。

「たまたま若州小浜藩酒井(忠禄)侯藩地に洋学を興さんと欲し、藩士池田政吉氏をして洋学者を四方に求めしめ、これを聘延せんとす。ここにおいて予て先生(筆者注、星亨)に英語を学び居たる同藩士日比野勉氏並びに塚原周造氏等先生に小浜行きを懇請し、何君またこれを賛成し、同時にまた塚越良之助氏(のち酸素彦また銓彦)、先生を池田氏に紹介したるより明治元年二月小浜藩に禄仕することを得たり。」(p. 44)

諸々の談話を紹介しつつ、塚越も星雇用に一役買っているとしている。有泉のこの辺りに関する記述も「当時、小浜藩は英学者を求めており、塚越は、上役の池田正吉に星を紹介して、慶應4年2月、星は小浜藩に雇われることになった(塚原の談話では別の人物の紹介だったという)」(『星亨』p. 14)と、まとめている。

星研究者にしてみれば、星の小浜藩への紹介者の確定は、余り重要では無く、研究者も拘泥していなかったのだろう。いずれにしても、内容が異なる談話を、史料として扱う際、かつての歴史研究者は、どのように処理したかという点で参考になった。

- (25) 山田みどり「幕末・明治初期の宣教医の活動ー宣教医へボンを中心にー」(『社会福祉学』58巻4号, 2018年) pp. 1-13の3.へボンの施療事業(p. 6)を参照。

医師の子弟でへボン塾に学びながらも、医学修業を希望しなかった林薫(1850-1913)のような例もある。林は、塚原や塚越が師事した、順天堂始祖の佐藤泰然(1804-1872)の五

男である。塚越や塚原の師，佐藤尚中（1827-1882）は泰然の弟子，その後養子で，泰然の後を継いだ。

林はまずアメリカ商館ウオルシュ・ホール商会の庶務・会計担当のウエルマンから指導を受け，次にジョゼフ彦に英語を習った。そして14歳でクララのヘボン塾に入学する。林は優秀な生徒であり，夫ヘボンも含め家族同様の付き合いをしていたようで，ヘボンの日常生活の様子もよく知っていた。林に関しては，権田益美「幕末期から明治初期の横浜開港場における英語の学習 — 林薫一族を事例に —」（『港湾経済研究』50号，2011年）pp.139-148を参照した。三宅にしても林にしても，塚越と異なり，生れた家と育った環境が恵まれていた，稀有な例である。

- (26) ヴェダーには，画家として有名なエリユ・ヴェダー（Elihu Vedder, 1836-1923）が弟にいて，彼に宛てた書簡が当時の日本の様子を知らせる貴重な史料となっている。布施田哲也「Alexander Madison Vedder の生涯について」（『日本医史学雑誌』60巻2号）p.144と寺島俊雄「神戸病院初代病院頭アレキサンダー・ヴェッターに関する新事実」（『神緑会ニュースレター』7巻4号，2016年3月）pp.17-24を参照した。

三宅はヴェダーのもとで3年間学んだが，最初は「代診兼薬局生」という身分で，アレンという米国人の菓のブローカーの店に間借りして薬剤師のような仕事をしていた。ヴェダーからは，化学，動物学，解剖学，内科学，外科学，眼科学等を学び，化学に関しては，最初ヴェダーからフォスターという化学の本をもらった（三浦義彰『文久航海記』（篠原出版，復刻版1988年，pp.84-85参照）。ここでは，「ファウンスの化学書」，「グリフィス・ケミカル・レリリエーション」といった英書が，当時の代表的な化学書として登場する。塚越がこのような化学に関する英書を読み，後年，小浜藩主酒井家に寄贈した可能性はあるが，酒井家文庫の目録には見当たらない。酒井家文庫に関しては，塩崎（2022）参照。

- (27) オランダ人医師ドクトル・マイルに関しては，今後の史料調査が必要である。斎藤多喜夫『幕末・明治の横浜 西洋文化事始め』（明石書店，2017年）の第6章「健康を求めて」には横浜居留地在住の医師や病院についてまとめられているが，マイルについては触れていない。p.147にオランダ海軍病院が1866年6月に山手に設けられたと書かれているが，マイルの病院は，もっと早い時期から開業していた。

- (28) 海外移住150周年研究プロジェクトの調査結果（『遙かなる「ワカマツ・コロニー」』，彩流社，2019年）によると，海外旅券勘合簿神奈川県之部と於開港場免状相渡候航海人明細鑑に，「鈴彦」という名前が記載されている。それぞれの記述は以下の通りである。

- ・「海外旅券勘合簿神奈川県之部：免状番号319，29歳。出身地は横浜北仲通四丁目森兵衛店，身分・職業は高橋屋小兵衛弟，渡航理由は米国人商人ゴブル小仕としてサンフランシスコへ。」（p.98）
- ・「於開港場免状相渡候航海人明細鑑：出身地は横浜北仲通四丁目嘉兵衛店高橋ヤ，身分・職業は小房弟，渡航理由は米人ゴブル小仕被雇，発行日は庚午五月二十三日，返納年月が六年十月四日，年齢31。」（p.110）

年齢等，細かな点で違いはあるが両方とも米人ゴブル小仕となっている。

- (29) 1869年に小浜藩は英式兵制を導入し，軍務所という部署が開設された。田中清「小浜の英学」（『舞鶴高等専門学校紀要』15号，1980年）pp.103-108，参照。p.106には，英学の必要性から，東京にいた井汲収，井坂静太郎，日比野政柄等を小浜に迎えたという記述がある。3人とも本稿既出で，塚越と浅からぬ縁がある小浜士族である。

- (30) 『塚原夢舟翁』p.10。

参考文献

【基調文献（重要度順）】

- 塚越丘二郎『金蘭簿物語』（著者発行，1929年）。
- 野沢鷄一編著，川崎勝，広瀬順晧校注『星亨とその時代1』（平凡社，1984年）。
- 有泉貞夫『星亨』（朝日新聞社，1983年）。
- 山崎米三郎編『塚原夢舟翁』（山崎米三郎，1925年）。

【その他の文献】

- 秋山勇造「研究の周辺 幕末・明治初期に外国人が発行した邦字新聞(2) ベイリーの『万国新聞紙』」
（『神奈川大学評論』38号，2001年）pp.91-94。
- 荒井保男『日本近代医学の黎明』（中央公論新社，2011年）。
- 石井光太郎，東海林静男編『横浜どんたく 上巻』（有隣堂，1973年）。
- 石井重光「星亨 英学と近代主義」（『近畿大学語学教育部紀要』5巻1号，2005年7月）pp.19-57。
- 伊東栄『伊東玄朴伝』（八潮書店，1978年）。
- 大槻文彦「大槻博士自傳」（『国語と国文学』5巻7号，1928年）pp.38-52。
- 海外移住150周年研究プロジェクト編『遙かなる「ワカマツ・コロニー」』，彩流社，2019年）。
- 「懷徳堂本「昌平黌書生寮姓名録」（『懷徳』42号，1972年10月）pp.21-84。
- 川口国昭，多田節子『茶業開化 明治発展史と多田元吉』（全貌社，1989年）。
- 草間俊郎「横浜の英語教育機関—幕末維新期・明治期における公認諸学校」（『英学史研究』9号，1976年）pp.23-31。
- 小玉晃一，敏子『明治の横浜 英語・キリスト教文学』（笠間書院，1979年）。
- 後藤斉「洋学者としての大槻文彦」（東北大学大学院文学研究科講演・出版文化企画委員会編『ハイブリッドな文化』東北大学出版会，2019年）pp.77-119。
- 権田益美「幕末期から明治初期の横浜開港場における英語の学習 — 林薫一族を事例に —」
（『港湾経済研究』50号，2011年），pp.139-148。
- 同「横浜開港場における英語教育 — ヘボンを介して開設した「横浜英学所」（郷土神奈川，55号，2017年）pp.16-32。
- 斎藤多喜夫『幕末・明治の横浜 西洋文化事始め』（明石書店，2017年）。
- 酒井シズ「良斎と秀」（福田雅代『桔梗 — 三宅秀とその周辺』福田雅代，1985年）pp.20-33。
- ジェームズ・バラ著，飛田妙子訳『ジェームズ・バラの若き日の回想』（キリスト新聞社，2018年）。
- 塩崎智「1872年3月26日横浜発サンフランシスコ行き，アメリカ号日本人渡航者の調査 — 先行研究発表後四半世紀の関連研究成果のまとめ」（『拓殖大学 人文・自然・人間科学研究』44号，2020年10月）pp.75-107。
- 同「小浜藩英学教師，塚越酸素彦（鈴彦，1842-1886）関連史料調査報告 — 於福井県福井市，小浜市」（『拓殖大学 人文・自然・人間科学研究』48号，2022年10月）pp.116-135。
- 鈴木秀幸「地方史と大学史 — 茨城県千代川村における明治青年の夢を追って —」『地方史研究』297号，2002年6月）pp.1-21。
- 関山邦宏「昌平坂学問所書生寮入寮者について — その数量的分析 —」（『国府台 和洋女子大学文化資料館紀要』12号，2003）pp.1-17。
- 高橋是清，上塚司編『高橋是清自伝』（中央公論社，1976年）。
- 田中清「小浜の英学」（『舞鶴高等専門学校紀要』15号，1980年）pp.100-122。
- 寺島俊雄「神戸病院初代病院頭アレキサンダー・ヴェッターに関する新事実」（『神緑会ニュースレター』7巻4号，2016年3月）pp.17-24。

- 東京都総務局文書課「市中取締沿革：明治初年の警察」（『東京都市紀要』11号，1951年11月）pp.30-34。
- 土佐博文「佐倉順天堂の門人とその広がり 門人帳に見る門人とその史料をめぐって」（『国立歴史民俗博物館研究報告』116集，2004年）pp.255-274。
- 富岡牛松『金山太田誌』（富岡書店，1934年）。
- 同「金山松茸の今昔」（『上毛及上毛人』187号，1932年）p.27。
- 中島耕二「宣教師デビット・タムソンの生涯——誕生から日本基督一致教会の創立までを中心として——」（『明治学院大学キリスト教研究所紀要』35号，2002年12月）pp.225-275。
- 同編，日本基督教団新栄教会タムソン書簡集編集委員会訳『タムソン書簡集』（教文館，2022年）。
- 西川武臣「神奈川奉行所の軍制改革——集められた農民兵たち——」（横浜対外関係史研究会，横浜開港資料館編『横浜英仏駐屯軍と外国人居留地』東京堂出版，1999年）pp.185-215。
- 同「幕末から明治初年の横浜の治安と警備」（『幕末維新期の治安と情報』横浜開港資料館・横浜近世史研究会編，大河書房，2003年）pp.35-57。
- 西脇康『幕末大江戸のおまわりさん 史料が語る新徴組』（文学通信，2021年）。
- 橋本進「渡辺清次郎回想録について（前編）」（『旅客船』260号，2012年5月）pp.22-32。
- 同「渡辺清次郎回想録について（後編）」（『旅客線』261号，2012年6月）pp.9-21。
- 福田雅代編発行『桔梗——三宅秀とその周辺——』（岩波ブックセンター信山社，1985年）。
- 布施田哲也「Alexander Madison Vedderの生涯について」（『日本医史学雑誌』60巻2号）p.144。
- 堀田璋左右「新徴組と上州人」（『上毛及上毛人』127号，1927年11月）pp.21-22。
- 三浦義彰『文久航海記』（篠原出版，復刻版1988年）。
- 茂住實男「横浜英学所（上）」（『大倉山論集』29号，1991年3月）pp.235-268。
- 同「横浜英学所（中）」（『大倉山論集』30号，1991年12月）pp.59-90。
- 同「横浜英学所（下）」（『大倉山論集』32号，1992年12月）pp.125-165。
- 山田みどり「幕末・明治初期の宣教医の活動——宣教医へボンを中心に——」（『社会福祉学』58巻4号，2018年）pp.1-13。
- 吉田忠「柴田収蔵の蘭学修業——『柴田収蔵日記』に見る伊東玄朴塾——」（『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』12号，2017年）pp.17-30。

（原稿受付 2022年10月26日）



ご挨拶

犬竹 正幸
(政経学部教授)

私が1987年に拓殖大学に奉職して以来、36年が経とうとしていますが、顧みれば本学人文科学研究所との関わりは長く、また深いものがありました。1991年の「ガリレオの自然観」に始まり、今年度の『『純粋理性批判』原則論に見られるカントの実体論』に至るまで、10本以上の論文を人文研紀要に掲載させて頂いたこと、また2005年には「カントの永久平和論と現代」というテーマで、人文研主催の第1回研究会を開催させて頂いたこと、とりわけ2011年には出版助成を受けて拙著『カントの批判哲学と自然科学』（創文社）を上梓させて頂いたこと（本書をもって京都大学より学位を授与されました）、誠に感謝の念に堪えません。

人文研の編集委員として、長期にわたり編集の仕事にも携わってまいりました。三浦正先生、坂田貞二先生、瀬尾幹夫先生といった歴代の所長の下で、通常業務の傍ら、人文研紀要への投稿規程の改訂や執筆要領の作成にさいしては、小川肇先生や佐藤健生先生などと、口角泡を飛ばしながら深夜まで議論し合ったことが懐かしく思い出されます。

2015年に思いがけなく人文研所長の職を拝命したさいには、投稿論文の質の向上と公開講座の充実に意を用いました。研究所の紀要は大学の顔と言われます。投稿原稿に対して、時には厳しい注文をつけたこともありましたが、修正に応じて頂いたどの論文も、大学の顔を輝かせることに大いに寄与したことは間違いありません。投稿された全先生方に、改めて感謝いたします。他方、公開講座の充実という目標は、私の力不足もあり、十分な実現には至りませんでした。この点は心残りでしたが、2020年度より文京区主催の「文京アカデミア講座」に、本学のいくつかの研究所が参加したことにより、公開講座の新しい形が開かれたように思われます。

末筆ながら、本学人文科学研究所の一層の発展と所員の先生方のご活躍を心より祈念いたします。

犬竹正幸教授 略歴

〈生 年〉

1952年8月16日 埼玉県日高市に生まれる

〈学 歴〉

1971年4月 京都大学文学部入学

1975年3月 京都大学文学部哲学科卒業

1978年4月 京都大学大学院文学研究科修士課程進学（哲学専攻）

1980年3月 京都大学大学院文学研究科修士課程修了

1980年4月 京都大学大学院文学研究科博士課程進学（哲学専攻）

1983年3月 京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得満期退学

1997年4月 ドイツ連邦共和国マールブルク大学で在外研修（～1998年3月）

2013年3月 京都大学博士（文学）

〈職 歴〉

1987年4月 拓殖大学政経学部専任講師

1990年4月 拓殖大学政経学部助教授

2000年4月 拓殖大学政経学部教授

この間、東京都立大学、法政大学、学習院大学、早稲田大学で非常勤講師を歴任

〈主要業績〉

単 著

2009年3月 『哲学と人間観』（梓出版社）

2011年9月 『カントの批判哲学と自然科学』（創文社）

共 著

1993年1月 （共編著）『現代カント研究4：自然哲学とその射程』（晃洋書房）

1997年12月 『カント事典』（弘文堂）

1998年3月 『哲学・思想事典』（岩波書店）

2004年12月 別冊情況『特集カント没後200年』（情況出版社）

2006年4月 『カント全集別巻：カント哲学案内』（岩波書店）

- 2012年 5月 『カントを学ぶ人のために』（世界思想社）
2012年11月 『ライプニッツ読本』（法政大学出版局）
2018年 2月 『新・カント読本』（法政大学出版局）

訳 書

- 1992年 1月 （共訳）ペーター・プラーズ『カントの自然科学論』（哲書房）
2000年10月 （単訳）『カント全集 12：自然の形而上学』（岩波書店）

論 文

- 1991年 「ガリレオの自然観」（拓殖大学論集第 190 号）
1992年 1月 「数学的自然科学の形而上学的基礎づけの問題」
（P. プラーズ『カントの自然科学論』解説 I，哲書房）
1993年 8月 「「形而上学叙説」におけるライプニッツの実体論」（拓殖大学論集第 204 号）
1994年12月 「カントにおける「実在性 Realität」の概念」（拓殖大学論集第 212 号）
1996年 4月 「カントにおける「実在性」と「客観的実在性」——実在性としての力」
（日本哲学会編『哲学』第 47 号）
1999年 3月 「Realität und Kraft bei Kant」（拓殖大学論集 230 号）
2000年10月 「自然科学の形而上学的原理」（『カント全集 12：自然の形而上学』解説，岩波書店）
2001年11月 「Kants Theorie der Bewegungserfahrung in den Metaphysischen Anfangsgründen der Naturwissenschaft」（Akten des IX. Internationalen Kant Kongresses, Band4）
2002年 4月 「カントの動力学的空間論」（日本哲学会編『哲学』第 53 号）
2003年 5月 「カントにおける運動と空間」（『ヘーゲル学報』第 5 号）
2003年 6月 「ニュートン物理学と批判哲学」（日本カント協会編『日本カント研究 4』）
2007年10月 「カントの力学論における力，慣性，質量概念の再検討」（拓殖大学論集第 267 号）
2008年10月 「機械論的自然観と生命」（拓殖大学論集第 270 号）
2010年 3月 「カントの歴史哲学の批判哲学的意義」（拓殖大学論集第 277 号）
2017年10月 「カントの批判哲学とパラダイム論」（拓殖大学論集第 308 号）
2019年10月 「批判哲学の成立におけるカント力学論の意義」（拓殖大学論集第 316 号）
2022年 3月 「空間論から見たカント批判哲学への道」（拓殖大学論集第 326 号）

その他

(書評)

2013年10月 「モノド論と哲学史研究のあいだ」(図書新聞)

2016年7月 「菊池健三著『カントと動力学の問題』について」(日本カント協会編『日本カント研究』第17号)

(講演)

2020年11月 「カント哲学と現代 — 科学と哲学の関係 —」(「文京アカデミア講座」)

拓殖大学研究所紀要投稿規則

(目的)

第1条 拓殖大学（以下、「本学」という。）に附置する，経営経理研究所，政治経済研究所，言語文化研究所，理工学総合研究所，人文科学研究所，国際開発研究所，日本語教育研究所および地方政治行政研究所（以下、「研究所」という。）が刊行する紀要には，多様な研究成果及び学術情報の発表の場を提供し，研究活動の促進に供することを目的とする。

(紀要他)

第2条 研究所の紀要は，次の各号のとおりとする。

- (1) 経営経理研究所紀要『拓殖大学 経営経理研究』
- (2) 政治経済研究所紀要『拓殖大学論集 政治・経済・法律研究』
- (3) 言語文化研究所紀要『拓殖大学 語学研究』
- (4) 理工学総合研究所紀要『拓殖大学 理工学研究報告』
- (5) 人文科学研究所紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』
- (6) 国際開発研究所紀要『国際開発学研究』
- (7) 日本語教育研究所紀要『拓殖大学 日本語教育研究』
- (8) 地方政治行政研究所紀要『拓殖大学 政治行政研究』

2 研究所長は，次の事項について毎年度決定する。

- (1) 紀要の『執筆予定表』の提出日
- (2) 投稿する原稿（以下、「投稿原稿」という。）及び紀要の『投稿原稿表紙』の提出日
- (3) 投稿原稿の査読等の日程

(投稿資格)

第3条 紀要の投稿者（共著の場合，投稿者のうち少なくとも1名）は，原則として研究所の専任教員，兼担研究員および兼任研究員（以下「研究所員」という。）とする。

2 研究所の編集委員会が認める場合には，研究所員以外も投稿することができる。

3 研究所の編集委員会は，前項に規定する研究所員以外のうち，講師（非常勤）の投稿について，年度1回を限度に認めることができる。

(著作権)

第4条 投稿者は，紀要に掲載された著作物が，本学機関リポジトリ（以下「リポジトリ」という。）において公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することを許諾しなければならない。

2 共同執筆として紀要に掲載する場合には，共同執筆者全員がリポジトリにおいて公開されることおよび当該著作物の著作権のうち複製権・公衆送信権の権利行使を研究所に委託することについて承諾し，投稿代表者に承諾書を提出しなければならない。投稿代表者は，共同執筆者全員の承諾書を投稿する原稿と一緒に研究所に提出しなければならない。

(執筆要領および投稿原稿)

第5条 投稿原稿は、研究所の紀要執筆要領の指示に従って作成する。

2 投稿原稿は、図・表を含め、原則として返却しない。

3 学会等の刊行物に公表した原稿あるいは他の学会誌等に投稿中の原稿は、紀要に投稿することはできない(二重投稿の禁止)。

(原稿区分他)

第6条 投稿原稿区分は、次の表1、2のとおり定める。

表1 投稿原稿区分：第2条に規定する理工学総合研究所を除く研究所

(1)論文	研究の課題、方法、結果、含意(考察)、技術、表現について明確であり、独創性および学術的価値のある研究成果をまとめたもの。
(2)研究ノート	研究の中間報告で、将来、論文になりうるもの(論文の形式に準じる)。新しい方法の提示、新しい知見の速報などを含む。
(3)抄録	本条第5項に該当するもの。
(4)その他	上記区分のいずれにも当てはまらない原稿(公開講座記録等)については、編集委員会において取り扱いを判断する。また、編集委員会が必要と認めた場合には、新たな種類の原稿を掲載することができる。

表2 投稿原稿区別：理工学総合研究所

(1)論文、(2)研究速報、(3)展望・解説、(4)設計・製図、(5)抄録(発表作品の概要を含む)、(6)その他(公開講座記録等)

2 投稿原稿区分は、投稿者が選定する。ただし、紀要への掲載にあたっては、査読結果に基づいて、編集委員会の議を以て、投稿者に掲載の可否等を通知する。

3 紀要への投稿が決定した場合には、投稿者は600字以内で要旨を作成し、投稿した原稿のキーワードを3~5個選定する。ただし、要旨には、図・表や文献の使用あるいは引用は、認めない。

4 研究所研究助成を受けた研究所員の研究成果発表(原稿)の投稿原稿区分は、原則として論文とする。

5 研究所研究助成を受けた研究所員が、既に学会等で発表した研究成果(原稿)は、抄録として掲載することができる。

(投稿料他)

第7条 投稿者には、一切の原稿料を支払わない。

2 投稿者には、抜き刷りを30部まで無料で贈呈する。但し、査読を受けた論文等に限る。

(リポジトリへの公開の停止及び削除)

第8条 投稿者よりリポジトリへの公開の停止及び削除の申し出があった場合または編集委員会がリポジトリへの公開の停止及び削除が必要と判断した場合には、リポジトリへの公開の停止及び削除をおこなうことができる。

(その他)

第9条 本投稿規則に規定されていない事柄については、編集委員会の議を以て決定する。

(改廃)

第10条 この規則の改廃は、研究所運営委員会の議を経て研究所運営委員会委員長が決定する。

附 則

この規則は、令和2年3月1日から施行する。

拓殖大学人文科学研究所紀要 『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』執筆要領

1. 発行回数

紀要『拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究』(以下、「紀要」という)は、原則として年 2 回発行する。原稿提出期日および発行は、次のとおりとする(厳守)。

(1)	原稿は、 6 月末日締切 - 10 月発行
(2)	原稿は、 10 月末日締切 - 3 月発行

2. 執筆予定表

投稿希望者は、研究所が定めた日までに、紀要の執筆予定表に必要な事項を記入・捺印し、学務部研究支援課(以下、「研究支援課」という。)に提出する。

3. 使用言語

使用言語は、日本語又は英語とする。ただし、これら以外の言語での執筆を希望する場合は、事前に人文科学研究所編集委員会(以下、「編集委員会」という)に書面にて申し出て、許可を受ける。

許可を受けた原稿は、必ず外国語に通じた人の入念な校閲を受けたものに限る。

4. 様式

投稿する原稿は、完成原稿とし、原則としてワープロ原稿 2 部を、編集委員会に提出する。

- (1) ワープロを使用する際は、A4 判の白紙片面を縦長に用い、横書きで、1 行 39 文字、1 ページ 34 行で印字する。その際、天地、左右各 30 mm 程度の余白をとっておく。縦書きの場合もこれに準ずる。
- (2) 欧文による原稿の場合は、A4 判の白紙片面を縦長に用い、天地左右の余白を 30 mm 程度とり、1 行 78 文字、1 ページ 34 行で印字する。外国語の要約の原稿もこれに倣う。
- (3) 原稿の分量は、本文と注及び図・表を含め、原則として、A4 縦版・横書で次のとおりとする。なお、日本語以外の言語による原稿の場合もこれに準ずる。
 - ① 日本語および全角文字で記す場合、原則として 24,000 字以内。
 - ② 欧文の場合、原則として 48,000 字以内
- (4) 投稿者は、紀要の複数の号にわたり、同一タイトルで投稿を希望することはできない。ただし、「資料」の場合は、同一タイトルの原稿を何回かに分けて投稿することができる。その場合は、最初の稿で、記載原稿の全体像と回数を明示しなければならない。

5. 原稿

- (1) 原稿区分は、「拓殖大学研究所紀要投稿規則」に記載されているとおりするが、「その他」の区分、定義については付記のとおりとする。
- (2) 原稿の受理日は、研究支援課に到着した日とする。
- (3) 投稿は、完成原稿の写しを投稿者が保有し、原本を編集委員会宛とする。
- (4) 投稿する原稿とあわせて、「拓殖大学論集 人文・自然・人間科学研究」投稿原稿表紙に必要な事項を記入、「拓殖大学機関リポジトリへの公開等の許諾」に捺印し、原稿提出期日までに添付する。

6. 本文表記

- (1) 本文の構成を章・節・項のように分ける場合、それぞれの表記の仕方は、例えば、章は I・II……、節は 1・2……、項は 1)・2)……などの表記方法があるが、本紀要の場合、執筆者の研究分野が多岐にわたることを考慮し、とくに定めない。各執筆者が所属する学会の学会誌などの表記方法に準ずること。
- (2) 数字は算用数字を用いる。数字や欧字は、1字のみの場合を除き、半角とする。
ただし、縦書きの場合に限り、数字は原則として漢数字を用いる。
- (3) 特殊な字体（イタリック・ボールド・ギリシャ文字など）・紛らわしい文字（1〈エル〉・1〈イチ〉・i〈アイ〉・0〈ゼロ〉・O〈オウ〉など）や大文字・小文字（W と w など）は、明瞭に区別できるように指定する。また、添え字も、上付き・下付きを明瞭に指定する。
- (4) 本文中に文献・資料を引用・参照する場合は、下記の例のように、文献・資料の著者名（姓のみ）と発表年を示し、必要に応じて関連ページも示す。
青木（2001）は……、上村（2002：50-61）は……、青木・上村（2003）によれば……、……という説がある（大山 1998：43-52）。……という見解もある（飯田 2003；太田 1999）。青木ほか（2004）は……、など。
- (5) 本文中に文献・資料の一部を引用する場合は、引用部分を、「」でくくる、字下げする、活字ポイントを小さくする、などの方法で表す。

7. 図・表・数式の表記および作成

- (1) 図（図には写真も含む）および表は必要最小限にとどめる。とくに、同じデータに関する図と表の重複は避ける。
- (2) 図および表は、各図・各表ごとに別紙とし、それぞれ、図 1・図 2… 表 1・表 2…のように通し番号を明示し、執筆者名を記入する。
- (3) 図および表のタイトル・説明文・出典などの原稿は、別紙にまとめる。外国語の要約をつけた場合は、図・表のタイトルと説明文は、外国語を併記することができる。
- (4) 本文中の図および表の挿入希望位置は、本文原稿の右側余白に記入する。また、図・表の大きさや体裁について希望がある場合は、本文原稿上に枠で指定するか、おおよその大きさなどを右側余白に記入しておく。なお、図・表の大きさや体裁は、編集委員会で決める。したがって執筆者の希望に添えない場合もある。
- (5) 図および表を本文中に引用する際は、「図 1 によれば……」「……は表 3 に示される」などのように示す。
- (6) 図は、黒インクで明瞭に描いたものか、ワープロあるいはコンピューターソフトを使用して描いたもので、そのまま写真製版が可能なもの（版下原稿）に限る。
- (7) 表は、ワープロあるいはコンピューターソフトを使用して作成する。
- (8) 図中や表中の文字や数字の大きさ、図の表現の細かさについては、刷り上がりの大きさで明瞭に読みとれるよう、縮小率を十分考慮して決める。
- (9) 数式は専用ソフトなどを使用して正確に表現する。数式の上下は 1 行ずつあける。

8. 注とその記載方法

- (1) 注は、本文内容の補足説明を行う場合と、引用・参照した文献・資料の出所を明示する場合に用いる。
- (2) 本文中の当該箇所の右肩に（ ）でくくった通し番号をつけ、注の内容は、本文のあとに、通し番号順にまとめて記す。

9. 文献・資料の表示方法

本文中で引用・参照した文献・資料を表示する方法としては、本文中には著者の姓と発表年のみを記し（これについては、前ページの本文表記4を参照のこと）、原稿末尾の文献・資料表に詳しく表示する方法と、本文中には記さず、本文のあとの注に詳しく表示する方法の二つが一般的である。

(1) 文献・資料表に表示する場合

- ① 文献・資料表に、下記の要領で記載する。なお、文献・資料表は、原稿の末尾（注の後ろ）に掲載する。
 - a. 学術雑誌など定期刊行物の場合は、著者名・発表年・文献名・定期刊行物名・巻または号番号・文献の最初と最後のページを明記する。単行本の場合は、著者名・発表年・書名・出版社（出版所）名を明記する。
 - b. 著者が複数の場合も、全著者名（姓名）を列記する。
 - c. 定期刊行物の巻・号番号およびページについては、巻ごとの通しページがある場合は、巻番号（ゴシック）と通しページを記す。巻ごとに通しページがない場合は、巻番号（ゴシック）のあとに号番号を（ ）でくくって示し、号ごとのページを記す。号番号のみの場合は、（ ）でくくった号番号とページを記す。
- ② その他の書式（記載順序や方法）については、本紀要の場合、執筆者の研究分野が多岐にわたることを考慮し、とくに定めない。各執筆者が所属する学会の学会誌などの要領に則って、統一した形式で記すこと。
- ③ 文献・資料の並べ方は、下記の要領による。
 - a. 日本語文献・資料、アジア地域言語文献・資料、欧語文献・資料の順に並べる。
 - b. 日本語文献・資料は、著者名の五十音順に並べる。アジア地域言語文献・資料はそれぞれの著者名の当該言語の固有の配列順（あるいはカタカナ表記の五十音順）に並べる。欧語文献・資料は著者名（姓が先）のアルファベット順に並べる。
 - c. 同じ著者の文献・資料は発表年の順に並べる。同じ発表年のものが複数ある場合は、本文の引用順に、a・b……を発表年のあとにつけて並べる。

(2) 注に表示する場合

- ① 注の該当箇所に著者名・文献・資料名などを詳しく表示する方式で、この場合は、文献・資料表を省くことができる。
- ② 表示例は、以下の通り。

【日本語文献・資料】

小林政吉『宗教改革の教育史的意義』（創文社 1960）p. 12. 《単行本の場合》

林 泰成「ピーターズのコールバーグ批判」（佐野安仁、吉田謙二編『コールバーグ理論の基底』世界思想社 1993）p. 34. 《単行本所収の論文の場合》

石井雅史「コミュニケーションと規則」（日本哲学会編『哲学』第51号 2000）pp. 270-272. 《学術雑誌等の掲載論文の場合》

G. ドゥルーズ『ベルクソンの哲学』宇波彰訳（法政大学出版局 1974）p. 25.

《和訳書の場合》

【英文文献・資料】

Alexander C. Judson, *The Life of Edmund Spencer* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945), p. 145. 《単行本の場合》

A. H. Bullen (ed.), *The Works of Francis Beaumont and John Fletcher* (Variorum ed.;

London London: George Bell and Sons, 1908), pp. 49–53. 《論文集の編者表記の場合》
G. M. Dutcher et al., *Guide to Historical Literature* (New York: The Macmillan Co., 1931),
p. 50. 《著者が3名以上の場合》

F. A. Moe, “School Retrenchment,” *School Review*, XLII (May 1934), p. 40.

《学術雑誌等の掲載論文の場合》

John Calvin, *The Institutes of the Christian Religion*, trans. Henry Beveridge (2nd ed.;
Edinburgh: T. & T. Clark, 1895), I, pp. 40–45. 《英訳書の場合》

【欧文文献・資料の略語の用法】

欧文文献・資料の引用・参照の際によく使われる略語（loc. cit., ibid., op. cit.）の用法を、以下に記す。

loc.cit. 同じ文献・資料の同じ箇所を連続して引用する場合に用いる。

ibid. 同じ文献・資料から連続して引用する場合に用いる。その際、前と引用ページが異なる場合には、当該ページを表示する。

op.cit. 前に挙げた文献・資料に、いくつかの注を隔てた後に、再び言及する場合に用いる。したがって、この場合は、著者名（姓のみ）とページ数とを必ず表示する。

上記の略語は、単行本と学術雑誌の場合はイタリック体で、論文の場合はローマン体で表記する。

[使用例]

(1) T. M. Parrot and R. H. Ball, *A Short View of Elizabethan Drama* (New York: Charles Scribner's Sons, 1943), p. 190.

(2) *loc. cit.*

(3) *ibid.*, p. 325.

(4) E. H. C. Oliphant, *The Plays of Beaumont and Fletcher* (New Haven: Yale University Press, 1927), p. 67.

(5) Parrot and Ball, *op. cit.*, p. 198.

(6) Oliphant, *op. cit.*, pp. 89–91.

∴

その他のよく用いられるページ表記略号（ただし、英文文献・資料の場合）

p. 5. = page 5 の意味

pp. 17 f. = pp. 17 *et seq.* とも表す。これは page 17 and the following page の意味

pp. 20 ff. = pp. 20 *et seq.* とも表す。これは page 20 and the following pages の意味

* 欧文文献・資料では、注に示す場合と、文献・資料表に示す場合とでは、著者名などの表記の仕方が異なる。これについては、以下の例を参照のこと。

〈 注に示す場合 〉

Alexander C. Judson, *The Life of Edmund Spencer* (Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945), p. 145.

〈 文献・資料表に示す場合 〉

Judson, Alexander C., *The Life of Edmund Spencer*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1945.

* なお、インターネット上の文献・資料を引用・参照する場合は、文献・資料表あるいは注に、原則として下記の事項を記載する。

執筆者・タイトル・年月日（掲載年月日あるいは更新年月日あるいは取得年月日）・URL

10. 原稿の審査

編集委員会が審査し決定する。その手続きは次の通り。

- (1) 原稿の内容に応じて編集委員以外の査読者を選び、査読を依頼する。それとともに編集委員の中から担当委員を選ぶ。査読者および担当委員は、原則として各1名とするが、場合により複数名とすることもある。
- (2) 査読者および担当委員は、論文・研究ノート・抄録・その他については、以下の11項目について原稿を検討し、査読結果（掲載の可否・原稿種類の妥当性についての意見や原稿に対するコメントなど）をまとめ、それを編集委員会に報告する。
 - ① タイトルは内容を的確に示しているか
 - ② 目的・主題は明確か
 - ③ 方法・手法は適切か
 - ④ データは十分か
 - ⑤ 考察は正確かつ十分か
 - ⑥ 先行研究を踏まえているか
 - ⑦ 独創性あるいは学術的価値（資料的価値）が認められるか
 - ⑧ 構成は適切か
 - ⑨ 文章・語句の表現は適切か
 - ⑩ 注や参考文献の表記は、執筆要領に添ったものになっているか
 - ⑪ 図・表の表現は適切か
- (3) 編集委員会は、これらの報告に基づいて、委員の合議により、掲載の可否、原稿種類の妥当性および次項の「審査結果のお知らせ」に添える文書の内容などを決定する。なお、掲載の可否については、①このままで掲載、②多少の修正の上で掲載、③大幅な修正が必要、④掲載見送りの4段階で判定する。③については、執筆者の修正原稿を査読者と担当委員が再査読し、その結果に基づいて、編集委員会が掲載の可否等を決定する。
- (4) 研究会記録および公開講座記録の原稿については、原則として掲載する。ただし、この場合も編集委員の中から担当委員を選び、担当委員は上記項目の9)等を検討する。その結果、執筆者に加筆修正を求めることがある。

11. 原稿の審査結果・変更・再提出

- (1) 投稿の採否は、編集委員会の指名した査読者の査読結果に基づいて、編集委員会が紀要への掲載を決定する。その際に編集委員会は、原稿区分の変更を投稿者に求める場合もある。
- (2) 編集委員会は、査読に基づき、若干の訂正、あるいは書き直しを要請することができる。

また、上記判定を受けた投稿者は、その趣旨に基づいて、原稿を速やかに修正し、再度、編集委員会に提出する。ただし、査読結果の内容に疑問・異論等がある投稿者は、編集委員会にその旨を申し出ることができる。
- (3) 投稿者は、投稿を許可された原稿（査読済）を、編集委員会の許可なしに変更してはならない。
- (4) 査読の結果、大幅な修正がある場合には、投稿者の修正原稿を編集委員会が再査読し、その結果に基づいて、編集委員会が紀要への掲載の可否等を決定する。
- (5) 編集委員会が、紀要に掲載しない事を決定した場合は、人文科学研究所長（以下「所長」という）より、その旨を投稿者に通達する。

12. 投稿原稿の電子媒体の提出

投稿者は、編集委員会の査読を経て、修正・加筆などが済み次第、A4 版用紙（縦版、横書き）

にプリントした完成原稿1部と電子媒体を提出する。電子媒体の提出時には、使用OSとソフトウェア名を明記する。

なお、手元には、必ずオリジナルの投稿原稿（データ）を保管しておく。

13. 校正

投稿した原稿の校正については、投稿者が初校および再校を行い、所長、編集委員長が三校を行う。

この際、投稿者がおこなう校正は、最小限の字句に限り、版組後の書き換え、追補は認めない。

また、投稿者は、編集委員会の指示に従い、迅速に校正を行う。

投稿者が、期日までに校正が行われない場合には、紀要への掲載はできない。

14. その他

本執領に定められていない事項については、投稿者（執筆者）と協議の上、編集委員会が判断する。

15. 改廃

本執筆要領の改正は、編集委員会が原案を作成し、本研究所会議の議を経て、所長が決定する。

附則

この要領は、平成18年4月以降に投稿される原稿から適用する。

附則

この要領は、平成26年4月以降に投稿される原稿から適用する。

附則

この要領は、平成29年4月以降に投稿される原稿から適用する。

付記：「その他」の区分・定義について

①	研究動向：	ある分野の研究成果を総覧・整理しまとめたもので、研究史・研究の現状・将来への展望などを論じたもの。
②	調査報告：	ある課題についての文献・アンケート・聞き取り調査などの報告で、調査の意義が明確なもの。
③	資料：	文献・統計・写真など、研究にとっての資料的価値があると思われる情報を吟味し、それに解説をつけたもの。
④	討論：	本紀要に掲載された論文等に対する批判・質問および執筆者からの反論・回答。
⑤	研究会記録：	本研究所主催の研究会の講演内容および質疑の概要。
⑥	公開講座記録：	本研究所主催の公開講座の講演内容の詳細な記録あるいは概要。

以上

- (33) 庵功雄編著『やさしい日本語』表現事典』（丸善出版・二〇二〇年）九ページ。なお本書は「会話編」と「文章編」に分かれており「学校」「行政」「くらし」などの具体的な場面毎に豊富な表現例を掲載している。なお「行政」にスポットを当てた問題提起と実践として岩田一成「公的文書をわかりやすくするために」（『日本語学』二〇一四年九月号 vol.38-11）「特集 福祉の言語学」明治書院・二〇一四年九月）や岩田一成『読み手に伝わる公用文〈やさしい日本語〉の視点から』（大修館書店・二〇一六年）などがある。
- (34) 注(30)に同じ。
- (35) 野田尚史『なぜ伝わらない、その日本語』（岩波書店・二〇〇五年）七〇ページ。
- (36) 以下の〈原文1〉〜〈原文3〉は、早稲田大学教育学部開講の「国語科教育法2B」（二〇二二年度）の受講生であった松隈杏梨氏（科目等履修生・早稲田大学大学院生）の作成による。記して謝意を示す。
- (37) 以下の〈やさしい日本語1〉〜〈やさしい日本語3〉は、「国語科教育法2B」（二〇二二年度）の受講生諸氏によるものである。記して謝意を示す。

- す。
- (38) 「日本語弱者のことを考えて書く」（野田尚史・森口稔「日本語を書くトレーニング」ひつじ書房・二〇〇三年）。一〇四ページ。本章では「日本語弱者」の例として「日本語が得意でない人」「子ども」「お年寄り」が挙げられている。
- (39) 「書き換え」の課題に取り組み際のポイントを注(35)は、次のように記している。「(1) 省略(2) 自分がどう書きたいではなく、こう書いたら、読む人がどう思うだろう、どういう意味にとるだろうということを考えてください。(3) 文章には個性も大事ですから、絶対的な『正解』はないと思ってください。正解より、とにかく『よく考える』ことが大事です。」七ページ。

- (40) 注(30)に同じ。
- (41) 『やさしい日本語』の批判的検討」。注(20)所収。三三三ページ。
- (42) 注(41)に同じ。三二二ページ。

（原稿受付 二〇二二年一〇月二日）

- 会議の原則や司会者の役割を学ぶためのモデル会議のシナリオを提示し、集団の意思をスムーズに決定する方法などを学ばせた。そして教科書の最終章では、高校生として、地域の人々を巻き込んだイベントの企画と実行に挑戦する、という総合的な言語活動に取り組ませた。
- (18) 幸田国広『資質・能力の育成』をめざす高校国語科の学習指導（大滝一登・幸田国広編著『変わる！ 高校国語の新しい理論と実践』資質・能力の確実な育成を目指して（大修館書店・二〇一六年）所収。二七ページ。）なおこの引用部分における「鶴田（1999）」とは鶴田清司『文学教材の読解主義を超える』（明治図書）のことである（幸田氏の引用による）が、鶴田氏のこのような考えは、氏のその後の著作、例えば『あたらしい国語科指導法』（学文社・二〇〇三年）においても一貫している。
- (19) 幸田国広「現代の国語」（町田守弘・幸田国広・山下直・高山美佐・浅田孝紀編著・日本国語教育学会監修『シリーズ国語授業づくり——高等学校国語科——新科目編成とこれからの授業づくり』（東洋館出版・二〇一八年）。四三〜四四ページ。
- (20) 庵功雄『やさしい日本語』とは何か（庵功雄・イオンस्क・森篤嗣『やさしい日本語』は何を目指すか』ココ出版・二〇一三年）所収。六七ページ。
- (21) 庵功雄『やさしい日本語——多文化共生社会を目指して』（岩波新書・二〇一六年）。
- (22) 注(21)に同じ。一三三ページ。
- (23) 注(21)に同じ。一八一ページ。
- (24) 注(21)に同じ。一八六ページ。
- (25) 注(7)に同じ。
- (26) 森篤嗣『やさしい日本語』と国語教育』注(20)所収。二三九ページ。以下は贅言である。森論文が次のような執筆意図を持って書かれていることは十分承知しているつもりである。『やさしい日本語』は、外国人に対してではなく、日本語母語話者同士のコミュニケーションにおいても有効な取り組みです。その応用として、学校教育（国語教育）は積極的に働き
- 変えていくべき有力な方向性です。しかし、その際には「学校教員（国語教育）は、『やさしい日本語』に関する取り組みをしてこなかった」という誤解があっては、協力関係を築くのに支障があるということを、本章では小学校教科書調査のデータを元に示しました。」二五五ページ。
- (27) 以下、本節における「」内の引用は注(26)に同じ。
- (28) 注(21)に同じ。三六六ページ。
- (29) 新しい学習指導要領に従えば「現代の国語」の教科書には載せられないはずの小説が複数掲載され、あろうことか文部科学省の検定を通過するという椿事（『現代の国語』に「羅生門」はNG？ 高校教科書めぐり起きた波紋」朝日新聞「二〇二二年九月二日）・「批判やまぬ『現代の国語』小説掲載『多様性』損なう危険性も」（毎日新聞「二〇二一年十二月十三日）が出来た。結果として小説を掲載した教科書が、現場から大きな支持を集めて営業的に好成績を修めることとなった（令和4年度使用都立高等学校及び都立中等教育学校（後期課程）用教科書教科別採択結果（教科書別学校数）令和3年8月・東京都教育委員会）。この度の、高校国語の「大改訂」の目玉の一つである新しい共通必修科目「現代の国語」の理念を完全に骨抜きにしかねないこの事件は、高校の現場がいかに保守的であるかという例として長く記憶されるだろう。
- (30) 『新現代の国語』（三省堂・二〇二二年）。七六ページ。ちなみに論者はこの教科書の編集に参画している。なお中学校国語科の教科書では、すでに佐藤和之「やさしい日本語」（『中学校国語2』（光村図書出版・二〇一一））などが登場している。
- (31) 「情報を生かすために」と題されたこの章は片田敏孝「人が死なない防災」、矢守克也「減災学を作る」という二本の読みの教材、「ハザードマップの作りかえ」という言語活動、そして「わかりやすく伝える」、「情報の編集」、「やさしい日本語」という三本のコラム、応用的な読みの教材（「学びを深める」として外山滋比古「情報の『メタ』化」で構成されている。
- (32) 注(7)に同じ。四八八ページ。

同じく言葉の教育でありながら、この国において辿ってきた歴史や扱って立つ思想と理論、そして何よりもそれぞれの状況認識の違いの大きさに改めて気づかされた。と同時にいくばくかの共通点も見えてきたようにも思う。もちろんこれらは論者一人の個人的な感想の吐露に過ぎない。今後も研究を継続していきたい。

《注》

- (1) 一一八ページ。以下、「審議のまとめ」と略称する。
- (2) 注(1)に同じ。
- (3) 「中央教育審議会答申」(平成二八年十二月)。四四ページ。
- (4) 「社説」(読売新聞・二〇二二年一月十日)。
- (5) 伊藤氏貴(毎日新聞・二〇二二年三月三十日)。なお注(4)と注(5)の問題提起に対して私見はあるが、本稿では触れないこととする。
- (6) 「日本語学」(二〇二二年春号・vol.14-1)「特集」現代の国語」「言語文化」の授業と必修科目の授業づくりと学習評価から(明治書院・二〇二二年)などの試みはある。
- (7) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成年告示) 解説国語編』(東洋館出版・平成30年7月)六九ページ。
- (8) 国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。
- (9) 注(7)に同じ。三ページ。
- (10) 注(7)に同じ。三ページ。
- (11) 旧課程における選択科目であった「国語表現」の目標は「国語で適切かつ効果的に表現する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力

や想像力を伸ばし、言語感覚を磨き、進んで表現することによって国語の向上や社会生活の充実を図る態度を育てる。」とされていた。論者は、これまで『国語表現Ⅰ』(二〇〇四年・教育出版)、『国語表現Ⅱ』(二〇〇四年・教育出版)、『国語表現Ⅰ 改訂版』(教育出版・二〇〇七年四月)、『国語表現Ⅱ』(二〇一三年・教育出版)の編集に参画してきた。

- (12) 大滝一登『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 実践編』(明治書院・平成三二年三月)。三一ページ。
- (13) 「高等学校学習指導要領(平成21年告示)」。ちなみに「話すこと・聞くこと」は「15〜25単位時間」を充てるとされている。
- (14) 論者が編集に参画した「国語総合」の教科書には以下のようなものがある。『国語総合 改訂版』(教育出版・二〇〇七年四月)、『新国語総合 改訂版』(教育出版・二〇〇七年四月)、『新編国語総合 言葉の世界へ』(教育出版・二〇一三年)、『新編国語総合』(教育出版・二〇一七年)などを参照のこと。このうち『新編国語総合 言葉の世界へ』は、編集の方針を従来型のコンテンツ重視から、コンピュータ重視へと変更し、単元冒頭に「読むことのレッスン」(つけたい言葉の力)を置いた構成となっている。本教科書の詳しい分析については別稿を期したい。
- (15) 大滝一登『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 理論編』(明治書院・平成三〇年)。九六〜九七ページ。
- (16) 『国語表現Ⅰ』(教育出版・二〇〇四年)、『国語表現Ⅱ』(教育出版・二〇〇四年)など。それまでの「国語表現」の教科書といえば、有名作家や評論家の名文集が一般的であった。このようなアンソロジー型の教科書を支えているのは「読書百遍意自通」「己を空しくすべし」というような漢籍の素読由来の読みの極意であると考えられる。
- (17) この「言葉の力」を育成するために私たちの「国語表現」の教科書は、視写と聴写から初めて、通知書や報告書はどのように書けば、必要な人に必要な情報を伝えやすくなるのか、聞き手の行動を変化させる(コンビート)にはどのようなプレゼンテーションが有効なのか、などを学ぶ言語活動を配列した。さらに利害の異なる者同士の間で、合意を形成するための

から、身のまわりの言語表現全般に拡張することによって、この取り組みはまさに庵氏が「日本語表現の鏡」と評した取り組みになっていくだろう。

第三にこれも繰り返になるが「やさしい日本語」への書き換えには、絶対的な正解が無いという点である。正解が無いということは、この取り組みの最大の長所でもある。「やさしい日本語」に書き換える「ルール」⁴⁰を学んだ後に、実際にグループで協働して「ああでもない、こうでもない」と話し合いながら取り組むことによって、この学習活動は「対話的」な学びとなる。また結果と責任がセットになっている「実社会」とは異なり、何回でもやり直しがきくシミュレーションの場である学校の特徴を最大限に活かして、動画や音声言語を取り入れた実験的な試みに挑戦させることもできるだろう。

V おわりに

ここまで高等学校国語科の新しい共通必修科目「現代の国語」の「書くこと」の学習活動として「やさしい日本語」に書き換えるという実践を提案してきた。「やさしい日本語」に書き換えるという取り組みは、「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする」という「現代の国語」の「目標」に正対した言語活動である。これからの「実社会」で生きて働いていく若者にとって、この「知識や技能」を身につけていることは大きなアドバンテージとなるだろう。最後に「やさ

しい日本語」の取り組みに対する批判的な見解を紹介しておきたい。安田敏朗氏は「やさしい日本語」の取り組みについて次のように述べる。

見通しだけつけておけば、「やさしい日本語」を論じることが、結局は日本語について、あるいは日本社会のあり方について、なにもし論じていない、ということ指摘することになると思います。⁴¹

多言語社会のあり方、そこでの日本語のあり方、各言語社会の具体的な言語状況について十分な考察がなされていないまま議論がなされているように思います。この点に留意しないと、だれも使わない、たんなる行政のお先棒を担ぐだけに「やさしい日本語」がなる危険性があります。⁴²

安田氏の「やさしい日本語」へのこの「批判的検討」について、本稿において何かを述べることは論者にとって手に余る。だが安田氏の「やさしい日本語」そのものに対するこのような根本的な批判的検討に対して、「やさしい日本語」の取り組みに積極的である日本語教育の論者たちが、どのように応答するのかについて重大な関心を持って今後とも見守っていききたい。

本稿の「I」において論者は、「高等学校における国語教育と日本語教育の相互乗り入れの可能性を探ってみよう」というようなことを述べた。ここまで拙論を草してきて、改めて国語教育と日本語教育の両者が

〈原文3〉

温泉の利用法／ご自身のお部屋からタオルをもってお越しくださ
い／湯船に入る前に体を洗い、湯船にかかる際はタオルを入れない
ようにしてください。／※土足厳禁です。／※貴重品の管理に注意
してください。

〈やさしい日本語3〉

温泉の使い方／あなたの部屋からタオルをもってきてください。

／はじめに体を洗いまししょう。お湯に入るときはタオルを入れない
てください。／○くつはぬぎまじょう。／○大切なものはロッカー
に入れまじょう。

※グループワークで取り組ませる。「やさしい日本語」に書き換え
る過程で注意したことをメモさせる。(指導上の留意点)

③ 「やさしい日本語」に書き換えたものと、書き換えの際に注意
したことのメモをグループ毎に発表させてクラス全体で共有し、
相互批評を行う。

【まとめ】

・「やさしい日本語」を、相互批評に基づいて推敲する(○推敲、
共有)

① 「やさしい日本語」に書き換えたものの相互批評を受けて、グ
ループ毎に「やさしい日本語」を推敲する。

② 身のまわりの文章表現の中から「やさしい日本語」の観点から、

書き換えることが望ましい例を探してクラス全体で共有する。

以下、この取り組みの国語科の授業としての特色を列挙していく。第
一に、繰り返しになるが「『やさしい日本語』に書き換える」という学
習の過程が、「現代の国語」の「書くこと」の指導事項ア〜エ(○題材
の設定、情報の収集、内容の検討)「○構成の検討、考えの形成、記述」
「○推敲、共有」の学習のすべて対応している点である。この点はこの
取り組みが、国語科の優れた言語活動であることの証しとして強調して
おきたい。

第二にこの取り組みが、「実社会」の問題の解決を図るものになっ
ている点である。生徒の身のまわりに実在する「日本語弱者」^⑧が抱えてい
る問題の解決に、生徒自身が直接関与できるといふ点がある。この取り組
みを生徒が「主体的」な学びとする原動力になる。この取り組みは、生徒
が本気で取り組むに値するおもしろさを持っているのだ。ミックスの生
徒の親が「日本語弱者」であるケース、コミュニケーション不足によっ
てトラブル(ゴミの捨て方など)が地域社会で頻発しているケース、飲
食店のわかりにくいメニューを改善するケースなど、生徒がまさに「主
体的」に取り組むことが可能なアクチュアリティをこの取り組みは持つ
ているのである。今回の学習計画では【展開】の③でクラス内で「相互
批評」を行うこととしたが、場合によっては実際の外国人や子どもに
「やさしい日本語」への書き換えを評価してもらふことも可能だろう。
そして「やさしい日本語」の取り組みを、日本語弱者に対する取り組み

長や課題を捉え直したりすることができている。(思考力・表現力・判断力等) B(1)エ)

(5) 単元の流れ

【導入】

・「やさしい日本語」を知る(○題材の設定、情報の収集、内容の検討)

① ナマズの絵が大きく描かれている交通標識「緊急交通路」の図を見せる。

※日本ではナマズは地震と結びついているが、他の文化圏の人に全く共有されないことに気づかせる。(指導上の留意点)

② 教科書掲載のコラム『やさしい日本語』(前掲引用部分)を読む。

【展開】

・「やさしい日本語」に書き換える(○構成の検討、考えの形成、記述)

① 〈例題〉ため池の周りにある「危険／立入禁止」という表示を、漢字が読めない子どもでもわかるように書き換えなさい。

↓〈例題〉なので生徒個人で取り組ませる。「危険 立入禁止」という表示を「あぶない。はいつてはいけません。」というようにひらがな書きにした上で、子どもがおぼれている絵をつける

などの工夫が必要であることを知る。

② 以下の〈原文1〉～〈原文3〉を「やさしい日本語」に書き換えなさい。

〈原文1〉

町内春季運動会について(ご案内)／下記のとおり、春季運動会を開催しますので、ぜひお越し下さい。／記／日時…2022年5月8日(日) 9時～12時／会場…早稲田小学校校庭／参加費…無料／弁当を持参してください。*雨天順延

〈やさしい日本語1〉

町のスポーツ大会について／いつ…2022年5月8日 日曜日
／9時から12時まで／どこ…早稲田小学校／いくら…0円／お昼ごはんを持って来てください。／雨が降ったら、ちがう日にやりま
す

〈原文2〉

新型コロナウイルス感染拡大防止について／外出時はマスクを着用し、公共交通機関を利用する際は会話をお控えください。／手洗い・手指消毒を徹底しましょう。／換気を行ってください。

〈やさしい日本語2〉

新型コロナウイルスを広げないために、外に出るときはマスクをつけましょう。／電車やバスにのるときは、話さないようにしましょう。／よく手を洗い消毒をしましょう。／窓などをあけて空気を入れかえましょう。

たりする活動。」にピタリと合致する。これらのことは、この単元がまさに「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする」という「現代の国語」の「目標」に正対していることの証しにほかならないのである。次に(3)単元設定の理由を示す。

(3) 単元設定の理由

- ① 「やさしい日本語」を書くプロセスを通して、情報を集めて選ぶ力、情報を整理する力、情報を作りかえる力をつけさせたい。
- ② 日本に住む外国人との共通言語である「やさしい日本語」について知り、実際に「やさしい日本語」を書いてみることによって、「実社会」（＝多文化共生社会）におけるコミュニケーションの能力を高めたい。
- ③ 「やさしい日本語」を書く作業にグループで協働して取り組むことによって、「見方・考え方」を働かせた「主体的・対話的で深い学び」を実現したい。

①は「現代の国語」の学習指導要領の「書くこと」の指導事項ア～エをふまえた単元設定の理由である。②は庵氏をはじめとする「やさしい日本語」の推進者の考えを国語教育の側の一員として引き受けた単元設定の理由である。③は「やさしい日本語」は、言語による表現であるがゆえに、絶対的な正解というものが無いという点を逆に生かして、グルー

プで日本語の表現の「調整」に取り組ませたいという願いに基づいた単元設定の理由である。グループで「やさしい日本語」を書くという協働作業は「主体的・対話的で深い学び」となる可能性を大いに持っていると考えられる。次に(4)単元の評価規準と(5)単元の流れを示す。

(4) 単元の評価規準

- ① 実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに、語句や語彙の構造や特色、用法及び表記の仕方などを理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができている。（「知識及び技能」(1)エ）
- ② 目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にすることができている。（「思考力・表現力・判断力等」(1)Bア）
- ③ 読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要度などを考えて、文章の構成や展開を工夫することができている。（「思考力・表現力・判断力等」B(1)イ）
- ④ 自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに、文章の種類や、文体、語句などの表現の仕方を工夫することができている。（「思考力・表現力・判断力等」B(1)ウ）
- ⑤ 目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の特

こわれた 建物に注意して ください。

この教科書において「やさしい日本語」はコラム扱いのため、いわゆる「学習の手引き」にあたるものは付いていない。つまり、「情報を生かすために」と題されたこの章の学習内容や活動と関連付けて、上下二段1ページのこのコラムを読んで「やさしい日本語」について知ることができれば、この教材の役割は果たしたことになるという設定なのである。しかしそれでは、いかにももったいない。そこで本稿では、このコラムをベースにして『やさしい日本語』に書き換える」という学習活動(単元)を提案したい。まずは以下に(1)単元名と(2)単元の目標を示す。

(1) 単元名「やさしい日本語」に書き換える

(2) 単元の目標

- ① 実社会において理解したり表現したりするために必要な語句の量を増すとともに、語句や語彙の構造や特色、用法及び表記の仕方などを理解し、話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすること。(知識及び技能) (1)エ)
- ② 目的や意図に応じて、実社会の中から適切な題材を決め、集めた情報の妥当性や信頼性を吟味して、伝えたいことを明確にすること。(思考力・表現力・判断力等) B(1)ア)
- ③ 読み手の理解が得られるよう、論理の展開、情報の分量や重要

度などを考えて、文章の構成や展開を工夫すること。(思考力・表現力・判断力等) B(1)イ)

④ 自分の考えや事柄が的確に伝わるよう、根拠の示し方や説明の仕方を考えるとともに、文章の種類や、文体、語句などの表現の仕方を工夫すること。(思考力・表現力・判断力等) B(1)ウ)

⑤ 目的や意図に応じて書かれているかなどを確かめて、文章全体を整えたり、読み手からの助言などを踏まえて、自分の文章の長や課題を捉え直したりすること。(思考力・表現力・判断力等) B(1)エ)

ここで注目すべきなのは、「現代の国語」の「書くこと」の指導事項のア〜エまでのすべてが、この単元で学習可能であるということである。そもそも「書くこと」の指導事項ア〜エは「○題材の設定、情報の収集、内容の検討」「○構成の検討、考えの形成、記述」「○推敲、共有」という具合に「書くこと」のプロセスに沿った形で配列されている。そして学習指導要領の「解説」では「ここに示す学習過程は指導の順序性を示すものではないため、指導事項を必ずしもアから順番に指導する必要はない」と述べられている。しかし、単元『やさしい日本語』に書き換えよう⁽³²⁾では、このア〜エのすべを一つの単元で学ぶことができるのである(具体的な学習の流れは後述する)。さらにこの単元は「書くこと」の「言語活動の例」である「イ 読み手が必要とする情報に応じて手順書や紹介文などを書いたり、書式を踏まえて案内文や通知文などを書い

語教育の中にしっかりと位置づけることが、なによりも重要なのではないだろうか。本稿のタイトルを『現代の国語』の中の『やさしい日本語』とした所以である。

IV 「現代の国語」の中の「やさしい日本語」をめぐる

令和四年四月、新しい共通必修科目である「現代の国語」の教科書の使用が開始された。そして「現代の国語」の教科書の中で「新しい日本語」を取り上げた教科書が現れた。『やさしい日本語』と題された上下二段ページのコラムが掲載されたのである。このコラムは「情報を生かすために」と題された「書くこと」の章に掲載されている。以下、このコラムの全文を引用する。

「やさしい日本語」

「やさしい日本語」は、災害情報を「迅速に」「正確に」「簡潔に」外国人被災者に伝えるために提案されたものである。

阪神淡路大震災では外国人被災者の数が、死者の数で日本人の一・八倍、負傷者の数で二・四倍にのぼった。こうしたことから、日本に住む外国人の共通言語としての日本語をわかりやすく簡潔に伝え、災害時に有効に情報提供をして、外国人を情報弱者にしない取り組みが行われている。

「やさしい日本語」の主なルールとしては、例えば次のようなも

のがある。

【文字で表わすとき】

- ① 重要度が高い情報だけに絞りこむ
- ② 曖昧な表現を避け具体的な表現にする
- ③ 難解な語彙は日常の言葉に言い換える
- ④ 知っているのと役に立つ災害語彙（「余震」など）には、「やさしい日本語」に言い換えた表現を添える
- ⑤ 複雑でわかりにくい表現は、文の構造を簡単にする

【書き換え例】

（もとの文章）

今朝、五時四十五分ごろ、兵庫県の淡路島付近を中心に広い範囲で強い地震がありました。気象庁では、今後もしばらく余震が続く上、やや規模の大きな余震が起きるおそれもあるとして、地震の揺れで壁に亀裂が入ったりしている建物には近づかないようにするなど、余震に対して十分に注意してほしいと呼びかけています。

（書き換え例）

今日朝 5時 45分、兵庫 大阪などで、大きい地震がありました。

余震（後）で 来る 地震）に 注意して ください。地震で

教育に普及させるために、学校教育と協力関係を築く上で不可欠な視点です。⁽²⁶⁾

森論文は小学校教科書「1285冊」⁽²⁷⁾を調査した大変な労作なのだが、ここで森氏が述べている3点の「結論」の中で「1 学校教育(国語教育)における『やさしい日本語』の取り組みは特に新しいものではないこと」については、多少の異論がある。確かに森氏が調査した小学校教科書には、「読み手を考えて」「6年生から低学年の子どもたちへの書き方の工夫を考えさせる教材」(昭和49年使用開始/日本書籍/6年上)や「読む人のことを考えて」平易な表現に書き換える課題(平成14年度使用開始/光村図書/5年下)などが掲載されている。その意味で国語教育では「やさしい日本語」の取り組みは古くから行われており「特に新しいものではない」のであろう。しかし、「昭和49年」の段階では専門用語としての「やさしい日本語」は登場していなかったのである。専門用語としての「やさしい日本語」の登場は、平成七年の阪神・淡路大震災の時である。⁽²⁸⁾つまり、国語教育で古くから行われてきたと森氏が言うところの「やさしい日本語」の取り組みは、それが後に「やさしい日本語」と呼ばれる言葉の取り組みであることに無自覚なまま行われていたということなのだ。

自覚的であるか無自覚かという問題は、この「やさしい日本語」という取り組みの場合、決定的に重要であると考える。前掲した引用である「読む人のことを考えて」(平成14年度使用開始/光村図書/5年下)と

いう取り組みは、阪神・淡路大震災の後の取り組みである。しかし、この取り組みはあくまでも「読む人のことを考えて」という取り組みなのであり、「やさしい日本語」を必要としている対象者を想定したものである。ない。「やさしい日本語」を必要としている人のために、日本語を書き換えましょうという取り組みと、他の「書くこと」の課題の中の一つとして「読む人のことを考えて」書き換えましょうという取り組みでは、指導者にとっても、学習者にとっても取り組み際のモチベーションが大きく違ってくるはずである。否、モチベーションだけの問題ではなく、国語科の学習活動自体の目標が大きく違ってくる(詳細は後述する)はずなのである。

森論文における調査と分析は、つまり、小学校教科書における数ある「書き換え」の課題の中に、現代の「やさしい日本語」と同じ取り組み(であると森氏が考える)を見い出す帰納的な試みなのである。しかし、森氏が自身の論文における結論「1」をふまえて「これだけ広い世代にまんべんなく『やさしい日本語』に関する取り組みがなされてきた結果が、現状なのです」と述べて現状について悲観的認識を示し、「学校教育(国語教育)における『やさしい日本語』の取り組みに過度に期待を持ちすぎるべきではないこと」という第2の結論を導き出していることは、国語教育に携わっている者として残念なことである。と同時に、捨て置けない事態であると考える。このような現状を変えていくためには、国語教育の過去の取り組みの中から、現在の「やさしい日本語」に通ずるものを掘り出すのではなく、「やさしい日本語」という言語活動を国

士の交流のあり方として不適切なものであり、外国人側にも最低限の日本語習得を求める一方で、日本人側もその日本語を理解し、自らの日本語をその日本語に合わせて調整する訓練をする必要があります。その調整過程に共通言語として登場するのが「やさしい日本語」⁽²⁰⁾なのです。

さらに庵氏は『やさしい日本語——多文化共生社会へ』⁽²¹⁾においても、「やさしい日本語」とは「相手の日本語能力に合わせて調整」⁽²²⁾した日本語のことであると述べる。ここでは「調整」という言葉に注意しておきたい。「やさしい日本語」とは、日本語を加工して新しく作られるものではなく、あくまでも日本語を「調整」して作られる日本語母語話者と日本語非母語話者間の共通言語なのである。関連して庵氏は「日本語母語話者に求められる最も重要な日本語能力は、『自分の考えを相手に伝えて、相手を説得する』⁽²³⁾ということである」と述べた上で、次のように述べる。

外国人に伝わるように自分の日本語を調整するという行為は、実は、「自分の言いたいことを相手に聞いてもらい、相手を説得する」という、母語話者（この点は日本語に限りません）にとっても最も重要な言語能力の格好の訓練の場になるのです。つまり、この点で「やさしい日本語」は、日本語母語話者にとって「日本語表現の鏡」としての役割を果たすのです。⁽²⁴⁾

引用部分中の「外国人に伝わるように自分の日本語を調整するという行為」こそ「社会人として活躍していく高校生が、他者と関わる現実の社会において必要な国語の知識や技能について理解し、それを適切に使うこと」⁽²⁵⁾を学ぶ行為にほかならないのではないだろうか。また引用部分中の「日本語母語話者にとって『日本語表現の鏡』としての役割を果たす」という指摘は、そのまま国語教育の実践の方向を的確に指し示している。そこで早速「現代の国語」の中で「やさしい日本語」を……という具合に話を進めたいのだが、その前に「やさしい日本語」を取り上げて、国語教育と日本語教育の関係についての貴重な提言をしている先行研究を取り上げておきたい。森篤嗣氏は日本語教育と学校教育（国語教育）の協力関係について次のように述べる。

本章では、昭和27年使用開始以降の1285冊の小学校教科書を調査し、「書き換え」や「言い換え」が扱われている教材から、「やさしい日本語」に関する取り組みの実態について述べます。本章の結論から言うと、「1 学校教育（国語教育）における「やさしい日本語」の取り組みは特に新しいものではないこと」、「2 学校教育（国語教育）における「やさしい日本語」の取り組みに過度に期待を持ちすぎるべきではないこと」、「3 学校教育（国語教育）における「やさしい日本語」の取り組みは、近年やや低調なので力を入れること。そして、長期的な視点で取り組みが続くよう見守ること」の3つが主張されます。この3つは「やさしい日本語」を学校

こと」「書くこと」領域との相関性が浮かび上がってくる。¹⁸⁾

まさにこのような固定観念が、教室の現場のみならず、教科書編集の現場においても存在しているように思う。教科書の教材が「身体論」「環境問題」「科学技術論」「平和論」などのテーマへ「教育内容」で束ねられ続けているのが、そのことの証左であると言えよう。さらに幸田氏は新科目「現代の国語」の科目としての姿について次のように述べる。

「現代の国語」が、実社会に生きて働く言語能力の育成を目指し、「話すこと・聞くこと」「書くこと」に多くの時間を配当していることから、その教科書の姿は、現行の「国語総合」よりも「国語表現」に近いイメージが浮かぶ。(中略) これ まで以上に「実用的な文章」が教材として重要な役割を果たすことになる。(中略) しかし、「実用的な文章」の場合、文章の解釈と理解だけでは学習指導にはなりにくい。例えば、評論と比べても手も語彙や表現は平易であり、曖昧さや解釈の揺れは極力排除されて書かれている。何より、ある明確な目的や役割を担っているのが「実用的な文章」だからだ。ということは、それを読む自体に価値があるというより、読み手の目的と必要との関連で読まれた時に教材としての価値が浮かび上がる。(傍線引用者)¹⁹⁾

引用部分中の傍線部に注目したい。「曖昧さや解釈のゆれは極力排除」

されている「実用的な文章」は、国語科の読解指導の対象になりにくいのである。そして「読み手の目的と必要との関連で読まれた時に教材としての価値が浮かび上がる」という幸田氏の指摘をふまえて「実用的な文章」を読んで、それを目的や意図に応じて書き換えるという言語活動を構想した時、浮かび上がってくるのが「やさしい日本語」の存在である。「実社会」の中にあふれているわかりにくい日本語を読んで、「やさしい日本語」に書き換えるという一連の学習活動を新しい共通必修科目である「現代の国語」おける「書くこと」の指導の中に位置づけられないだろうか。次にそもそも「やさしい日本語」は、どのようなものかについて簡単に触れてみたい。

Ⅲ 「やさしい日本語」をめぐる

「やさしい日本語」の「やさしい」には「優しい」と「易しい」が含まれているということだが、そもそも「やさしい日本語」とはどのようなものだろうか。庵功雄氏は「やさしい日本語」について次のように述べる。

これまでの日本社会は、外国人に対して一方的に日本語習得を求めてきました。「ここまで来たら（日本人と同じような (native-like な) 日本語能力を身につけたら）仲間に入れてあげよう」という考え方です。(中略) しかし、こうした考え方は対等な市民同

(中略) 彼らの多くは高等学校の卒業証書を手にするのが夢であり、そこから一人の社会人として、よりよい人生の道を進もうとしていた。そのような生徒たちの未来を支えるのが教育であり、学習指導要領はそうした理念に支えられていなければならないと筆者は考えている。

大学に進学するのに都合のよいようにのみ、高等学校の教育課程が存在するのではない。むしろ、話は逆であって、高等学校で身に付けた資質・能力を大学のアドミッション・ポリシーに基づいて確認、評価するのが大学入試である。進学校の教師が新テストに対応した教育課程を意識するのは当然かもしれないが、そこだけに意識を集中してしまい、社会で必要な国語の資質・能力が軽視されるとすれば、それは本末転倒と言わざるを得ない。¹⁵⁾

まさに我が意を得たりである。論者も参加していたチームが二〇〇〇年代初頭に編集に着手した「国語表現」¹⁶⁾の教科書は、大滝氏が述べるところの「よりよい人生の道を進もうと」している高校生に必要な言葉をつけることを目標の第一にしていたからである。「実社会」で役立つ言葉の力をも身につけるべく、教科書全体を「レッスン」と称する言語活動の集合体として構成し、さらにその「レッスン」の内部を三段階の「ステップ」に構造化して、言葉の力のスパイラルな学びの過程を提示したのである。高校卒業と同時に「実社会」に出ていく生徒は、例えば商業高校なら商業、工業高校なら工業という分野の専門的な知識や技能を活

かして社会人として仕事をしていくはずである。そんな彼らに必要な言葉の力とは、商業や工業などの専門分野の基礎となる言葉の力である。身につけていなければ「実社会」においては不利な立場に置かれてしまうような言葉の力なのである。¹⁷⁾

今後、ICTがいくら発達しても、個々人が扱う端末に情報を入力するのは人間であると考えている。そして日本においては、その情報の主力を担うのは日本語であり続けるとも考えている。「実社会」を生き抜いていくために若者が身につけていなければならない言葉「国語(日本語)」の力を身につけさせることこそが、後期中等教育である高等学校国語科の核心的な役割ではないだろうか。大滝氏の問題提起と関連して、幸田国広氏は鶴田清司氏の言を引用しながら高等学校の国語科について次のように述べる。

国語科で何を教えるかという発想の固定観念の問題がある。鶴田(1999)は国語科で教える内容を〈教材内容〉〈教科内容〉〈教育内容〉の三つの概念に区分した。この概念にしたがって現状を整理すれば、高校国語科の現状は〈教材内容〉に集中し、言語の機能による汎用的能力を含む〈教科内容〉の指導が不十分のまま、「自然環境の大切さ」「平和の尊さ」「命の尊厳」といった、教科を超えた教育的価値「教育内容」を、教材の読解から直結させて教えている。国語科のカリキュラムを〈教科内容〉のレベルで捉え直すところ「読むこと」の目標は読む能力として相対化され、「話すこと・聞く

標」に「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けること」が位置づけられていることの意義は極めて大きいと考える。まさにその意味で、今回の学習指導要領の改訂は、特に高校国語においては「大改訂」というべきもので、その改訂の規模は戦後の国語教育史を振り返ってみても類をみない。予測困難で複雑なこれからの社会を行きっていく高校生たちにとって、共通必修科目の筆頭である「現代の国語」の学びをどのように作っていくかという問題は、高等学校の現場にとって喫緊の課題であるといえよう。大滝一登氏は「現代の国語」の科目としての性格について次のように述べる。

「現代の国語」では、特にこれまで課題視されてきた「話すこと・聞くこと」「書くこと」に比重を置いた指導を行うことになる。これは、単に教材を読んで読みを深めるために話し合ったり、読み取った内容をレポートにまとめたりする言語活動を意味しない。これらは「読むこと」の言語活動であり、直接的かつ目的的に話す能力や書く能力の指導をねらったものではないからだ。「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域の指導は、その資質・能力の育成自体を目指し計画的に指導・評価されなくてはならない。¹²⁾

以下は私事だが、論者が初めて高等学校の教壇に立ったのは一九八五年四月であり、その時の共通必修科目は「国語Ⅰ」であった。以後、一九九九年告示の学習指導要領で「国語総合」が選択必修科目となり、

その後「国語総合」は二〇二二年まで必修科目であり続けた。振り返ってみると、高校一年の必修科目である「国語Ⅰ」「国語総合」の学習指導は、現代文でも古典でも「読むこと」が中心であったという実感がある。大滝氏からの引用部分中の「教材を読んで読みを深めるために話し合ったり、読み取った内容をレポートにまとめたりする言語活動」は『「読むこと」の言語活動』である、という指摘は当時の現場の状況を適切に捉えた評であると思う。「羅生門」を読んで「下人のゆくえは誰も知らない。」という末尾の続きを考えて書く、「水の東西」を読んで「××の東西」を調べて書くなどの言語活動は、まさに「読むこと」の言語活動であったのである。

確かに「国語総合」においても「書くこと」を主とする指導には30〜40単位時間程度を配当するものとし、計画的に指導すること¹³⁾とされていた。しかし、教科書の作りも、「読むこと」の本単元の配列に、単発的で何の脈絡もない言語活動の集合体である「表現(編)」が挿入されているというものがほとんどであった¹⁴⁾。そして現場においては前述したように、「書くこと」の指導の多くは、「読むこと」の言語活動の「まとめ」の意味合いで扱われていたのだ。まさに忸怩たる思いがある。しかし、「読むこと」の学習のまとめとして「書くこと」の言語活動を位置づければ、それで「書くこと」の指導時数のつじつまは合わせられたのである。大滝氏はさらに次のように述べる。

筆者の初任校は昼間二部制の商業科定時制高等学校であった。

に必要な国語の知識や技能を身に付けるとは、学校生活や身近な社会生活における様々な関わりを含みながらも、社会人として活躍していく高校生が、他者と関わる現実の社会において必要な国語の知識や技能について理解し、それを適切に使うことができるように示している。(ゴチック体原文・傍線引用者)

本稿は、新しい共通必修科目「現代の国語」の授業において、「やさしい日本語」に書き換える、という実践を提案することを目的としている。「やさしい日本語」に書き換えるという学習活動は、「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする」という「現代の国語」の「目標」の「(1)」に正対した言語活動であると考えるからである。さらにこの提案によって、高等学校における国語教育と日本語教育の相互乗り入れの可能性を探ってみたいとも考えている。そのためは、もう少し「現代の国語」という新しい共通必修科目の内容について検討してみたい。

II 新しい共通必修科目「現代の国語」をめぐる

「現代の国語」の「目標」の「(1)」は、「審議のまとめ」にある「高等学校では、教材への依存度が高く、主体的な言語活動が軽視され、依然として講義調の伝達型授業に偏っている傾向があり、授業改善に取り組む必要がある。」をふまえたものであるとされているが、旧課程の共通

必修科目であった「国語総合」の「目標」^⑧と比較しても、特に引用部分の傍線部に見られるように極めてプラグマティックな内容になっている。これは今回の学習指導要領が「育成を目指す資質・能力の明確化」つまり「何のために学ぶのか」という各教科等を学ぶ意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の目標や内容を『知識及び技能』『思考力、判断力、表現力等』、『学びに向かう力、人間性等』の三つの柱で再整理^⑨することを改訂の基本方針としたこと、つまり「何ができるよくなるか」を明確化したことによるのだろう。

従来、特に高等学校の学びは「大学入学者選抜や資格の在り方等の外部要因によって、その教育の在り方が規定されて」^⑩しまう傾向があり、それこそ「何ができるようになったのか」が不問に付されたままの学習が繰り返されてきたという実感が、元高校現場の教諭であった自分にもある。今回「現代の国語」で「身に付けるようにする」とされている「実社会に必要な国語の知識や技能」が、少々乱暴に言えば、大学受験や就職試験を突破するための「知識や技能」にすり替えられてきた、と総括することもできるだろう。

もちろん旧課程の科目の中には、生徒のコミュニケーション能力を高める科目として「国語表現」^⑪という科目が設置されていたし、「国語表現」は新課程においても引き続き選択科目として設けられている。そしてこの「国語表現」は、前掲した「現代の国語」の「目標」の「(1)」を直接、引き継いだ科目として位置づけられてもいる。しかし今日において、高等学校国語の共通必修科目の筆頭である「現代の国語」の「目

の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどが課題として指摘されている。

「こうした長年にわたり指摘されている課題の解決を図るため」²⁾に、今回(平成三〇年七月)改訂された学習指導要領では、共通必修科目「現代の国語」「言語文化」と選択科目として「論理国語」「文学国語」「国語表現」「古典探求」が新設された。「現代の国語」は「実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目」として、『知識・技能』では「伝統的な言語文化に関する理解」以外の各事項を、『思考力・判断力・表現力等』では全ての力を総合的に育成する³⁾科目として誕生したのであった。

今回の学習指導要領の改訂では、選択科目である「文学国語」と「論理国語」の新設に伴って「高校の国語 文学と論理は分けられない」⁴⁾や「高校教科書検定 論理・文学、切り分け『困難』 二項対立の構図に問題」⁵⁾に代表される「文学軽視」を憂う立場からの発言が相次いだ。「論理国語」と「文学国語」をめぐる盛んな議論の影に隠れて、共通必修科目である「現代の国語」という新設科目についての検討は、私見だがあまり活発に行われてはいない感がある⁶⁾。そこで本稿では新しい共通必修科目である「現代の国語」を取り上げて、現場の実践に資する取り組みを提案したい。新しい学習指導要領は「現代の国語」の「目標」を

次のように設定している。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語的に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする。
- (2) 論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし、他者との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
- (3) 言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わりとうとする態度を養う。

この「目標」の(1)について指導要領の「解説」⁷⁾は、次のように解説する。

(1)は、「知識及び技能」に関する目標を示したものである。中学校第3学年において「社会生活に必要な国語の知識や技能」としていたものを受け、「現代の国語」では、**実社会に必要な国語の知識や技能**としている。

実社会とは、私たちが生きる現実の社会そのものである。**実社会**

「現代の国語」の中の「やさしい日本語」について

― 共通必修科目における「書くこと」の指導をめぐって ―

佐野 正俊

要旨

平成三十年に改訂された学習指導要領において、高等学校国語科の新しい共通必修科目として「現代の国語」が誕生した。今回の改訂では、「論理国語」と「文学国語」をめぐる盛んな議論の影に隠れて、共通必修科目である「現代の国語」という新設科目についての検討は、私見だがあまり活発に行われてはいない感がある。そこで本稿では、「現代の国語」の授業において、「やさしい日本語」に書き換える、という実践を提案してみたい。「やさしい日本語」に書き換えるという学習活動は、「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付けるようにする」という「現代の国語」の「目標」に正対した言語活動であると考えらるからである。これからの「実社会」で生きて働いていく若者にとって、この「知識や技能」を身につけていることは大きなアドバンテージとなると考える。

キーワード：「現代の国語」、「やさしい日本語」、共通必修科目、「書くこと」の指導

I はじめに

平成二十二年三月の学習指導要領の改訂では、高等学校の国語科において言語活動の重視が強調され、他教科の学習に資する国語科の学びが期待されるようになった。しかし一方でその課題も指摘された。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめについて（報告）」（平成二八年八月¹⁾）は、次のように述べている。

○ 高等学校の国語教育においては、教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分行われていないこと、話合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと、古典

執筆者および専門分野の紹介（目次掲載順）

犬竹 正幸（いぬたけ・まさゆき）	政経学部教授	哲学，論理学
豊岡めぐみ（とよおか・めぐみ）	政経学部非常勤講師	哲学，倫理学
富田 爽子（とみた・そうこ）	人文科学研究所客員研究員	英文学，書誌学
田野 武夫（たの・たけお）	政経学部教授	ドイツ近代思想，ドイツ文学
大森 裕二（おおもり・ゆうじ）	工学部教授	アメリカ演劇，比較文学
三井 美穂（みつゐ・みほ）	商学部准教授	アメリカ文学，アメリカ文化
黒崎 茂樹（くろさき・しげき）	商学部非常勤講師	教育工学，情報教育
塩崎 智（しおざき・さとし）	外国語学部教授	比較文化，日米交流史
佐野 正俊（さの・まさとし）	外国語学部教授	国語科教育，日本文学

表紙ロゴ『拓殖大学論集』は、西東書房、二玄社のご協力をいただきました。
2社に感謝申し上げます。

- (1) 「拓」 次の2項目を合成
手偏 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.12の「持」より）
石 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.15）
- (2) 「殖」 西嶽華山廟碑（二玄社刊，p.90）
- (3) 「大」 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.9）
- (4) 「學」 史晨後碑（二玄社刊，p.52）
- (5) 「論」 尹宙碑（西東書房刊，p.36）
- (6) 「集」 西嶽華山廟碑（西東書房刊，p.11）

人文・自然・人間科学研究 第49号 ISSN 1344-6622（拓殖大学論集330） ISSN 0288-6650

2023年（令和5年）3月18日 印刷

2023年（令和5年）3月25日 発行

編集 拓殖大学人文科学研究所編集委員会

編集委員 田野 武夫 海口 浩芳 長尾 素子 末延 俊生 関 良基
小林 敏宏 村上 祐紀 永江 貴子 廣澤 明彦 大森 裕二

発行者 拓殖大学人文科学研究所長 田野 武夫

発行所 拓殖大学人文科学研究所

〒112-8585 東京都文京区小日向3丁目4番14号

Tel. 03-3947-7595

印刷所 ㈱外為印刷

THE JOURNAL OF HUMANITIES AND SCIENCES

Number 49

March 2023

CONTENTS

Articles:

- Masayuki INUTAKE Kant's Theory of Substance as seen in the
"Analytics of Principles"
of the *Critique of Pure Reason*
— Reading Back from the Third Analogy
to the First Analogy — (1)
- Megumi TOYOOKA The Struggle for Right to Die with Dignity
— Palliative Care in France — (29)
- Soko TOMITA Steven Mierdman: Printer in the Age of Edward VI (51)
- Takeo TANO On the View of Nature in the Poetic Works of
Justinus Kerner (78)
- Yuji OMORI The Gardens of Adonis, the Drama of
the Green World,
and Eugene O'Neill's Urban Dystopia (95)
- Miho MITSUI African-American Journey in
Toni Morrison's *Home* (113)
- Shigeki KUROSAKI Reconsidering the
"Data-Information-Knowledge-Wisdom" Model (132)
- Study Note:**
- Satoshi SHIOZAKI A Verification of the Biography of Suzuhiko Tsukagoshi,
from His Birth in Ohta to His Arrival in San Francisco
— Focusing on His Study of Chemistry,
Medicine and English (156)
- Article:**
- Masatoshi SANO "Yasasii nihongo" among "Gendai no kokugo"
— Teaching Writing in Comupulsory Subjects — (1)

Instructions to Authors (192)

Edited and Published by
INSTITUTE FOR RESEARCH IN THE HUMANITIES
TAKUSHOKU UNIVERSITY
Kohinata, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8585, JAPAN